The pLATEX 2ε Sources

Ken Nakano & Japanese TEX Development Community

 $2020 \hbox{-} 02 \hbox{-} 02 \hbox{ Patch level 3} \\ \hbox{(last updated: } 2020/02/28)$

Contents

a	plvers.dtx	1
1	\mathbf{p} IAT $_{\mathbf{E}}$ X $2_{arepsilon}$ のバージョンの設定	1
	1.1 \LaTeX 2 $_{\varepsilon}$ のバージョンの取得	2
	1.2 パッチファイルのロード	
	1.3 起動時に実行するコード	2
2	latexrelease パッケージへの対応	3
b	plfonts.dtx	6
3	概要	6
	3.1 DOCSTRIP プログラムのためのオプション	6
4	コード	7
	4.1 準備	7
	4.1.1 和文フォント属性	7
	4.1.2 長さ変数	8
	4.1.3 一時コマンド	8
	4.1.4 フォントリスト	9
	4.1.5 支柱	10
	4.2 コマンド	13
	4.3 合成文字	46
	4.4 イタリック補正と \xkanjiskip	54
	4.5 デフォルト設定ファイルの読み込み	56

5	デフォルト設定ファイル	56								
	5.1 テキストフォント	56								
	5.2 プリロードフォント	57								
	5.3 組版パラメータ	58								
6	フォント定義ファイル	59								
\mathbf{c}	plcore.dtx	61								
7	概要	61								
8	コード	61								
	8.1 プリアンブルコマンド	61								
	8.2 直前の JFM 由来スペースの削除【コミュニティ版独自】	62								
	8.3 改ページ	63								
	8.4 改行	64								
	8.5 オブジェクトの出力順序	67								
	8.6 トンボ	72								
	8.7 脚注マクロ	84								
	8.8 相互参照	88								
	8.9 疑似タイプ入力	89								
	8.10 tabbing 環境	90								
	8.11 用語集の出力	91								
	8.12 時分を示すカウンタ	91								
	8.13 tabular 環境	92								
9	2013 年以降の新しい pT _E X 対応	96								
10	10 e-pT _E X での FAM256 パッチの利用 98									
11	IPT $_{\mathbf{E}}$ X $2_{arepsilon}$ と $_{\mathbf{p}}$ IPT $_{\mathbf{E}}$ X $2_{arepsilon}$ の更新タイミングずれ対策	100								
d	d plext.dtx 102									
12	12 概要 102									
13	組方向オプションについて	102								

18 禁則 128 18.1 半角文字に対する禁則	14	コード		103
14.3 段落ボックス環境11314.4 作図環境11914.5 連数字/漢数字/傍点/下線12114.6 参照番号123e pl209.dtx12415 DOCSTRIP 用モジュール12416 2.09 互換マクロ12417 スタイルファイル126f kinsoku.dtx12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション13721.3 横置きオプション138		14.1	表組環境	103
14.4 作図環境11914.5 連数字/漢数字/傍点/下線12114.6 参照番号123e pl209.dtx12415 DOCSTRIP 用モジュール12416 2.09 互換マクロ12417 スタイルファイル126f kinsoku.dtx12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オブション13721.2 サイズオブション13721.3 横置きオブション138		14.2	フロートとキャプションの出力位置	108
14.5 連数字/演数字/傍点/下線 121 14.6 参照番号 123 e pl209.dtx		14.3	段落ボックス環境	113
14.6 参照番号123e pl209.dtx12415 DOCSTRIP 用モジュール12416 2.09 互換マクロ12417 スタイルファイル126f kinsoku.dtx12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138		14.4	作図環境	119
epl209.dtx12415 DOCSTRIP 用モジュール12416 2.09 互換マクロ12417 スタイルファイル126fkinsoku.dtx12818 禁則12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133gjclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138		14.5	連数字/漢数字/傍点/下線	121
15 DOCSTRIP 用モジュール 124 16 2.09 互換マクロ 124 17 スタイルファイル 126 f kinsoku.dtx 128 18 禁則 128 18.1 半角文字に対する禁則 128 18.2 全角文字に対する禁則 129 19 文字間のスペース 130 19.1 ある英字と前後の漢字の間の制御 130 19.2 ある漢字と前後の英字の間の制御 133 19.2 ある漢字と前後の英字の間の制御 133 g jclasses.dtx 135 20 オプションスイッチ 135 21 オプションの宣言 136 21.1 用紙オプション 137 21.2 サイズオプション 137 21.3 横置きオプション 138		14.6	参照番号	123
15 DOCSTRIP 用モジュール 124 16 2.09 互換マクロ 124 17 スタイルファイル 126 f kinsoku.dtx 128 18 禁則 128 18.1 半角文字に対する禁則 128 18.2 全角文字に対する禁則 129 19 文字間のスペース 130 19.1 ある英字と前後の漢字の間の制御 130 19.2 ある漢字と前後の英字の間の制御 133 19.2 ある漢字と前後の英字の間の制御 133 g jclasses.dtx 135 20 オプションスイッチ 135 21 オプションの宣言 136 21.1 用紙オプション 137 21.2 サイズオプション 137 21.3 横置きオプション 138				
16 2.09 互換マクロ12417 スタイルファイル126f kinsoku.dtx12818 禁則12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	\mathbf{e}	pl20	09.dtx	124
17 スタイルファイル126f kinsoku.dtx12818 禁則12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	15	DOCST	TRIP 用モジュール	124
f kinsoku.dtx12818 禁則12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	16	2.09 7	互換マクロ	124
18 禁則12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	17	スタイ	、 ルファイル	126
18 禁則12818.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138				
18.1 半角文字に対する禁則12818.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	f	kins	oku.dtx	128
18.2 全角文字に対する禁則12919 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	18	禁則		128
19 文字間のスペース13019.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138		18.1	半角文字に対する禁則	128
19.1 ある英字と前後の漢字の間の制御13019.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138		18.2	全角文字に対する禁則	129
19.2 ある漢字と前後の英字の間の制御133g jclasses.dtx13520 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	19	文字間	のスペース	130
g jclasses.dtx 135 20 オプションスイッチ 135 21 オプションの宣言 136 21.1 用紙オプション 137 21.2 サイズオプション 137 21.3 横置きオプション 138		19.1	ある英字と前後の漢字の間の制御	130
20 オプションスイッチ13521 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138		19.2	ある漢字と前後の英字の間の制御	133
21 オプションの宣言13621.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	\mathbf{g}	jcla	${f sses.dtx}$	135
21.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138	20	オプシ	·ョンスイッチ	135
21.1 用紙オプション13721.2 サイズオプション13721.3 横置きオプション138		° >		
21.2サイズオプション	21			
21.3 横置きオプション 138				
ZI.4 _ トノホオ ノンヨン				
21.5 面付けオプション 138 21.6 組方向オプション 139		01 F	五付けまプション	100

	21.7 両面、片面オプション	139
	21.8 二段組オプション	139
	21.9 表題ページオプション	139
	21.10 右左起こしオプション	139
	21.11 数式のオプション	139
	21.12 参考文献のオプション	140
	21.13 日本語ファミリ宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字	140
	21.14 ドラフトオプション	141
	21.15 オプションの実行	141
22	: フォント	141
23		145
	23.1 用紙サイズの決定	145
	23.2 段落の形	146
	23.3 ページレイアウト	146
	23.3.1 縦方向のスペース	146
	23.3.2 本文領域	147
	23.3.3 マージン	153
	23.4 脚注	156
	23.5 フロート	157
	23.5.1 フロートパラメータ	157
	23.5.2 フロートオブジェクトの上限値	159
24	: 改ページ(日本語 $\mathbf{T}_{\mathbf{E}}\mathbf{X}$ 開発コミュニティ版のみ)	160
4 4		100
25	ページスタイル	161
	25.1 マークについて	162
	25.2 plain ページスタイル	162
	25.3 jpl@in ページスタイル	162
	25.4 headnombre ページスタイル	163
	25.5 footnombre ページスタイル	163
	25.6 headings スタイル	163
	25.7 bothstyle スタイル	164
	25.8 myheading スタイル	166

26	文書	コマント		166
	26.1	表題		166
	26.2	概要		171
	26.3	章見出	はし	172
		26.3.1	マークコマンド	172
		26.3.2	カウンタの定義	172
		26.3.3	前付け、本文、後付け	174
		26.3.4	ボックスの組み立て	175
		26.3.5	part レベル	176
		26.3.6	chapter $V \stackrel{\checkmark}{\sim} V$	178
		26.3.7	下位レベルの見出し	180
		26.3.8	付録	181
	26.4	リスト	、環境	181
		26.4.1	enumerate 環境	184
		26.4.2	itemize 環境	185
		26.4.3	description 環境	186
		26.4.4	verse 環境	186
		26.4.5	quotation 環境	187
		26.4.6	quote 環境	187
	26.5	フロー	- h	187
		26.5.1	figure 環境	187
		26.5.2	table 環境	188
	26.6	キャフ	プション	189
	26.7	コマン	/ドパラメータの設定	190
		26.7.1	array と tabular 環境	190
		26.7.2	tabbing 環境	190
		26.7.3	minipage 環境	190
		26.7.4	framebox 環境	190
		26.7.5	equation と eqnarray 環境	190
27	フォ	ントコマ	フンド	191
21	<i>7 1</i> 3	<i>-</i>		131
2 8	相互	参照		192
	28.1	目次		192
		28.1.1	本文目次	195
		28.1.2	図目次と表目次	197
	28.2	参考文	太献	198

	28.3 28.4														99
2 9	今日の	D日付												2	00
30	初期認	设定												2	01
h	jltx	doc.	dtx	ζ										20)3
変	更履歷	陸												20)6
索	引													2	19

File a

plvers.dtx

$pIAT_{F}X 2_{\varepsilon}$ のバージョンの設定

```
まず、このディストリビューションでの pIATeX 2_{\varepsilon} の日付とバージョン番号を定義
します。
  このバージョンの pIAT<sub>F</sub>X 2_{\varepsilon} は、次のバージョンの IAT<sub>F</sub>X<sup>1</sup>をもとにしています。
 1 (*2ekernel)
 2 %\def\fmtname{LaTeX2e}
 3 %\edef\fmtversion
```

4 (/2ekernel)

5 (latexrelease)\edef\latexreleaseversion

6 \(platexrelease \) \(

7 (*2ekernel | latexrelease | platexrelease)

{2020-02-02}

9 (/2ekernel | latexrelease | platexrelease)

まず、次のバージョンの $ext{IMPX}$ が利用可能なことを確認します。 $ext{IMPX}$ 2_{ϵ} 2017-04-15で、バージョン番号(日付)のフォーマットが YYYY/MM/DD 形式から YYYY-MM-DD に変更されています。

```
10 (*plcore)
11 \ifx\fmtversion\@undefined
                           \verb|\errhelp{Please reinstall LaTeX.}| % \label{latex} % $$ \end{substants} $$ \end{subst
                           \errmessage{This cannot happen!^^JYour file 'latex.ltx'
13
                                                                               might be broken}\@@end
14
15 \setminus else
                  \ifnum\expandafter\@parse@version\fmtversion//00\@nil<20170415
16
                            \errhelp{Please update your TeX installation; if not available,
17
18
                                                                   obtain it ^ Jmanually from CTAN
19
                                                                    (https://ctan.org/pkg/latex-base) or from^^JGitHub
20
                                                                   (https://github.com/latex3/latex2e).}%
21
                           \errmessage{This version of pLaTeX2e requires LaTeX2e 2017-04-15
                                                                                or newer!^^JObtain a newer version of 'latex',
22
                                                                                otherwise pLaTeX2e setup will^^Jnever succeed}\@@end
23
                  \fi
24
25 \fi
26 (/plcore)
```

pIATeX 2ε のフォーマットファイル名とバージョンです。 \pfmtname

\pfmtversion 28 \def\pfmtname{pLaTeX2e} \ppatch@level

29 \def\pfmtversion

¹IATEX authors: Johannes Braams, David Carlisle, Alan Jeffrey, Leslie Lamport, Frank Mittelbach, Chris Rowley, Rainer Schöpf

```
30 \langle /plcore \rangle
31 \langle platexrelease \rangle \langle def \rangle platexrelease version
32 \langle *plcore | platexrelease \rangle
33 \quad \langle platexrelease \rangle
34 \langle platexrelease \rangle
35 \langle *plcore \rangle
36 \rangle def \rangle platexrelease \rangle
37 \langle platexrelease \rangle
38 \quad \langle platexrelease \rangle
39 \quad \langle platexrelease \rangle
30 \quad \langle platexrelease \rangle
31 \quad \rangle platexrelease \rangle
32 \quad \rangle platexrelease \rangle
33 \quad \langle platexrelease \rangle
34 \quad \langle platexrelease \rangle
35 \quad \langle platexrelease \rangle
36 \quad \langle platexrelease \rangle
37 \langle platexrelease \rangle
38 \quad \langle platexrelease \rangle
39 \quad \langle platexrelease \rangle
30 \quad \langle platexrelease \rangle
30 \quad \langle platexrelease \rangle
31 \quad \langle platexrelease \rangle
32 \quad \langle platexrelease \rangle
33 \quad \langle platexrelease \rangle
35 \quad \langle platexrelease \rangle
36 \quad \langle platexrelease \rangle
37 \langle platexrelease \rangle
38 \quad \langle platexrelease \rangle
39 \quad \langle platexrelease \rangle
30 \quad \langle platexrelease \rangle
30 \quad \langle platexrelease \rangle
31 \quad \langle platexrelease \rangle
32 \quad \langle platexrelease \rangle
33 \quad \langle platexrelease \rangle
34 \quad \langle platexrelease \rangle
35 \quad \langle platexrelease \rangle
36 \quad \langle platexrelease \rangle
37 \quad \langle platexrelease \rangle
38 \quad \langle platexrelease \rangle
39 \quad \langle platexrelease \rangle
30 \quad \langle platexrelease \rangle
30 \quad \langle platexrelease \rangle
31 \quad \langle platexrelease \rangle
32 \quad \langle platexrelease \rangle
33 \quad \langle platexrelease \rangle platexrelease \rangle
34 \quad \langle platexrelease \rangle
35 \quad \langle platexrelease \rangle
36 \quad \langle platexrelease \rangle
37 \quad \langle platexrelease \rangle
38 \quad \langle platexrelease \rangle platexrelease \rangle
39 \quad \langl
```

1.1 IFTeX 2_{ε} のバージョンの取得

このファイルの直前で $\c PT_{EX} \c 2\varepsilon$ の latex.ltx が読み込まれているはずなので、その起動時のバナーを保存します。

IATEX 2ε 2018-04-01 patch level 1 までは、\everyjob が

\typeout{LaTeX2e version}\typeout{Babel version}

だけでしたが、IPTEX 2_{ε} 2018-04-01 patch level 2 で新たなトークン列が追加されました。今後も IPTEX 2_{ε} 側で \everyjob に実行を遅らせるコードが追加される可能性がありますので、そのコードを抽出しなければなりません。そこで、最初と最後に区切りトークン(それぞれ \platexNILa と \platexNILb)を付けておきます。

1.2 パッチファイルのロード

コミュニティ版 pI $oldsymbol{MTEX}
oldsymbol{2}
oldsymbol{2}
oldsymbol{2}
oldsymbol{2}
oldsymbol{3}
oldsymbol{2}
oldsymbol{3}
oldsymbol{3}
oldsymbol{4}
oldsymbol{3}
oldsymbol{4}
oldsymbol{3}
oldsymbol{4}
oldsymbol{5}
oldsymbol{6}
oldsymbol{6}$

1.3 起動時に実行するコード

\everyjob pIFTEX 2_{ε} が起動されたときに実行されるコードです。IFTEX 2_{ε} の実行コードを元に、pIFTEX 2_{ε} 用の調整を加えます。

まず、IFTEX 2_ε のバージョン表示(\typeout{LaTeX2e version})より前に実行されるコードがあれば、それを抽出して \everyjob に入れます。IFTEX 2_ε 2018-04-01 patch level 2 の時点では空です。

```
43 \( \*\pricore \)
44 \\ \text{begingroup}
45 \\ \def\platexNILa#1\typeout#2#3\platexNILb{#1}
46 \\ \toks0=\expandafter\expandafter\expandafter{\platexBANNER}
47 \\ \global\everyjob\expandafter{\the\toks0}\%
48 \\ \text{endgroup}
```

```
ンとまとめて表示するように整形します。
49\ \%\ if x\ppatch@level\@undefined % fallback if undefined in pLaTeX
50 % \def\ppatch@level{0}\fi
51 \begingroup
   \def\platexNILa#1\typeout#2#3\platexNILb{#2}
   \toks0=\expandafter\expandafter\expandafter{\platexBANNER}
   \ifnum\ppatch@level=0
     \toks2={\pfmtname\space<\pfmtversion>\space}%
   \else\ifnum\ppatch@level>0
56
     \toks2={\pfmtname\space<\pfmtversion>+\ppatch@level\space}%
57
   \else
58
     \toks2={\pfmtname\space<\pfmtversion>-pre\ppatch@level\space}%
59
    \fi\fi
60
   \edef\platexBANNER{\the\everyjob
61
      \global\everyjob\expandafter{\platexBANNER}%
64 \endgroup
 IATEX 2_{\epsilon} のバージョン表示の後に残っているコードを、そのまま \every job に追
加します。
65 \begingroup
    \def\platexNILa#1\typeout#2#3\platexNILb{#3}
    \toks0=\expandafter\expandafter\expandafter{\platexBANNER}
    \edef\platexBANNER{\the\everyjob \the\toks0}
    \global\everyjob\expandafter{\platexBANNER}%
70 \endgroup
71 \let\platexBANNER=\@undefined
72 (/plcore)
```

次に、 $ext{IM}_{ ext{FX}} 2_{arepsilon}$ のバージョンを表示するコードを抽出し、 $ext{pIM}_{ ext{FX}} 2_{arepsilon}$ のバージョ

2 latexrelease パッケージへの対応

最後に、latexrelease パッケージへの対応です。

$\verb|\plincludeInRelease| \\$

```
73 \( \*\protection | \protection | \protect
```

File a: plvers.dtx Date: 2020/02/01 Version v1.1r

```
{\@plIncludeInRelease{#1}[#1]}}
86 \def\@plIncludeInRelease#1[#2]{\@plIncludeInRele@se{#2}}
87 \def\@plIncludeInRele@se#1#2#3{%
     \toks@{[#1] #3}%
88
     \expandafter\ifx\csname\string#2+\@currname+plIIR\endcsname\relax
89
       \ifnum\expandafter\@parse@version#1//00\@nil
90
             >\expandafter\@parse@version\pfmtversion//00\@nil
91
92
         \GenericInfo{}{Skipping: \the\toks@}%
        \expandafter\expandafter\expandafter\@gobble@plIncludeInRelease
93
94
         \GenericInfo{}{Applying: \the\toks@}%
95
         \@plincludeinreleasetrue
96
97
         \expandafter\let\csname\string#2+\@currname+plIIR\endcsname\@empty
       \fi
98
99
     \else
       \GenericInfo{}{Already applied: \the\toks@}%
100
       \expandafter\@gobble@plIncludeInRelease
101
102
103 }
104 \def\plEndIncludeInRelease{%
     \if@plincludeinrelease
       \@plincludeinreleasefalse
106
107
       \PackageError{platexrelease}
108
109
         {mis-matched \string\plEndIncludeInRelease}{}%
110
     \fi}
111 \long\def\@gobble@plIncludeInRelease#1\plEndIncludeInRelease{%
     \@plincludeinreleasefalse
112
     \@check@plIncludeInRelease#1\plIncludeInRelease
       \@check@plIncludeInRelease\@end@check@plIncludeInRelease}
115 \long\def\@check@plIncludeInRelease#1\plIncludeInRelease
     #2#3\@end@check@plIncludeInRelease{%
     \ifx\@check@plIncludeInRelease#2\else
117
118
       \PackageError{platexrelease}
119
         {skipped \string\plIncludeInRelease\space for tag \string#2}{}%
120
     fi
121 (/plcore | platexrelease)
  IATpX 2_{\varepsilon} が提供する latexrelease パッケージが読み込まれていて、かつ pIATpX 2_{\varepsilon}
が提供する platexrelease パッケージが読み込まれていない場合は、警告を出します。
122 \langle *plfinal \rangle
123 \AtBeginDocument{%
     \@ifpackageloaded{latexrelease}{%
       \@ifpackageloaded{platexrelease}{}{%
         \@latex@warning@no@line{%
127
           Package latexrelease is loaded.\MessageBreak
```

File b plfonts.dtx

3 概要

ここでは、和文書体をNFSS2のインターフェイスで選択するためのコマンドやマクロについて説明をしています。また、フォント定義ファイルや初期設定ファイルなどの説明もしています。新しいフォント選択コマンドの使い方については、fntguide.texやusrguide.texを参照してください。

第3節 この節です。このファイルの概要と DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示しています。

第4節 実際のコードの部分です。

第5節 プリロードフォントやエラーフォントなどの初期設定について説明をしています。

第6節 フォント定義ファイルについて説明をしています。

3.1 DOCSTRIP プログラムのためのオプション

DOCSTRIP プログラムのためのオプションを次に示します。

オプション	意味
plcore	plcore.ltx の断片を生成します。
trace	ptrace.sty を生成します。
JY1mc	横組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JY1gt	横組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
JT1mc	縦組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JT1gt	縦組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
pldefs	pldefs.ltx を生成します。次の4つのオプションを付加
	することで、プリロードするフォントを選択することがで
	きます。デフォルトは 10pt です。
xpt	10pt プリロード
xipt	11pt プリロード
xiipt	12pt プリロード
ori	plfonts.tex に似たプリロード

4 コード

この節で、具体的に NFSS2 を拡張するコマンドやマクロの定義を行なっています。

4.1 準備

NFSS2を拡張するための準備です。和文フォントの属性を格納するオブジェクトや 長さ変数、属性を切替える際の判断材料として使うリストなどを定義しています。

ptrace パッケージは IATFX の tracefnt パッケージに依存します。

- 1 (*trace)
- 2 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
- 3 \ProvidesPackage{ptrace}
- 4 [2019/09/16 v1.6t Standard pLaTeX package (font tracing)]
- 5 \RequirePackageWithOptions{tracefnt}
- 6 (/trace)

4.1.1 和文フォント属性

ここでは、和文フォントの属性を格納するためのオブジェクトについて説明をして います。

\k@encoding 和文エンコードを示すオブジェクトです。\ck@encodingは、最後に選択された和

\ck@encoding 文エンコード名を示しています。\cy@encodingと\ct@encoding はそれぞれ、最

\cy@encoding 後に選択された、横組用と縦組用の和文エンコード名を示しています。

\ct@encoding ここでは単に「空」に初期化するだけにしています。

7 ⟨*plcore⟩

- 8 \let\k@encoding\@empty
- 9 \let\ck@encoding\@empty
- 10 \let\cy@encoding\@empty
- 11 \let\ct@encoding\@empty

\k@family 和文書体のファミリを示すオブジェクトです。

12 \let\k@family\@empty

\k@series 和文書体のシリーズを示すオブジェクトです。

13 \let\k@series\@empty

\k@shape 和文書体のシェイプを示すオブジェクトです。

14 \let\k@shape\@empty

\curr@kfontshape 現在の和文フォント名を示すオブジェクトです。

15 \def\curr@kfontshape{\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape}

\rel@fontshape 関連付けされたフォント名を示すオブジェクトです。

16 \def\rel@fontshape{\f@encoding/\f@family/\f@series/\f@shape}

4.1.2 長さ変数

ここでは、和文フォントの幅や高さなどを格納する変数について説明をしています。 頭文字が大文字の変数は、ノーマルサイズの書体の大きさで、基準値となります。 これらは、jart10.clo などの補助クラスファイルで設定されます。

小文字だけからなる変数は、フォントが変更されたときに(\selectfont 内で) 更新されます。

- \Cht \Cht は基準となる和文フォントの文字の高さを示します。\cht は現在の和文フォン
- \cht トの文字の高さを示します。なお、この"高さ"はベースラインより上の長さです。
 - 17 \newdimen\Cht
 - 18 \newdimen\cht
- \Cdp \Cdp は基準となる和文フォントの文字の深さを示します。\cdp は現在の和文フォン \cdp トの文字の深さを示します。なお、この"深さ"はベースラインより下の長さです。
 - 19 \newdimen\Cdp
 - 20 \newdimen\cdp
- \Cwd \Cwd は基準となる和文フォントの文字の幅を示します。\cwd は現在の和文フォン\cwd トの文字の幅を示します。
 - 21 \newdimen\Cwd
 - 22 \newdimen\cwd
- \Cvs \Cvs は基準となる行送りを示します。ノーマルサイズの \baselineskip と同値で \cvs す。\cvs は現在の行送りを示します。
 - $23 \newdimen\Cvs$
 - 24 \newdimen\cvs
- \Chs は基準となる字送りを示します。\Cwd と同値です。\chs は現在の字送りを示\chs します。
 - $25 \newdimen\Chs$
 - $26 \mbox{ \newdimen\chs}$
- \cHT \cHT は、現在のフォントの高さに深さを加えた長さを示します。\set@fontsize コマンド(実際は\size@update)で更新されます。
 - 27 \newdimen\cHT

4.1.3 一時コマンド

\afont I^ATEX 内部の \do@subst@correction マクロでは、\fontname\font で返される外部フォント名を用いて、I^ATEX フォント名を定義しています。したがって、\font をそのまま使うと、和文フォント名に欧文の外部フォントが登録されたり、縦組フォ

ント名に横組用の外部フォントが割り付けられたりしますので、\jfont か\tfont を用いるようにします。\afont は、\font コマンドの保存用です。

28 \let\afont\font

4.1.4 フォントリスト

ここでは、フォントのエンコードやファミリの名前を登録するリストについて説明 をしています。

 $p\text{IATeX}\,2_\varepsilon$ の NFSS2 では、一つのコマンドで和文か欧文のいずれか、あるいは両方を変更するため、コマンドに指定された引数が何を示すのかを判断しなくてはなりません。この判断材料として、リストを用います。

このときの具体的な判断手順については、エンコード選択コマンドやファミリ選択コマンドなどの定義を参照してください。

\inlist@ 次のコマンドは、エンコードやファミリのリスト内に第二引数で指定された文字列があるかどうかを調べるマクロです。

29 \def\inlist@#1#2{%

- 30 \def\in@@##1<#1>##2##3\in@@{%
- 31 \ifx\in@##2\in@false\else\in@true\fi}%
- 32 \in00#2<#1>\in0\in00}

\enc@elt \enc@elt と \fam@elt は、登録されているエンコードに対して、なんらかの処理を \fam@elt 逐次的に行ないたいときに使用することができます。

- 33 \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}
- 34 \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}

\fenc@list \fenc@listには、\DeclareFontEncoding コマンドで宣言されたエンコード名が

\kenc@list 格納されていきます。

\kyenc@list \kyenc@list には、\DeclareYokoKanjiEncoding コマンドで宣言されたエン \ktenc@list コード名が格納されていきます。\ktenc@listには、\DeclareTateKanjiEncoding コマンドで宣言されたエンコード名が格納されていきます。

ここで、これらのリストに具体的な値を入れて初期化をするのは、リストにエンコードの登録をするように \DeclareFontEncoding を再定義する前に、欧文エンコードが宣言されるため、リストに登録されないからです。

- $35 \enc@elt<OML>\enc@elt<T1>\enc@elt<OMS>\%$
- 36 \enc@elt<OMX>\enc@elt<TS1>\enc@elt<U>}
- 37 \let\kenc@list\@empty
- $38 \left(\frac{0}{1} \right)$
- 39 \let\ktenc@list\@empty

\kfam@list \kfam@listには、\DeclareKanjiFamily コマンドで宣言されたファミリ名が格納 \ffam@list されていきます。

\notkfam@list

\notffam@list File b: plfonts.dtx Date: 2020/02/28 Version v1.6z

\ffam@listには、\DeclareFontFamily コマンドで宣言されたファミリ名が格納されていきます。

\notkfam@listには、和文ファミリではないと推測されたファミリ名が格納されていきます。このリストは\fontfamilyコマンドで作成されます。

\notffam@listには欧文ファミリではないと推測されたファミリ名が格納されていきます。このリストは \fontfamily コマンドで作成されます。

ここで、これらのリストに具体的な値を入れて初期化をするのは、リストにファミリの登録をするように、\DeclareFontFamilyが再定義される前に、このコマンドが使用されるため、リストに登録されないからです。

- $40 \ef\fam@list{fam@elt<mc>fam@elt<gt>}$
- $41 \end{figure} $$41 \end{fi$
- 42 \fam@elt<cmm>\fam@elt<cmsy>\fam@elt<cmex>}

つぎの二つのリストの初期値として、上記の値を用います。これらのファミリ名は、 和文でないこと、欧文でないことがはっきりしています。

- $43 \left(\frac{43}{1} \right)$
- $44 \left(\frac{4}{notffam@list} \right)$

4.1.5 支柱

行間の調整などに用いる支柱です。支柱のもととなるボックスの大きさは、フォントサイズが変更されるたびに、\set@fontsize コマンドによって変化します。

フォントサイズが変更されたときに、\set@fontsize コマンドで更新されます。 従来、横組ボックス用の支柱は\strutbox で、高さと深さが 7 対 3 となってい ました。これは plateX 単体では問題になりませんでしたが、海外製の lateX パッ ケージを縦組で使用した場合に、意図しない幅や高さが取得されることがありまし た。この不都合を回避するため、コミュニティ版 plateX では次の方法をとります。

- \ystrutbox (新設): 高さと深さが7対3の横組ボックス用の支柱
- ◆ \tstrutbox:高さと深さが5対5の縦組ボックス用の支柱
- ◆ \zstrutbox: 高さと深さが7対3の縦組ボックス用の支柱
- \strutbox (仕様変更): 縦横のディレクションに応じて \tstrutbox または \ystrutbox に展開されるマクロ

すなわち、従来の pl $ext{PT}_{EX}$ における \strutbox と同じ挙動を示すのが、新設された \ystrutbox ということになります。

\tstrutbox \tstrutbox は高さと深さが5対5、\zstrutbox は高さと深さが7対3の支柱ボッ\zstrutbox クスとなります。これらは縦組ボックスの行間の調整などに使います。

```
45 \newbox\tstrutbox
              46 \newbox\zstrutbox
\ystrutbox \ystrutbox は高さと深さが7対3の横組ボックス用の支柱です。
              47 (/plcore)
              48 \ \langle platexrelease \rangle \ \langle plincludeInRelease \{ 2017/04/08 \} \{ \ vstrutbox \}
              49 (platexrelease)
                                                    {Add \ystrutbox}%
              50 (*plcore | platexrelease)
              51 \newbox\ystrutbox
              52 (/plcore | platexrelease)
              53 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
              54 \ \langle platexrelease \rangle \ \ | \ lease \{0000/00/00\} \{\ \ \ \ \}
                                                   {Add \ystrutbox}%
              55 (platexrelease)
              56 \langle platexrelease \rangle \text{let}\ystrutbox\\\@undefined
              57 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
\strutbox \strutbox は縦横両対応です。
              58 \langle platexrelease \rangle plincludeInRelease \{2017/04/08\} \{ \strutbox \}
              59 (platexrelease)
                                                    {Macro definition of \strutbox}%
              60 (*plcore | platexrelease)
              61 \def\strutbox{\iftdir\tstrutbox\else\ystrutbox\fi}
              62 (/plcore | platexrelease)
              63 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
              65 (platexrelease)
                                                   {LaTeX2e original}%
              66 (platexrelease)\newbox\strutbox % emulation purpose only
              67 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
    \strut ディレクションに応じて \ystrutbox と \tstrutbox を使い分けます。オリジナル
             の \LaTeX では ltplain.dtx で定義されていますが、\LaTeX 2\varepsilon 2019-10-01 以降では
             さらに ltdefns.dtx で \MakeRobust を前置されるため、robust になります。
              68 \(\rangle platexrelease \)\plIncludeInRelease\(\rangle 2019/10/01 \)\{\strut\}
              69 (platexrelease)
                                                    {Make robust}%
              70 (*plcore | platexrelease)
              71 \DeclareRobustCommand\strut{\relax
                  \iftdir
                     \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi
              74
                   \else
                     \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi
              75
                  \fi}
              77 \; \langle / \mathsf{plcore} \; | \; \mathsf{platexrelease} \rangle
              78 \langle platexrelease \rangle \langle plEndIncludeInRelease \rangle
              79 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{2017/04/08\} \{\strut\}
              80 (platexrelease)
                                                    {Use \ystrutbox}%
              81 <platexrelease \def\strut{\relax
              82 (platexrelease) \ifydir
              83 (platexrelease)
                                   \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi
              84 (platexrelease) \else
```

```
85 (platexrelease)
                                                                                      \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi
                              86 (platexrelease)
                                                                              \fi}
                              87 (platexrelease)\expandafter \let \csname strut \endcsname \@undefined
                              88 \(\rangle place | \rangle plendIncludeInRelease \)
                              89 \(\rangle plane = \rangle plinclude = \rang
                              90 (platexrelease)
                                                                                                                                    {ASCII Corporation original}%
                             91 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt def} \\ \tt strut{\tt relax}
                              92 (platexrelease)
                                                                              \ifydir
                             93 (platexrelease)
                                                                                      \ifmmode\copy\strutbox\else\unhcopy\strutbox\fi
                             94 (platexrelease)
                             95 (platexrelease)
                                                                                      \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi
                             96 (platexrelease)
                                                                              \fi}
                              97 (platexrelease)\expandafter \let \csname strut \endcsname \@undefined
                              98 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
\tstrut
                             99 \langle platexrelease \rangle plincludeInRelease \{2019/10/01\} \{ tstrut \}
\zstrut
                           100 (platexrelease)
                                                                                                                                   {Make robust}%
                           101 (*plcore | platexrelease)
                           102 \verb|\DeclareRobustCommand\tstrut{\relax\hbox{\tate}}|
                                              \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi}}
                           104 \verb|\DeclareRobustCommand\zstrut{\relax\hbox{\tate}}|
                                              \ifmmode\copy\zstrutbox\else\unhcopy\zstrutbox\fi}}
                           106 (/plcore | platexrelease)
                            107 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                            108 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\tstrut}
                           109 (platexrelease)
                                                                                                                                   {ASCII Corporation original}%
                           110 \langle platexrelease \rangle \langle tstrut{relax\hbox{tate}}
                           111 (platexrelease) \ifmmode\copy\tstrutbox\else\unhcopy\tstrutbox\fi}}
                           112 \(\relax\hbox{\tate}\)
                           113 \(\rangle platexrelease \) \(\rangle \) \(\rangle p\\zstrutbox\else\\unhcopy\zstrutbox\fi\)}
                           115 (platexrelease)\expandafter \let \csname zstrut \endcsname \@undefined
                            116 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle plEndIncludeInRelease \)
\ystrut
                            117 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2019/10/01}{\ystrut}
                            118 (platexrelease)
                                                                                                                                   {Make robust}%
                           119 (*plcore | platexrelease)
                           120 \DeclareRobustCommand\ystrut{\relax\hbox{\yoko
                                                 \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi}}
                           122 \langle /plcore \mid platexrelease \rangle
                           123 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plEndIncludeInRelease \)
                           124 \ \langle platexrelease \rangle \ | plIncludeInRelease \{ 2017/04/08 \} \{ \ ystrut \}
                           125 (platexrelease)
                                                                                                                                   {Add \ystrut}%
                           126 \(\rangle platexrelease \) \(\def \) \(\text{relax}\) \(\def \) \(\def \
                                                                                    \ifmmode\copy\ystrutbox\else\unhcopy\ystrutbox\fi}}
                           127 (platexrelease)
                            128 (platexrelease)\expandafter \let \csname ystrut \endcsname \@undefined
                           129 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

131 (platexrelease) {Add \ystrut}%

132 $\langle platexrelease \rangle \land t \land gundefined$

 $134 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease$

135 (*plcore)

4.2 コマンド

次のコマンドの定義をしています。

コマンド	意味
\Declare{Font YokoKanji TateKanji}Encoding	エンコードの宣言
\Declare{Yoko Tate}KanjiEncodingDefaults	デフォルトの和文エンコードの宣言
\Declare{Font Kanji}Family	ファミリの宣言
\DeclareKanjiSubstitution	和文の代用フォントの宣言
\DeclareErrorKanjiFont	和文のエラーフォントの宣言
\DeclareFixedFont	フォントの名前の宣言
\reDeclareMathAlphabet	和欧文を同時に切り替えるコマンド宣言
\{Declare Set}RelationFont	従属書体の宣言
\userelfont	欧文書体を従属書体にする
\selectfont	フォントを切り替える
\set@fontsize	フォントサイズの変更
\adjustbaseline	ベースラインシフト量の設定
\{font roman kanji}encoding	エンコードの指定
\{font roman kanji}family	ファミリの指定
\{font roman kanji}series	シリーズの指定
\{font roman kanji}shape	シェイプの指定
\use{font roman kanji}	書体の切り替え
\normalfont	デフォルト値の設定に切り替える
\mcfamily,\gtfamily	和文書体を明朝体、ゴシック体にする
\textunderscore	テキストモードでの下線マクロ

\DeclareFontEncoding 欧文エンコードを宣言するためのコマンドです。ltfssbas.dtx で定義されている \DeclareFontEncoding@ ものを、\fenc@listを作るように再定義をしています。

136 \def\DeclareFontEncoding{%

\begingroup

\nfss@catcodes

139 \expandafter\endgroup

140 \DeclareFontEncoding@}

```
141 (/plcore)
142 \platexrelease\\plIncludeInRelease{2018/04/01}{\DeclareFontEncoding@}
143 (platexrelease)
                                 {UTF-8 Encoding}%
144 \; \langle *plcore \mid platexrelease \rangle
  まず、IATrX 2<sub>5</sub> 2017-04-15 以前の場合のコードです。このコードは、\UseRawInputEncoding
の内部でも使われます。
145\ \% for compatibility with LaTeX2e 2017-04-15 or earlier.
146\,\mbox{\%} this code is used if MLTeX is enabled
147 \def\DeclareFontEncoding@#1#2#3{%
    \expandafter
    \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
149
150
        \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
        \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
                      {\default@family}{\default@series}%
152
153
                      {\default@shape}}%
       \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@cmd
以下の 2 行が pLAT<sub>F</sub>X 2_{\varepsilon} による追加部分です。
        \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
        \xdef\fenc@list{\fenc@list\enc@elt<#1>}%
157
    \else
       \OfontOinfo{Redeclaring font encoding #1}%
158
159
    \left( T0#1 \right) = 1
160
    \global\@namedef{M@#1}{\default@M#3}%
    \xdef\LastDeclaredEncoding{#1}%
163 }
164 \let\DeclareFontEncoding@saved\DeclareFontEncoding@
  次に、\LaTeX2018-04-01 以降の場合のコードです。
165 \ifx\IeC\Qundefined\else
166 % for LaTeX2e with UTF-8 input.
167 \def\DeclareFontEncoding@#1#2#3{%
    \expandafter
168
169
    \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
170
        \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
        \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
171
                      {\default@family}{\default@series}%
172
173
                      {\default@shape}}%
       \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@cmd
IATFX 2\varepsilon 2018-04-01 で、既定の欧文入力エンコーディングが UTF-8 になりました。こ
れは、latex.ltxがutf8.def (従来はLATFX ソースに \usepackage[utf8]{inputenc}
と書いたときに読み込まれていたもの)を読み込むことで実現されています。
utf8.def は \DeclareFontEncoding@ を再定義するので、これに合わせるための
コードを追加します。
175
       \begingroup
```

```
\lowercase{%
                               177
                                            \InputIfFileExists{#1enc.dfu}}%
                                                {\wlog{... processing UTF-8 mapping file for font %
                               179
                               180
                                                            encoding #1}}%
                                               {\wlog{... no UTF-8 mapping file for font encoding #1}}%
                               181
                                        \endgroup
                               182
                               以下の 2 行が pLAT<sub>F</sub>X 2_{\varepsilon} による追加部分です。
                                        \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
                                        \xdef\fenc@list{\fenc@list\enc@elt<#1>}%
                               185
                                    \else
                                        \OfontOinfo{Redeclaring font encoding #1}%
                               186
                               187
                                    \global\ensuremath{\mbox{Qnamedef{T0#1}{\#2}}\%
                               188
                                    \global\@namedef{M@#1}{\default@M#3}%
                               189
                                    \xdef\LastDeclaredEncoding{#1}%
                               191
                               192 \fi
                               193 (/plcore | platexrelease)
                               194 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
                               196 (platexrelease)
                                                                     {ASCII Corporation original}%
                               197 ⟨platexrelease⟩\def\DeclareFontEncoding@#1#2#3{%
                               198 (platexrelease)
                                                 \expandafter
                               199 (platexrelease)
                                                  \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
                               200 (platexrelease)
                                                     \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
                               201 \langle platexrelease \rangle
                                                     \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
                               202 (platexrelease)
                                                                      {\default@family}{\default@series}%
                               203 (platexrelease)
                                                                      {\default@shape}}%
                               204 (platexrelease)
                                                     \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@cmd
                               205 (platexrelease)
                                                     \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
                               206 (platexrelease)
                                                     \xdef\fenc@list{\fenc@list\enc@elt<#1>}%
                               207 (platexrelease)
                               208 (platexrelease)
                                                     \@font@info{Redeclaring font encoding #1}%
                               209 (platexrelease)
                                                 \fi
                               210 \langle platexrelease \rangle
                                                  \global\@namedef{T@#1}{\#2}\%
                               211 \langle platexrelease \rangle
                                                 \label{local_mamedef_M0#1} $$ \ \end{M0#1} {\default0M#3} % $$
                               212 (platexrelease)
                                                 \xdef\LastDeclaredEncoding{#1}%
                               213 \langle platexrelease \rangle }
                               214 (platexrelease)\let\DeclareFontEncoding@saved\@undefined
                               215 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
                               216 \langle *plcore \rangle
                               和文エンコードの宣言をするコマンドです。
     \DeclareKanjiEncoding
                               217 \def\DeclareKanjiEncoding#1{%
\DeclareYokoKanjiEncoding
                                    \@latex@warning{%
                               218
\DeclareYokoKanjiEncoding@
                                        The \string\DeclareKanjiEncoding\space is obsoleted command. Please use
\DeclareTateKanjiEncoding
\DeclareTateKanjiEncoding@
                               File b: plfonts.dtx Date: 2020/02/28 Version v1.6z
                                                                                                                15
```

\wlog{Now handling font encoding #1 ...}%

176

```
220
        \MessageBreak
        the \string\DeclareTateKanjiEncoding\space for 'Tate-kumi' encoding, and
221
        \MessageBreak
        the \string\DeclareYokoKanjiEncoding\space for 'Yoko-kumi' encoding.
223
224
        \MessageBreak
        I treat the '#1' encoding as 'Yoko-kumi'.}
225
     \DeclareYokoKanjiEncoding{#1}%
226
227 }
228 \def\DeclareYokoKanjiEncoding{%
229
     \begingroup
     \nfss@catcodes
230
231
     \expandafter\endgroup
     \DeclareYokoKanjiEncoding@}
232
233 %
234 \def\DeclareYokoKanjiEncoding@#1#2#3{%
     \expandafter
     \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
236
       \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
237
       \xdef\cdp@list{\cdp@list\cdp@elt{#1}%
238
239
                        {\default@k@family}{\default@k@series}%
240
                        {\default@k@shape}}%
       \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@kcmd
241
       \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
^{242}
       \xdef\kyenc@list{\kyenc@list\enc@elt<#1>}%
       \xdef\kenc@list{\kenc@list\enc@elt<#1>}%
244
245
       \OfontOinfo{Redeclaring KANJI (yoko) font encoding #1}%
^{246}
247
     \global\0namedef{T0#1}{\#2}%
248
     \label{local_modef} $$ \global\0namedef{M0#1}{\default0KM#3}% $$
249
250
251 %
252 \def\DeclareTateKanjiEncoding{%
253
     \begingroup
254
     \nfss@catcodes
     \expandafter\endgroup
256
     \DeclareTateKanjiEncoding@}
257 %
258 \def\DeclareTateKanjiEncoding@#1#2#3{%
     \expandafter
259
     \ifx\csname T@#1\endcsname\relax
260
       \def\cdp@elt{\noexpand\cdp@elt}%
261
       \label{limit} $$ \xdef\cdp@list\cdp@elt{#1}% $$
262
                        {\default@k@family}{\default@k@series}%
263
                        {\default@k@shape}}%
264
       \expandafter\let\csname#1-cmd\endcsname\@changed@kcmd
265
^{266}
       \def\enc@elt{\noexpand\enc@elt}%
267
       \xdef\ktenc@list{\ktenc@list\enc@elt<#1>}%
268
       \xdef\kenc@list{\kenc@list\enc@elt<#1>}%
269
     \else
```

```
\fi
                                                                        271
                                                                                   \global\@namedef{T@#1}{#2}%
                                                                                   \global\@namedef{M@#1}{\default@KM#3}%
                                                                        274
                                                                        275 %
                                                                        276 \@onlypreamble\DeclareKanjiEncoding
                                                                        277 \@onlypreamble\DeclareYokoKanjiEncoding
                                                                        278 \Conlypreamble\DeclareYokoKanjiEncodingC
                                                                        279 \@onlypreamble\DeclareTateKanjiEncoding
                                                                        280 \@onlypreamble\DeclareTateKanjiEncoding@
                                                                      和文エンコードのデフォルト値を宣言するコマンドです。
\DeclareKanjiEncodingDefaults
                                                                        281 \def\DeclareKanjiEncodingDefaults#1#2{%
                                                                                   \ifx\relax#1\else
                                                                        282
                                                                                         \verb|\default@KT\\@empty\\else|
                                                                        283
                                                                                             \OfontOinfo{Overwriting KANJI encoding scheme text defaults}%
                                                                        284
                                                                        285
                                                                                         \fi
                                                                        286
                                                                                         \gdef\default@KT{#1}%
                                                                        287
                                                                                   \fi
                                                                                   \ir \relax#2\else
                                                                        288
                                                                                         \ifx\default@KM\@empty\else
                                                                        290
                                                                                              \@font@info{Overwriting KANJI encoding scheme math defaults}%
                                                                        291
                                                                                         \gdef\default@KM{#2}%
                                                                        292
                                                                        293
                                                                                   \fi}
                                                                        294 \let\default@KT\@empty
                                                                        295 \let\default@KM\@empty
                                                                        296 \@onlypreamble\DeclareKanjiEncodingDefaults
                         \KanjiEncodingPair 和文の縦横のエンコーディングはそれぞれ対にして扱うため、セット化するための
                                                                         コマンドを定義します。
                                                                        297 \ def\ Kanji Encoding Pair #1#2 \{\ Cnamed ef \{t Cenc C#1\} \{ \#2 \} \ Cnamed ef \{y Cenc C#2\} \{ \#1\} \}
                         \DeclareFontFamily 欧文ファミリを宣言するためのコマンドです。\ffam@listを作るように再定義を
                                                                         します。
                                                                        298 \def\DeclareFontFamily#1#2#3{%
                                                                                 \@ifundefined{T@#1}%
                                                                                         \label{lem:conding} $$ \operatorname{Color}(Encoding scheme '#1' unknown}\end{2} 
                                                                        301
                                                                                         {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                                                                           \expandafter\expandafter\expandafter
                                                                        302
                                                                                           303
                                                                                           \ifin@ \else
                                                                        304
                                                                                                  \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
                                                                        305
                                                                                                  \xdef\ffam@list{\ffam@list\fam@elt<#2>}%
                                                                        306
                                                                        307
                                                                                           \def\reserved@a{#3}%
                                                                        308
                                                                        309
                                                                                           \global
```

\OfontOinfo{Redeclaring KANJI (tate) font encoding #1}%

270

```
\expandafter\let\csname #1+#2\expandafter\endcsname
                                                                 310
                                                                                                      \ifx \reserved@a\@empty
                                                                 311
                                                                 312
                                                                                                           \@empty
                                                                 313
                                                                                                      \else \reserved@a
                                                                                                      \fi
                                                                 314
                                                                 315
                                                                                   }%
                                                                 316 }
              \DeclareKanjiFamily 和文ファミリを宣言するためのコマンドです。
                                                                 317 \def\DeclareKanjiFamily#1#2#3{%
                                                                           \@ifundefined{T@#1}%
                                                                                   {\@latex@error{KANJI Encoding scheme '#1' unknown}\@eha}%
                                                                 319
                                                                 320
                                                                                   {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                                                 321
                                                                                     \expandafter\expandafter\expandafter
                                                                                     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kfam@list}%
                                                                 322
                                                                 323
                                                                                     \ifin@ \else
                                                                                             \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
                                                                 325
                                                                                             \xdef\kfam@list{\kfam@list\fam@elt<#2>}%
                                                                 326
                                                                                     \fi
                                                                 327
                                                                                     \def\reserved@a{#3}%
                                                                 328
                                                                                     \global
                                                                                     \expandafter\let\csname #1+#2\expandafter\endcsname
                                                                 329
                                                                                                      \ifx \reserved@a\@empty
                                                                 330
                                                                 331
                                                                                                           \@empty
                                                                 332
                                                                                                      \else \reserved@a
                                                                 333
                                                                                                      \fi
                                                                 334
                                                                                     }%
                                                                 335 }
                                                                 目的の和文フォントが見つからなかったときに使うフォントの宣言をするコマンド
\DeclareKanjiSubstitution
                                                                  です。\DeclareFontSubstitutionに対応します。
                                                                 336 \def\DeclareKanjiSubstitution#1#2#3#4{%
                                                                              \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
                                                                 337
                                                                 338
                                                                                   \@latex@error{KANJI Encoding scheme '#1' unknown}\@eha
                                                                 339
                                                                              \else
                                                                 340
                                                                                   \begingroup
                                                                                          \def\reserved@a{#1}%
                                                                 342
                                                                                          \t 0
                                                                                          \def\cdp@elt##1##2##3##4{%
                                                                 343
                                                                 344
                                                                                               \def\reserved@b{##1}%
                                                                                               \verb|\ifx\reserved@a\reserved@b|
                                                                 345
                                                                                                    346
                                                                 347
                                                                                               \else
                                                                                                    348
                                                                 349
                                                                                               fi}%
                                                                                          \cdp@list
                                                                 350
                                                                                          \xdef\cdp@list{\the\toks@}%
                                                                 351
                                                                 352
                                                                                   \endgroup
                                                                 353
                                                                                   \global\@namedef{D@#1}{\def\default@family{#2}%
```

File b: plfonts.dtx Date: 2020/02/28 Version v1.6z

```
354
                                                             \def\default@series{#3}%
                                                             \def\default@shape{#4}}%
                           355
                                \fi}
                           356
                           357 \@onlypreamble\DeclareKanjiSubstitution
                           \DeclareErrorFont に対応するコマンドです。
\DeclareErrorKanjiFont
                           358 (/plcore)
                           359 \ \langle platexrelease \rangle \ | plincludeInRelease \{ 2019/10/01 \} \{ \ ClareErrorKanjiFont \} \} 
                           360 (platexrelease)
                                                                 {No side effects please}%
                           361 (*plcore | platexrelease)
                           362 \def\DeclareErrorKanjiFont#1#2#3#4#5{%
                                  \xdef\error@kfontshape{%
                                     \noexpand\expandafter\noexpand\split@name\noexpand\string
                           365
                                     \ensuremath{\texttt{expandafter}} \ensuremath{\texttt{noexpand}} \ensuremath{\texttt{csname}} \ensuremath{\texttt{1/#2/#3/#4/\#5}} \endcsname
                           366
                                     \noexpand\@nil}%
                                  \gdef\default@k@family{#2}%
                           367
                                  \gdef\default@k@series{#3}%
                           368
                                  \gdef\default@k@shape{#4}%
                           369
                           370
                           371 (/plcore | platexrelease)
                           372 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                           373 \ \langle platexrelease \rangle \ | \ DeclareErrorKanjiFont \}
                           374 (platexrelease)
                                                                 {ASCII Corporation original}%
                           375 ⟨platexrelease⟩\def\DeclareErrorKanjiFont#1#2#3#4#5{%
                           376 (platexrelease)
                                               \xdef\error@kfontshape{%
                           377 (platexrelease)
                                                   \noexpand\expandafter\noexpand\split@name\noexpand\string
                           378 (platexrelease)
                                                   379 \langle platexrelease \rangle
                                                   \noexpand\@nil}%
                           380 (platexrelease)
                                               \gdef\default@k@family{#2}%
                           381 (platexrelease)
                                               \gdef\default@k@series{#3}%
                           382 (platexrelease)
                                               \gdef\default@k@shape{#4}%
                           383 (platexrelease)
                                               \global\let\k@family\default@k@family
                           384 (platexrelease)
                                               \global\let\k@series\default@k@series
                           385 (platexrelease)
                                               \global\let\k@shape\default@k@shape
                           386 (platexrelease)
                                               \gdef\f@size{#5}%
                           387 (platexrelease)
                                               \gdef\f@baselineskip{#5pt}}
                           388 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \\ {\tt plEndIncludeInRelease}
                           389 (*plcore)
                           390 \@onlypreamble\DeclareErrorKanjiFont
                          フォント名を宣言するコマンドです。
     \DeclareFixedFont
                           391 \def\DeclareFixedFont#1#2#3#4#5#6{%
                                  \begingroup
                           392
                           393
                                     \let\afont\font
                                     \math@fontsfalse
                           394
                           395
                                     \every@math@size{}%
                                     fontsize{#6}\z@
                                     \left( \frac{\#2}{\%} \right)
                           397
                           398
                                     \expandafter\expandafter\expandafter
```

```
\inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
399
400
         \ifin@
           \usekanji{#2}{#3}{#4}{#5}%
401
           \let\font\jfont
402
403
         \else
404
            \expandafter\expandafter\expandafter
           \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
405
           \ifin@
406
              \usekanji{#2}{#3}{#4}{#5}%
407
              \let\font\tfont
408
           \else
409
              \useroman{#2}{#3}{#4}{#5}%
410
              \let\font\afont
411
           \fi
412
          \fi
413
          \global\expandafter\let\expandafter#1\the\font
414
         \let\font\afont
415
416
      \endgroup
417
```

\reDeclareMathAlphabet

数式モード内で、数式文字用の和欧文フォントを同時に切り替えるコマンドです。 $pIAT_{EX} 2_{\varepsilon}$ には、本来の動作モードと 2.09 互換モードの二つがあり、両モードで数式文字を変更するコマンドや動作が異なります。本来の動作モードでは、\mathrm{...} のように \math??に引数を指定して使います。このときは引数にだけ影響します。 2.09 互換モードでは、\rm のような二文字コマンドを使います。このコマンドには引数を取らず、書体はグルーピングの範囲で反映されます。二文字コマンドは、ネイティブモードでも使えるようになっていて、動作も 2.09 互換モードのコマンドと同じです。

しかし、内部的には \math??という一つのコマンドがすべての動作を受け持ち、\math??コマンドや \??コマンドから呼び出された状態に応じて、動作を変えています。したがって、欧文フォントと和文フォントの両方を一度に変更する、数式文字変更コマンドを作るとき、それぞれの状態に合った動作で動くようにフォント切り替えコマンドを実行させる必要があります。

使い方

usage: \reDeclareMathAlphabet{\mathAA}{\mathBB}{\mathCC}

欧文・和文両用の数式文字変更コマンド \mathAA を (再) 定義します。欧文用のコマンド \mathBB と、和文用の \mathCC を (p)IMTEX 標準の方法で定義しておいた後、上のように記述します。なお、{\mathBB}{\mathCC} の部分については {\@mathBB}{\@mathCC} のように @ をつけた記述をしてもかまいません (互換性のため)。上のような命令を発行すると、\mathAA が、欧文に対しては \mathBB、和文に対しては \mathCC の意味を持つようになります。通常は、

\reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm} oように AA=BB として用います。また、\mathrm は IATEX kernel において標準のコマンドとして既に定義されているので、この場合は \mathrm の再定義となります。native mode での\rm のような two letter command (old font command) に対しても同様なことが引きおこります。つまり、数式モードにおいて、新たな \rm は、IATEX originalの\rm と \mc (正確に言えば \mathrm と \mathrm と \mathrm であるが)の意味を合わせ持つようになります。

補足

- \mathAA を再定義する他の命令 (\DeclareSymbolFontAlphabet を用いるパッケージの使用等) との衝突を避けるためには、\AtBeginDocument を併用するなどして展開位置の制御を行ってください。
- テキストモード時のエラー表示用に \mathBB のみを用いることを除いて、 \mathBB と \mathCC の順は実際には意味を持ちません。和文、欧文の順に定義しても問題はありません。
- 第 2,3 引き数には {\@mathBB}{\@mathCC} のように @ をつけた記述も行えます。ただし、形式は統一してください。判断は第 2 引き数で行っているため、 {\@mathBB}{\mathCC} のような記述ではうまく動作しません。また、\makeatletter な状態で {\@mathBB }{\@mathCC } のような @ と余分なスペースをつけた場合には無限ループを引き起こすことがあります。このような記述は避けるようにして下さい。
- \reDeclareMathAlphabet を実行する際には、\mathBB, \mathCC が定義されている必要はありません。実際に \mathAA を用いる際にはこれらの \mathBB, \mathCC が (p) LATeX 標準の方法で定義されている必要があります。
- 他の部分で \mathAA を全く定義しない場合を除き、\mathAA は \reDeclareMathAlphabet を実行する以前で (p)IFTEX 標準の方法で定義されている必要があります (\mathrm や \mathbf の標準的なコマンドは、IFTEX kernel で既に定義されています)。 \DeclareMathAlphabet の場合には、\reDeclareMathAlphabet よりも前で1度 \mathAA を定義してあれば、\reDeclareMathAlphabet の後ろで再度 \DeclareMathAlphabet を用いて \mathAA の内部の定義内容を変更することには問題ありません。 \DeclareSymbolFontAlphabet の場合、再定義においても \mathAA が直接定義されるので、\mathAA に対する最後の\DeclareSymbolFontAlphabet のさらに後で \reDeclareMathAlphabet を実行しなければ有効とはなりません。

● \documentstyle の互換モードの場合、\rm 等の two letter command (old font command) は、\reDeclareMathAlphabet とは関連することのない別個のコマンドとして定義されます。従って、この場合には \reDeclareMathAlphabet を用いても \rm 等は数式モードにおいて欧文・和文両用のものとはなりません。

```
418 \def\reDeclareMathAlphabet#1#2#3{%
     \edef#1{\noexpand\protect\expandafter\noexpand\csname%
419
420
       \expandafter\@gobble\string#1\space\space\endcsname}%
     \edef\@tempa{\expandafter\@gobble\string#2}%
421
     \edef\@tempb{\expandafter\@gobble\string#3}%
     \edef\@tempc{\string @\expandafter\@gobbletwo\string#2}%
424
     \int x\ensuremaker \
425
       \edef\@tempa{\expandafter\@gobbletwo\string#2}%
426
       \edef\@tempb{\expandafter\@gobbletwo\string#3}%
427
     \expandafter\edef\csname\expandafter\@gobble\string#1\space\space\endcsname%
428
       {\noexpand\DualLang@mathalph@bet%
429
430
         {\expandafter\noexpand\csname\@tempa\space\endcsname}%
431
         {\expandafter\noexpand\csname\@tempb\space\endcsname}%
     }%
432
434 \@onlypreamble\reDeclareMathAlphabet
435 \def\DualLang@mathalph@bet#1#2{%
     \relax\ifmmode
437
       \ifx\math@bgroup\bgroup%
                                     2e normal style
                                                           (\mathbf{mathrm}{...})
438
         \bgroup\let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@standard
439
         \ifx\math@bgroup\relax%
                                     2e two letter style (\rm->\mathrm)
440
           \let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@oldstyle
441
         \else
442
           \ifx\math@bgroup\@empty% 2.09 oldlfont style ({\mathrm ...})
443
              \let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@oldlfont
444
                                     panic! assume 2e normal style
445
              \bgroup\let\DualLang@Mfontsw\DLMfontsw@standard
446
           \fi
447
         \fi
448
       \fi
449
     \else
450
       \let\DualLang@Mfontsw\@firstoftwo
451
452
     \DualLang@Mfontsw{#1}{#2}%
453
454 }
455 \def\DLMfontsw@standard#1#2#3{#1{#2{#3}}\egroup}
456 \def\DLMfontsw@oldstyle#1#2{#1\relax\@fontswitch\relax{#2}}
457 \def\DLMfontsw@oldlfont#1#2{#1\relax#2\relax}
```

\DeclareRelationFont \SetRelationFont

和文書体に対する従属書体を宣言するコマンドです。**従属書体**とは、ある和文書体とペアになる欧文書体のことです。主に多書体パッケージ skfonts を用いるための仕組みです。

\DeclareRelationFont コマンドの最初の4つの引数の組が和文書体の属性、その後の4つの引数の組が従属書体の属性です。

\DeclareRelationFont{JY1}{mc}{m}{0T1}{cmr}{m}{n} \DeclareRelationFont{JY1}{gt}{m}{0T1}{cmr}{bx}{n}

上記の例は、明朝体の従属書体としてコンピュータモダンローマン、ゴシック体の 従属書体としてコンピュータモダンボールドを宣言しています。カレント和文書体 が\JY1/mc/m/nとなると、自動的に欧文書体が\OT1/cmr/m/nになります。また、 和文書体が\JY1/gt/m/nになったときは、欧文書体が\OT1/cmr/bx/nになります。 和文書体のシェイプ指定を省略するとエンコード/ファミリ/シリーズの組合せ で従属書体が使われます。このときは、\selectfontが呼び出された時点でのシェイプ(\f@shape)の値が使われます。

\DeclareRelationFontの設定値はグローバルに有効です。\SetRelationFontの設定値はローカルに有効です。フォント定義ファイルで宣言をする場合は、\DeclareRelationFontを使ってください。

```
458 \left[ \frac{458}{all@shape{all}} \right]
459 \ensuremath{\mbox{\sc height}}\xspace 18459 \ensuremath{\mbo
                  \def\rel@shape{#4}%
461
                  \ifx\rel@shape\@empty
                               \global
462
463
                               \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/all\endcsname{%
                                      \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
464
                                      \romanseries{#7}}%
465
466
                  \else
467
                               \global
                               \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/#4\endcsname{%
468
                                      \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
469
470
                                      \romanseries{#7}\romanshape{#8}}%
471
472 }
473 \def\SetRelationFont#1#2#3#4#5#6#7#8{%
                  \def\rel@shape{#4}%
                  \ifx\rel@shape\@empty
                               \expandafter\def\csname rel@#1/#2/#3/all\endcsname{%
476
477
                                      \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
478
                                      \romanseries{#7}}%
                  \else
479
                              \end{after\end} $$\operatorname{rel@#1/#2/#3/#4\endcsname}_{\%} $$
480
                                     \romanencoding{#5}\romanfamily{#6}%
481
482
                                      \romanseries{#7}\romanshape{#8}}%
483
                  \fi
484 }
```

\if@knjcmd \if@knjcmd は欧文書体を従属書体にするかどうかのフラグです。このフラグが真になると、欧文書体に従属書体が使われます。

485 \newif\if@knjcmd

```
\if@knjcmd フラグは \userelfont コマンドによって、真となります。そして
\userelfont
              \selectfont 実行後には偽に初期化されます。
              486 \langle /plcore \rangle
              487 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2019/10/01}{\userelfont}
              488 (platexrelease)
                                                     {Make robust}%
              489 (*plcore | platexrelease)
              490 \verb|\DeclareRobustCommand\userelfont{\Qknjcmdtrue}|
              491 (/plcore | platexrelease)
              492 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
              493 \ \langle platexrelease \rangle \ \langle plIncludeInRelease \{0000/00/00\} \{ \ varelfont \}
              494 (platexrelease)
                                                     {ASCII Corporation original}%
              495 (platexrelease)\def\userelfont{\@knjcmdtrue}
              496 \platexrelease \expandafter \let \csname userelfont \endcsname \@undefined
              497 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
              498 (*plcore)
```

\selectfont \selectfont のオリジナルからの変更部分は、次の3点です。

- 和文書体を変更する部分
- 従属書体に変更する部分
- 和欧文のベースラインを調整する部分

\selectfont コマンドは、まず、和文フォントを切り替えます。 499 (/plcore) 500 (*plcore | trace) 501 \DeclareRobustCommand\selectfont{% \let\tmp@error@fontshape\error@fontshape \let\error@fontshape\error@kfontshape \edef\tmp@item{{\k@encoding}}% 504 \expandafter\expandafter\expandafter 505 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}% 506 507 \let\cy@encoding\k@encoding 508 \edef\ct@encoding{\csname t@enc@\k@encoding\endcsname}% 509 510 511 \expandafter\expandafter\expandafter $\verb|\colorer| tmp@item=\expandafter{\colorer| tmp@item=\colorer|} % % The colorer is a constant of the colorer is a colorer in the colorer is a colorer in the colorer in t$ 512\ifin@ 513 \let\ct@encoding\k@encoding 514 \edef\cy@encoding{\csname y@enc@\k@encoding\endcsname}% 515 516 \@latex@error{KANJI Encoding scheme '\k@encoding' unknown}\@eha 517 \fi 518 \fi 519

```
\let\font\tfont
520
    \let\k@encoding\ct@encoding
   \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
   \pickup@font
524
   \font@name
525
   \let\font\jfont
526
    \let\k@encoding\cy@encoding
    \xdef\font@name{\csname\curr@kfontshape/\f@size\endcsname}%
527
528
    \pickup@font
    \font@name
529
    \expandafter\def\expandafter\k@encoding\tmp@item
530
    \kenc@update
    \let\error@fontshape\tmp@error@fontshape
次に、\if@knjcmd が真の場合、欧文書体を現在の和文書体に関連付けされたフォ
ントに変えます。このフラグは \userelfont コマンドによって真となります。この
フラグはここで再び、偽に設定されます。
    \if@knjcmd \@knjcmdfalse
      \expandafter\ifx
535
      \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname\relax
536
        \expandafter\ifx
           \csname rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname\relax
537
538
        \else
           \verb|\csname| rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/all\endcsname| \\
539
        \fi
540
      \else
541
         \verb|\csname| rel@\k@encoding/\k@family/\k@series/\k@shape\endcsname| \\
542
543
   \fi
そして、欧文フォントを切り替えます。
    \let\font\afont
    \xdef\font@name{\csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
547
    \pickup@font
548
    \font@name
         \ifnum \tracingfonts>\tw@
549 (trace)
           \@font@info{Roman:Switching to \font@name}\fi
550 (trace)
    \enc@update
最後に、サイズが変更されていれば、ベースラインの調整などを行ないます。英語版
の \selectfont では最初に行なっていますが、pIPT_{PX} 2_{\varepsilon} ではベースラインシフト
の調整をするために、書体を確定しなければならないため、一番最後に行ないます
    \ifx\f@linespread\baselinestretch \else
552
      \set@fontsize\baselinestretch\f@size\f@baselineskip
553
554
    \fi
555
    \size@update}
556 ⟨/plcore | trace⟩
557 (*plcore)
```

```
\set@fontsize \fontsize コマンドの内部形式です。ベースラインの設定と、支柱の設定を行ない
             ます。
             558 (/plcore)
             560 (platexrelease | trace)
                                                {Construct \ystrutbox}%
             561 (*plcore | platexrelease | trace)
             562 \def\set@fontsize#1#2#3{%
                   \@defaultunits\@tempdimb#2pt\relax\@nnil
             563
                   \edef\f@size{\strip@pt\@tempdimb}%
             564
                   \@defaultunits\@tempskipa#3pt\relax\@nnil
             565
             566
                   \edef\f@baselineskip{\the\@tempskipa}%
             567
                   \edef\f@linespread{#1}%
                   \let\baselinestretch\f@linespread
             568
                   \def\size@update{%
             569
                     \baselineskip\f@baselineskip\relax
             570
                     \baselineskip\f@linespread\baselineskip
             571
             572
                     \normalbaselineskip\baselineskip
             ここで、ベースラインシフトの調整と支柱を組み立てます。
                     \adjustbaseline
             573
                     \setbox\ystrutbox\hbox{\yoko
             574
                         \vrule\@width\z@
             575
                              \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
             576
             577
                     \setbox\tstrutbox\hbox{\tate
             578
                         \vrule\@width\z@
                              \@height.5\baselineskip \@depth.5\baselineskip}%
             579
                     \setbox\zstrutbox\hbox{\tate
             580
             581
                         \vrule\@width\z@
                              \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
             フォントサイズとベースラインに関する診断情報を出力します。
             583 (*trace)
                    \ifnum \tracingfonts>\tw@
             584
             585
                     \ifx\f@linespread\@empty
             586
                       \let\reserved@a\@empty
             587
                     \else
                       \def\reserved@a{\f@linespread x}%
             588
                     \fi
             589
             590
                     \@font@info{Changing size to\space
                           \f@size/\reserved@a \f@baselineskip}%
             591
                     \aftergroup\type@restoreinfo
             592
             593
                   \fi
             594 (/trace)
                       \let\size@update\relax}}
             595
             596 (/plcore | platexrelease | trace)
             597 ⟨platexrelease | trace⟩ \plEndIncludeInRelease
             599 (platexrelease | trace)
                                                {ASCII Corporation original}%
```

```
601 (platexrelease | trace)
                             \@defaultunits\@tempdimb#2pt\relax\@nnil
602 (platexrelease | trace)
                             \edef\f@size{\strip@pt\@tempdimb}%
603 (platexrelease | trace)
                             \@defaultunits\@tempskipa#3pt\relax\@nnil
604 (platexrelease | trace)
                             \edef\f@baselineskip{\the\@tempskipa}%
605 (platexrelease | trace)
                             \edef\f@linespread{#1}%
606 (platexrelease | trace)
                             \let\baselinestretch\f@linespread
607 (platexrelease | trace)
                             \def\size@update{%
608 (platexrelease | trace)
                               \baselineskip\f@baselineskip\relax
609~\langle \mathsf{platexrelease} \mid \mathsf{trace} \rangle
                               \baselineskip\f@linespread\baselineskip
610 (platexrelease | trace)
                               \normalbaselineskip\baselineskip
611 (platexrelease | trace)
                               \adjustbaseline
612 (platexrelease | trace)
                               \setbox\strutbox\hbox{\yoko
613 (platexrelease | trace)
                                    \vrule\@width\z@
614 (platexrelease | trace)
                                           \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
615 (platexrelease | trace)
                               \setbox\tstrutbox\hbox{\tate
616 (platexrelease | trace)
                                    \vrule\@width\z@
617 (platexrelease | trace)
                                           \@height.5\baselineskip \@depth.5\baselineskip}%
618 (platexrelease | trace)
                               \setbox\zstrutbox\hbox{\tate
619 (platexrelease | trace)
                                    \vrule\@width\z@
620 (platexrelease | trace)
                                           \@height.7\baselineskip \@depth.3\baselineskip}%
621 (*trace)
622 (platexrelease | trace)
                             \ifnum \tracingfonts>\tw@
623 (platexrelease | trace)
                               \ifx\f@linespread\@empty
624 (platexrelease | trace)
                                  \let\reserved@a\@empty
625 (platexrelease | trace)
                                  \def\reserved@a{\f@linespread x}%
626 (platexrelease | trace)
627 (platexrelease | trace)
628 (platexrelease | trace)
                               \@font@info{Changing size to\space
629 (platexrelease | trace)
                                      \f@size/\reserved@a \f@baselineskip}%
630 (platexrelease | trace)
                               \aftergroup\type@restoreinfo
631 (platexrelease | trace)
632 (/trace)
633 (platexrelease | trace)
                                  \let\size@update\relax}}
634 \(\rangle platexrelease \) \(\rangle plendIncludeInRelease \)
```

\adjustbaseline

現在の和文フォントの空白(EUCコード 0xA1A1)の中央に現在の欧文フォントの "/"の中央がくるようにベースラインシフトを設定します。

当初はまずベースラインシフト量をゼロにしていましたが、\tbaselineshiftを連続して変更した後に鈎括弧類を使うと余計なアキがでる問題が起こるため、\tbaselineshiftをゼロクリアする処理を削除しました。

しかし、それではベースラインシフトを調整済みの欧文ボックスと比較してしまうため、計算した値が大きくなってしまいます。そこで、このボックスの中でゼロにするようにしました。また、"/"と比較していたのを"M"にしました。

全角空白(EUC コード 0xA1A1) は JFM で特殊なタイプに分類される可能性があるため、和文書体の基準を「漢」(JIS コード 0x3441)へ変更しました。

```
636 \newbox\adjust@box
637 \newdimen\adjust@dimen
638 (/plcore)
639 \langle platexrelease \mid trace \rangle \\ plIncludeInRelease \{2019/10/01\} \{ \land djustbaseline \} 
640 (platexrelease | trace)
                                           {Make robust}%
641 \langle *plcore \mid platexrelease \mid trace \rangle
642 \verb|\DeclareRobustCommand\adjustbaseline{%}|
和文フォントの基準値を設定します。
       \setbox\adjust@box\hbox{\char\jis"3441}%"
643
       \cht\ht\adjust@box
644
645
       \cdp\dp\adjust@box
       \cwd\wd\adjust@box
       \cvs\normalbaselineskip
       \chs\cwd
       \cHT\cht \advance\cHT\cdp
649
基準となる欧文フォントの文字を含んだボックスを作成し、ベースラインシフト量
```

の計算を行ないます。計算式は次のとおりです。

ベースラインシフト量 =
$$\{(漢の深さ) - (M の深さ)\}$$

$$-\frac{(漢の高さ + 深さ) - (M の高さ + 深さ)}{2}$$

```
650
      \iftdir
        \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
651
        \adjust@dimen\ht\adjust@box
652
        \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
653
        \advance\adjust@dimen-\cHT
654
        \divide\adjust@dimen\tw@
655
        \advance\adjust@dimen\cdp
656
        \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
657
        \tbaselineshift\adjust@dimen
658
               \ifnum \tracingfonts>\tw@
659 (trace)
660 (trace)
                  \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}%
661 (trace)
               \fi
662
      \fi}
663 (/plcore | platexrelease | trace)
664 \ \langle {\tt platexrelease} \ | \ {\tt trace} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
665 \langle platexrelease \mid trace \rangle \\ plIncludeInRelease \{2017/07/29\} \{ \land djustbaseline \} 
666 (platexrelease | trace)
                                                {Change zenkaku reference}%
667 (platexrelease | trace)\def\adjustbaseline{%
668 (platexrelease | trace)
                             \setbox\adjust@box\hbox{\char\jis"3441}%"
669 (platexrelease | trace)
                             \cht\ht\adjust@box
670 (platexrelease | trace)
                             \cdp\dp\adjust@box
671 (platexrelease | trace)
                             \cwd\wd\adjust@box
```

```
673 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \chs\cwd
                                                    674 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \cHT\cht \advance\cHT\cdp
                                                    675 (platexrelease | trace)
                                                                                                                             \iftdir
                                                                                                                                    \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
                                                    676 (platexrelease | trace)
                                                    677 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \adjust@dimen\ht\adjust@box
                                                    678 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
                                                    679 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \advance\adjust@dimen-\cHT
                                                                                                                                    \divide\adjust@dimen\tw@
                                                    680 (platexrelease | trace)
                                                    681 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \advance\adjust@dimen\cdp
                                                    682 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
                                                    683 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \tbaselineshift\adjust@dimen
                                                    684 (*trace)
                                                    685 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                     \ifnum \tracingfonts>\tw@
                                                    686 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                            \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}%
                                                    687 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                     \fi
                                                    688~\langle/\text{trace}\rangle
                                                    689 (platexrelease | trace) \fi}
                                                    690 \ \langle platexrelease \ | \ trace \rangle \ \langle platexrelease \ | \ 
                                                    692 \label{eq:condition} $$692 \end{condition} $$ \end{condition} $$
                                                    693 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                                                                     {ASCII Corporation original}%
                                                    694 (platexrelease | trace) \def \adjustbaseline \%
                                                    695 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \setbox\adjust@box\hbox{\char\euc"A1A1}%"
                                                    696 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \cht\ht\adjust@box
                                                    697 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \cdp\dp\adjust@box
                                                    698 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \cwd\wd\adjust@box
                                                    699 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \cvs\normalbaselineskip
                                                    700 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \chs\cwd
                                                    701 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \cHT\cht \advance\cHT\cdp
                                                    702 (platexrelease | trace)
                                                                                                                             \iftdir
                                                    703 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \setbox\adjust@box\hbox{\tbaselineshift\z@ M}%
                                                    704 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \adjust@dimen\ht\adjust@box
                                                    705 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \advance\adjust@dimen\dp\adjust@box
                                                    706 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \advance\adjust@dimen-\cHT
                                                    707 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \divide\adjust@dimen\tw@
                                                    708 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \advance\adjust@dimen\cdp
                                                    709 \langle platexrelease \mid trace \rangle
                                                                                                                                    \advance\adjust@dimen-\dp\adjust@box
                                                    710 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                    \tbaselineshift\adjust@dimen
                                                    711 (*trace)
                                                    712 \; \langle \mathsf{platexrelease} \; | \; \mathsf{trace} \rangle
                                                                                                                                     \ifnum \tracingfonts>\tw@
                                                    713 (platexrelease | trace)
                                                                                                                                           \typeout{baselineshift:\the\tbaselineshift}
                                                    714 (platexrelease | trace)
                                                    715 (/trace)
                                                    716 (platexrelease | trace) \fi}
                                                    717 \( platexrelease \| trace \\ \expandafter \| let \\ csname adjustbaseline \| \expandefined
                                                    718 \(\rangle platexrelease \| \text{trace} \rangle plEndIncludeInRelease \]
                                                    719 (*plcore)
                                                   書体のエンコードを指定するコマンドです。\fontencoding コマンドは和欧文のど
\romanencoding
\kanjiencoding
                                                                                                                                                                                                                                                                                                   29
   \fontencoding File b: plfonts.dtx Date: 2020/02/28 Version v1.6z
```

\cvs\normalbaselineskip

672 (platexrelease | trace)

ちらかに影響します。\DeclareKanjiEncoding で指定されたエンコードは和文エンコードとして、\DeclareFontEncoding で指定されたエンコードは欧文エンコードとして認識されます。

\kanjiencoding と \romanencoding は与えられた引数が、エンコードとして登録されているかどうかだけを確認し、それが和文か欧文かのチェックは行なっていません。そのため、高速に動作をしますが、\kanjiencoding に欧文エンコードを指定したり、逆に \romanencoding に和文エンコードを指定した場合はエラーとなります。

```
720 \DeclareRobustCommand\romanencoding[1] {%
       \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
         \@latex@error{Encoding scheme '#1' unknown}\@eha
722
723
         \edef\f@encoding{#1}%
724
725
         \ifx\cf@encoding\f@encoding
726
           \let\enc@update\relax
727
           \let\enc@update\@@enc@update
728
729
         \fi
       \fi
730
731 }
732 \DeclareRobustCommand\kanjiencoding[1] {%
       \expandafter\ifx\csname T@#1\endcsname\relax
         \@latex@error{KANJI Encoding scheme '#1' unknown}\@eha
735
       \else
736
         \edef\k@encoding{#1}%
         \ifx\ck@encoding\k@encoding
737
            \let\kenc@update\relax
738
         \else
739
            \let\kenc@update\@@kenc@update
740
         \fi
741
742
       \fi
743 }
744 \DeclareRobustCommand\fontencoding[1]{%
     \edef\tmp@item{{#1}}%
     \expandafter\expandafter\expandafter
747
     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
     \ifin@ \kanjiencoding{#1}\else\romanencoding{#1}\fi}
```

\@@kenc@update

\kanjiencoding コマンドのコードからもわかるように、\ck@encoding と \k@encoding が異なる場合、\kenc@update コマンドは \@@kenc@update コマンドと等しくなります。

\@@kenc@update コマンドは、そのエンコードでのデフォルト値を設定するためのコマンドです。欧文用の \@@enc@update コマンドでは、750 行目と 751 行目のような代入もしていますが、和文用にはコメントにしてあります。これらは \DeclareTextCommand や \ProvideTextCommand などでエンコードごとに設定さ

```
コマンドやマクロを作成することは、現時点では、ないと思います。
                                   749 \def\@@kenc@update{%
                                   750 % \expandafter\let\csname\ck@encoding -cmd\endcsname\@changed@kcmd
                                                \verb|\expandafter| let| csname| & encoding-cmd| endcsname| & encoding-cmd| & & encod
                                   751 %
                                   752
                                              \default@KT
                                               \csname T@\k@encoding\endcsname
                                   753
                                               \csname D@\k@encoding\endcsname
                                   754
                                               \let\kenc@update\relax
                                   755
                                   756
                                               \let\ck@encoding\k@encoding
                                   757
                                               \edef\tmp@item{{\k@encoding}}%
                                   758
                                               \expandafter\expandafter\expandafter
                                               \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kyenc@list}%
                                               \ifin@ \let\cy@encoding\k@encoding
                                   760
                                   761
                                   762
                                                    \expandafter\expandafter\expandafter
                                                    \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ktenc@list}%
                                   763
                                                    \ifin@ \let\ct@encoding\k@encoding
                                   764
                                   765
                                                        \@latex@error{KANJI Encoding scheme '\k@encoding' unknown}\@eha
                                   766
                                   767
                                                    \fi
                                   768
                                              \fi
                                   769 }
                                   770 \let\kenc@update\relax
\@changed@kcmd \@changed@cmd の和文エンコーディングバージョン。
                                   771 \def\@changed@kcmd#1#2{%
                                   772
                                                 \ifx\protect\@typeset@protect
                                   773
                                                         \@inmathwarn#1%
                                   774
                                                        \expandafter\ifx\csname\ck@encoding\string#1\endcsname\relax
                                   775
                                                               \expandafter\ifx\csname ?\string#1\endcsname\relax
                                   776
                                                                      \expandafter\def\csname ?\string#1\endcsname{%
                                   777
                                                                             \TextSymbolUnavailable#1%
                                                                     }%
                                   778
                                                               \fi
                                   779
                                   780
                                                               \global\expandafter\let
                                   781
                                                                            \csname\cf@encoding \string#1\expandafter\endcsname
                                   782
                                                                            \csname ?\string#1\endcsname
                                   783
                                   784
                                                         \csname\ck@encoding\string#1%
                                                               \expandafter\endcsname
                                    785
                                                 \else
                                    786
                                   787
                                                         \noexpand#1%
                                   788
                                                 \fi}
                                \fontfamily コマンド内で使用するフラグです。@notkfam フラグは和文ファミリ
           \@notkfam
                                   でなかったことを、@notffam フラグは欧文ファミリでなかったことを示します。
           \@notffam
                                   789 \newif\if@notkfam
```

れるコマンドを使うための仕組みです。しかし、和文エンコードに依存するような

790 \newif\if@notffam

 $791 \neq 0$

\romanfamily 書体のファミリを指定するコマンドです。

\kanjifamily \fontfamily

\kanjifamily と \romanfamily は与えられた引数が、和文あるいは欧文のファミリとして正しいかのチェックは行なっていません。そのため、高速に動作をしますが、\kanjifamily に欧文ファミリを指定したり、逆に \romanfamily に和文ファミリを指定した場合は、エラーとなり、代用フォントかエラーフォントが使われます。

792 \DeclareRobustCommand\romanfamily[1]{\edef\f@family{#1}}

793 \DeclareRobustCommand\kanjifamily[1]{\edef\k@family{#1}}

\fontfamily は、指定された値によって、和文ファミリか欧文ファミリ、あるいは両方のファミリを切り替えます。和欧文ともに無効なファミリ名が指定された場合は、和欧文ともに代替書体が使用されます。

引数が\rmfamilyのような名前で与えられる可能性があるため、まず、これを展開したものを作ります。

また、和文ファミリと欧文ファミリのそれぞれになかったことを示すフラグを偽にセットします。

794 \DeclareRobustCommand\fontfamily[1]{%

795 \edef\tmp@item{{#1}}%

796 \@notkfamfalse

797 \@notffamfalse

次に、この引数が \kfam@list に登録されているかどうかを調べます。登録されていれば、 \k@family にその値を入れます。

798 \expandafter\expandafter\expandafter

799 \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kfam@list}%

800 \ifin@ \edef\k@family{#1}%

そうでないときは、\notkfam@listに登録されているかどうかを調べます。登録されていれば、この引数は和文ファミリではありませんので、\@notkfam フラグを真にして、欧文ファミリのルーチンに移ります。

このとき、\ffam@listを調べるのではないことに注意をしてください。\ffam@listを調べ、これにないファミリを和文ファミリであるとすると、たとえば、欧文ナールファミリが定義されているけれども、和文ナールファミリが未定義の場合、\fontfamily{nar}という指定は、narが\ffam@listにだけ、登録されているため、和文書体をナールにすることができません。

逆に、\kfam@listに登録されていないからといって、\k@familyにnarを設定すると、cmrのようなファミリも\k@familyに設定される可能性があります。したがって、「欧文でない」を明示的に示す\notkfam@listを見る必要があります。

801 \else

```
802
       \expandafter\expandafter\expandafter
       \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\notkfam@list}%
803
       \ifin@ \@notkfamtrue
```

\notkfam@list に登録されていない場合は、フォント定義ファイルが存在するかど うかを調べます。ファイルが存在する場合は、\k@familyを変更します。ファイル が存在しない場合は、\notkfam@list に登録します。

\kenc@list に登録されているエンコードと、指定された和文ファミリの組合せの フォント定義ファイルが存在する場合は、\k@family に指定された値を入れます。

```
\else
805
         \@tempswzfalse
806
         \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
807
         \message{(I search kanjifont definition file:}%
808
809
         \def\enc@elt<##1>{\message{.}%
           \edef\reserved@a{\lowercase{\noexpand\IfFileExists{##1#1.fd}}}%
810
           \reserved@a{\@tempswztrue}{}\relax}%
811
         \kenc@list
812
813
         \message{)}%
814
         \if@tempswz
           \edef\k@family{#1}%
```

つぎの部分が実行されるのは、和文ファミリとして認識できなかった場合です。こ の場合は、\@notkfam フラグを真にして、\notkfam@list に登録します。

```
\else
816
817
            \@notkfamtrue
           \xdef\notkfam@list{\notkfam@list\fam@elt<#1>}%
818
```

\kfam@list と \notkfam@list に登録されているかどうかを調べた \ifin@を閉じ ます。

820 \fi\fi

欧文ファミリの場合も、和文ファミリと同様の方法で確認をします。

```
\expandafter\expandafter\expandafter
     \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\ffam@list}%
     \ifin@ \edef\f@family{#1}\else
       \expandafter\expandafter\expandafter
824
825
       \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\notffam@list}%
826
       \ifin@ \@notffamtrue \else
827
         \@tempswzfalse
         \def\fam@elt{\noexpand\fam@elt}%
828
         \message{(I search font definition file:}%
829
         \def\enc@elt<##1>{\message{.}%
830
           \edef\reserved@a{\lowercase{\noexpand\IfFileExists{##1#1.fd}}}%
831
           \reserved@a{\@tempswztrue}{}\relax}%
832
         \fenc@list
833
         \message{)}%
834
835
         \if@tempswz
```

```
\edef\f@family{#1}%
836
837
         \else
           \@notffamtrue
           \xdef\notffam@list{\notffam@list\fam@elt<#1>}%
839
         \fi
840
     \fi\fi
841
最後に、指定された文字列が、和文ファミリと欧文ファミリのいずれか、あるいは
 両方として認識されたかどうかを確認します。
   どちらとも認識されていない場合は、ファミリの指定ミスですので、代用フォン
 トを使うために、故意に指定された文字列をファミリに入れます。
     \if@notkfam\if@notffam
         \edef\k@family{#1}\edef\f@family{#1}%
     \fi\fi}
844
845 (/plcore)
本家 	ext{IPT}_{	ext{E}} X 2_{\varepsilon} 2020-02-02 patch level 5 で追加された命令です。NFSS が大幅に修正・
拡張された 	ext{PT}_{	ext{EX}} 2_{\varepsilon} 2020-02-02 のうち、patch level 2 には latex3/latex2e#277
のバグがあり、patch level 4には latex3/latex2e#293のバグがあったため、安定
 した \text{IAT}_{FX} 2_{\varepsilon} のみをサポートします。
846 (*plcore | platexrelease)
847 \ifx\fontseriesforce\@undefined
                                      % old
                                      % 2020-02-02
848 \else
     \ifx\@forced@seriestrue\@undefined % patch level 0, 1, 2
       \@latex@error
851
         {Please update LaTeX2e!^^J\space\space
          At least LaTeX2e 2020-02-02 patch level 3 is required}
852
         {LaTeX2e 2020-02-02 patch level 2 has a bug.}
853
             \@@end
854 (plcore)
     \fi
855
     % actually we'd like to check the below too,
856
     % but commented out for TL19 frozen since
     % platex-dev format generation fails
     %\ifx\series@maybe@drop@one@m\@undefined % patch level 0--4
     % \@latex@error
860
          {Please update LaTeX2e!^^J\space\space
861
     %
           At least LaTeX2e 2020-02-02 patch level 5 is required}
862
     %
     %
          {LaTeX2e 2020-02-02 patch level 2 and 4 has a bug.}
863
864 %\fi
865 \fi
866 (/plcore | platexrelease)
書体のシリーズを指定するコマンドです。\fontseries コマンドは和欧文の両方に
影響します。
```

2019年までは無条件に指定されたとおりのシリーズを選択していましたが、

\series@maybe@drop@one@m

\romanseries \kanjiseries

\fontseries

```
れた「シリーズ更新規則」に基づきシリーズを選択します。
                                                    867 (*plcore | platexrelease)
                                                    868 \ifx\fontseriesforce\@undefined % old
                                                    869 \label{lem:bound} $$ 869 \end{\colored} $$ \colored{\colored} $$ $$ \colored{\colored} $$ \colored{\colored} $$ $$ \colored{\colored} $$ \colored{\colored} $$ $$ \colored{\colored} $$ $$ \colored{\colored} $$ \colo
                                                    870 \DeclareRobustCommand\kanjiseries[1] {\edef\k@series{#1}}
                                                    871 \DeclareRobustCommand\fontseries[1]{\kanjiseries{#1}\romanseries{#1}}
                                                                                                                             % 2020-02-02
                                                    872 \else
                                                    873 \DeclareRobustCommand\romanseries[1]{\OforcedQseriesfalse\mergeQfontQseries{#1}}
                                                    874 \DeclareRobustCommand\kanjiseries[1]{\@forced@seriesfalse\merge@kanji@series{#1}}
                                                    875 \DeclareRobustCommand\fontseries[1]{\kanjiseries{#1}\romanseries{#1}}
             \romanseriesforce 無条件にシリーズを変更します。
                                                   877 \ifx\fontseriesforce\@undefined % old
             \kanjiseriesforce
                                                    878 \let\romanseriesforce\@undefined
               \fontseriesforce
                                                    879 \let\kanjiseriesforce\@undefined
                                                    880 \ensuremath{\setminus} else
                                                                                                                             % 2020-02-02
                                                    881 \DeclareRobustCommand\romanseriesforce[1] {\@forced@seriestrue\edef\f@series{#1}}
                                                    882 \DeclareRobustCommand\kanjiseriesforce[1] {\@forced@seriestrue\edef\k@series{#1}}
                                                    883 \DeclareRobustCommand\fontseriesforce[1]{\kanjiseriesforce{#1}\romanseriesforce{#1}}
                                                    884 \fi
         \merge@kanji@series
                                                    \merge@font@series の和文版です。
                                                    885 \ifx\fontseriesforce\@undefined % old
       \merge@kanji@series@
                                                    886 \let\merge@kanji@series\@undefined
\set@target@series@kanji
                                                    887 \let\merge@kanji@series@\@undefined
                                                    888 \let\set@target@series@kanji\@undefined
                                                                                                                             % 2020-02-02
                                                    890 \def\merge@kanji@series#1{%
                                                              \expandafter\expandafter\expandafter
                                                    891
                                                              \merge@kanji@series@
                                                    892
                                                                  \csname series@\k@series @#1\endcsname
                                                    893
                                                                  {#1}%
                                                    894
                                                    895
                                                                  \@nil
                                                    896 }
                                                    897 \def\merge@kanji@series@#1#2#3\@nil{%
                                                              \def\reserved@a{#3}%
                                                              \ifx\reserved@a\@empty
                                                    900
                                                                  \set@target@series@kanji{#2}%
                                                    901
                                                    902
                                                                  \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
                                                    903
                                                                      \maybe@load@fontshape\endgroup
                                                                  \edef\reserved@a{\k@encoding /\k@family /#1/\k@shape}%
                                                    904
                                                                    \ifcsname \reserved@a \endcsname
                                                    905
                                                                        \set@target@series@kanji{#1}%
                                                    906
                                                    907
                                                                  \else
                                                                        \ifcsname \k@encoding /\k@family /#2/\k@shape \endcsname
                                                    908
                                                                            \set@target@series@kanji{#2}%
                                                    909
                                                    910
                                                                            {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
```

```
911
                             \else
                               \set@target@series@kanji{#3}%
                   912
                               {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
                   913
                             \fi
                   914
                          \fi
                   915
                   916
                        \fi
                   917 }
                   918 \ifx\series@maybe@drop@one@m\@undefined % patch level 0--4
                   919 \def\set@target@series@kanji#1{%
                           \edef\k@series{#1}%
                   920
                   921
                          \edef\k@series{\expandafter\series@drop@one@m\k@series mm\series@drop@one@m}%
                   922 }
                                                             % patch level 5
                   923 \else
                   924 \def\set@target@series@kanji#1{%
                          \edef\k@series{#1}%
                          \expandafter\series@maybe@drop@one@m\expandafter{\k@series}\k@series
                   926
                   927 }
                   928\fi
                   929 \fi
                   書体のシェイプを指定するコマンドです。\fontshape コマンドは和欧文の両方に
       \romanshape
                   影響します。
       \kanjishape
                     2019 年までは無条件に指定されたとおりのシェイプを選択していましたが、
        \fontshape

etaTpX 2_{\varepsilon} 2020-02-02 以降では、\DeclareFontShapeChangeRule によって宣言さ
                   れた「シェイプ更新規則」に基づきシェイプを選択します。
                   930 \ifx\fontshapeforce\@undefined
                                                     % old
                   931 \DeclareRobustCommand\romanshape[1] {\edef\f@shape{#1}}
                   932 \DeclareRobustCommand\kanjishape[1] {\edef\k@shape{#1}}
                   933 \DeclareRobustCommand\fontshape[1] {\kanjishape{#1}\romanshape{#1}}
                                                      % 2020-02-02
                   935 \DeclareRobustCommand\romanshape[1]{\merge@font@shape{#1}}
                   936 \DeclareRobustCommand\kanjishape[1] {\merge@kanji@shape{#1}}
                   937 \DeclareRobustCommand\fontshape[1] {\kanjishape{#1}\romanshape{#1}}
                   938 \fi
                   無条件にシェイプを変更します。
  \romanshapeforce
                   939 \footshapeforce\Qundefined
                                                      % old
  \kanjishapeforce
                   940 \ \text{let}\
   \fontshapeforce
                   941 \let\kanjishapeforce\@undefined
                                                      % 2020-02-02
                   942 \else
                   943 \DeclareRobustCommand\romanshapeforce[1]{\edef\f@shape{#1}}
                   944 \DeclareRobustCommand\kanjishapeforce[1]{\edef\k@shape{#1}}
                   945 \DeclareRobustCommand\fontshapeforce[1]{\kanjishapeforce{#1}\romanshapeforce{#1}}
                   946 \fi
                   \merge@font@shape の和文版です。
\merge@kanji@shape
                   947 \ifx\fontseriesforce\@undefined % old
\merge@kanji@shape@
```

```
948 \let\merge@kanji@shape\@undefined
           949 \let\merge@kanji@shape@\@undefined
                                               % 2020-02-02
           950 \else
           951 \def\merge@kanji@shape#1{%
                \expandafter\expandafter\expandafter
           952
                \merge@kanji@shape@
           953
                  \csname shape@\k@shape @#1\endcsname
           954
                  {#1}%
           955
                  \@nil
           956
           957 }
           958 \def\merge@kanji@shape@#1#2#3\@nil{%
                \def\reserved@a{#3}%
                \ifx\reserved@a\@empty
           960
                  \ensuremath{\mbox{def}\k@shape{\#2}}\%
           961
           962
                \else
                  \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
           963
                    \maybe@load@fontshape\endgroup
           964
                  \edef\reserved@a{\k@encoding /\k@family /\k@series/#1}%
           965
                   \ifcsname \reserved@a\endcsname
           966
                     \edef\k@shape{#1}%
           967
           968
                  \else
                     \ifcsname \k@encoding /\k@family /\k@series/#2\endcsname
           969
           970
                       \edef\k@shape{#2}%
                       {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
           971
           972
                       \edef\k@shape{#3}%
           973
                       {\let\curr@fontshape\curr@kfontshape\@font@shape@subst@warning}%
           974
                     \fi
           975
                  \fi
           976
           977
                \fi
           978 }
           979 \fi
           980 (/plcore | platexrelease)
           書体属性を一度に指定するコマンドです。和文書体には \usekanji を、欧文書体に
\usekanji
           は \useroman を指定してください。
\useroman
             \usefont コマンドは、第一引数で指定されるエンコードによって、和文または
\usefont
           欧文フォントを切り替えます。
           981 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2020/02/02}{\usefont}
           982 (platexrelease)
                                             {Don't call \fontseries or \fontshape}%
           983 (*plcore | platexrelease)
           984 \DeclareRobustCommand\usekanji[4]{\kanjiencoding{#1}%
           985
                  \edef\k@family{#2}%
                  \edef\k@series{#3}%
           986
                  \edef\k@shape{#4}\selectfont
                  \ignorespaces}
           989 \DeclareRobustCommand\useroman[4]{\romanencoding{#1}%
           990
                  \edef\f@family{#2}%
```

```
\edef\f@series{#3}%
991
992
        \edef\f@shape{#4}\selectfont
        \ignorespaces}
994 \DeclareRobustCommand\usefont [4] {%
      \edef\tmp@item{{#1}}%
995
996
      \expandafter\expandafter\expandafter
      \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
997
      \ifin@ \usekanji{#1}{#2}{#3}{#4}%
998
      \left( \frac{41}{42} \right) 
999
1000
      \fi}
1001 (/plcore | platexrelease)
1002 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1003 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2019/10/01}{\usefont}
1004 (platexrelease)
                                     {Make robust}%
1005 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\usekanji[4]{%
                     1006 (platexrelease)
                     \selectfont\ignorespaces}
1007 (platexrelease)
1008 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\useroman[4] {%
1009 (platexrelease)
                     \romanencoding{#1}\romanfamily{#2}\romanseries{#3}\romanshape{#4}%
1010 (platexrelease)
                     \selectfont\ignorespaces}
1011 (platexrelease) \DeclareRobustCommand\usefont[4] {%
1012 (platexrelease)
                  \edef\tmp@item{{#1}}%
1013 (platexrelease)
                  \expandafter\expandafter\expandafter
1014 (platexrelease)
                  \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
1015 (platexrelease)
                  \ifin@ \usekanji{#1}{#2}{#3}{#4}%
1016 (platexrelease)
                  \else\useroman{#1}{#2}{#3}{#4}%
1017 (platexrelease)
                  \fi}
1018 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1019 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\usefont}
1020 (platexrelease)
                                     {ASCII Corporation original}%
1021 (platexrelease)\def\usekanji#1#2#3#4{%
1022 (platexrelease)
                     \kanjiencoding{#1}\kanjifamily{#2}\kanjiseries{#3}\kanjishape{#4}%
1023 (platexrelease)
                     \selectfont\ignorespaces}
1024 (platexrelease)\def\useroman#1#2#3#4{%
1025 (platexrelease)
                     \romanencoding{#1}\romanfamily{#2}\romanseries{#3}\romanshape{#4}%
1026 (platexrelease)
                     \selectfont\ignorespaces}
1027 (platexrelease)\def\usefont#1#2#3#4{%
1028 (platexrelease)
                  \edef\tmp@item{{#1}}%
1029 \langle platexrelease \rangle
                  \expandafter\expandafter\expandafter
                  \inlist@\expandafter\tmp@item\expandafter{\kenc@list}%
1030 (platexrelease)
1031 (platexrelease)
                  \ifin@ \usekanji{#1}{#2}{#3}{#4}%
1032 (platexrelease)
                  \else\useroman{#1}{#2}{#3}{#4}%
1033 (platexrelease)
                  \fi}
1034 (platexrelease)\expandafter \let \csname usekanji \endcsname \@undefined
1035 (platexrelease)\expandafter \let \csname useroman \endcsname \@undefined
1036 (platexrelease)\expandafter \let \csname usefont \endcsname \@undefined
1037 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

\normalfont 書体をデフォルト値にするコマンドです。和文書体もデフォルト値になるように再定義

```
を一度しか呼び出さないようにしています。
                           1038 \; \langle \texttt{platexrelease} \rangle \\ \texttt{plIncludeInRelease} \\ \texttt{2020/02/02} \\ \texttt{\{normalfont\}}
                           1039 (platexrelease)
                                                                                                  {Don't call \fontseries or \fontshape}%
                           1040 (*plcore | platexrelease)
                           1041 \DeclareRobustCommand\normalfont{%
                                           \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
                           1042
                                           \edef\k@family{\kanjifamilydefault}%
                           1043
                                           \edef\k@series{\kanjiseriesdefault}%
                           1044
                           1045
                                           \edef\k@shape{\kanjishapedefault}%
                                           \romanencoding{\encodingdefault}%
                           1046
                                           \edef\f@family{\familydefault}%
                           1047
                                           \edef\f@series{\seriesdefault}%
                           1048
                                           \end{f@shape{\hapedefault}} % % $$ \end{formula} $$ \en
                           1049
                           1050
                                           \selectfont\ignorespaces}
                           1051 \adjustbaseline
                           1052 \let\reset@font\normalfont
                           1053 (/plcore | platexrelease)
                           1054 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                           1055 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\normalfont}
                           1056 (platexrelease)
                                                                                                  {ASCII Corporation original}%
                           1057 \langle platexrelease \rangle \DeclareRobustCommand \setminus 1057
                           1058 \langle platexrelease \rangle
                                                                   \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
                                                                   \kanjifamily{\kanjifamilydefault}%
                           1059 (platexrelease)
                           1060 (platexrelease)
                                                                   \kanjiseries{\kanjiseriesdefault}%
                           1061 (platexrelease)
                                                                   \kanjishape{\kanjishapedefault}%
                           1062 (platexrelease)
                                                                   \romanencoding{\encodingdefault}%
                           1063 (platexrelease)
                                                                   \romanfamily{\familydefault}%
                                                                   \romanseries{\seriesdefault}%
                           1064 (platexrelease)
                           1065 (platexrelease)
                                                                   \romanshape{\shapedefault}%
                           1066 (platexrelease)
                                                                   \selectfont\ignorespaces}
                           1067 (platexrelease)\adjustbaseline
                           1068 (platexrelease)\let\reset@font\normalfont
                           1069 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                          	ext{LAT}_{	ext{FX}} 	ext{2}_{arepsilon} 2020-02-02 では、欧文フォントについて「ファミリごとの実際のシリーズ
\bfseries@mc
                          値を設定できる」という機能が導入されました(元は mweights パッケージの機能)。
\bfseries@gt
                           また、同時に「Computer Modern と Latin Modern の場合は互換性のため太字を
\mdseries@mc
\mdseries@gt bx に、それ以外の欧文ファミリの場合は太字を b にする」という仕様変更も入りま
                             した。これに合わせて、pIFT_{
m F}X 2_{arepsilon} の和文フォントにも同等の機能を追加し、和文
                             ファミリの太字も bx ではなく b に変更しました。
                           1070 (*plcore | platexrelease)
                           1071 \ifx\bfseries@rm\@undefined % old
                           1072 \let\bfseries@mc\@undefined
                           1073 \let\bfseries@gt\@undefined
                           1074 \let\mdseries@mc\@undefined
                           1075 \let\mdseries@gt\@undefined
```

しています。ただし高速化のため、\usekanjiと \useroman を展開し、\selectfont

```
% 2020-02-02
                     1076 \else
                     1077 \edef\bfseries@mc{\bfdefault}% b
                     1078 \edef\bfseries@gt{\bfdefault}% b
                     1079 \edef\mdseries@mc{\mddefault}% m
                     1080 \edef\mdseries@gt{\mddefault}% m
                     1081 \fi
                     ファミリのデフォルトを完全展開します。まず、オリジナルの LATFX の定義を載せ
\expand@font@defaults
                      ておきます。
                     1082 %\def\expand@font@defaults{%
                     1083 % \edef\rmdef@ult{\rmdefault}%
                     1084 % \edef\sfdef@ult{\sfdefault}%
                     1085 % \edef\ttdef@ult{\ttdefault}%
                     1086 % \edef\bfdef@ult{\bfdefault}%
                     1087 % \edef\mddef@ult{\mddefault}%
                     1088 % \edef\famdef@ult{\familydefault}%
                     1089 %}
                      pLATEX では、以下のコードを末尾に追加します。
                     1090 \ifx\expand@font@defaults\@undefined\else % 2020-02-02
                     1091 \g@addto@macro\expand@font@defaults{%
                           \edef\mcdef@ult{\mcdefault}%
                           \edef\gtdef@ult{\gtdefault}%
                     1094
                           \edef\kanjidef@ult{\kanjifamilydefault}%
                     1095 }
                     1096 \fi
           \bfseries ファミリごとの設定値を参照します。
           \mdseries 1097\ifx\bfseries@rm\@undefined\else % 2020-02-02
                     1098 \DeclareRobustCommand\bfseries{%
                           \not@math@alphabet\bfseries\mathbf
                     1100
                           \expand@font@defaults
                           % changed \fontseries -> \romanseries
                     1101
                             \ifx\f@family\rmdef@ult
                                                        \romanseries\bfseries@rm
                     1102
                             \else\ifx\f@family\sfdef@ult \romanseries\bfseries@sf
                     1103
                             \else\ifx\f@family\ttdef@ult \romanseries\bfseries@tt
                     1104
                     1105
                             \else
                                                          \romanseries\bfdefault
                     1106
                             \fi\fi\fi
                      ここからが pIATeX による追加コードです。
                           % changed \fontseries -> \kanjiseries
                     1107
                             \footnotemark \ifx\k@family\mcdef@ult
                                                          \kanjiseries\bfseries@mc
                     1108
                             \else\ifx\k@family\gtdef@ult \kanjiseries\bfseries@gt
                     1109
                             \else
                                                          \kanjiseries\bfdefault
                     1110
                     1111
                             \fi\fi
                      ここまで。
                     1112 \selectfont
                     1113 }
```

```
1114 \DeclareRobustCommand\mdseries{%
                                1115
                                      \not@math@alphabet\mdseries\relax
                                      \expand@font@defaults
                                      % changed \fontseries -> \romanseries
                                1117
                                1118
                                         \ifx\f@family\rmdef@ult
                                                                       \romanseries\mdseries@rm
                                1119
                                         \else\ifx\f@family\sfdef@ult \romanseries\mdseries@sf
                                         \else\ifx\f@family\ttdef@ult \romanseries\mdseries@tt
                                1120
                                1121
                                         \else
                                                                       \romanseries\mddefault
                                         \fi\fi\fi
                                1122
                                  ここからが pIATeX による追加コードです。
                                      % changed \fontseries -> \kanjiseries
                                 1123
                                         \ifx\k@family\mcdef@ult
                                                                       \kanjiseries\mdseries@mc
                                1124
                                         \else\ifx\k@family\gtdef@ult \kanjiseries\mdseries@gt
                                 1125
                                 1126
                                         \else
                                                                       \kanjiseries\mddefault
                                         \fi\fi
                                1127
                                  ここまで。
                                 1128 \selectfont
                                 1129 }
                                 1130 \fi
pare@family@series@update@kanji \prepare@family@series@updateの和文版です。
      \@meta@family@list@kanji 1131 \ifx\prepare@family@series@update\@undefined % old
                                1132 \let\prepare@family@series@update@kanji\@undefined
odate@series@target@value@kanji
                                 1133 \let\@meta@family@list@kanji\@undefined
                                 1134 \let\update@series@target@value@kanji\@undefined
                                                                                     % 2020-02-02
                                1135 \else
                                 1136 \def\prepare@family@series@update#1#2{%
                                 1137 \if@forced@series
                                1138 \langle +debug \rangle \series@change@debug{No series preparation (forced \f@series)\on@line}%
                                        \romanfamily#2% % changed \fontfamily -> \romanfamily
                                1139
                                1140 \else
                                1141 \langle +debug \rangle \series@change@debug{Prepearing for switching to #1 (#2)\on@line}%
                                        \expand@font@defaults
                                1142
                                1143
                                        \let\target@series@value\@empty
                                1144
                                        \def\target@meta@family@value{#1}%
                                 1145
                                        \expandafter\edef\csname ??def@ult\endcsname{\f@family}%
                                 1146
                                        \let\@elt\update@series@target@value
                                1147
                                           \@meta@family@list
                                1148
                                           \@elt{??}%
                                 1149
                                        \let\@elt\relax
                                                           % changed \fontfamily -> \romanfamily
                                1150
                                        \romanfamily#2%
                                        \verb|\ifx\target@series@value\@empty| \\
                                1151
                                1152 (+debug) \series@change@debug{Target series still empty ...}%
                                1153
                                        \else
                                1154
                                          \ifx \f@series\target@series@value
                                 1155 (+debug) \series@change@debug{Target series unchanged:
                                                                    \f@series \space = \target@series@value}%
                                 1156 \langle +debug \rangle
                                 1157
                                          \else
```

```
\maybe@load@fontshape
1158
1159 \langle +debug \rangle \series@change@debug{Target series:
                                      \f@series \space -> \target@series@value}%
1160 (+debug)
            \let\f@series\target@series@value
1161
1162
          \fi
        \fi
1163
1164 \fi
1165 }
1166 \def\prepare@family@series@update@kanji#1#2{%
1167 \if@forced@series
1168 \langle +debug \rangle \ series@change@debug\{No series preparation (forced \k@series) \on@line\}
1169
        \kanjifamily#2%
1170 \else
1171 (+debug) \series@change@debug{Prepearing for switching to #1 (#2)\on@line}%
        \expand@font@defaults
1172
1173
        \let\target@series@value\@empty
        \def\target@meta@family@value{#1}%
1174
        \expandafter\edef\csname ??def@ult\endcsname{\k@family}%
1175
        \let\@elt\update@series@target@value@kanji
1176
           \@meta@family@list@kanji
1177
1178
           \@elt{??}%
        \let\@elt\relax
1179
1180
        \kanjifamily#2%
        \ifx\target@series@value\@empty
1182 (+debug) \series@change@debug{Target series still empty ...}%
1183
        \else
          \ifx \k@series\target@series@value
1184
1185 (+debug) \series@change@debug{Target series unchanged:
                                      \k@series \space = \target@series@value}%
1186 \langle +debug \rangle
          \else
1187
            \begingroup\let\f@encoding\k@encoding\let\f@family\k@family
1188
              \maybe@load@fontshape\endgroup
1189
1190 \langle +debug \rangle \series@change@debug{Target series:
1191 (+debug)
                                      \k@series \space -> \target@series@value}%
1192
            \let\k@series\target@series@value
1193
          \fi
        \fi
1194
1195 \fi
1196 }
1197 \def\@meta@family@list@kanji{\@elt{mc}\@elt{gt}}
1198 \def\update@series@target@value@kanji#1{%
       \def\reserved@a{#1}%
1199
      \ifx\target@meta@family@value\reserved@a
1200
                                                       % rm -> rm do nothing
1201
      \else
1202 \; \langle +\mathsf{debug} \rangle \; \mathsf{lseries@change@debug\{Trying \; to \; \mathtt{match} \; \#1: \; \mathsf{lcsname\#1def@ult} \setminus \mathsf{endcsname} \} \\
                                      \space = \k@family\space ?}%
1204
         \expandafter\ifx\csname#1def@ult\endcsname\k@family
1205
           \let\@elt\@gobble
1206
           \expandafter\let\expandafter\reserved@b
                             \csname mdseries@\target@meta@family@value\endcsname
1207
```

```
1210 (+debug)\series@change@debug{Targets for mdseries and bfseries:
                   1211 (+debug)
                                                   \reserved@b\space and \reserved@c}%
                  1212
                             \expandafter\ifx\csname mdseries@#1\endcsname\k@series
                                 \series@change@debug{mdseries@#1 matched -> \reserved@b}%
                  1213 (+debug)
                                                            \let\target@series@value\reserved@b
                  1214
                            \else\expandafter\ifx\csname bfseries@#1\endcsname\k@series
                  1215
                  1217
                                                            \let\target@series@value\reserved@c
                  1218
                            \else\ifx\k@series\mddef@ult
                                                            \let\target@series@value\reserved@b
                  1219 (+debug) \series@change@debug{mddef@ult matched -> \reserved@b}%
                            \else\ifx\k@series\bfdef@ult
                  1220
                                                            \let\target@series@value\reserved@c
                   1221 (+debug) \series@change@debug{bfdef@ult matched -> \reserved@c}%
                            \fi\fi\fi\fi
                   1222
                          \fi
                   1223
                        \fi
                  1224
                  1225 }
                  1226 \fi
\init@series@setup \begin{document}で実行される初期化です。まず、オリジナルの LATFX の定義を
                   載せておきます。
                   1227 %\def\init@series@setup{%
                   1228 % \ifx\bfseries@rm@kernel\bfseries@rm
                   1229 %
                           \expandafter\in@\expandafter{\rmdefault}{cmr,cmss,cmtt,lcmss,lcmtt,lmr,lmss,lmtt}%
                   1230 %
                           \ifin@ \else \def\bfseries@rm{b}\fi\fi
                  1231 % \ifx\bfseries@sf@kernel\bfseries@sf
                   1232 %
                           \expandafter\in@\expandafter{\sfdefault}{cmr,cmss,cmtt,lcmss,lcmtt,lmr,lmss,lmtt}%
                  1233 %
                           \ifin@ \else \def\bfseries@sf{b}\fi\fi
                  1234 % \ifx\bfseries@tt@kernel\bfseries@tt
                           \expandafter\in@\expandafter{\ttdefault}{cmr,cmss,cmtt,lcmss,lcmtt,lmr,lmss,lmtt}%
                  1235 %
                           \label{lem:condition} $$ \left( \frac{b}{fi} \right) = \left( \frac{b}{fi} \right) $$
                  1236 %
                  1237 % \expand@font@defaults
                  1238 % \ifx\famdef@ult\rmdef@ult
                                                        \rmfamilv
                  1239 % \else\ifx\famdef@ult\sfdef@ult \sffamily
                   1240 % \else\ifx\famdef@ult\ttdef@ult \ttfamily
                   1241 % \fi\fi\fi
                  1242 %}%
                    ここからが pIAT<sub>F</sub>X による追加コードです。
```

\expandafter\let\expandafter\reserved@c

\csname bfseries@\target@meta@family@value\endcsname

- LATEX 2 € 2019-10-01 以前:未定義
- IATEX 2ε 2020-02-02 以降:上のとおりの定義
- ただし、latexrelease で巻き戻し:\relax と同義

になることに注意します。

1208

1209

1243 \expandafter\ifx\csname init@series@setup\endcsname\relax\else % 2020-02-02

```
1244 \g@addto@macro\init@series@setup{%
             1245 \ifx\kanjidef@ult\mcdef@ult
             1246 \else\ifx\kanjidef@ult\gtdef@ult \gtfamily
             1247 \fi\fi
             1248 }%
             1249 \fi
   \mcfamily 和文書体を明朝体にする \mcfamily とゴシック体にする \gtfamily を定義します。
   \gtfamily これらは、\rmfamilyなどに対応します。\mathmcと\mathgt は数式内で用いると
              きのコマンド名です。
             1250 \ifx\prepare@family@series@update@kanji\@undefined % old
             1251 \DeclareRobustCommand\mcfamily
             1252
                        {\not@math@alphabet\mcfamily\mathmc
             1253
                         \kanjifamily\mcdefault\selectfont}
             1254 \DeclareRobustCommand\gtfamily
                        {\not@math@alphabet\gtfamily\mathgt
             1255
             1256
                         \kanjifamily\gtdefault\selectfont}
                                                                  % 2020-02-02
             1257 \else
             1258 \DeclareRobustCommand\mcfamily
                     {\not@math@alphabet\mcfamily\mathmc
                      \prepare@family@series@update@kanji{mc}\mcdefault\selectfont}
             1261 \DeclareRobustCommand\gtfamily
                     {\not@math@alphabet\gtfamily\mathgt
             1263
                      \prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault\selectfont}
             1264 \fi
             1265 (/plcore | platexrelease)
     \textmc テキストファミリを切り替えるためのコマンドです。1tfntcmd.dtx で定義されて
     \textgt いる \textrm などに対応します。
             1266 (*plcore)
             1267 \DeclareTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
             1268 \DeclareTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
             1269 (/plcore)
         \em 従来は \em, \emph で和文フォントの切り替えは行っていませんでしたが、和文フォ
       \emph ントも \gtfamily に切り替えるようにしました。
\eminnershape
                [pIATFX 2_{\epsilon} 2016/04/17] IATFX <2015/01/01>で追加された \eminnershape も取
              り入れ、強調コマンドを入れ子にする場合の書体を自由に再定義できるようになり
              ました。
                [pIPT_FX\ 2_{\varepsilon}\ 2020-02-02] IPT_FX\ <2020-02-02>で追加された \DeclareEmphSequence
              をサポートしました。
             1270 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{2020/02/02\} \rangle \rangle per lare \text{EmphSequence} \)
             1271 (platexrelease)
                                                          {Nested emph}%
             1272 (*plcore | platexrelease)
             1273 \ifx\DeclareEmphSequence\@undefined % old
```

```
1274 \DeclareRobustCommand\em
                                                                                     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                                                     1275
                                                                                                                             \eminnershape \else \gtfamily \itshape \fi}%
                                                     1277 \else
                                                     1278 \DeclareRobustCommand\em{%
                                                                                                                                                               % 2020-02-02
                                                     1279
                                                                    \@nomath\em
                                                                    \ifx\emfontdeclare@clist\@empty
                                                     1280
                                                                          \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                                                     1281
                                                                                \eminnershape \else \gtfamily \itshape \fi
                                                     1282
                                                     1283
                                                                     \else
                                                     1284
                                                                     \edef\em@currfont{\csname\curr@fontshape/\f@size\endcsname}%
                                                                          \expandafter\do@emfont@update\emfontdeclare@clist\do@emfont@update
                                                      1285
                                                     1286
                                                     1287 }
                                                      1288 \fi
                                                     1289 \def\eminnershape{\mcfamily \upshape}%
                                                     1290 (/plcore | platexrelease)
                                                     1291 \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease
                                                     1292 \ \langle platexrelease \rangle \ \langle platexrelease \rangle
                                                      1293 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                  {Support \eminnershape}%
                                                     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                                                     1295 (platexrelease)
                                                      1296 (platexrelease)
                                                                                                                                                            \eminnershape \else \gtfamily \itshape \fi}%
                                                      1297 (platexrelease)\def\eminnershape{\mcfamily \upshape}%
                                                      1298 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                                                      1299 \ \langle platexrelease \rangle \ \langle plincludeInRelease \{ 2015/01/01 \} \{ \ \ CareEmphSequence \} \} 
                                                      1300 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                 {Non-supported \eminnershape}%
                                                      1301 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\em
                                                      1302 (platexrelease)
                                                                                                                    {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                                                                                                                                                            \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
                                                      1303 (platexrelease)
                                                      1304 (platexrelease) \def\eminnershape{\upshape}% defined by LaTeX, but not used by pLaTeX
                                                      1305 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                                                      1306 \(\rangle platexrelease \)\text{plIncludeInRelease} \(\rangle 0000/00/00 \)\text{\DeclareEmphSequence}
                                                      1307 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                 {ASCII Corporation original}%
                                                      1308 (platexrelease)\DeclareRobustCommand\em
                                                      1309 (platexrelease)
                                                                                                                    {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                                                                                                                                                            \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
                                                     1310 (platexrelease)
                                                      1311 (platexrelease)\let\eminnershape\@undefined
                                                     1312 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plEndIncludeInRelease \)
\romanprocess@table 文書の先頭で、和文デフォルトフォントの変更が反映されないのを修正します。
\mbox{\c hanjiprocess@table } 1313 \mbox{\c *plcore}
                                                    1314 \let\romanprocess@table\process@table
             \process@table
                                                     1315 \def\kanjiprocess@table{%
                                                                    \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
                                                     1316
                                                                     \kanjifamily{\kanjifamilydefault}%
                                                     1317
                                                                    \kanjiseries{\kanjiseriesdefault}%
                                                      1319
                                                                     \kanjishape{\kanjishapedefault}%
                                                      1320 }
```

```
1321 \def\process@table{%
1322 \romanprocess@table
     \kanjiprocess@table
1324 }
1325 \@onlypreamble\romanprocess@table
1326 \@onlypreamble\kanjiprocess@table
1327 (/plcore)
このコマンドはテキストモードで指定された \_の内部コマンドです。縦組での位置
 を調整するように再定義をします。もとは1toutenc.dtxで定義されています。
   なお、\_を数式モードで使うと \mathunderscore が実行されます。
   コミュニティ版では縦数式ディレクションでベースライン補正量が変だったのを
直しました。あわせて横ディレクションでもベースライン補正に追随するようにし
 ています。
1328 \ \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{plIncludeInRelease} \{ 2017/04/08 \} \{ \texttt{textunderscore} \}
1329 (platexrelease)
                                   {Baseline shift for \textunderscore}%
1330 (*plcore | platexrelease)
1331 \DeclareTextCommandDefault{\textunderscore}{%
1332
     \leavevmode\kern.06em
1333
      \raise-\iftdir\ifmdir\ybaselineshift
1334
             \else\tbaselineshift\fi
1335
             \else\ybaselineshift\fi
     \vbox{\hrule\@width.3em}}
1336
1337 (/plcore | platexrelease)
1338 \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease
1339 \ \langle platexrelease \rangle \ | plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{ textunderscore \} 
1340 (platexrelease)
                                   {ASCII Corporation original}%
1341 (platexrelease)\DeclareTextCommandDefault{\textunderscore}{%
1342 (platexrelease) \leavevmode\kern.06em
1343 (platexrelease) \iftdir\raise-\tbaselineshift\fi
```

4.3 合成文字

\textunderscore

I $ext{PT}_{ ext{EX}}$ 2_{ε} のカーネルのコードをそのまま使うと、 $ext{pT}_{ ext{EX}}$ のベースライン補正量がゼロでないときに合成文字がおかしくなっていたため、対策します。

\pltx@saved@oalign \b{...}, \c{...}, \d{...}, \k{...}などの合成文字を修正するため、ltplain.dtx の \oalign を上書きします。

 $1346 \ \langle platexrelease \rangle \% \ plIncludeInRelease \{0000/00/00\} \{ \ pltx@saved@oalign \} \}$

1347 $\langle platexrelease \rangle \%$ {Special case! (This block is required for any emulation date)}% 1348 $\langle *plcore \mid platexrelease \rangle$

まず、元の \LaTeX のコードをコピーしたものです。接頭辞 \pltx@saved... を付けておきます。

```
1349 \def\pltx@saved@oalign#1{\leavevmode\vtop{\baselineskip\z@skip \lineskip.25ex%
                                                              1350 \ialign{##\crcr#1\crcr}}
                                                              1351 (/plcore | platexrelease)
                                                              1352 <platexrelease <pre>\%\plEndIncludeInRelease
                        \pltx@oalign 次に、plPTFX の新しいコードです。
                                                             1353 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 2018/07/28 \} \pltx@oalign \}
                                                              1354 (platexrelease)
                                                                                                                                                                {Fix for non-zero baselineshift}%
                                                              1355 (*plcore | platexrelease)
                                                              1356 \def\pltx@oalign#1{\ifmmode
                                                              1357 \leavevmode\vtop{\baselineskip\z@skip \lineskip.25ex%
                                                              1358
                                                                                    \ialign{##\crcr#1\crcr}}%
                                                              1359 \else
                                                              1360 \iftdir\ybaselineshift\tbaselineshift\fi
                                                             1361
                                                                             \m@th$\hbox{\vtop{\baselineskip\z@skip \lineskip.25ex%
                                                                                   \ialign{##\crcr#1\crcr}}$%
                                                              1363 \fi}
                                                             1364 (/plcore | platexrelease)
                                                              1365~{\tt \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease}
                                                              1366 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\pltx@oalign}
                                                              1367 (platexrelease)
                                                                                                                                                                {Fix for non-zero baselineshift}%
                                                              1368 /platexrelease \ let \ pltx@oalign \ Qundefined
                                                              1369 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
\pltx@saved@ltx@sh@ft \b{...}と \d{...}の合成文字を修正するため、ltplain.dtxの \ltx@sh@ftを上
                                                                書きします。
                                                              1370 \ \langle platexrelease \rangle \% \ plIncludeInRelease \{0000/00/00\} \{ \ pltx@saved@ltx@sh@ft \} \} \ \langle platexrelease \rangle \% \ \langle platexrelease \rangle \ \langle platexrelease \rangle \ \langle platexrelease \rangle \% \ \langle platexrelease \rangle \ \langle platexrelease 
                                                              1371 (platexrelease)%
                                                                                                                       {Special case! (This block is required for any emulation date)}%
                                                              1372 (*plcore | platexrelease)
                                                                まず、元の LATeX のコードをコピーしたものです。接頭辞 \pltx@saved...を付け
                                                                ておきます。
                                                              1373 \def\pltx@saved@ltx@sh@ft #1{%
                                                                            \dimen@ #1%
                                                              1374
                                                              1375
                                                                              \kern \strip@pt
                                                             1376
                                                                                  \fontdimen1\font \dimen0
                                                                              } % kern by #1 times the current slant
                                                              1378 (/plcore | platexrelease)
                                                             1379 ⟨platexrelease⟩%\plEndIncludeInRelease
                \pltx@ltx@sh@ft 次に、pLATFX の新しいコードです。
                                                              1381 (platexrelease)
                                                                                                                                                                {Fix for non-zero baselineshift}%
                                                              1382 (*plcore | platexrelease)
                                                              1383 \def\pltx@ltx@sh@ft #1{%
                                                                            \ybaselineshift\z@
                                                                           \dimen@ #1%
                                                              1386 \kern \strip@pt
```

```
\fontdimen1\font \dimen@
                    } % kern by #1 times the current slant
               1388
               1389 (/plcore | platexrelease)
               1390 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
               {Fix for non-zero baselineshift}%
               1392 (platexrelease)
               1393 \ \langle \verb|platexrelease| \rangle \verb|let| pltx@ltx@sh@ft| @undefined
               1394 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
\g@tlastchart@ T<sub>F</sub>X Live 2015 で追加された \lastnodechar を利用して、「直前の文字」の符号位
                置を得るコードです。\lastnodechar が未定義の場合は -1 が返ります。
               1395 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\g@tlastchart@}
               1396 (platexrelease)
                                                  {Added \g@tlastchart@}%
               1397 (*plcore | platexrelease)
               1398 \def\g@tlastchart@#1{#1\ifx\lastnodechar\@undefined\m@ne\else\lastnodechar\fi}
               1399 (/plcore | platexrelease)
               1400 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
               1401 \ \langle platexrelease \rangle \rangle PlIncludeInRelease \{0000/00/00\} \{ \ g@tlastchart@ \}
               1402 (platexrelease)
                                                  {Added \g@tlastchart@}%
               1403 \; \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{let} \\ \texttt{g@tlastchart@} \\ \texttt{@undefined}
               1404 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
\pltx@isletter 第一引数のマクロ (#1) の置換テキストが、カテゴリコード 11 か 12 の文字トーク
                ン1文字であった場合に第二引数の内容に展開され、そうでない場合は第三引数の
                内容に展開されます。
               {Support PD1 encoding}%
               1406 (platexrelease)
               1407 (*plcore | platexrelease)
               1408 \def\pltx@mark{\pltx@mark@}
               1409 \let\pltx@scanstop\relax
               1410 \long\def\pltx@cond#1\fi{%
               1411 #1\expandafter\@firstoftwo\else\expandafter\@secondoftwo\fi}
               1412 \def\pltx@pdfencA{PD1}
               1413 \def\pltx@composite@chkenc{%
               1414
                    \ifx\pltx@pdfencA\f@encoding
               1415
                       \expandafter\@firstoftwo
               1416
                    \else
                       \expandafter\@secondoftwo
               1417
                    \fi}
               1418
               1419 \long\def\pltx@isletter#1{%
               1420 \expandafter\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop}
               1421 \long\def\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop{%
                    \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi{\@firstoftwo}%
                       {\pltx@isletter@ii\pltx@scanstop#1\pltx@scanstop{}#1\pltx@mark}}
               1424 \long\def\pltx@isletter@ii#1\pltx@scanstop#{%
               1425
                    \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi%
               1426
                       {\pltx@isletter@iii}{\pltx@isletter@iv}}
               1427 \verb|\long\def\pltx@isletter@iii#1\pltx@mark{\@secondoftwo}|
```

```
1428 \long\def\pltx@isletter@iv#1#2#3\pltx@mark{%
                        \pltx@cond\ifx\pltx@mark#3\pltx@mark\fi{%
                          \pltx@cond{\ifnum0\ifcat A\noexpand#21\fi\ifcat=\noexpand#21\fi>\z@}\fi
                  1431
                            {\@firstoftwo}{\pltx@composite@chkenc}%
                        }{\pltx@composite@chkenc}}
                  1432
                  1433 (/plcore | platexrelease)
                  1434 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                  1435 \ \langle platexrelease \rangle \\ \ plincludeInRelease \{ 2016/06/10 \} \{ \ pltx@isletter \} \\
                                                      {Added \pltx@isletter}%
                  1436 (platexrelease)
                  1437  / def \pltx@mark{\pltx@mark@}
                  1438 (platexrelease)\let\pltx@scanstop\relax
                  1439 (platexrelease)\long\def\pltx@cond#1\fi{%
                  1440 (platexrelease) #1\expandafter\@firstoftwo\else\expandafter\@secondoftwo\fi}
                  1441 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter#1{%
                  1442 (platexrelease) \expandafter\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop}
                  1443 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter@i#1\pltx@scanstop{%
                  1444 \(\rangle platexrelease \) \(\rangle pltx@cond\ifx\pltx@mark\fi\\Qfirstoftwo\)\(\rangle pltx@mark\fi\\Qfirstoftwo\)\(\rangle pltx\text{\text{$\cond\infty}}\)
                  1445 (platexrelease)
                                       {\pltx@isletter@ii\pltx@scanstop#1\pltx@scanstop{}#1\pltx@mark}}
                  1446 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter@ii#1\pltx@scanstop#{%
                                    \pltx@cond\ifx\pltx@mark#1\pltx@mark\fi%
                  1447 (platexrelease)
                  1448 (platexrelease)
                                      {\pltx@isletter@iii}{\pltx@isletter@iv}}
                  1449 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter@iii#1\pltx@mark{\@secondoftwo}
                  1450 (platexrelease)\long\def\pltx@isletter@iv#1#2#3\pltx@mark{%
                  1451 (platexrelease)
                                    \pltx@cond\ifx\pltx@mark#3\pltx@mark\fi{%
                                      1452 (platexrelease)
                  1453 (platexrelease)
                                        {\@firstoftwo}{\@secondoftwo}%
                  1454 \langle platexrelease \rangle  }{\@secondoftwo}}
                  1455 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                  1457 (platexrelease)
                                                      {Added \pltx@isletter}%
                  1458 (platexrelease)\let\pltx@isletter\@undefined
                  1459 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
\@text@composite 合成文字の内部命令です。v1.6aで誤って LATEX の定義を上書きしてしまいました
                  が、v1.6c で外しました。
                  1460 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/06/10}{\@text@composite}
                  1461 (platexrelease)
                                                      {Fix for non-zero baselineshift (revert)}%
                  1462 (platexrelease)\def\@text@composite#1#2#3\@text@composite{%
                  1463 (platexrelease)
                                     \expandafter\@text@composite@x
                  1464 (platexrelease)
                                        \csname\string#1-\string#2\endcsname}
                  1465 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                  {Fix for non-zero baselineshift (wrong)}%
                  1467 (platexrelease)
                  1468 \langle platexrelease \rangle \def \ensuremath{\tt QtextQcomposite\#1\#2\#3\#\{\%\}}
                  1469 (platexrelease)
                                    \begingroup
                                    \setbox\z@=\hbox\bgroup%
                  1470 (platexrelease)
                  1471 (platexrelease)
                                    \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
                  1472 (platexrelease)
                                    \expandafter\@text@composite@x
                  1473 (platexrelease)
                                    \csname\string#1-\string#2\endcsname}
```

```
1476 (platexrelease)
                                                      {LaTeX2e original}%
                        1478 (platexrelease)
                                        \expandafter\@text@composite@x
                                           \csname\string#1-\string#2\endcsname}
                        1479 (platexrelease)
                        1480 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                        合成文字の内部命令 \@text@composite@x のために、2 通りの定義を準備します。
\pltx@saved@text@composite@x
                        1481 \langle platexrelease \rangle \% plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{ pltx@saved@text@composite@x \} \}
                        1482 (platexrelease)%
                                          {Special case! (This block is required for any emulation date)}%
                        1483 (*plcore | platexrelease)
                         まず、元の PTFX のコードをコピーしたものです。接頭辞 \pltx@saved...を付け
                         ておきます。
                        1484 \def\pltx@saved@text@composite@x#1{%
                              \int x#1\relax
                        1486
                                 \expandafter\@secondoftwo
                        1487
                              \else
                        1488
                                 \expandafter\@firstoftwo
                              \fi
                        1489
                              #1}
                        1490
                        1491 (/plcore | platexrelease)
                        1492 <platexrelease <pre>\%\plEndIncludeInRelease
    \pltx@text@composite@x 次に、pLMTFX の新しいコードです。\g@tlastchart@と \pltx@isletter を使い
                         ます。
                        1494 (platexrelease)
                                                      {Fix for non-zero baselineshift}%
                        1495 (*plcore | platexrelease)
                        1496 \def\pltx@text@composite@x#1#2{%
                        1497
                             \ifx#1\relax
                        1498
                               #2%
                             \else\pltx@isletter{#1}{#1}{%
                        1499
                               \begingroup
                         #1 を実際に組んでみて、符号位置の取得を試みます。結果は \@tempcntb に保存さ
                         れます。取得に失敗した場合は-1です。
                               \setbox\z@\hbox\bgroup
                        1501
                                 \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
                        1502
                        1503
                                 #1%
                        1504
                                 \g@tlastchart@\@tempcntb
                        1505
                                 \xdef\pltx@composite@temp{\noexpand\@tempcntb=\the\@tempcntb\relax}%
                        1506
                                 \aftergroup\pltx@composite@temp
                        1507
                               \egroup
                         アクセントが付く「本体の文字」が欧文文字と推測される場合には、一旦数式モー
                         ドに入ることによって \xkanjiskip が前後に入るようにします。ここでは、取得に
```

1474 <platexrelease <pre>\plEndIncludeInRelease

失敗した場合も欧文文字であると仮定しています。また、符号位置の取得に成功していた場合は、その\xspcode の状態に応じて、数式モードの前後に\null を補って\xkanjiskip の挿入を抑制します。

```
1508
         \ifnum\@tempcntb<\@cclvi
1509
            \ifnum\@tempcntb>\m@ne
              \ifodd\xspcode\@tempcntb\else\leavevmode\null\fi
1510
1511
           \begingroup\m@th$%
1512
              \ifx\textbaselineshiftfactor\@undefined\else
1513
                \textbaselineshiftfactor\z@\fi
1514
1515
              \box\z0
1516
           $\endgroup
           \ifnum\@tempcntb>\m@ne
1517
              \ifnum\xspcode\@tempcntb<2\null\fi
1518
           \fi
1519
 アクセントが付く「本体の文字」が和文文字と推測される場合には、ベースライン
 補正を行わずに出力します。
         \else
1520
           {\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@#1}%
1521
         \fi
1522
         \endgroup}%
1523
1524
       \fi
1525 }
1526 (/plcore | platexrelease)
1527 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1528 \(\rangle platexrelease \rangle plinclude InRelease \{2016/06/10\} \{\pltx@text@composite@x\}\
1529 (platexrelease)
                                        {Fix for non-zero baselineshift}%
1530 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle pltx@text@composite@x#1#2{%
1531 (platexrelease) \ifx#1\relax
1532 (platexrelease)
                       #2%
                    \ensuremath{\verb| lse| pltx@isletter{#1}{#1}{%}}
1533 (platexrelease)
1534 \langle platexrelease \rangle
                       \begingroup
1535 (platexrelease)
                       \setbox\z@\hbox\bgroup%
1536 (platexrelease)
                         \ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@
1537 (platexrelease)
1538 (platexrelease)
                         \g@tlastchart@\@tempcntb
1539 (platexrelease)
                         \xdef\pltx@composite@temp{\noexpand\@tempcntb=\the\@tempcntb\relax}%
1540 (platexrelease)
                         \aftergroup\pltx@composite@temp
1541 (platexrelease)
                       \egroup
1542 \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                       \ifnum\@tempcntb<\z@
1543 (platexrelease)
                         \@tempdima=\iftdir
1544 \langle platexrelease \rangle
                              \ifmdir
1545 (platexrelease)
                                \ifmmode\tbaselineshift\else\ybaselineshift\fi
1546 (platexrelease)
                              \else
1547 (platexrelease)
                                \tbaselineshift
1548 (platexrelease)
                              \fi
1549 (platexrelease)
                           \else
1550 (platexrelease)
                              \ybaselineshift
```

```
1551 (platexrelease)
1552 (platexrelease)
                                                                        \@tempcntb=\@cclvi
1553 (platexrelease)
                                                                 \else\@tempdima=\z@
1554 (platexrelease)
                                                                 \fi
                                                                 \ifnum\@tempcntb<\@cclvi
1555 (platexrelease)
1556 (platexrelease)
                                                                        \ifnum\@tempcntb>\m@ne\ifnum\@tempcntb<\@cclvi
1557 (platexrelease)
                                                                               \ifodd\xspcode\@tempcntb\else\leavevmode\hbox{}\fi
1558 (platexrelease)
                                                                        \fi\fi
1559 (platexrelease)
                                                                        \begingroup\mathsurround\z@$%
1560 (platexrelease)
                                                                              \ifx\textbaselineshiftfactor\@undefined\else
1561 (platexrelease)
                                                                                     \textbaselineshiftfactor\z@\fi
1562 (platexrelease)
                                                                               \box\z@
1563 (platexrelease)
                                                                        $\endgroup%
1564 (platexrelease)
                                                                        \ifnum\@tempcntb>\m@ne\ifnum\@tempcntb<\@cclvi
1565 (platexrelease)
                                                                               \ifnum\xspcode\@tempcntb<2\hbox{}\fi
                                                                       \fi\fi
1566 (platexrelease)
1567 \langle platexrelease \rangle
                                                                 \else
                                                                        \label{lineshift} $$ \left(\frac{20}{\parent 20}\right) = \frac{20}{\parent 20} $$
1568 (platexrelease)
1569 (platexrelease)
                                                                       \else\leavevmode\lower\@tempdima\box\z@\fi
1570 (platexrelease)
                                                                 \fi
1571 (platexrelease)
                                                                 \endgroup}%
1572 (platexrelease)
                                                          \fi
1573 (platexrelease)}
1574 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1575 \(\rangle plane \) \(plinclude InRelease \) \( \) \( \pline \) \( \plune \) \( \pline \) \( \plune \) \(
1576 (platexrelease)
                                                                                                                  {Fix for non-zero baselineshift}%
1577 ⟨platexrelease⟩\def\pltx@text@composite@x#1#2{%
1578 (platexrelease)
                                                          \int x#1\relax
1579 (platexrelease)
                                                                 \expandafter\@secondoftwo
1580 (platexrelease)
                                                          \else
1581 (platexrelease)
                                                                 \expandafter\@firstoftwo
1582 (platexrelease)
                                                          \fi
1583 (platexrelease)
                                                          #1{#2}\egroup
1584 (platexrelease)
                                                          \leavevmode
1585 (platexrelease)
                                                          \expandafter\lower
1586 (platexrelease)
                                                                 \iftdir
1587 (platexrelease)
                                                                        \ifmdir
1588 (platexrelease)
                                                                              \ifmmode\tbaselineshift\else\ybaselineshift\fi
1589 (platexrelease)
                                                                        \else
1590 (platexrelease)
                                                                              \tbaselineshift
1591 (platexrelease)
                                                                       \fi
1592 (platexrelease)
                                                                 \else
                                                                        \ybaselineshift
1593 (platexrelease)
1594 (platexrelease)
                                                                 \fi
1595 (platexrelease)
                                                                 \box\z0
1596 (platexrelease)
                                                         \endgroup}
1597 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1598 \(\rangle platexrelease \)\rangle \)\rangle \( \rangle plate \)\rangle \( \rangle plat \)\rangle \( \rangle plate \)\rangle \( \rangle plate \)\rangle 
1599 (platexrelease)
                                                                                                                  {Fix for non-zero baselineshift}%
```

1601 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease

```
上記2通りの定義のうち、本当は pLATeX の定義を用いたいのですが、想定外の
 \fixcompositeaccent
                       エラーが発生するのを防ぐため、デフォルトでは LATeX の定義のままとしておき
\nofixcompositeaccent
   \@text@composite@x ます。そして、\fixcompositeaccent が有効な時だけ pLATpX の定義を用います。
                        \nofixcompositeaccent はこの否定です。
                       1602 \(\rangle\)plincludeInRelease\(\rangle\)0000/00\(\rangle\)\(\rangle\)text\(\rangle\)composite\(\rangle\)x\\
                       1603 (platexrelease)%
                                             {Special case! (This block is required for any emulation date)}%
                       1604 (*plcore | platexrelease)
                       1605 \DeclareRobustCommand\fixcompositeaccent{%
                             \let\oalign\pltx@oalign
                       1607
                             \let\ltx@sh@ft\pltx@ltx@sh@ft
                       1608
                             \let\@text@composite@x\pltx@text@composite@x
                       1609 }
                       1610 \DeclareRobustCommand\nofixcompositeaccent{%
                       1611
                             \let\oalign\pltx@saved@oalign
                             \let\ltx@sh@ft\pltx@saved@ltx@sh@ft
                       1612
                       1613
                             \let\@text@composite@x\pltx@saved@text@composite@x
                       1614 }
                       1615 \nofixcompositeaccent
                       1616 (/plcore | platexrelease)
                       1617 ⟨platexrelease⟩%\plEndIncludeInRelease
   \@text@composite@x エミュレーション専用のコードです。
                       1618 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2018/07/28}{\fixcompositeaccent}
                       1619 (platexrelease)
                                                            {Fix for non-zero baselineshift}%
                       1620 (platexrelease)\nofixcompositeaccent % force LaTeX original (conditional default)
                       1621 (platexrelease)% other commands are actually defined for pLaTeX2e 2018-07-28
                       1622 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                       1623 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plIncludeInRelease \{2016/07/01\} \{\fixcompositeaccent\}\)
                       1624 (platexrelease)
                                                            {Fix for non-zero baselineshift}%
                       1625 (platexrelease)\nofixcompositeaccent % force LaTeX original (always)
                       1626 \(\rangle platexrelease \rangle \left\) fixcompositeaccent\@undefined
                       1627 ⟨platexrelease⟩\let\nofixcompositeaccent\@undefined
                       1628 (platexrelease)\let\pltx@saved@oalign\@undefined
                       1629 (platexrelease)\let\pltx@oalign\@undefined
                       1630 ⟨platexrelease⟩\let\pltx@saved@ltx@sh@ft\@undefined
                       1631 (platexrelease)\let\pltx@ltx@sh@ft\@undefined
                       1632 (platexrelease)\let\pltx@saved@text@composite@x\@undefined
                       1633 ⟨platexrelease⟩\let\pltx@text@composite@x\@undefined
                       1634 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                       1635 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\fixcompositeaccent}
                       1636 (platexrelease)
                                                            {Fix for non-zero baselineshift}%
                       1637 (platexrelease)\fixcompositeaccent % force pLaTeX definition (always)
                       1638 (platexrelease)\let\oalign\pltx@saved@oalign % no fix at that time
                       1639 \langle platexrelease \rangle \ tx@sh@ft pltx@saved@ltx@sh@ft <math>\% no fix at that time
                       1640 (platexrelease)\let\fixcompositeaccent\@undefined
                       1641 (platexrelease) \let\nofixcompositeaccent\@undefined
```

```
1642 \(\rangle platexrelease \)\let\\pltx@saved@oalign\@undefined
1643 (platexrelease)\let\pltx@oalign\@undefined
1644 (platexrelease)\let\pltx@saved@ltx@sh@ft\@undefined
1645 (platexrelease)\let\pltx@ltx@sh@ft\@undefined
1646 \langle platexrelease \rangle \ let pltx@saved@text@composite@x \ @undefined
1647 (platexrelease)\let\pltx@text@composite@x\@undefined
1648 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1650 (platexrelease)
                                    {Fix for non-zero baselineshift}%
1651 (platexrelease)\nofixcompositeaccent % force LaTeX original (always)
1652 (platexrelease)\let\fixcompositeaccent\@undefined
1653 (platexrelease)\let\nofixcompositeaccent\@undefined
1654 (platexrelease)\let\pltx@saved@oalign\@undefined
1655 (platexrelease)\let\pltx@oalign\@undefined
1656 \(\rangle platexrelease \)\let\pltx@saved@ltx@sh@ft\@undefined
1657 (platexrelease)\let\pltx@ltx@sh@ft\@undefined
1658 (platexrelease)\let\pltx@saved@text@composite@x\@undefined
1659 (platexrelease)\let\pltx@text@composite@x\@undefined
1660 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

4.4 イタリック補正と\xkanjiskip

\check@nocorr@

「あ \texttt{abc}い」としたとき、書体の変更を指定された欧文の左側に和欧文間スペースが入らないのを修正します。

コミュニティ版の修正: pT_EX のバージョン p3.1.11 以前は、イタリック補正(以下 \/と記す)と \xkan jiskip の挿入が衝突 2 し

- 「欧文文字 → \/」の場合には \/を無視する(つまり後に \xkanjiskip 挿入可能)
- 2. 「和文文字 → \/」の場合にはこの後に \xkan jiskip は挿入できない

という挙動になっていました。p3.2(2010年)の修正で

◆ \xkanjiskip 挿入時にはいかなる場合も \/を無視する

という挙動に変更されました。pIFTEX カーネルの \check@nocorr@の修正は、p3.1.11 以前の 2. への対処でしたが、これは「\text...{}の左への \/挿入」を無効化しているので、\textit{f\textup{a}}で本来入るべきイタリック補正が入りませんでした。p3.2 以降では pTEX の \xkanjiskip 対策が不要になっていますので、コミュニティ版では削除しました。

```
\label{local_local_local_local_local} $$ 1661 \ \langle platexrelease \rangle \left[10/28\right] \ \langle platexrelease \rangle $$ {Italic correction before \textt...}% $$
```

 $^{^2}$ 和文のイタリック補正用 kern が、通常の explicit な (\kern による) kern と同じ扱いを受けていたため。

```
1663 /def \check@nocorr@ #1#2\nocorr#3\@nil {%
1664 (platexrelease)
                    \let \check@icl \maybe@ic
1665 (platexrelease)
                    \def \check@icr {\ifvmode \else \aftergroup \maybe@ic \fi}%
1666 (platexrelease)
                    \def \reserved@a {\nocorr}%
1667 (platexrelease)
                    \def \reserved@b {#1}%
1668 (platexrelease)
                    \def \reserved@c {#3}%
1669 (platexrelease)
                    \ifx \reserved@a \reserved@b
1670 (platexrelease)
                       \ifx \reserved@c \@empty
_{1671} \langle platexrelease \rangle
                         \let \check@icl \@empty
1672 (platexrelease)
                       \else
1673 (platexrelease)
                         \let \check@icl \@empty
1674 (platexrelease)
                         \let \check@icr \@empty
1675 (platexrelease)
1676 (platexrelease)
                    \else
1677 (platexrelease)
                       \ifx \reserved@c \@empty
                       \else
1678 (platexrelease)
1679 (platexrelease)
                         \let \check@icr \@empty
1680 (platexrelease)
                      \fi
1681 (platexrelease)
                    \fi
1682 (platexrelease)}
1683 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1684 \label{localized} $$1684 \end{plane} $$ \check@nocorr@} $$
1685 (platexrelease)
                                        {ASCII Corporation original}%
1686 (platexrelease)\def \check@nocorr@ #1#2\nocorr#3\@nil {%
1687 (platexrelease)
                    \let \check@icl \relax % changed from \maybe@ic
1688 (platexrelease)
                    \def \check@icr {\ifvmode \else \aftergroup \maybe@ic \fi}%
1689 (platexrelease)
                    \def \reserved@a {\nocorr}%
1690 (platexrelease)
                    \def \reserved@b {#1}%
1691 (platexrelease)
                    \def \reserved@c {#3}%
_{1692} \langle platexrelease \rangle
                    \ifx \reserved@a \reserved@b
1693 (platexrelease)
                       \ifx \reserved@c \@empty
1694 (platexrelease)
                         \let \check@icl \@empty
1695 (platexrelease)
                       \else
1696 (platexrelease)
                         \let \check@icl \@empty
1697 (platexrelease)
                         \let \check@icr \@empty
1698 (platexrelease)
                      \fi
1699 (platexrelease)
                    \else
1700 (platexrelease)
                       \ifx \reserved@c \@empty
1701 (platexrelease)
                       \else
1702 \langle platexrelease \rangle
                         \let \check@icr \@empty
1703 (platexrelease)
                       \fi
1704 (platexrelease)
                    \fi
1705 (platexrelease)}
1706 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

\< 最後に、\inhibitglue の簡略形を定義します。このコマンドは、和文フォントの メトリック情報から、自動的に挿入されるグルーの挿入を禁止します。

2014年の pTeX の \inhibitglue のバグ修正に伴い、 \inhibitglue が垂直モードでは効かなくなりました。 IPTeX では垂直モードと水平モードの区別が隠されて

いますので、pIATeX の追加命令である \<は段落頭でも効くように修正します。

\DeclareRobustCommandを使うと\protectの影響で前方の文字に対する\inhibitglueが効かなくなるので、e-TrX の\protected が必要です。

```
1707 \; \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{lncludeInRelease} \{2017/10/28\} \{ \backslash < \}
1708 (platexrelease)
                                             {\inhibitglue in vertical mode}%
_{1709} \; \langle * \mathsf{plcore} \; | \; \mathsf{platexrelease} \rangle
1710 \ifx\protected\@undefined
1711 \def \< \\inhibitglue \}
1712 \else
1713 \protected\def\<{\ifvmode\leavevmode\fi\inhibitglue}
1714 \fi
1715 (/plcore | platexrelease)
1716 \( platexrelease \)\\\plEndIncludeInRelease
1718 (platexrelease)
                                             {ASCII Corporation original}%
1719 (platexrelease)\def\<{\inhibitglue}</pre>
1720 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
```

4.5 デフォルト設定ファイルの読み込み

デフォルト設定ファイル pldefs.ltx は、もともと plcore.ltx の途中で読み込んでいましたが、2018 年以降の新しいコミュニティ版 pl Δ TeX では platex.ltx から読み込むことにしました。実際の中身については、第5節を参照してください。

5 デフォルト設定ファイル

ここでは、フォーマットファイルに読み込まれるデフォルト値を設定しています。この節での内容は pldefs.ltx に出力されます。このファイルの内容を plcore.ltx に含めてもよいのですが、デフォルトの設定を参照しやすいように、別ファイルにしてあります。

プリロードサイズは、DOCSTRIP プログラムのオプションで変更することができます。これ以外の設定を変更したい場合は、pldefs.ltx を直接、修正するのではなく、このファイルを pldefs.cfg という名前でコピーをして、そのファイルに対して修正を加えるようにしてください。

```
1721 \langle *pldefs \rangle
1722 \ProvidesFile{pldefs.ltx}
1723 [2020/02/01 v1.6v pLaTeX Kernel (Default settings)]
1724 \langle /pldefs \rangle
```

5.1 テキストフォント

テキストフォントのための属性やエラー書体などの宣言です。 ${\it pIPT_{EX}}$ のデフォルトの横組エンコードは JY1、縦組エンコードは JT1 とします。

```
縦横エンコード共通:
1725 (*pldefs)
1726 \DeclareKanjiEncodingDefaults{}{}
1727 \DeclareErrorKanjiFont{JY1}{mc}{m}{10}
1728 \kanjifamily{mc}
1729 \kanjiseries{m}
1730 \kanjishape{n}
1731 \fontsize{10}{10}
  横組エンコード:
1732 \DeclareYokoKanjiEncoding{JY1}{}{}
1733 \DeclareKanjiSubstitution{JY1}{mc}{m}{n}
  縦組エンコード:
1734 \DeclareTateKanjiEncoding{JT1}{}{}
1735 \DeclareKanjiSubstitution{JT1}{mc}{m}{n}
  縦横のエンコーディングのセット化:
1736 \KanjiEncodingPair{JY1}{JT1}
   フォント属性のデフォルト値:IATFX 2<sub>6</sub> 2019-10-01 までは\shapedefault は\updefault
  でしたが、\LaTeX 2\varepsilon 2020-02-02 で \updefault が "n" から "up" へと修正されたこ
   とに伴い、\shapedefault は明示的に"n"に設定されました。
1737 \newcommand\mcdefault{mc}
1738 \newcommand\gtdefault{gt}
1739 \newcommand\kanjiencodingdefault{JY1}
1740 \mbox{ } \mbox
1741 \newcommand\kanjiseriesdefault{\mddefault}
1742 \newcommand \kanjishapedefault \{n\}% formerly \updefault
  和文エンコードの指定:
1743 \kanjiencoding{JY1}
   フォント定義:これらの具体的な内容は第6節を参照してください。
1744 \input{jy1mc.fd}
1745 \input{jy1gt.fd}
1746 \input{jt1mc.fd}
1747 \input{jt1gt.fd}
  フォントを有効にします。
1748 \fontencoding{JT1}\selectfont
1749 \fontencoding{JY1}\selectfont
```

5.2 プリロードフォント

あらかじめフォーマットファイルにロードされるフォントの宣言です。DOCSTRIP プログラムのオプションでロードされるフォントのサイズを変更することができます。plfmt.ins では xpt を指定しています。

```
1750 (*xpt)
1751 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
1752 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
1753 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{5,7,10,12}
1754 \ \ DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
1755 (/xpt)
1756 (*xipt)
1757 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{5,7,10.95,12}
1758 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
1759 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{5,7,10.95,12}
1760 \ \ DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
1761 (/xipt)
1762 (*xiipt)
1763 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
1764 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
1765 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
1766 \ \ DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
1767 (/xiipt)
1768 (*ori)
1769 \DeclarePreloadSizes{JY1}{mc}{m}{n}
            {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
1771 \DeclarePreloadSizes{JY1}{gt}{m}{n}
            {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
1773 \DeclarePreloadSizes{JT1}{mc}{m}{n}
            {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
1775 \DeclarePreloadSizes{JT1}{gt}{m}{n}
            {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
1776
1777 (/ori)
```

5.3 組版パラメータ

禁則パラメータや文字間へ挿入するスペースの設定などです。実際の各文字への禁則パラメータおよびスペースの挿入の許可設定などは、kinsoku.tex で行なっています。具体的な設定については、kinsoku.dtx を参照してください。

組版パラメータの設定をします。\kanjiskip は、漢字と漢字の間に挿入されるグルーです。\noautospacing で、挿入を中止することができます。デフォルトは\autospacing です。

```
1786 \kanjiskip=0pt plus .4pt minus .5pt 1787 \autospacing
```

\xkanjiskip は、和欧文間に自動的に挿入されるグルーです。\noautoxspacing で、挿入を中止することができます。デフォルトは \autoxspacing です。

```
1788 \xkanjiskip=.25zw plus1pt minus1pt
```

1789 \autoxspacing

\jcharwidowpenalty は、パラグラフに対する禁則です。パラグラフの最後の行が 1文字だけにならないように調整するために使われます。

1790 \jcharwidowpenalty=500

ここまでが、pldefs.ltxの内容です。

1791 (/pldefs)

6 フォント定義ファイル

ここでは、フォント定義ファイルの設定をしています。フォント定義ファイルは、 LATEX のフォント属性を $T_{E}X$ フォントに置き換えるためのファイルです。記述方法 についての詳細は、fntguide.tex を参照してください。

欧文書体の設定については、cmfonts.fdd や slides.fdd などを参照してください。skfonts.fdd には、写研代用書体を使うためのパッケージとフォント定義が記述されています。

```
1792 (JY1mc)\ProvidesFile{jy1mc.fd}
```

1793 (JY1gt)\ProvidesFile{jy1gt.fd}

1794 (JT1mc)\ProvidesFile{jt1mc.fd}

1795 (JT1gt)\ProvidesFile{jt1gt.fd}

 $1796 \langle JY1mc, JY1gt, JT1mc, JT1gt \rangle$

[2018/07/03 v1.6q KANJI font defines]

横組用、縦組用ともに、明朝体のシリーズ bx がゴシック体となるように宣言しています。また、シリーズ b は同じ書体の bx と等価になるように宣言します。

pIATeX では従属書体に OT1 エンコーディングを指定しています。また、要求サイズ (指定されたフォントサイズ) が $10 \mathrm{pt}$ のとき、全角幅の実寸が $9.62216 \mathrm{pt}$ となるよう にしますので、和文スケール値($1 \mathrm{zw}$ ÷ 要求サイズ)は $9.62216 \mathrm{pt}/10 \mathrm{pt} = 0.962216$ です。 $\min 10$ 系のメトリックは全角幅が $9.62216 \mathrm{pt}$ でデザインされているので、これを 1 倍で読込みます。

```
1797 (*JY1mc)
```

1798 \DeclareKanjiFamily{JY1}{mc}{}

1799 \DeclareRelationFont{JY1}{mc}{m}{}{cmr}{m}{}

1802 <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> min10

1803 <-> min10

1804 }{}

 $1805 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{\mbox

 $1806 \ensuremath{\mbox{\mbox{1806}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{1806}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{1806}}} \ensuremath{\mbox{1806}} \ensuremath{\mbox{\mbox{1806}}} \ensuremath{\mbox{1806}} \ensuremath{\$

1807 (/**JY1mc**)

```
1808 (*JT1mc)
 1809 \DeclareKanjiFamily{JT1}{mc}{}
 1810 \DeclareRelationFont{JT1}{mc}{m}{}{cmr}{m}{}
 1811 \DeclareRelationFont{JT1}{mc}{bx}{}{OT1}{cmr}{bx}{}
 1812 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1812$} \mbox{$1812$} \mbox{$1812$} \mbox{$1812$} \ensuremath{\mbox{$4$} \mbox{$4$} \mbox{
                                                                                                 <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> tmin10
1813
                                                                                                 <-> tmin10
1814
                                                                                               }{}
1815
1816 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1816$} \mbox{$1816$}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1816$} \mbox{$1816$}}} \ensuremath{\mbox{$1816$} \mbox{$1816$}} \ensuremath{\mbo
 1817 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{b}{n}{<->ssub*mc/bx/n}{}
 1818 (/JT1mc)
 1819 (*JY1gt)
 1820 \DeclareKanjiFamily{JY1}{gt}{}
 1821 \DeclareRelationFont{JY1}{gt}{m}{}{OT1}{cmr}{bx}{}
 1822 \ensuremath{$\setminus$} 1822 \ensuremath{$\setminus$
                                                                                                 <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> goth10
1823
                                                                                                 <-> goth10
1824
                                                                                                 }{}
1825
1826 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1826$} \mbox{$1826$}} \ensuremath{\mbox{$1826$} \mbox{$1826$} \mbox{$1826$}} \ensuremath{\mbox{$1826$} \mbox{$1826$}} \ensuremat
1827 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1827$} \mbox{$1827$}} fgt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
1828 (/JY1gt)
1829 (*JT1gt)
1830 \DeclareKanjiFamily{JT1}{gt}{}
 1831 \DeclareRelationFont{JT1}{gt}{m}{}{Cmr}{bx}{}
 1832 \DeclareFontShape{JT1}{gt}{m}{n}{<5> <6> <7> <8> <9> <10> sgen*tgoth
                                                                                               <10.95><12><14.4><17.28><20.74><24.88> tgoth10
1833
1834
                                                                                                 <-> tgoth10
                                                                                               }{}
1835
 1836 \ensuremath{\mbox{\sc Normalize}} 1836 \ensuremath
 1837 \ensuremath{\mbox{\sc lareFontShape{JT1}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}} \label{lareFontShape{JT1}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{{}}} \label{lareFontShape{JT1}{gt}{b}{n}{{}}{\mbox{\sc lareFontShape{JT1}{gt}{b}{n}}} \label{lareFontShape{JT1}{gt}{b}{n}{{}}{\mbox{\sc lareFontShape{JT1}{gt}{b}{n}}} \label{lareFontShape{JT1}{gt}{b}{n}{{}}{\mbox{\sc lareFontShape{JT1}{gt}{b}{n}}} \label{lareFontShape{JT1}{gt}{b}{m}{{}}{\mbox{\sc lareFontShape{JT1}{gt}{b}{m}{{}}{\mbox{\sc lareFontShape{JT1}{gt}{b}{m}{{}}{\mbox{\sc lareFontShape{JT1}{gt}{b}{m}{{}}{\mbox{\sc lareFontShape{JT1}{gt}{b}{m}{{}}{\mbox{\sc lareFontShape{\sc lar
 1838 (/JT1gt)
```

File c

plcore.dtx

概要

このファイルでは、つぎの機能の拡張や修正を行っています。詳細は、それぞれの 項目の説明を参照してください。

- プリアンブルコマンド
- 改ページ
- 改行
- オブジェクトの出力順序
- ・トンボ
- 脚注マクロ
- 相互参照
- 疑似タイプ入力
- tabbing 環境
- 用語集の出力
- 時分を示すカウンタ

8 コード

このファイルの内容は、pI $otin T_E X 2_{\varepsilon}$ のコア部分です。 1 (*plcore)

8.1 プリアンブルコマンド

文書ファイルが必要とするフォーマットファイルの指定をするコマンドを拡張し、 $pIAT_{E}X 2\varepsilon$ フォーマットファイルも認識するようにします。

\NeedsTeXFormat \NeedsTeXFormatsに "pLaTeX2e" を指定すると、"LaTeX2e" フォーマットを必要 \@needsPformat とする英語版のクラスファイルやパッケージファイルなどが使えなくなってしまう \@needsPf@rmat ために再定義します。このコマンドは ltclass.dtx で定義されています。

```
2 \def\NeedsTeXFormat#1{%
     \def\reserved@a{#1}%
     \ifx\reserved@a\pfmtname
       \expandafter\@needsPformat
5
6
7
       \ifx\reserved@a\fmtname
         \expandafter\expandafter\@needsformat
8
       \else
9
         \ClatexCerror{This file needs format '\reservedCa',%
10
            \MessageBreak but this is '\pfmtname'}{%
11
            The current input file will not be processed
12
            further,\MessageBreak
13
            because it was written for some other flavor of
            TeX.\MessageBreak\@ehd}%
         \endinput
       \fi
17
     fi
18
19 %
20 \def\@needsPformat{\@ifnextchar[\@needsPf@rmat{}}
21 %
22 \def\@needsPf@rmat[#1]{%
      \@ifl@t@r\pfmtversion{#1}{}%
^{24}
      {\@latex@warning@no@line
          {You have requested release '#1' of pLaTeX,\MessageBreak
25
           but only release '\pfmtversion' is available}}}
26
27 %
28 \@onlypreamble\@needsPformat
29 \@onlypreamble\@needsPf@rmat
```

\documentstyle

\documentclass の代わりに \documentstyle が使われると、 \mbox{IAT}_{EX} 2.09 互換モードに入ります。このとき、オリジナルの \mbox{IAT}_{EX} では latex209.def を読み込みますが、 \mbox{pIAT}_{EX} 2 $\mbox{\varepsilon}$ では pl209.def を読み込みます。このコマンドは ltclass.dtx で定義されています。

```
30 \def\documentstyle{%
31 \makeatletter\input{pl209.def}\makeatother
32 \documentclass}
33 \langle/plcore\
```

8.2 直前の JFM 由来スペースの削除【コミュニティ版独自】

現状の pT_EX (T_EX Live 2017 時点)では、\inhibitglue プリミティブは「JFM 由来のスペース(グルー・カーン)挿入ルーチンを抑制する」働きをします。しかし、既に挿入されてしまった JFM グルーやカーンを削除することはできません。

\removejfmglue そこで、「最後のノードが JFM グルーであった場合にそれを削除する」というユーザ向け命令を定義します。この機能には e-pTEX 180226 以降の \lastnodesubtype

File c: plcore.dtx Date: 2019/10/19 Version v1.3d

プリミティブが必要です。この命令はあくまで「\removejfmglue の展開時点で既に pT_EX によって挿入完了している JFM グルー」だけを削除し、「これから挿入されようとする JFM グルー」は抑制しません。例えば

始) \removejfmglue 中) \relax\removejfmglue 終

という入力からは

始)中)終

```
が得られます(最初の\removejfmglue は結果的に何もしていません)。
34 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt plincludeInRelease} \{ 2018/03/09 \} \%
35 (platexrelease)
                                        {\removejfmglue}{Macro added}%
36 (*plcore | platexrelease)
38 \let\removejfmglue\@undefined
39 \else
40 \setbox0\hbox{%
     \ifdefined\ucs %% upTeX check
41
          \finthermin=upjisr-h at 9.62216pt
42
        \else
43
          \jfont\tenmin=min10
44
        \fi\tenmin
45
        \c \jis"214B\null\setbox0\lastbox
47
        \global\chardef\pltx@gluetype\lastnodetype
48
        \global\chardef\pltx@jfmgluesubtype\lastnodesubtype
49
     \setbox0=\box\voidb@x
50
     \protected\def\removejfmglue{%
51
        \ifnum\lastnodetype=\pltx@gluetype\relax
52
          \ifnum\lastnodesubtype=\pltx@jfmgluesubtype\relax
53
54
             \unskip
          \fi
55
        fi
56
57\fi
58 \; \langle / \mathsf{plcore} \; | \; \mathsf{platexrelease} \rangle
59 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
60 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \%
61 (platexrelease)
                                        {\removejfmglue}{Macro added}%
62~ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt let} \\ {\tt removejfmglue} \backslash {\tt @undefined}
63 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
```

8.3 改ページ

縦組のとき、改ページ後の内容が偶数ページ (右ページ) からはじまるようにします。横組のときには、奇数ページ (右ページ) からはじまります。

\cleardoublepage

このコマンドによって出力される、白ページのページスタイルを *empty* にし、ヘッダとフッタが入らないようにしています。ltoutput.dtx の定義を、縦組、横組に合わせて、定義しなおしたものです。

```
65 \def\cleardoublepage{\clearpage\if@twoside
    \ifodd\c@page
67
      \iftdir
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
68
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
69
70
      \fi
    \else
71
      \ifydir
72
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
73
        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
      \fi
    fi\fi
```

8.4 改行

\@gnewline

日本語 T_EX の行頭禁則処理は、禁則対象文字の直前に、 \prebreakpenalty で指定されたペナルティの値を挿入することで行なっています。ところが、改行コマンドは負のペナルティの値を挿入することで改行を行ないます。そのために、禁則ペナルティの値が 10000 の文字の直後では、ペナルティの値が相殺され、改行することができません。

```
あいうえお \\
!かきくけこ
```

したがって、\newline マクロに \mbox{}を入れることによって、\newline マクロのペナルティ-10000 と行頭文字のペナルティ10000 が加算されないようにします。\\ は \newline マクロを呼び出しています。

なお、\newline マクロは ltspaces.dtx で定義されています。

IFT_EX <1996/12/01>で改行マクロが変更され、\\ が \newline を呼び出さなくなったため、変更された改行マクロに対応しました。\null の挿入位置は同じです。ltspace.dtx の定義を上記に合わせて、定義しなおしました。

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる補足: アスキーによる pI Φ T_EX では、行頭 禁則文字の直前で \\ による強制改行を行えるようにするという目的で \null を \@gnewline マクロ内に挿入していました。しかし、これでは \\\par と書いた場合に Underfull 警告が出なくなっています(tests/newline_par.tex を latex と platex で処理してみてください)。

もし \null の代わりに \hskip\z@を挿入すれば、IATEX と同様に Underfull 警告を出すことができます。ただし、\null を挿入した場合と異なり、強制改行後の行

頭に JFM グルーが入らなくなります。これはむしろ、奥村さんの jsclasses で行頭を天ツキに直しているのと同じですが、pIPTEX としては挙動が変化してしまいますので、現時点では $\null \rightarrow \nskip\null > \null > \n$

```
77 \def\@gnewline #1{%
78 \ifvmode
79 \@nolnerr
80 \else
81 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
82 \ignorespaces
83 \fi}
84 \langle /plcore \rangle
```

\@no@lnbk 日本語 T_EX 開発コミュニティによる追加: さらに、\\ だけでなく \linebreak についても同様の対処をします。 I_F X の定義のままではマクロによるペナルティ-10000 と行頭文字のペナルティ10000 が加算されてしまうため、\hskip\z@\relax を入れておきます。なお、\linebreak を発行して行分割が起きた場合、新しい行頭の JFM グルーは消えるという従来の pIFTFX の挙動も維持しています。

前回の \hskip\z@\relax の追加では、\nolinebreak の場合に \kanjiskip や \xkanjiskip が入らない問題が起きてしまいました。そこで、\penalty\z@\relax に変更しました。これは、明示的な \penalty プリミティブ同士の合算は行われないことを利用しています。

ところが、その変更によってそもそも \nolinebreak が効かない場合が生じたので、変更全体をいったんキャンセルして元に戻します。

```
85 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\@no@lnbk}
                                  {Break before prebreakpenalty (revert)}%
86 (platexrelease)
87 (platexrelease)\def\@no@lnbk #1[#2]{%
88 (platexrelease) \ifvmode
89 (platexrelease)
                   \@nolnerr
90 (platexrelease) \else
91 (platexrelease)
                   \@tempskipa\lastskip
92 (platexrelease)
                   \unskip
93 (platexrelease)
                   \penalty #1\@getpen{#2}%
94 (platexrelease)
                   \ifdim\@tempskipa>\z@
95 (platexrelease)
                     \hskip\@tempskipa
96 (platexrelease)
                     \ignorespaces
                   \fi
97 (platexrelease)
98 \langle platexrelease \rangle \ \fi
101 (platexrelease)
                                  {Break before prebreakpenalty (another)}%
102 (platexrelease)\def\@no@lnbk #1[#2]{%
103 (platexrelease)
                \ifvmode
104 (platexrelease)
                   \@nolnerr
105 (platexrelease)
                \else
106 (platexrelease)
                   \@tempskipa\lastskip
```

File c: plcore.dtx Date: 2019/10/19 Version v1.3d

```
107 (platexrelease)
                      \unskip
108 (platexrelease)
                      \penalty #1\@getpen{#2}%
109 (platexrelease)
                      \penalty\z@\relax %% added (2017/08/25)
110 (platexrelease)
                      \ifdim\@tempskipa>\z@
111 (platexrelease)
                        \hskip\@tempskipa
112 (platexrelease)
                        \ignorespaces
113 (platexrelease)
                      \fi
114 (platexrelease)
                    \fi}
115 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
116 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/05/05}{\@no@lnbk}
117 (platexrelease)
                                        {Break before prebreakpenalty}%
118 \(\rangle platexrelease \rangle \def \OnoOlnbk #1[#2] \{\%\}
119 (platexrelease)
                    \ifvmode
120 (platexrelease)
                      \@nolnerr
121 (platexrelease)
                    \else
_{122} \; \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                      \@tempskipa\lastskip
123 (platexrelease)
                      \unskip
                      \penalty #1\@getpen{#2}%
124 (platexrelease)
                      \hskip\z@\relax %% added (2017/05/03)
125 (platexrelease)
126 (platexrelease)
                      \ifdim\@tempskipa>\z@
127 (platexrelease)
                        \hskip\@tempskipa
128 (platexrelease)
                        \ignorespaces
129 (platexrelease)
                      \fi
130 (platexrelease)
                    \fi}
131 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle \)\(\rangle platexrelease \)
133 (platexrelease)
                                        {LaTeX2e original}%
134 (platexrelease)\def\@no@lnbk #1[#2]{%
135 (platexrelease)
                   \ifvmode
136 (platexrelease)
                      \@nolnerr
137 (platexrelease)
                    \else
138 (platexrelease)
                      \@tempskipa\lastskip
139 (platexrelease)
                      \unskip
140 (platexrelease)
                      \penalty #1\@getpen{#2}%
141 (platexrelease)
                      \ifdim\@tempskipa>\z@
142 (platexrelease)
                        \hskip\@tempskipa
143 (platexrelease)
                        \ignorespaces
144 (platexrelease)
                      \fi
145 (platexrelease)
                   \fi}
146 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

なお、LPT_EX 用の命令である \\ と \linebreak には上記のような禁則文字への対策を入れていますが、plain T_EX 互換のシンプルな命令である \break や \nobreak には、対策を行いません。

8.5 オブジェクトの出力順序

オリジナルの LFTEX は、トップフロート、本文、脚注、ボトムフロートの順番で出力しますけれども、日本語組版では、トップフロート、本文、ボトムフロート、脚注という順番の方が一般的ですので、このような順番になるよう修正をします。

したがって、文書ファイルによっては IATEX の組版結果と異なる場合がありますので、注意をしてください。

2014 年に IPTEX に fltrace パッケージが追加されましたので、その pIPTEX 版 として pfltrace パッケージを追加します。この pfltrace パッケージは IPTEX の fltrace パッケージに依存します。

```
147 (*fltrace)
```

- 148 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
- 149 \ProvidesPackage{pfltrace}
- [2016/05/20 v1.2e Standard pLaTeX package (float tracing)]
- 151 \RequirePackageWithOptions{fltrace}
- 152 (/fltrace)

\@makecol このマクロが組み立てる部分の中心となります。ltoutput.dtx で定義されているものです。

```
153 \(\rangle plane = \rangle plinclude InRelease \{ 2017/04/08 \} \) \(\lambda makecol \)
```

- 154 (platexrelease) {Take into account depth of footnote}%
- 155 (*plcore | platexrelease)
- 156 \gdef\@makecol{%
- 157 \setbox\@outputbox\box\@cclv%
- 158 \let\@elt\relax % added on LaTeX (ltoutput.dtx 2003/12/16 v1.2k)
- 159 \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
- 160 \global \let \@midlist \@empty
- 161 \@combinefloats

オリジナルの IFTEX は、トップフロート、本文、脚注、ボトムフロートの順番で出力します。一方 pIFTEX は、トップフロート、本文、ボトムフロート、脚注の順番で出力します。ところが、アスキー版のコードは順番を入れ替えるだけでなく、脚注のあるページの版面全体の垂直位置が(特に縦組で顕著に)ずれてしまっていました。これは補正量 \dp\@outputbox の取得を脚注挿入より前に行っていたためで、コミュニティ版 pIFTEX ではこの問題に対処してあります。結果的に、fnpos パッケージ (yafoot) の \makeFNbottom かつ \makeFNbelow な状態と完全に等価になりました。

```
162 \let\pltx@textbottom\@textbottom \% save (pLaTeX 2017/02/25)
```

- 163 \ifvoid\footins\else % changed (pLaTeX 2017/02/25)
- 164 \setbox\@outputbox \vbox {%
- 165 \boxmaxdepth \@maxdepth
- 166 \unvbox \@outputbox
- 167 \Otextbottom % inserted here (pLaTeX 2017/02/25)
- 168 \vskip \skip\footins

```
\color@begingroup
169
170
             \normalcolor
            \footnoterule
172
            \unvbox \footins
173
          \color@endgroup
174
          }%
          \let\@textbottom\relax % disable temporarily (pLaTeX 2017/02/25)
175
176
      \fi
177
      \ifvbox\@kludgeins
        \@makespecialcolbox
178
179
        \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
180
          %\boxmaxdepth \@maxdepth
                                        % comment out on LaTeX 1997/12/01
181
           \@texttop
182
183
          \dimen@ \dp\@outputbox
          \unvbox \@outputbox
184
```

縦組の際に \@outputbox の内容が空のボックスだけの場合に、\wd\@outputbox が Opt になってしまい、結果としてフッタの位置がくるってしまっていた。0 の \hskip を発生させると \wd\@outputbox の値が期待したものとなるので、縦組の場合はそ の方法で対処する。

ただし、0の \hskip を発生させるとき、水平モードに入ってしまうと、たとえば longtable パッケージを使用して表組途中で改ページするときに \par -> {\vskip} の無限ループが起きてしまいます。そこで、\vbox の中で発生させます。

```
\iftdir\vbox{\hskip\z@}\fi
           \vskip -\dimen@
186
           \@textbottom
187
188
           }%
       \fi
189
       \let\@textbottom\pltx@textbottom % restore (pLaTeX 2017/02/25)
190
       \global \maxdepth \@maxdepth
191
192 }
193  (/plcore | platexrelease)
194 \plEndIncludeInRelease
195 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\@makecol}
196 (platexrelease)
                                      {Avoid infinite loop}%
197 (platexrelease)\gdef\@makecol{%
198 (platexrelease)
                    \setbox\@outputbox\box\@cclv%
199 (platexrelease)
                    \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
200 (platexrelease)
                    \global \let \@midlist \@empty
201 (platexrelease)
                    \@combinefloats
202~\langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                    \ifvbox\@kludgeins
203 (platexrelease)
                      \@makespecialcolbox
204 (platexrelease)
                    \else
                      \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
205 (platexrelease)
                        %\boxmaxdepth \@maxdepth
                                                        % comment out on LaTeX 1997/12/01
206 (platexrelease)
207 (platexrelease)
                        \@texttop
208 (platexrelease)
                        \dimen@ \dp\@outputbox
```

```
209 (platexrelease)
                                                                              \unvbox \@outputbox
                                                                              \iftdir\vbox{\hskip\z@}\fi
210 (platexrelease)
211 (platexrelease)
                                                                              \vskip -\dimen@
212 (platexrelease)
                                                                              \@textbottom
213 (platexrelease)
                                                                              \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
214 (platexrelease)
                                                                                    \vskip \skip\footins
215 \langle platexrelease \rangle
                                                                                    \color@begingroup
216 \langle platexrelease \rangle
                                                                                                \normalcolor
217 (platexrelease)
                                                                                               \footnoterule
218 (platexrelease)
                                                                                                \unvbox \footins
219 (platexrelease)
                                                                                    \color@endgroup
220 (platexrelease)
                                                                              \fi
221 (platexrelease)
                                                                              }%
222 (platexrelease)
                                                                \fi
223 (platexrelease)
                                                                \global \maxdepth \@maxdepth
224 (platexrelease)}
225 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
226 \ \langle platexrelease \rangle \ | plincludeInRelease \{ 2016/04/17 \} \{ \ (\ collaboration of the c
227 (platexrelease)
                                                                                                                        {Adjust for \dp\@outputbox in tate mode}%
228 \langle platexrelease \rangle \gdef \@makecol{%}
229 (platexrelease)
                                                               \setbox\@outputbox\box\@cclv%
230 (platexrelease)
                                                               \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
231 (platexrelease)
                                                                \global \let \@midlist \@empty
232 (platexrelease)
                                                               \@combinefloats
233 (platexrelease)
                                                               \ifvbox\@kludgeins
234 (platexrelease)
                                                                       \@makespecialcolbox
235 (platexrelease)
236 (platexrelease)
                                                                       \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
237 (platexrelease)
                                                                             %\boxmaxdepth \@maxdepth
                                                                                                                                                                                % comment out on LaTeX 1997/12/01
238 (platexrelease)
                                                                              \@texttop
239 (platexrelease)
                                                                              \dimen@ \dp\@outputbox
240 (platexrelease)
                                                                              \unvbox \@outputbox
241 (platexrelease)
                                                                              \iftdir\hskip\z@\fi
242 (platexrelease)
                                                                              \vskip -\dimen@
243 (platexrelease)
                                                                              \@textbottom
244 (platexrelease)
                                                                              \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
245 (platexrelease)
                                                                                    \vskip \skip\footins
246 \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                                                                                    \color@begingroup
247 (platexrelease)
                                                                                                \normalcolor
                                                                                                \footnoterule
248 (platexrelease)
                                                                                               \unvbox \footins
249 (platexrelease)
250 (platexrelease)
                                                                                    \color@endgroup
                                                                              \fi
251 (platexrelease)
252 (platexrelease)
                                                                             }%
253 (platexrelease)
                                                               \fi
254 (platexrelease)
                                                                \global \maxdepth \@maxdepth
255 (platexrelease)}
256 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
257 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{\column{2}{c} | \column{2}{c} | \col
258 (platexrelease)
                                                                                                                        {ASCII Corporation original}%
```

```
259 \langle platexrelease \rangle \gdef \@makecol{%}
260 (platexrelease)
                    \setbox\@outputbox\box\@cclv%
261 (platexrelease)
                    \xdef\@freelist{\@freelist\@midlist}%
262 (platexrelease)
                    \global \let \@midlist \@empty
263 (platexrelease)
                    \@combinefloats
264 (platexrelease)
                    \ifvbox\@kludgeins
265 (platexrelease)
                       \@makespecialcolbox
266 (platexrelease)
                    \else
267 (platexrelease)
                       \setbox\@outputbox \vbox to\@colht {%
268 (platexrelease)
                         %\boxmaxdepth \@maxdepth
                                                          % comment out on LaTeX 1997/12/01
269 (platexrelease)
                         \@texttop
270 (platexrelease)
                         \dimen@ \dp\@outputbox
271 (platexrelease)
                         \unvbox \@outputbox
272 (platexrelease)
                         \iftdir\hskip\z@
273 (platexrelease)
                         \else\vskip -\dimen@\fi
274 (platexrelease)
                         \@textbottom
275 (platexrelease)
                         \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
276 (platexrelease)
                           \vskip \skip\footins
277 (platexrelease)
                           \color@begingroup
278 (platexrelease)
                               \normalcolor
279 (platexrelease)
                               \footnoterule
280 (platexrelease)
                               \unvbox \footins
281 (platexrelease)
                           \color@endgroup
282 (platexrelease)
                         \fi
283 (platexrelease)
                         }%
284 (platexrelease)
                    \fi
                     \global \maxdepth \@maxdepth
285 (platexrelease)
286 (platexrelease)}
287 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

\@makespecialcolbox

本文(あるいはボトムフロート)と脚注の間に \@textbottom を入れたいので、 \@makespecialcolbox コマンドも修正をします。やはり、ltoutput.dtx で定義されているものです。

このマクロは、\enlargethispage が使われたときに、\@makecol マクロから呼び出されます。

日本語 T_EX 開発コミュニティによる補足 (2017/02/25): 2016/11/29 以前の pLFTEX では、 $\mbox{\c omakecol}$ はボトムフロートを挿入した後、すぐに $\mbox{\c okludgeins}$ が空かどうか判定し

- 空の場合は、残りすべての処理を \@makespecialcolbox に任せる
- 空でない場合は、\@makecol 自身で残りすべての処理を行う

としていました。しかし 2017/04/08 以降の pIFTEX では、\@makecol はボトムフロートと脚注を挿入してから \@kludgeins の判定に移るようにしています。したがって、新しい \@makecol から以下に記す \@makespecialcolbox が呼び出される

場合は、\ifvoid\footins(二箇所)の判定は常に真となるはずです。要するに「つぎの部分が $pIAT_EX$ 用の修正です。」という二箇所のコードは実質的に不要となりました。

しかし、だからといって消してしまうと、古い pI $\stackrel{\text{IMT}}{\text{EX}}$ の \@makecol をベースに作られた外部パッケージから \@makespecialcolbox が呼び出される場合に脚注が消滅するおそれがあります。このため、\@makespecialcolbox は従来のコードのまま維持してあります(害はありません)。

```
288 \langle *plcore | fltrace \rangle
289 \gdef\@makespecialcolbox{%
290 (*trace)
291
      292
                           dp \the\dp\@kludgeins\space
                           wd \the\wd\@kludgeins}%
293
294 (/trace)
      \setbox\@outputbox \vbox {%
295
        \@texttop
297
        \dimen@ \dp\@outputbox
298
        \unvbox\@outputbox
299
        \vskip-\dimen@
        }%
300
      \@tempdima \@colht
301
      \ifdim \wd\@kludgeins>\z@
302
        \advance \@tempdima -\ht\@outputbox
303
        \advance \@tempdima \pageshrink
304
305 (*trace)
        \fl@trace {Natural ht of col: \the\ht\@outputbox}%
306
307
        \fl@trace {\string \@colht: \the\@colht}%
        \fl@trace {Pageshrink added: \the\pageshrink}%
308
309
        \fl@trace {Hence, space added: \the\@tempdima}%
310 \langle / trace \rangle
311
        \setbox\@outputbox \vbox to \@colht {%
312 %
           \boxmaxdepth \maxdepth
313
          \unvbox\@outputbox
314
          \vskip \@tempdima
          \@textbottom
315
つぎの部分が pIATeX 用の修正です。
          \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
316
317
            \vskip\skip\footins
318
            \color@begingroup
319
               \normalcolor
320
               \footnoterule
               \unvbox \footins
321
            \color@endgroup
322
323
          \fi
        }%
324
325
      \else
326
        \advance \@tempdima -\ht\@kludgeins
```

```
327 (*trace)
                     \fl@trace {Natural ht of col: \the\ht\@outputbox}%
             328
                     \fl@trace {\string \@colht: \the\@colht}%
             329
             330
                     \fl@trace {Extra size added: -\the \ht \@kludgeins}%
                     \fl@trace {Hence, height of inner box: \the\@tempdima}%
             331
                     \fl@trace {Max? pageshrink available: \the\pageshrink}%
             332
             333~\langle/\text{trace}\rangle
                     \setbox \@outputbox \vbox to \@colht {%
             334
                       \vbox to \@tempdima {%
             335
             336
                         \unvbox\@outputbox
             337
                         \@textbottom
              つぎの部分が pIATFX 用の修正です。脚注があれば、ここでそれを出力します。
                         \ifvoid\footins\else % for pLaTeX
             338
                           \vskip\skip\footins
             339
             340
                           \color@begingroup
             341
                             \normalcolor
             342
                             \footnoterule
                             \unvbox \footins
             343
                           \color@endgroup
             344
             345
                         \fi
             346
                       }\vss}%
                   \fi
             347
                   {\setbox \@tempboxa \box \@kludgeins}%
             348
             349 (*trace)
                     \fl@trace {kludgeins box made void}%
             350
             _{351}\;\langle/\text{trace}\rangle
             352 }
             353 (/plcore | fltrace)
             このマクロは、\@specialoutput マクロから呼び出されます。ボックス footins が
 \@reinserts
             組み立てられたモードに合わせて縦モードか横モードで \unvbox をします。
             354 (*plcore)
             355 \def\@reinserts{%
                  356
             357
                    \iftbox\footins\tate\else\yoko\fi
             358
                    \unvbox\footins}\fi
                  \ifvbox\@kludgeins\insert\@kludgeins{\unvbox\@kludgeins}\fi
             359
             360 }
                    トンボ
             8.6
              ここではトンボを出力するためのマクロを定義しています。
   \iftombow
             \iftombow はトンボを出力するかどうか、\iftombowdate は DVI を作成した日付
             をトンボの脇に出力するかどうかを示すために用います。
\iftombowdate
```

File c: plcore.dtx Date: 2019/10/19 Version v1.3d

361 \newif\iftombow \tombowfalse 362 \newif\iftombowdate \tombowdatetrue

```
\@tombowwidth \@tombowwidth には、トンボ用罫線の太さを指定します。デフォルトは 0.1 ポイン
                               トです。この値を変更し、\maketombowbox コマンドを実行することにより、トンボ
                              の罫線太さを変更して出力することができます。通常の使い方では、トンボの罫線
                               を変更する必要はありません。DVI をフィルムに面付け出力するとき、トンボをつ
                              けずに位置はそのままにする必要があるときに、この太さをゼロポイントにします。
                              363 \newdimen\@tombowwidth
                              364 \ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{
\@tombowbleed \@tombowbleed は、bleed 幅を指定します。デフォルトは 3mm です。
                              365 (/plcore)
                              366 \langle platexrelease \rangle plincludeInRelease \{2018/05/20\} \{\ensuremath{\mbox{\sc Macro}} added} \%
                              367 (*plcore | platexrelease)
                              368 \def\@tombowbleed{3mm}
                              369  /plcore | platexrelease
                              370 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
                              371 \platexrelease\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@tombowbleed}{Macro added}%
                              373 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                              374 (*plcore)
\@tombowcolor \@tombowcolor は、トンボの色です。デフォルトは \normalcolor です。
                              375 (/plcore)
                              376 \platexrelease\plIncludeInRelease{2018/05/20}{\@tombowcolor}{Macro added}%
                              377 (*plcore | platexrelease)
                              378 \def\@tombowcolor{\normalcolor}
                              379 (/plcore | platexrelease)
                              380 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
                              381 \platexrelease\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@tombowcolor}{Macro added}%
                              382 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt let} \ ({\tt Qtombowcolor} \ ({\tt Qundefined} \ )
                              383 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
                              384 (*plcore)
                                   トンボ用の罫線を定義します。
                  \@TL \@TLと\@T1 はページ上部の左側、\@TC はページ上部の中央、\@TR と\@Tr はペー
                  \@Tl ジ上部の左側のトンボとなるボックスです。
                  \@TC 385 \newbox\@TL\newbox\@Tl
                              386 \newbox\@TC
                  \@TR
                              387 \newbox\@TR\newbox\@Tr
                  \@Tr
                  \@BL \@BLと\@B1 はページ下部の左側、\@BC はページ下部の中央、\@BR と \@Br はペー
                  \@B1 ジ下部の左側のトンボとなるボックスです。
                  \@BC 388 \newbox\@BL\newbox\@B1
                              389 \newbox\@BC
                  \@BR
                              390 \newbox\@BR\newbox\@Br
                  \@Br
```

```
\@CL \@CL はページ左側の中央、\@CR はページ右側の中央のトンボとなるボックスです。
         \@CR 391 \newbox\@CL
              392 \newbox\CR
 \@bannertoken \@bannertokenトークンは、トンボの横に出力する文字列を入れます。デフォルト
 \@bannerfont では何も出力しません。\@bannerfont フォントは、その文字列を出力するための
              フォントです。9 ポイントのタイプライタ体としています。
              393 \font\@bannerfont=cmtt9
              394 \newtoks\@bannertoken
              395 \@bannertoken{}
\maketombowbox \maketombowbox コマンドは、トンボとなるボックスを作るために用います。この
              コマンドは、トンボとなるボックスを作るだけで、それらのボックスを出力するの
              ではないことに注意をしてください。
              396 (/plcore)
              397 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2018/05/20\} \{\maketombowbox\}
              398 (platexrelease)
                                                        {Use \@tombowbleed}%
              399 (*plcore | platexrelease)
              400 \ensuremath{\mbox{\mbowbox}}\
                  \setbox\@TL\hbox to\z@{\yoko\hss
                      \vrule width\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax height\@tombowwidth depth\z@
              402
              403
                      \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
              404
                      \iftombowdate
                        405
              406
                   \setbox\@Tl\hbox to\z@{\yoko\hss
              407
              408
                      \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@
                      \vrule height\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax width\@tombowwidth depth\z@}%
              409
                  \setbox\@TC\hbox{\yoko
              410
                      411
                      \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
              412
                      \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@}%
              413
                  \setbox\@TR\hbox to\z@{\yoko
              414
                      \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
              415
                      \vrule width\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
              417
                   \setbox\@Tr\hbox to\z@{\yoko
              418
                      \vrule height\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax width\@tombowwidth depth\z@
              419
                      \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
              420 %
                  \label{locality} $$\left(\frac{0}{\box{0}}\ to\z0{\box{0}hss}\right)$
              421
                      \vrule width\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax depth\@tombowwidth height\z@
              422
                      \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@}%
              423
                  \setbox\@Bl\hbox to\z@{\yoko\hss
              424
              425
                      \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
                      \vrule depth\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax width\@tombowwidth height\z@}%
              426
              427
                   \setbox\@BC\hbox{\yoko
              428
                      \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
```

```
\vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
429
430
         \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@}%
     \setbox\@BR\hbox to\z@{\yoko
431
         \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
432
433
         \vrule width\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
434
     \setbox\@Br\hbox to\z@{\yoko
         \vrule depth\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax width\@tombowwidth height\z@
435
         \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
436
437 %
438
     \setbox\@CL\hbox to\z@{\yoko\hss
         \vrule width10mm height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth
439
         \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth}%
440
     \setbox\@CR\hbox to\z@{\yoko
441
         \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth
         \vrule height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth width10mm\hss}%
443
444 }
445 (/plcore | platexrelease)
446 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
448 (platexrelease)
                                               {ASCII Corporation original}%
449 (platexrelease)\def\maketombowbox{%
450 (platexrelease)
                 \setbox\@TL\hbox to\z@{\yoko\hss
451 (platexrelease)
                     \vrule width13mm height\@tombowwidth depth\z@
452 (platexrelease)
                     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
453 (platexrelease)
454 (platexrelease)
                       \raise4pt\hbox to\z@{\hskip5mm\@bannerfont\the\@bannertoken\hss}%
455 (platexrelease)
                     \fi}%
456 (platexrelease)
                 \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@
457 (platexrelease)
                     \vrule height13mm width\@tombowwidth depth\z@}%
458 (platexrelease)
459 (platexrelease)
                 \setbox\@TC\hbox{\yoko
460 (platexrelease)
                     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@
461 (platexrelease)
                     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
462 (platexrelease)
                     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@}%
463 (platexrelease)
                 \c \TR\hbox to\z \C\yoko
464 (platexrelease)
                     \vrule height10mm width\@tombowwidth depth\z@
465 (platexrelease)
                     \vrule width13mm height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
466 (platexrelease)
                 \setbox\@Tr\hbox to\z@{\yoko
                     \vrule height13mm width\@tombowwidth depth\z@
467 (platexrelease)
468 (platexrelease)
                     \vrule width10mm height\@tombowwidth depth\z@\hss}%
469 (platexrelease)
                 \vrule width13mm depth\@tombowwidth height\z@
470 (platexrelease)
471 (platexrelease)
                     \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@}%
472 (platexrelease)
                 \setbox\@Bl\hbox to\z@{\yoko\hss
473 (platexrelease)
                     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
474 (platexrelease)
                     \vrule depth13mm width\@tombowwidth height\z@}%
475 (platexrelease)
                 \setbox\@BC\hbox{\yoko
476 (platexrelease)
                     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@
477 (platexrelease)
                     \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
478 (platexrelease)
```

\vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@}%

```
479 (platexrelease)
                                 \setbox\@BR\hbox to\z@{\yoko
                480 (platexrelease)
                                     \vrule depth10mm width\@tombowwidth height\z@
                481 (platexrelease)
                                     \vrule width13mm depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
                482 (platexrelease)
                                 \setbox\@Br\hbox to\z@{\yoko
                                     \vrule depth13mm width\@tombowwidth height\z@
                483 (platexrelease)
                484 (platexrelease)
                                     \vrule width10mm depth\@tombowwidth height\z@\hss}%
                485 (platexrelease)
                                 \setbox\@CL\hbox to\z@{\yoko\hss
                486 (platexrelease)
                                     \vrule width10mm height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth
                487 (platexrelease)
                                     \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth}%
                488 (platexrelease)
                                 \setbox\@CR\hbox to\z@{\yoko
                489 (platexrelease)
                                     \vrule height10mm depth10mm width\@tombowwidth
                490 (platexrelease)
                                     \vrule height.5\@tombowwidth depth.5\@tombowwidth width10mm\hss}%
                491 (platexrelease)}
                492 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                493 (*plcore)
               \@outputtombow コマンドは、トンボを出力するのに用います。コミュニティ版で
\@outputtombow
                は、「色付きテキストの途中で改ページが起きた場合に、トンボにも色が付いてしま
                う」という現象を防ぎ、さらにトンボの色を簡単に変えられるよう、\@tombowcolor
                というマクロに切り出しています。
                494 (/plcore)
                495 \langle platexrelease \rangle \\ plincludeInRelease \{ 2018/05/20 \} \{ \coutput tombow \}
                                                  {Use \@tombowcolor and \@tombowbleed}%
                496 (platexrelease)
                497 (*plcore | platexrelease)
                498 \def\@outputtombow{%
                     \iftombow
                500
                     \vbox to\z@{\kern-\dimexpr 10mm+\@tombowbleed\relax\relax
                501
                       \boxmaxdepth\maxdimen
                       \moveleft\@tombowbleed \vbox to\@@paperheight{%
                502
                       \color@begingroup
                503
                         \@tombowcolor
                504
                         \hbox to\@@paperwidth{\hskip\@tombowbleed\relax
                505
                            \copy\@TL\hfill\copy\@TC\hfill\copy\@TR\hskip\@tombowbleed}%
                506
                507
                         \kern-10mm
                         \hbox to\@@paperwidth{\copy\@Tl\hfill\copy\@Tr}%
                508
                         \vfill
                509
                         \hbox to\@@paperwidth{\copy\@CL\hfill\copy\@CR}%
                510
                         \vfill
                511
                         \hbox to\@@paperwidth{\copy\@Bl\hfill\copy\@Br}%
                512
                513
                         \hbox to\@@paperwidth{\hskip\@tombowbleed\relax
                514
                            \copy\@BL\hfill\copy\@BC\hfill\copy\@BR\hskip\@tombowbleed}%
                515
                       \color@endgroup
                516
                517
                       }\vss
                     }%
                518
                519
                     \fi
                520 }
                521 (/plcore | platexrelease)
```

```
523 \(\rangle\)plincludeInRelease\(2016/04/17\)\(\rangle\)outputtombow\\
                                 524 (platexrelease)
                                                                                                          {Safe \boxmaxdepth}%
                                 525 \platexrelease \def \@outputtombow{%
                                 526 (platexrelease)
                                                                     \iftombow
                                 527 (platexrelease)
                                                                     \vbox to\z@{\kern-13mm\relax
                                 528 (platexrelease)
                                                                          \boxmaxdepth\maxdimen
                                 529 (platexrelease)
                                                                          \moveleft3mm\vbox to\@@paperheight{%
                                 530~\langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
                                 531 (platexrelease)
                                                                                     \copy\@TL\hfill\copy\@TC\hfill\copy\@TR\hskip3mm}%
                                 532 (platexrelease)
                                                                              \kern-10mm
                                 533 (platexrelease)
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\copy\@Tl\hfill\copy\@Tr}%
                                 534 (platexrelease)
                                                                              \vfill
                                 535 (platexrelease)
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\copy\@CL\hfill\copy\@CR}%
                                 536 (platexrelease)
                                                                              \vfill
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\copy\@B1\hfill\copy\@Br}%
                                 537 (platexrelease)
                                 538 (platexrelease)
                                                                              \kern-10mm
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
                                 539 (platexrelease)
                                 540 (platexrelease)
                                                                                     \copy\@BL\hfill\copy\@BC\hfill\copy\@BR\hskip3mm}%
                                 541 (platexrelease)
                                                                         }\vss
                                 542 (platexrelease)
                                                                     }%
                                 543 (platexrelease)
                                                                     \fi
                                 544 (platexrelease)}
                                 545 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
                                 546 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \\ \\@outputtombow \}
                                 547 (platexrelease)
                                                                                                          {ASCII Corporation original}%
                                 548 \(\rangle platexrelease \) \(\def \\\ Qoutputtombow \{\%\)
                                 549 (platexrelease)
                                                                     \iftombow
                                 550 (platexrelease)
                                                                     \vbox to\z@{\kern-13mm\relax
                                                                          \moveleft3mm\vbox to\@@paperheight{%
                                 551 (platexrelease)
                                 552 (platexrelease)
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
                                                                                     \copy\@TL\hfill\copy\@TC\hfill\copy\@TR\hskip3mm}%
                                 553 (platexrelease)
                                 554 (platexrelease)
                                                                              \kern-10mm
                                 555 (platexrelease)
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\copy\@Tl\hfill\copy\@Tr}%
                                 556 (platexrelease)
                                 557 (platexrelease)
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\copy\@CL\hfill\copy\@CR}%
                                 558 (platexrelease)
                                                                              \vfill
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\copy\@B1\hfill\copy\@Br}%
                                 559 (platexrelease)
                                 560 (platexrelease)
                                                                              \kern-10mm
                                                                              \hbox to\@@paperwidth{\hskip3mm\relax
                                 561 (platexrelease)
                                                                                    \label{lem:copyQBC\hfill\copy\QBR\hskip3mm} % % The copy\QBC\hfill\copy\QBR\hskip3mm \end{substitute} % % % The copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\copy\QBC\hfill\Cop\QBC\hfil
                                 562 (platexrelease)
                                 563 (platexrelease)
                                                                         }\vss
                                                                     }%
                                 564 (platexrelease)
                                 565 (platexrelease)
                                                                     \fi
                                 566 (platexrelease)}
                                 568 (*plcore)
                                 \@@paperheight は、用紙の縦の長さにトンボの長さを加えた長さになります。
\@@paperheight
  \@@paperwidth
    \@@topmargin
                                 File c: plcore.dtx Date: 2019/10/19 Version v1.3d
                                                                                                                                                                                            77
```

522 \platexrelease \plEndIncludeInRelease

```
\@@paperwidth は、用紙の横の長さにトンボの長さを加えた長さになります。 \@@topmargin は、現在のトップマージンに 1 インチ加えた長さになります。 569 \newdimen\@@paperheight
```

 $570 \mbox{ newdimen}\mbox{@paperwidth}$

571 \newdimen\@@topmargin

\@tombowreset@@paper

トンボ出力オプションが指定されている場合に用紙サイズを再設定する命令です。 \@outputpage へ加える変更を簡潔にするため、分離した上で \@tombowbleed を使 うようにしました。

```
572 (/plcore)
573 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 2018/05/20 \} \{ \quad \text{tombowreset @qpaper} \}
574 (platexrelease)
                                  {Macro separated}%
575 (*plcore | platexrelease)
576 \def\@tombowreset@@paper{%
        \@@topmargin\topmargin
577
        \iftombow
578
          \@@paperwidth\paperwidth
579
580
          \advance\@@paperwidth 2\dimexpr\@tombowbleed\relax
          \@@paperheight\paperheight \advance\@@paperheight 10mm\relax
581
582
          \advance\@@paperheight 2\dimexpr\@tombowbleed\relax
          \advance\@@topmargin 1in\relax \advance\@themargin 1in\relax
584
        \fi
585 }
586 (/plcore | platexrelease)
587 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
589 (platexrelease)
                                  {Macro separated}%
590 (platexrelease) \let\@tombowreset@@paper\@undefined
591 /plEndIncludeInRelease
592 (*plcore)
```

\@shipoutsetup \@outputpage 内に挿入したので削除しました。

\@outputpage

\textwidth と \textheight の交換は、\@shipoutsetup 内では行ないません。なぜなら、\@shipoutsetup マクロが実行されるときは、\shipout される vbox の中であり、このときは横組モードですので、つねに \iftdir は偽と判断され、縦と横のサイズを交換できないからです。

なお、この変更をローカルなものにするために、\begingroup と \endgroup で 囲みます。

```
593 \parbox{plcore} \\ 594 \parbox{pllncludeInRelease{2018/05/20}{\color{putpage}} \\ 595 \parbox{platexrelease} & {Use \color{paper}% } \\ 596 \parbox{**plcore | platexrelease} \\ 597 \color{putpage{% } \\ 598 \parbox{begingroup % the \endgroup is put in by \aftergroup } \\ 599 \parbox{pltdir}
```

```
600 \dimen\z@\textwidth\textwidth\textheight\\dimen\z@
601 \fi
602 \let \protect \noexpand
```

```
\language\document@default@language
     \@resetactivechars
605
     \global\let\@@if@newlist\if@newlist
     \global\@newlistfalse
606
     \@parboxrestore
607
    \shipout\vbox{\yoko
608
       \set@typeset@protect
609
610
       \aftergroup\endgroup
611
       \aftergroup\set@typeset@protect
ここから \@shipoutsetup の内容。
        \if@specialpage
612
          \global\@specialpagefalse\@nameuse{ps@\@specialstyle}%
613
614
        \if@twoside
          \ifodd\count\z@ \let\@thehead\@oddhead \let\@thefoot\@oddfoot
             \iftdir\let\@themargin\evensidemargin
618
             \else\let\@themargin\oddsidemargin\fi
619
          \else \let\@thehead\@evenhead
             \let\@thefoot\@evenfoot
620
              \iftdir\let\@themargin\oddsidemargin
621
622
              \else\let\@themargin\evensidemargin\fi
```

トンボ出力オプションが指定されている場合、ここで用紙サイズを再設定します。 TeX の加える左と上部の1インチは、トンボの内側に入ります。

 $^{^3\}text{IAT}_{\text{EX}}\,2\varepsilon$ 2017/01/01 以前を使って pIATeX 2ε のフォーマットを作成した場合や、dinbrief.cls のように独自の再定義を行うクラスやパッケージを使った場合に起こるかもしれません。

```
ここまでが \@shipoutsetup の内容。
        \@begindvi
633
        \@outputtombow
634
        \vskip \@@topmargin
635
        \moveright\@themargin\vbox{%
          \setbox\@tempboxa \vbox to\headheight{%
636
            \vfil
637
            \color@hbox
638
               \normalcolor
639
640
               \hb@xt@\textwidth{\@thehead}%
641
            \color@endbox
          }%
                                       %% 22 Feb 87
643
          \dp\@tempboxa \z@
          \box\@tempboxa
644
645
          \vskip \headsep
646
          \box\@outputbox
647
          \baselineskip \footskip
          \color@hbox
648
            \normalcolor
649
650
            \hb@xt@\textwidth{\@thefoot}%
651
          \color@endbox
652
654 \% \endgroup now inserted by \aftergroup
\if@newlist を初期化。
     \global\let\if@newlist\@@if@newlist
     \global \@colht \textheight
657
     \stepcounter{page}%
     \let\firstmark\botmark
658
659 }
660 (/plcore | platexrelease)
^{661}\ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt \ plEndIncludeInRelease}
662 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\@outputpage}
663 (platexrelease)
                                      {Reset language for hyphenation}%
664 (platexrelease)\def\@outputpage{%
665 \langle platexrelease \rangle \setminus begingroup % the \endgroup is put in by \aftergroup
666 (platexrelease)
                  \iftdir
667 (platexrelease)
                     \dimen\z@\textwidth \textwidth\textheight \textheight\dimen\z@
668 (platexrelease)
                  \fi
                  \let \protect \noexpand
669 (platexrelease)
670 (platexrelease)
                  \language\document@default@language
                   \@resetactivechars
671 (platexrelease)
                  \global\let\@@if@newlist\if@newlist
672 (platexrelease)
673 (platexrelease)
                   \global\@newlistfalse
674 (platexrelease)
                   \@parboxrestore
675 (platexrelease)
                  \shipout\vbox{\yoko
676 (platexrelease)
                     \set@typeset@protect
677 (platexrelease)
                     \aftergroup\endgroup
678 (platexrelease)
                     \aftergroup\set@typeset@protect
```

```
679 (platexrelease)
                       \if@specialpage
                         \global\@specialpagefalse\@nameuse{ps@\@specialstyle}%
680 (platexrelease)
681 (platexrelease)
682 (platexrelease)
                       \if@twoside
683 (platexrelease)
                         \ifodd\count\z@ \let\@thehead\@oddhead \let\@thefoot\@oddfoot
684 (platexrelease)
                             \iftdir\let\@themargin\evensidemargin
685 (platexrelease)
                             \else\let\@themargin\oddsidemargin\fi
686 (platexrelease)
                         \else \let\@thehead\@evenhead
687 (platexrelease)
                             \let\@thefoot\@evenfoot
688 (platexrelease)
                              \iftdir\let\@themargin\oddsidemargin
689 (platexrelease)
                              \else\let\@themargin\evensidemargin\fi
690 (platexrelease)
                       \fi\fi
691 (platexrelease)
                       \@@topmargin\topmargin
692 (platexrelease)
                       \iftombow
693 (platexrelease)
                         \@@paperwidth\paperwidth \advance\@@paperwidth 6mm\relax
694 (platexrelease)
                         \@@paperheight\paperheight \advance\@@paperheight 16mm\relax
695 (platexrelease)
                         \advance\@@topmargin 1in\relax \advance\@themargin 1in\relax
                       \fi
696 (platexrelease)
697 (platexrelease)
                       \reset@font
698 (platexrelease)
                       \normalsize
699 (platexrelease)
                       \normalsfcodes
700 (platexrelease)
                       \let\label\@gobble
701 (platexrelease)
                       \let\index\@gobble
702 (platexrelease)
                       \let\glossary\@gobble
703 (platexrelease)
                       \baselineskip\z@skip \lineskip\z@skip \lineskiplimit\z@
704 (platexrelease)
                      \@begindvi
705 (platexrelease)
                      \@outputtombow
                      \vskip \@@topmargin
706 (platexrelease)
707 (platexrelease)
                      \moveright\@themargin\vbox{%
708 (platexrelease)
                        \setbox\@tempboxa \vbox to\headheight{%
709 (platexrelease)
                          \vfil
710 (platexrelease)
                          \color@hbox
711 (platexrelease)
                             \normalcolor
712 (platexrelease)
                             \hb@xt@\textwidth{\@thehead}%
713 (platexrelease)
                          \color@endbox
                        }%
                                                      %% 22 Feb 87
714 (platexrelease)
715 (platexrelease)
                        \dp\@tempboxa \z@
716 \langle platexrelease \rangle
                        \box\@tempboxa
                        \vskip \headsep
717 (platexrelease)
718 (platexrelease)
                        \box\@outputbox
719 \langle platexrelease \rangle
                        \baselineskip \footskip
720 (platexrelease)
                        \color@hbox
721 (platexrelease)
                          \normalcolor
722 (platexrelease)
                          \hb@xt@\textwidth{\@thefoot}%
723 (platexrelease)
                        \color@endbox
724 (platexrelease)
                     }%
725 (platexrelease)
                   }%
726 (platexrelease)
                   \global\let\if@newlist\@@if@newlist
727 (platexrelease)
                   \global \@colht \textheight
728 (platexrelease)
                   \stepcounter{page}%
```

```
729 (platexrelease) \let\firstmark\botmark
730 (platexrelease)}
731 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
732 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \\ \(\cent{Qoutputpage} \)
733 (platexrelease)
                                       {ASCII Corporation original}%
734 (platexrelease)\def\@outputpage{%
735 (platexrelease)\begingroup % the \endgroup is put in by \aftergroup
736 (platexrelease)
                   \iftdir
737 (platexrelease)
                      \dimen\z@\textwidth \textwidth\textheight \textheight\dimen\z@
738 (platexrelease)
                   \fi
739 (platexrelease)
                   \let \protect \noexpand
740 (platexrelease)
                   \@resetactivechars
741 (platexrelease)
                   \global\let\@@if@newlist\if@newlist
742 (platexrelease)
                   \global\@newlistfalse
743 (platexrelease)
                   \@parboxrestore
744 (platexrelease)
                   \shipout\vbox{\yoko
745 (platexrelease)
                      \set@typeset@protect
746 (platexrelease)
                      \aftergroup\endgroup
747 \langle platexrelease \rangle
                      \aftergroup\set@typeset@protect
748 (platexrelease)
                       \if@specialpage
749 (platexrelease)
                         \global\@specialpagefalse\@nameuse{ps@\@specialstyle}%
                       \fi
750 (platexrelease)
751 (platexrelease)
                       \if@twoside
752 (platexrelease)
                         \ifodd\count\z@ \let\@thehead\@oddhead \let\@thefoot\@oddfoot
753 (platexrelease)
                             \iftdir\let\@themargin\evensidemargin
754 (platexrelease)
                             \else\let\@themargin\oddsidemargin\fi
755 (platexrelease)
                         \else \let\@thehead\@evenhead
756 (platexrelease)
                             \let\@thefoot\@evenfoot
757 (platexrelease)
                              \iftdir\let\@themargin\oddsidemargin
_{758} \; \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                              \else\let\@themargin\evensidemargin\fi
759 (platexrelease)
                       \fi\fi
760 (platexrelease)
                       \@@topmargin\topmargin
761 (platexrelease)
                       \iftombow
762 (platexrelease)
                          \@@paperwidth\paperwidth \advance\@@paperwidth 6mm\relax
763 (platexrelease)
                         \@@paperheight\paperheight \advance\@@paperheight 16mm\relax
764 (platexrelease)
                          \advance\@@topmargin 1in\relax \advance\@themargin 1in\relax
                       \fi
765 (platexrelease)
                       \reset@font
766 (platexrelease)
767 (platexrelease)
                       \normalsize
                       \normalsfcodes
768 (platexrelease)
769 (platexrelease)
                       \let\label\@gobble
770 (platexrelease)
                       \let\index\@gobble
771 (platexrelease)
                       \let\glossary\@gobble
772 (platexrelease)
                       \baselineskip\z@skip \lineskip\z@skip \lineskiplimit\z@
773 (platexrelease)
                      \@begindvi
774 (platexrelease)
                      \@outputtombow
775 (platexrelease)
                      \vskip \@@topmargin
776 (platexrelease)
                      \moveright\@themargin\vbox{%
777 (platexrelease)
                        \setbox\@tempboxa \vbox to\headheight{%
778 (platexrelease)
                           \vfil
```

```
779 (platexrelease)
                           \color@hbox
780 (platexrelease)
                              \normalcolor
781 (platexrelease)
                              \hb@xt@\textwidth{\@thehead}%
782 (platexrelease)
                           \color@endbox
                                                        %% 22 Feb 87
783 (platexrelease)
                         }%
784 (platexrelease)
                         785 (platexrelease)
                         \box\@tempboxa
786 \langle platexrelease \rangle
                         \vskip \headsep
787 (platexrelease)
                         \box\@outputbox
788 (platexrelease)
                         \baselineskip \footskip
789 (platexrelease)
                         \color@hbox
790 (platexrelease)
                            \normalcolor
791 (platexrelease)
                           \hb@xt@\textwidth{\@thefoot}%
792 (platexrelease)
                         \color@endbox
793 (platexrelease)
                      }%
794 (platexrelease)
                    }%
795 (platexrelease)
                    \global\let\if@newlist\@@if@newlist
796~\langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                    \global \@colht \textheight
797 \langle platexrelease \rangle
                    \stepcounter{page}%
798 (platexrelease)
                    \let\firstmark\botmark
799 (platexrelease)}
800 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
801 (*plcore)
```

\AtBeginDvi pLATEX の出力ルーチンの \@outputpage では、\shipout する vbox の中身に \yoko を指定しています。このため、\AtBeginDocument{\AtBeginDvi{}}というコード を書くと Incompatible direction list can't be unboxed. というエラーが出 てしまいます。

> そこで、コミュニティ版 pLAT_FX では「\shipout で \yoko が指定されている」こ とを根拠として

> > \@begindvibox は(空でない限り)常に横組でなければならない

と仮定します。この仮定に従い、\AtBeginDvi を再定義します。

```
802 (/plcore)
803 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2019/10/01}{\AtBeginDvi}
804 (platexrelease)
                                    {Make robust}%
805 (*plcore | platexrelease)
806 \DeclareRobustCommand \AtBeginDvi [1] {%
     \global \setbox \@begindvibox
807
       \vbox{\yoko \unvbox \@begindvibox #1}%
808
809 }
810   /plcore | platexrelease
812 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/07/01}{\AtBeginDvi}
813 (platexrelease)
                                    {Fix for incompatible direction}%
814 \(\rangle platexrelease \) \(\def \AtBeginDvi #1\{\%\)
815 (platexrelease) \global \setbox \@begindvibox
```

```
818 (platexrelease)\expandafter \let \csname AtBeginDvi \endcsname \@undefined
                                                                  820 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\AtBeginDvi}
                                                                  821 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                 {LaTeX2e original}%
                                                                  822 (platexrelease)\def \AtBeginDvi #1{%
                                                                  823 \; \langle {\tt platexrelease} \rangle \; \; \backslash {\tt global} \; \backslash {\tt global} \; \backslash {\tt global} \; \backslash {\tt global} \; \; \backslash {\tt global} \; 
                                                                  824 (platexrelease)
                                                                                                                                                  \vbox{\unvbox \@begindvibox #1}%
                                                                  825 (platexrelease)}
                                                                  826 \platexrelease\\expandafter \let \csname AtBeginDvi \endcsname \@undefined
                                                                  827 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                                                  828 (*plcore)
                                                                                              脚注マクロ
                                                                  8.7
                                                                  脚注を組み立てる部分のマクロを再定義します。主な修正点は、縦組モードでの動
                                                                  作の追加です。
                                                                            これらのマクロは、ltfloat.dtx で定義されていたものです。
                        \thempfn 本文で使われる脚注記号です。
                                                                           \Ofootnotemarkで縦横の判断をするようにしたため、削除。
                                                                  829 %\def\thempfn{%
                                                                  830 % \ifydir\thefootnote\else\hbox{\yoko\thefootnote}\fi}
\thempfootnote minipage 環境で使われる脚注記号です。
                                                                  831 %\def\thempfootnote{%
                                                                  832 % \ifydir\alph{mpfootnote}\else\hbox{\yoko\alph{mpfootnote}}\fi}
        \@makefnmark 脚注記号を作成するマクロです。
                                                                  833 (/plcore)
                                                                  834 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{2016/04/17\} \\ \@makefnmark\)
                                                                  835 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                 {Remove extra \xkanjiskip}%
                                                                  836 (*plcore | platexrelease)
                                                                  837 \renewcommand\@makefnmark{%
                                                                                      \else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\fi}
                                                                  840 (/plcore | platexrelease)
                                                                  841 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                                                  843 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                                 {ASCII Corporation original}%
                                                                  844 \(\rangle platexrelease \)\renewcommand \(\rangle makefnmark \)\\\\\\\
                                                                  845 (platexrelease) \ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
                                                                  846 \(\rightarrow\) \(\rightar
                                                                  847 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

\vbox{\yoko \unvbox \@begindvibox #1}%

816 (platexrelease)

817 (platexrelease)}

```
開き括弧類の直後に \footnotetext が続いた場合、\footnotetext の前での改行
\pltx@foot@penalty
                   は望ましくありません。このような場合に対処するために、\pltx@foot@penalty
                   というカウンタを用意しました。\footnotetextの最初で「直前のペナルティ値」
                   としてこのカウンタが初期化されます。\footnotemark, \footnote では使わない
                   ので0に設定しています。
                   848 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2016/09/03\} \{ pltx@foot@penalty \}
                   849 (platexrelease)
                                                    {Add new counter \pltx@foot@penalty}%
                   850 (*plcore | platexrelease)
                   851 \ifx\@undefined\pltx@foot@penalty \newcount\pltx@foot@penalty \fi
                   852 \pltx@foot@penalty\z@
                   853 (/plcore | platexrelease)
                   854 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                   855 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \pltx@foot@penalty \}
                   856 (platexrelease)
                                                    {Add new counter \pltx@foot@penalty}%
                   857 (platexrelease)\let\pltx@foot@penalty\@undefined
                   858 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                  また、合印の前の文字と合印の間は原則ベタ組です(但し、JIS X 4051 には例外有り)。
    \footnotemark
                  そのため、合印を出力する \footnotemark, \footnote の最初で \inhibitglue を
        \footnote
                   実行しておくことにします(\@makefnmarkの中に置いても効力がありません)。
                   859 \(\rho\) plincludeInRelease \(\{2016/09/03\) \(\fo\) tnote}
                   860 (platexrelease)
                                                    {Append \inhibitglue in \footnotemark}%
                   861 (*plcore | platexrelease)
                   862 \def\footnote{\inhibitglue
                           \@ifnextchar[\@xfootnote{\stepcounter\@mpfn
                   863
                           \protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
                   864
                           \@footnotemark\@footnotetext}}
                   866 \def\final {\mbox{\cinhibitglue}}
                         \@ifnextchar[\@xfootnotemark
                   868
                           {\stepcounter{footnote}%
                            \protected@xdef\@thefnmark{\thefootnote}%
                   869
                            \@footnotemark}}
                   870
                   871 (/plcore | platexrelease)
                   872 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                   873 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \\ footnote \}
                   874 (platexrelease)
                                                    {LaTeX2e original}%
                   876 (platexrelease)
                                      \protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
                   877 (platexrelease)
                                      \@footnotemark\@footnotetext}}
                   878 (platexrelease)\def\footnotemark{%
                   879 (platexrelease)
                                   \@ifnextchar[\@xfootnotemark
                   880 (platexrelease)
                                      {\stepcounter{footnote}%
                                       \protected@xdef\@thefnmark{\thefootnote}%
                   881 (platexrelease)
                   882 (platexrelease)
                                       \@footnotemark}}
```

File c: plcore.dtx Date: 2019/10/19 Version v1.3d

883 <platexrelease <pre>\plEndIncludeInRelease

```
\footnotetext \footnotetext の直前のペナルティ値を保持します。
               884 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{2016/09/03\} \{\footnotetext\}
               885 (platexrelease)
                                                 {Preserve penalty before \footnotetext}%
               886 (*plcore | platexrelease)
               887 \def\footnotetext{%
                    \ifhmode\pltx@foot@penalty\lastpenalty\unpenalty\fi%
                    \@ifnextchar [\@xfootnotenext
                       {\protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
                       \@footnotetext}}
               892 (/plcore | platexrelease)
               894 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \footnotetext \}
               895 (platexrelease)
                                                 {LaTeX2e original}%
               896 \(\rangle platexrelease \rangle \)\def\\footnotetext{\%
               897 (platexrelease)
                                   \@ifnextchar [\@xfootnotenext
               898 (platexrelease)
                                     {\protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
               899 (platexrelease)
                                  \@footnotetext}}
               900 <platexrelease \plEndIncludeInRelease
               インサートボックス \footins に脚注のテキストを入れます。コミュニティ版 pIATeX
\@footnotetext
               では\footnotetext, \footnote の直後で改行を可能にします。jsclasses ではこの
               変更に加え、脚注で\verbが使えるように再定義されます。
               901 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/09/08}{\@footnotetext}
               902 (platexrelease)
                                                 {Allow break after \footnote (more fix)}%
               903 (*plcore | platexrelease)
               904 \long\def\@footnotetext#1{%
                    906
                    \insert\footins{\@tempa%
                      \reset@font\footnotesize
               907
                      \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
               908
                      \splittopskip\footnotesep
               909
                      \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
               910
                      \hsize\columnwidth \@parboxrestore
               911
                      \protected@edef\@currentlabel{%
               912
               913
                         \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
                      }%
               914
               915
                      \color@begingroup
                        \@makefntext{%
               916
                          \rule\z@\footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%
```

 pT_{EX} では \insert の直後に和文文字が来た場合、そこでの改行は許されないという挙動になっています。このため、従来は脚注番号(合印)の直後の改行が抑制されていました。しかし、\hbox の直後に和文文字が来た場合は、そこでの改行は許されますから、最後に \null を追加します。また、\pltx@foot@penaltyの値が0 ではなかった場合、脚注の前にペナルティがあったということですから、復活させておきます。

```
\color@endgroup}\ifhmode\null\fi
918
                      \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
919
                             \penalty\pltx@foot@penalty
920
921
                             \pltx@foot@penalty\z@
                      \fi}
922
923 \langle /plcore \mid platexrelease \rangle
924 \langle platexrelease \rangle \plEndIncludeInRelease
925 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/09/03}{\@footnotetext}
926 (platexrelease)
                                                                                                          {Allow break after \footnote}%
927 (platexrelease)\long\def\@footnotetext#1{%
928 \langle platexrelease \rangle
                                                    \ifydir\def\@tempa{\yoko}\else\def\@tempa{\tate}\fi
929 (platexrelease)
                                                    \insert\footins{\@tempa%
930 (platexrelease)
                                                            \reset@font\footnotesize
931 (platexrelease)
                                                            \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
932 (platexrelease)
                                                            \splittopskip\footnotesep
                                                            \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
933 (platexrelease)
934 (platexrelease)
                                                            \hsize\columnwidth \@parboxrestore
935 (platexrelease)
                                                           \protected@edef\@currentlabel{%
936 (platexrelease)
                                                                     \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
937 (platexrelease)
938 (platexrelease)
                                                           \color@begingroup
939 (platexrelease)
                                                                  \@makefntext{%
940 (platexrelease)
                                                                        \rule\z@\footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%
941 (platexrelease)
                                                           \color@endgroup}\null
942 (platexrelease)
                                                           \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
943 (platexrelease)
                                                                  \penalty\pltx@foot@penalty
944 (platexrelease)
                                                                  \pltx@foot@penalty\z@
945 (platexrelease)
                                                           \fi}
946 \langle platexrelease \rangle \rangle 1 EndIncludeInRelease
947 \(\rangle place \) \(place \)
948 (platexrelease)
                                                                                                          {ASCII Corporation original}%
949 \(\rangle\) \(
950 (platexrelease)
                                                    \ifydir\def\@tempa{\yoko}\else\def\@tempa{\tate}\fi
951 (platexrelease)
                                                     \insert\footins{\@tempa%
952 (platexrelease)
                                                            \reset@font\footnotesize
953 (platexrelease)
                                                            \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
954 (platexrelease)
                                                            \splittopskip\footnotesep
                                                            \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
955 (platexrelease)
956 (platexrelease)
                                                           \hsize\columnwidth \@parboxrestore
957 (platexrelease)
                                                           \protected@edef\@currentlabel{%
958 (platexrelease)
                                                                     \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
959 (platexrelease)
960 (platexrelease)
                                                           \color@begingroup
961 (platexrelease)
                                                                  \@makefntext{%
                                                                        \rule\z@\footnotesep\ignorespaces#1\@finalstrut\strutbox}%
962 (platexrelease)
963 (platexrelease)
                                                           \color@endgroup}}
964 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
```

965 (*plcore)

```
| Voice を出力します。 | 966 | Voice | 966 | Voice | 966 | Voice | 966 | Voice | 967 | Voice | 968 | Voice | 968 | Voice | 969 | Voi
```

970 \ifhmode\spacefactor\@x@sf\fi\relax}

8.8 相互参照

\@setref \ref コマンドや \pageref コマンドで参照したとき、これらのコマンドによって 出力された番号と続く 2 バイト文字との間に \xkanjiskip が入りません。これは、 \null が \hbox{}と定義されているためです。そこで \null を取り除きます。この コマンドは、ltxref.dtx で定義されているものです。

しかし、単に \null を \relax に置き換えるだけでは、\section のような「動く引数」で \ref などを使った場合に、目次で後ろの空白が消えてしまいます。そこで、\relax のあとに{}を追加しました。従来も \protect\ref のように使えば問題ありませんでしたが、IATEX では展開されても問題が起きない robust な実装になっていますので、これに従います。

さらに、例えば "see Appendix A." のような記述が文末にあり、かつ "A"を相互参照で取得した場合のスペースファクターを補正するため、\spacefactor\@m{}に修正しました。これで、"A." の後のスペースが文末として扱われます。「IFTEX 2ε マクロ&クラス プログラミング実践解説」のコードを参考にしましたが、数式モード内でもエラーにならないように改良しています。

```
971 (/plcore)
972 \(\rangle plane = \plinclude InRelease \{ 2017/10/28 \} \\ \Qsetref \}
                                     {Space factor after \ref}%
973 (platexrelease)
974 (*plcore | platexrelease)
975 \def\@setref#1#2#3{%
     \int x#1\relax
976
977
        \protect\G@refundefinedtrue
        \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
        \@latex@warning{Reference '#3' on page \thepage \space
                   undefined}%
980
981
982
        \expandafter#2#1\protect\@setref@{}% change \null to \protect\@setref@{}
983
     \fi}
984 \def\@setref@{\ifhmode\spacefactor\@m\fi}
985 (/plcore | platexrelease)
986 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
987 ⟨platexrelease⟩\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\@setref}
                                      {Spacing after \ref in moving arguments}%
988 (platexrelease)
989 \platexrelease \def \@setref #1#2#3{%
990 (platexrelease) \ifx#1\relax
991 (platexrelease)
                     \protect\G@refundefinedtrue
```

```
992 (platexrelease)
                                                                 \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
  993 (platexrelease)
                                                                 \@latex@warning{Reference '#3' on page \thepage \space
  994 (platexrelease)
                                                                                                   undefined}%
  995 (platexrelease)
                                                          \else
                                                                  \expandafter#2#1\relax{}% change \null to \relax{}
  996 (platexrelease)
  997 (platexrelease)
                                                          fi
  998 (platexrelease)\let\@setref@\@undefined
  999 \plEndIncludeInRelease
1000 \langle platexrelease \rangle \plincludeInRelease \{0000/00/00\} \{\colored \plane \pla
1001 (platexrelease)
                                                                                                                    {ASCII Corporation original}%
1002 (platexrelease)\def\@setref#1#2#3{%
1003 (platexrelease)
                                                          \int x#1\relax
1004 (platexrelease)
                                                                  \protect\G@refundefinedtrue
1005 (platexrelease)
                                                                  \nfss@text{\reset@font\bfseries ??}%
1006 (platexrelease)
                                                                  \@latex@warning{Reference '#3' on page \thepage \space
1007 (platexrelease)
                                                                                                   undefined}%
1008 (platexrelease)
                                                           \else
                                                                 \expandafter#2#1\relax% change \null to \relax
1009 (platexrelease)
1010 (platexrelease)
                                                          fi
1011 (platexrelease)\let\@setref@\@undefined
1012 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1013 (*plcore)
```

8.9 疑似タイプ入力

\verb IfTeX の \verb コマンドでは、数式モードでないときは、\leavevmode で水平モードに入ったあと、\null を出力しています。マクロ \null は \hbox{}として定義されていますので、ここには和欧文間スペース(\xkanjiskip)が入りません。

しかし、単に \null を除いてしまうと、今度は \verb+ abc+のように \verb の 冒頭に半角空白がある場合にこれが消えてしまいます (TeX.SX 170245)。そこで、 pIATpX では \null の代わりに

- 1. 和欧文間スペースの挿入処理は透過する
- 2. 行分割時に消える (discardable) ノードではない

の両条件を満たすノードを挿入します。ここでは \vadjust{}としました。このマクロは、ltmiscen.dtx で定義されています。

```
1014 \(/plcore\)
1015 \( platexrelease\) \( plIncludeInRelease{2017/10/28} \) \( \text{Verb} \)
1016 \( \text{platexrelease} \) \( \text{Preserve beginning space characters} \) \( \text{1017} \) \( \text{*plcore} \) \( platexrelease \)
1018 \( \text{if@compatibility} \) \( else \)
1019 \( \text{def} \) \( \text{verb} \) \( \text{relax} \) \( ifmode \) \( \text{bgroup} \)
1021 \( \text{verb@eol@error} \ let \) \( \text{do} \) \( \text{cmakeother} \) \( \text{dospecials} \)
1022 \( \text{verbatim@font} \) \( \text{onoligs} \)
```

```
1023
                        \language\l@nohyphenation
1024
                        \@ifstar\@sverb\@verb}
1025 \fi
1026 (/plcore | platexrelease)
1027 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1028 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\verb}
1029 (platexrelease)
                                                                                                          {Disable hyphenation in verb}%
1030 (platexrelease)\if@compatibility\else
1031 \partition{The lambda limits of the lambda l
1032 (platexrelease) \bgroup
1033 (platexrelease)
                                                            \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
1034 (platexrelease)
                                                             \verbatim@font\@noligs
1035 (platexrelease)
                                                            \language\l@nohyphenation
1036 (platexrelease)
                                                             \@ifstar\@sverb\@verb}
1037 (platexrelease)\fi
1038 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1039 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\verb}
1040 (platexrelease)
                                                                                                          {ASCII Corporation original}%
1041 (platexrelease)\if@compatibility\else
1042 \(\relax\)ifmmode\\\box\else\\leavevmode\\fi
1043 \langle platexrelease \rangle \setminus bgroup
1044 \langle platexrelease \rangle
                                                             \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
1045 (platexrelease)
                                                            \verbatim@font\@noligs
1046 (platexrelease)
                                                            \@ifstar\@sverb\@verb}
1047 (platexrelease)\fi
1048 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1049 (*plcore)
```

8.10 tabbing 環境

\@startline tabbing 環境の行で、中身が始め括弧類などで始まる場合、最初の項目だけ JFM グルーが消えない現象に対処します。

```
1050 (/plcore)
1051 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\@startline}
1052 (platexrelease)
                                      {Inhibit JFM glue at the beginning}%
1053 (*plcore | platexrelease)
1054 \gdef\@startline{%
         \ifnum \@nxttabmar >\@hightab
1055
            \@badtab
1056
1057
            \global\@nxttabmar \@hightab
1058
         \global\@curtabmar \@nxttabmar
1059
         \global\@curtab \@curtabmar
1060
1061
         \global\setbox\@curline \hbox {}%
         \@startfield
1062
         \strut\inhibitglue}
1063
```

```
1064 (/plcore | platexrelease)
1065 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1066 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@startline}
1067 (platexrelease)
                                     {LaTeX2e original}%
1069 (platexrelease)
                      \ifnum \@nxttabmar >\@hightab
1070 (platexrelease)
                        \@badtab
1071 (platexrelease)
                        \global\@nxttabmar \@hightab
1072 (platexrelease)
                      \fi
1073 (platexrelease)
                      \global\@curtabmar \@nxttabmar
1074 (platexrelease)
                      \global\@curtab \@curtabmar
1075 (platexrelease)
                      \global\setbox\@curline \hbox {}%
                      \@startfield
1076 (platexrelease)
1077 (platexrelease)
                      \strut}
1078 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1079 (*plcore)
```

\@stopfield 相互参照や疑似タイプ入力では、和欧文間スペースが入らないので、\null を取り 除きましたが、tabbing 環境では、逆に \null がないため、和欧文間スペースが 入ってしまうので、それを追加します。lttab.dtx で定義されているものです。

1080 \gdef\@stopfield{\null\color@endgroup\egroup}

8.11 用語集の出力

\printglossary \printglossary コマンドは、単に拡張子が gls のファイルを読み込むだけです。 このファイルの生成には、mendex などを用います。

1081 \newcommand\printglossary{\@input@{\jobname.gls}}

8.12 時分を示すカウンタ

 $T_{\rm E}X$ には、年月日を示す数値を保持しているカウンタとして、それぞれ \year, \month, \day がプリミティブとして存在します。しかし、時分については、深夜の零時からの経過時間を示す \time カウンタしか存在していません。そこで、pIFT $_{\rm E}X$ 2_{ε} では、時分を示すためのカウンタ \hour と \minute を作成しています。

\hour 何時か(\hour)を得るには、\timeを60で割った商をそのまま用います。何分か\minute (\minute)は、\hourに60を掛けた値を\timeから引いて算出します。ここではカウンタを宣言するだけです。実際の計算は、クラスやパッケージの中で行なっています。

1082 \newcount\hour 1083 \newcount\minute

8.13 tabular 環境

LATFX カーネル (lttab.dtx) の命令群を修正します。

\@tabclassz

IATEX カーネルは、アラインメント文字&の周囲に半角空白を書いたかどうかにかかわらず余分なスペースを出力しないように、\ignorespaces と \unskip を発行しています (lttab.dtx)。しかし、これだけでは JFM グルーが消えずに残ってしまうので、pIATEX では追加の対処を入れます。

まず、1, c, r の場合です。2017/09/26 の修正では「セルの要素を \mbox に入れ、その最初で \inhibitglue を発行する」という方針でしたが、2018/03/09 の修正では「\removejfmglue マクロが定義されている場合は最初に \inhibitglue を発行し、最後に \removejfmglue を発行する」という方針にします。こうすれば少々 IATeX との互換性が向上します。

```
1084 (/plcore)
1085 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2018/03/09}{\@tabclassz}
1086 (platexrelease)
                                    {Inhibit JFM glue in tabular cells (better)}%
1087 (*plcore | platexrelease)
1088 \ifx\removejfmglue\@undefined
1089 \ensuremath{\tt lossz{\%}}
1090
      \ifcase\@lastchclass
        \@acolampacol
1091
1092
      \or
1093
        \@ampacol
1094
      \or
1095
      \or
1096
1097
        \@addamp
1098
1099
        \@acolampacol
1100
     \or
        \@firstampfalse\@acol
1101
1102
      \edef\@preamble{%
1103
        \@preamble{%
1104
          \ifcase\@chnum
1105
1106
            \hfil\mbox{\inhibitglue\ignorespaces\@sharp\unskip}\hfil % c
1107
            1108
1109
            \label{line-parameter} $$  \hfil\hskip1sp\mbox{\linhibitglue\ignorespaces}@sharp\unskip}% \% r
1110
          fi}}
1111
1112 \else
1113 \def\@tabclassz{%
      \ifcase\@lastchclass
1114
        \@acolampacol
1115
1116
1117
        \@ampacol
```

```
1118
                 \or
1119
                 \or
1120
                 \or
1121
                       \@addamp
1122
                 \or
1123
                       \@acolampacol
1124
1125
                       \@firstampfalse\@acol
1126
                 \edef\@preamble{%
1127
                       \@preamble{%
1128
                             \ifcase\@chnum
1129
                                   \hfil\hskip1sp\inhibitglue
1130
                                   \ignorespaces\@sharp\unskip\removejfmglue\hfil % c
1131
1132
                                   \hskip1sp\inhibitglue
1133
                                  \ignorespaces\@sharp\unskip\removejfmglue\hfil % 1
1134
1135
                             \or
                                   \hfil\hskip1sp\inhibitglue
1136
                                  \ignorespaces\@sharp\unskip\removejfmglue % r
1137
1138
                             fi}}
1139 \fi
1140 (/plcore | platexrelease)
1141 \plEndIncludeInRelease
1142 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/09/26}{\@tabclassz}
                                                                                                    {Inhibit JFM glue in tabular cells}% = {\rm Inhibit} \ {\rm JFM} \ {\rm glue} \ {\rm Inhibit} \ {\rm Inhibit
1143 (platexrelease)
1144 (platexrelease)\def\@tabclassz{%
1145 (platexrelease)
                                                  \ifcase\@lastchclass
1146 (platexrelease)
                                                        \@acolampacol
1147 (platexrelease)
                                                  \or
1148 (platexrelease)
                                                         \@ampacol
1149 (platexrelease)
                                                   \or
1150 (platexrelease)
                                                   \or
1151 (platexrelease)
                                                   \or
1152 (platexrelease)
                                                         \@addamp
1153 (platexrelease)
1154 (platexrelease)
                                                        \@acolampacol
1155 (platexrelease)
                                                  \or
1156 (platexrelease)
                                                        \@firstampfalse\@acol
1157 (platexrelease)
                                                   \fi
1158 (platexrelease)
                                                   \edef\@preamble{%
1159 (platexrelease)
                                                         \@preamble{%
                                                               \ifcase\@chnum
1160 (platexrelease)
1161 (platexrelease)
                                                                    \hfil\mbox{\inhibitglue
1162 (platexrelease)
                                                                          \ignorespaces\@sharp\unskip}\hfil % c
1163 (platexrelease)
1164 (platexrelease)
                                                                     \hskip1sp\mbox{\inhibitglue
                                                                          \ignorespaces\@sharp\unskip}\hfil % 1
1165 (platexrelease)
1166 (platexrelease)
                                                              \or
1167 (platexrelease)
```

```
1168 (platexrelease)
                               \ignorespaces\@sharp\unskip}% % r
1169 (platexrelease)
                          fi}}
1170 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1171 \ \langle platexrelease \rangle \ | plincludeInRelease \{ 2017/07/29 \} \{ \ dtabclassz \} 
1172 (platexrelease)
                                         {Inhibit JFM glue in tabular cells (wrong)}%
1173 (platexrelease)\def\@tabclassz{%
1174 (platexrelease)
                     \ifcase\@lastchclass
1175 (platexrelease)
                        \@acolampacol
1176 (platexrelease)
                     \or
1177 (platexrelease)
                        \@ampacol
1178 (platexrelease)
                     \or
1179 (platexrelease)
                     \or
1180 (platexrelease)
1181 (platexrelease)
                        \@addamp
1182 (platexrelease)
1183 (platexrelease)
                       \@acolampacol
1184 (platexrelease)
                     \or
1185 (platexrelease)
                       \@firstampfalse\@acol
1186 (platexrelease)
1187 (platexrelease)
                     \edef\@preamble{%
1188 (platexrelease)
                       \@preamble{%
1189 (platexrelease)
                          \ifcase\@chnum
1190 (platexrelease)
                            \hfil\inhibitglue
1191 (platexrelease)
                            \ignorespaces\@sharp\unskip\unskip\hfil % c
1192 (platexrelease)
                            \hship1sp\inhibitglue
1193 (platexrelease)
                            \ignorespaces\@sharp\unskip\unskip\hfil % 1
1194 (platexrelease)
1195 (platexrelease)
1196 (platexrelease)
                            \hfil\hskip1sp\inhibitglue
1197 (platexrelease)
                            \ignorespaces\@sharp\unskip\unskip % r
1198 (platexrelease)
                          \fi}}}
1199 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1200 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\@tabclassz}
1201 (platexrelease)
                                         {LaTeX2e original}%
1202 (platexrelease)\def\@tabclassz{%
1203 (platexrelease)
                     \ifcase\@lastchclass
1204 (platexrelease)
                       \@acolampacol
1205 (platexrelease)
                     \or
1206 (platexrelease)
                       \@ampacol
1207 (platexrelease)
                     \or
1208 (platexrelease)
                     \or
1209 (platexrelease)
                     \or
1210 (platexrelease)
                       \@addamp
1211 (platexrelease)
                     \or
1212 (platexrelease)
                        \@acolampacol
1213 (platexrelease)
1214 (platexrelease)
                       \@firstampfalse\@acol
1215 (platexrelease)
                     \edef\@preamble{%
1216 (platexrelease)
1217 (platexrelease)
                        \@preamble{%
```

```
1218 (platexrelease)
                                                                                                                                                     \ifcase\@chnum
                                                                             1219 (platexrelease)
                                                                                                                                                            \hfil\ignorespaces\@sharp\unskip\hfil
                                                                             1220 (platexrelease)
                                                                             1221 (platexrelease)
                                                                                                                                                            \hskip1sp\ignorespaces\@sharp\unskip\hfil
                                                                             1222 (platexrelease)
                                                                                                                                                     \or
                                                                             1223 (platexrelease)
                                                                                                                                                            \hfil\hskip1sp\ignorespaces\@sharp\unskip
                                                                             1224 (platexrelease)
                                                                                                                                                     \fi}}}
                                                                             1225~ \langle {\tt platexrelease} \rangle {\tt \plEndIncludeInRelease}
                                              \@classv 次に、pの場合です。2017/07/29の修正では \mbox{}\inhibitglue と \unskip を
                                                                               追加していましたが、以下のように p 指定のセルの最初で \par として改段落を発
                                                                               行すると、一行空いてしまうという症状が起きてしまいます (platex/#63)。
                                                                                   \begin{tabular}{p{5cm}}
                                                                                   A\\
                                                                                   \relax\par
                                                                                   \end{tabular}
                                                                                ここでは、2017/07/29 の修正から方針を改め、\everypar 内に \inhibitglue を
                                                                               仕込むという方針で対応します。
                                                                             1226 \ \langle platexrelease \rangle \rangle llncludeInRelease \{ 2018/03/09 \} \{ \ \ classv \}
                                                                             1227 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                {Inhibit JFM glue in tabular cells (better)}%
                                                                             1228 (*plcore | platexrelease)
                                                                            1229 \ \texttt{\Classv{\Caddtopreamble{\Cstartpbox{\Cnextchar}\pltx@next@inhibitglue\ignorespaces}} \\
                                                                             1230 \@sharp\unskip\@endpbox}}
                                                                            1231 (/plcore | platexrelease)
                                                                             1232 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plEndIncludeInRelease \)
                                                                             1233 \; \langle \texttt{platexrelease} \rangle \texttt{plIncludeInRelease} \{2017/07/29\} \{\texttt{\Qclassv}\}
                                                                                                                                                                                                {Inhibit JFM glue in tabular cells}%
                                                                             1235 \langle platexrelease \rangle (add to preamble \{\c tartpbox {\c tartpbox {\
                                                                             1236 (platexrelease)\@sharp\unskip\@endpbox}}
                                                                             1237 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plEndIncludeInRelease \)
                                                                             1239 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                              {LaTeX2e original}%
                                                                             1240 \ \langle platexrelease \rangle \ \langle classv{\dadtopreamble{\dstartpbox{\dnextchar}\ignorespaces} \rangle \ \langle classv{\dadtopreamble{\dstartpbox{\dnextchar}\ignorespaces} \rangle \ \langle classv{\dadtopreamble{\dastartpbox{\dnextchar}\ignorespaces} \rangle \ \langle classv{\dastartpbox{\dnextchar}\ignorespaces} \rangle 
                                                                             1241 (platexrelease)\@sharp\@endpbox}}
                                                                             1242 \langle platexrelease \rangle \backslash plEndIncludeInRelease
\pltx@next@inhibitglue 水平モードであればそのまま \inhibitglue を発行し、それ以外であれば \everypar
                                                                               内に \inhibitglue を仕込みます。
                                                                             1243 \(\rangle\)plincludeInRelease{2018/03/09}{\pltx@next@inhibitglue}
                                                                             1244 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                {Add \pltx@next@inhibitglue}%
                                                                             1245 (*plcore | platexrelease)
                                                                             1246 \verb|\protected\def\pltx@next@inhibitglue{%}|
                                                                            1247 \ifhmode\inhibitglue\else
                                                                            1248
                                                                                             \edef\@tempa{\everypar{%
                                                                                                       \everypar{\unexpanded\expandafter{\the\everypar}}%
                                                                             1249
```

```
1250 \unexpanded\expandafter{\the\everypar}\inhibitglue}}%

1251 \@tempa\fi}

1252 \langle/plcore | platexrelease\\
1253 \langle/plEndIncludeInRelease

1254 \langle/platexrelease\\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\pltx@next@inhibitglue}}

1255 \langle/platexrelease\\ \langle \langle/pltx@next@inhibitglue\\\
1256 \langle/platexrelease\\langle/pltx@next@inhibitglue\\\\
1257 \langle/platexrelease\\plEndIncludeInRelease
```

9 2013年以降の新しい pT_EX 対応

 \LaTeX 2ε のカーネルのコードをそのまま使うと、2013 年以降の pT_{EX} では \xkanjiskip 由来のアキが前後に入ってしまうことがありました。そうした命令にパッチをあてます。なお、既に出てきた \footnote の内部命令(\@makefnmark)には同様のパッチがもうあててあります。

```
\@tabular tabular 環境の内部命令です。もとは 1ttab.dtx で定義されています。
                                                      1258 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\@tabular}
                                                      1259 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                     {Remove extra \xkanjiskip}%
                                                      1260 (*plcore | platexrelease)
                                                      1261 \def\@tabular{\leavevmode \null\hbox \bgroup $\let\@acol\@tabacol
                                                                                   \let\@classz\@tabclassz
                                                                                   \let\@classiv\@tabclassiv \let\\\@tabularcr\@tabarray}
                                                      1263
                                                      1264 \langle /plcore \mid platexrelease \rangle
                                                      1265 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                                      1266 \(\rangle plane = \rangle plane = \rangle
                                                      1267 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                     {LaTeX2e original}%
                                                      1268 \(\rangle platexrelease \) \(\def \) \(\d
                                                      1269 (platexrelease)
                                                                                                                                \let\@classz\@tabclassz
                                                      1270 (platexrelease)
                                                                                                                                  \let\@classiv\@tabclassiv \let\\\@tabularcr\@tabarray}
                                                      1271 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
     \endtabular
\endtabular* 1272 \( \text{platexrelease} \plIncludeInRelease{2016/04/17}{\endtabular} \)
                                                     1273 \langle platexrelease \rangle
                                                                                                                                                                                                     {Remove extra \xkanjiskip}%
                                                     1274 (*plcore | platexrelease)
                                                     1275 \def\endtabular{\crcr\egroup\egroup $\egroup\null}
                                                     1276 \expandafter \let \csname endtabular*\endcsname = \endtabular
                                                      1277 (/plcore | platexrelease)
                                                      1278 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
                                                      1279 \(\rangle\)plincludeInRelease\(\rangle\)000/00\(\rangle\)\(\rangle\) and tabular\(\rangle\)
                                                      1280 (platexrelease)
                                                                                                                                                                                                     {LaTeX2e original}%
                                                      1281 (platexrelease)\def\endtabular{\crcr\egroup\egroup $\egroup}
                                                      1282 \( platexrelease \)\\ \expandafter \let \\ \csname \) endtabular*\\ endcsname = \\ \expandafter \\ \let \\ \csname \)
                                                      1283 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

```
\@iiiparbox \parbox の内部命令です。もとは ltboxes.dtx で定義されています。
                            1284 \(\rangle planter | \rangle planter | \rang
                            1285 (platexrelease)
                                                                                                             {Remove extra \xkanjiskip}%
                            1286 \langle *plcore | platexrelease \rangle
                            1287 \let\@parboxto\@empty
                            1288 \long\def\@iiiparbox#1#2[#3]#4#5{%
                                         \leavevmode
                            1290
                                          \@pboxswfalse
                            1291
                                          \setlength\@tempdima{#4}%
                            1292
                                          \@begin@tempboxa\vbox{\hsize\@tempdima\@parboxrestore#5\@@par}%
                                              \int x=2\varepsilon
                            1293
                                                   \setlength\@tempdimb{#2}%
                            1294
                                                   \edef\@parboxto{to\the\@tempdimb}%
                            1295
                                              \fi
                            1296
                                              \if#1b\vbox
                            1297
                            1298
                                              \else\if #1t\vtop
                                              \else\ifmmode\vcenter
                            1299
                                              \else\@pboxswtrue\null$\vcenter% !!!
                            1300
                                              \fi\fi\fi
                            1301
                            1302
                                              \@parboxto{\let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
                            1303
                                                     \csname bm@#3\endcsname}%
                            1304
                                              \if@pboxsw \m@th$\null\fi% !!!
                                         \@end@tempboxa}
                            1305
                            1306 \langle \text{plcore} \mid \text{platexrelease} \rangle
                            1307 \ \langle {\tt platexrelease} \rangle \backslash {\tt plEndIncludeInRelease}
                            1309 (platexrelease)
                                                                                                             {LaTeX2e original}%
                            1310 (platexrelease)\let\@parboxto\@empty
                            1311 (platexrelease)\long\def\@iiiparbox#1#2[#3]#4#5{%
                            1312 (platexrelease)
                                                                     \leavevmode
                            1313 (platexrelease)
                                                                     \@pboxswfalse
                            1314 (platexrelease)
                                                                     \setlength\@tempdima{#4}%
                            1315 \ \langle \mathsf{platexrelease} \rangle
                                                                     \@begin@tempboxa\vbox{\hsize\@tempdima\@parboxrestore#5\@@par}%
                            1316 (platexrelease)
                                                                          \int x = 2 \le x 
                            1317 \langle platexrelease \rangle
                                                                               \setlength\@tempdimb{#2}%
                            1318 (platexrelease)
                                                                               \verb|\edef|@parboxto{to}the|@tempdimb|%|
                            1319 (platexrelease)
                            1320 (platexrelease)
                                                                          \if#1b\vbox
                            1321 (platexrelease)
                                                                          \else\if #1t\vtop
                            1322 (platexrelease)
                                                                          \else\ifmmode\vcenter
                            1323 (platexrelease)
                                                                          \else\@pboxswtrue $\vcenter
                            1324 (platexrelease)
                                                                          \fi\fi\fi
                            1325 (platexrelease)
                                                                          \@parboxto{\let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
                            1326 (platexrelease)
                                                                                 \csname bm@#3\endcsname}%
                            1327 \langle platexrelease \rangle
                                                                          \if@pboxsw \m@th$\fi
                            1328 (platexrelease)
                                                                    \@end@tempboxa}
                            1329 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

\underline 下線を引く命令です。もとは ltboxes.dtx で定義されています。

```
1331 (platexrelease)
                                     {Make robust}%
1332 (*plcore | platexrelease)
1333 \DeclareRobustCommand\underline[1]{%
1334
      \relax
1335
      \ifmmode\@@underline{#1}%
      \else \leavevmode\null\\@@underline{\hbox{#1}}\m@th$\null\relax\fi}
1336
1337  /plcore | platexrelease
1338 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1339 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\underline}
1340 (platexrelease)
                                     {Remove extra \xkanjiskip}%
1341 \(\rangle platexrelease \)\def\underline#1{%
1342 (platexrelease)
                   \relax
1343 (platexrelease)
                   \ifmmode\@@underline{#1}%
1344 (platexrelease)
                   \else \leavevmode\null\\@@underline{\hbox{#1}}\m@th\\null\relax\fi}
1345 (platexrelease)\expandafter \let \csname underline \endcsname \@undefined
1346 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1347 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\underline}
1348 (platexrelease)
                                     {LaTeX2e original}%
1349 \(\rangle platexrelease \) \(\def\underline #1 \){\(\hat{\mathcal{n}}}
1350 (platexrelease)
                   \relax
                  \ifmmode\@@underline{#1}%
1351 (platexrelease)
1352 (platexrelease) \else $\@@underline{\hbox{#1}}\m@th$\relax\fi}
1353 (platexrelease)\expandafter \let \csname underline \endcsname \@undefined
1354 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

10 e-pT_FX での FAM256 パッチの利用

```
\e@alloc@chardef 	ext{LAT}_{FX} 	ext{2}_{arepsilon} 	ext{2015}/01/01 以降、拡張レジスタがあれば利用するようになっていますの
   \eQallocQtop で、e-pTFX の拡張レジスタを利用できるように設定します。
               1355 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2019/10/01}%
                1356 (platexrelease)
                                               {\e@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
               1357 (*plcore | platexrelease)
                1358 \ifx\widowpenalties\@undefined
                オリジナルの TeX の場合 (拡張なしのアスキー pTeX の場合)。
                       \mathchardef\e@alloc@top=255
                1359
                1360
                       \let\e@alloc@chardef\chardef
                1361 \else
               e-T<sub>F</sub>X 拡張で 2^{15} 個のレジスタが利用できます。
                       \mathchardef\e@alloc@top=32767
                       \let\e@alloc@chardef\mathchardef
                1364
                1365
                     \else
                {
m FAM256} パッチが適用された e-pTeX の場合は、2^{16} 個のレジスタが利用できます。
                1366
                       \omathchardef\e@alloc@top=65535
```

```
\let\e@alloc@chardef\omathchardef
1367
      \fi
1368
1369 \fi
1370 (/plcore | platexrelease)
1371 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
1372 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2018/03/09}%
1373 (platexrelease)
                                       {\e@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
1375 (platexrelease)
                   \ifx\widowpenalties\@undefined
1376 (platexrelease)
                      \mathchardef\e@alloc@top=255
1377 (platexrelease)
                      \let\e@alloc@chardef\chardef
1378 (platexrelease)
                   \else
1379 (platexrelease)
                      \mathchardef\e@alloc@top=32767
1380 (platexrelease)
                      \let\e@alloc@chardef\mathchardef
                  \fi
1381 (platexrelease)
1382 \langle platexrelease \rangle \backslash else
1383 (platexrelease)
                      \omathchardef\e@alloc@top=65535
1384 (platexrelease)
                      \let\e@alloc@chardef\omathchardef
1385 (platexrelease)\fi
1386 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1387 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/11/29}%
1388 (platexrelease)
                                       {\e@alloc@chardef}{Extended Allocation (FAM256)}%
1389 (platexrelease)\ifx\omathchar\@undefined
1390 (platexrelease)
                   \ifx\widowpenalties\@undefined
1391 (platexrelease)
                      \mathchardef\e@alloc@top=255
1392 (platexrelease)
                      \let\e@alloc@chardef\chardef
1393 (platexrelease)
                    \else
1394 (platexrelease)
                      \mathchardef\e@alloc@top=32767
1395 (platexrelease)
                      \let\e@alloc@chardef\mathchardef
1396 (platexrelease)
                   \fi
1397 (platexrelease)\else
1398 (platexrelease)
                    \ifx\enablecjktoken\@undefined % pTeX
1399 (platexrelease)
                      \omathchardef\e@alloc@top=65535
1400 (platexrelease)
                      \let\e@alloc@chardef\omathchardef
1401 (platexrelease)
                    \else
                                                      % upTeX
1402 (platexrelease)
                      \chardef\e@alloc@top=65535
1403 \langle platexrelease \rangle
                      \let\e@alloc@chardef\chardef
1404 (platexrelease)
                   \fi
1405 (platexrelease)\fi
1406 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
1407 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2015/01/01}%
1408 (platexrelease)
                                       {\e@alloc@chardef}{LaTeX2e original}%
1409 (platexrelease)\ifx\widowpenalties\@undefined
1410 (platexrelease) \mathchardef\e@alloc@top=255
1411 (platexrelease) \let\e@alloc@chardef\chardef
1412 (platexrelease)\else
1413 (platexrelease) \mathchardef\e@alloc@top=32767
1414 (platexrelease) \let\e@alloc@chardef\mathchardef
1415 (platexrelease)\fi
```

```
1416 \(\rangle platexrelease \)\(\rangle plantle platexrelease \)
                   1417 \(\rangle platexrelease \rangle \rangle plinclude InRelease \{ 0000/00/00 \} \%
                   1418 (platexrelease)
                                                         {\e@alloc@chardef}{LaTeX2e original}%
                   1419 (platexrelease)\let\e@alloc@top\@undefined
                   1420 \(\rangle platexrelease \)\let\e@alloc@chardef\@undefined
                   1421 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease
    \float@count \newcount や\newdimen で使われます。
                   1422 (*plcore | platexrelease)
                   1423 \let\float@count\e@alloc@top
                   1424 (/plcore | platexrelease)
                  2015/01/01 以降の IATFX 2<sub>E</sub> カーネルは、XeTFX と LuaTFX に対して数式 fam の
\e@mathgroup@top
                    上限を 16 から 256 に増やしています (\Umathcode で判定)。FAM256 パッチが適
                    用された e-pT<sub>F</sub>X でも同様に上限を 16 から 256 に増やします。これで
                      ! LaTeX Error: Too many math alphabets used in version normal.
                    が出にくくなるはずです。
                   1425 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2016/11/29}%
                                                         {\e@mathgroup@top}{Extended Allocation (FAM256)}%
                   1426 (platexrelease)
                   1427 (*plcore | platexrelease)
                   1428 \ifx\omathchar\@undefined
                   1429 \chardef\e@mathgroup@top=16 % LaTeX2e kernel standard
                         \mathchardef\e@mathgroup@top=256 % for e-pTeX FAM256 patched
                   1432 \fi
                   1433 (/plcore | platexrelease)
                   1434 <platexrelease > \plEndIncludeInRelease
                   1435 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2015/01/01}%
                   1436 (platexrelease)
                                                         {\e@mathgroup@top}{LaTeX2e original}%
                   1437 (platexrelease)\chardef\e@mathgroup@top=16
                   1438 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
                   1439 (platexrelease)\plIncludeInRelease{0000/00/00}%
                   1440 (platexrelease)
                                                        {\e@mathgroup@top}{LaTeX2e original}%
                   1441 \(\rangle platexrelease \rangle \left\) \(\rangle \text{Qmathgroup@top\@undefined}\)
                   1442 (platexrelease)\plEndIncludeInRelease
```

IATEX 2_{ε} と pIATEX 2_{ε} の更新タイミングずれ対策 11

\1@nohyphenation 通常は Babel のハイフネーション定義により提供されるパラメータです。しかし、 IATEX 2_{ε} 2017-04-15 以降・pIATEX 2_{ε} 2017-04-08 以降では、\verb の途中でハイフ ネーションが起きないようにするために必須のものとなりました。 $ext{IPX} \, 2_{arepsilon}$ は特殊 な状況も想定して ltfinal.dtx で対策しているようですので、pIATFX 2ε も念のため ここで対策します (参考: latex2e svn r1405)。

```
1445 \newlanguage\l@nohyphenation
                           1446 \fi
                           1447 (/plcore)
                           IATeX 2_{\varepsilon} 2017-04-15 で導入されたパラメータですが、これに先立ち pIATeX 2_{\varepsilon} 2017-
\document@default@language
                            04-08 でも使用しています。verbatim 環境の途中で改ページが起きた場合にヘッダ
                            でハイフネーションが抑制されないように、\@outputpageで\languageをリセッ
                            トするときに使われます (参考: latex2e svn r1407)。
                           1448 (platexrelease)\plIncludeInRelease{2017/04/08}{\document@default@language}%
                           1449 (platexrelease)
                                                              {Save language for hyphenation}%
                           1450 (*plcore | platexrelease)
                           1451 \ifx\document@default@language \@undefined
                           1452 \let\document@default@language\m@ne
                           1453 \fi
                           1454 (/plcore | platexrelease)
                           1455 \langle platexrelease \rangle \rangle 1455 \langle platexrelease \rangle
```

1459 ⟨platexrelease⟩\plEndIncludeInRelease

 $1456 \ \langle platexrelease \rangle \\ \ plincludeInRelease \{0000/00/00\} \\ \ \ document@default@language\} \\ \%$

{Save language for hyphenation}%

 $1443 \langle *plcore \rangle$

1457 (platexrelease)

1444 \ifx\l@nohyphenation \@undefined

File d plext.dtx

12 概要

このパッケージは、以下の項目に関する機能を拡張するものです。

- 表組環境
- フロートとキャプションの出力位置
- 段落ボックス環境
- 作図環境
- 連数字、漢数字、傍点、下線
- 参照番号

このパッケージは縦組用クラス(tarticle, tbook, treport)のときには、自動的に 読み込まれます。横組用クラス(jarticle, jbook, jreport)で拡張機能を使いたい場 合は、文書ファイルのプリアンブルに以下の一行を記述してください。

\usepackage{plext}

13 組方向オプションについて

つぎの環境やコマンドは、組方向オプションが追加され、拡張されています。

- tabular 環境、array 環境
- \layoutcaption コマンド
- minipage 環境、\parbox コマンド、\pbox コマンド
- picture 環境

組方向オプションは、コマンド名や環境の後ろで<と>で囲って、"y", "t", "z" のいずれかを指定します。それぞれのオプションの意味はつぎのとおりです。デフォルトの組み方向は、横組のときは"y"、縦組のときは"t"です。

オプション	意味
У	横組で出力(横組モードでは何もしない)
t	縦組で出力(縦組モードでは何もしない)
z	90 度回転して出力(横組モードでは何もしない)

組方向オプションを用いたサンプルを図1に示します。左から、"y", "t", "z" オプションを指定してあります。

たとえば、これはいったい何、いったいどうして、などと思えるようなことが世の中にはたくさんあります。	たくさんあります? して、などと思えるようなことが世の中にはうなことが出の中にはたいがどう	たとえば、これはいったいで、いったい何、いったいどうして、などと思えるようなことが甘の中にはたくさんあります!	
---	---	---	--

Figure 1: 組方向オプションの使用例

14 コード

\if@rotsw このスイッチは、縦組モードで90度回転させるかどうかを示すのに使います。

- 1 (*package)
- 2 \newif\if@rotsw

14.1 表組環境

tabular 環境と array 環境は、組方向を指定するオプションを追加しました。これらのコマンドは、1ttab.dtx で定義されています。

\array array 環境と tabular 環境を開始するコマンドです。tabular 環境にはアスタリスク \tabular 形式があります。

\tabular*

- ${\tt 3 \ def\ array{\ let\ @classz\ @arrayclassz}}$
- 4 \let\@classiv\@arrayclassiv
- $\label{lem:condition} 5 $$ \left(\operatorname{Chalignto}\C \right) $$$
- 6 **%**
- 7 \def\tabular{\let\@halignto\@empty\X@tabular}
- 8 \@namedef{tabular*}{\@ifnextchar<%>
- 9 {\p@stabular}{\p@stabular<Z>}}

\XOtabarray 組方向オプションを調べます。

\X@tabular 10 \def\X@tabarray{\@ifnextchar<%>

```
{\p@tabarray}{\p@tabarray<Z>}}
             12 \def\X@tabular{\@ifnextchar<%>
                  {\p@tabular}{\p@tabular<Z>}}
            アスタリスク形式の場合は、組方向オプションの後ろに幅を指定します。
\p@stabular
             14 \def\p@stabular<#1>#2{%
 \p@tabular
                  \setlength\dimen@{#2}%
                  \edef\@halignto{to\the\dimen@}\p@tabular<#1>}
             17 \def\p@tabular<#1>{\leavevmode \null\hbox \bgroup $\let\@acol\@tabacol
                  \let\@classz\@tabclassz
                  \let\@classiv\@tabclassiv \let\\\@tabularcr\p@tabarray<#1>}
            位置オプションを調べます。
\p@tabarray
             20 \def\p@tabarray<#1>{\m@th\@ifnextchar[%]
                  {\p@array<#1>}{\p@array<#1>[c]}}
            tabular 環境と array 環境の内部形式です。
             22 \def\p@array<#1>[#2]#3{%
                 \fork@array@option<#1>[#2]\@begin@alignbox
                 \bgroup\box@dir\adjustbaseline
                 \setbox\@arstrutbox\hbox{%
             26
                 \iftdir
             27
                   \if #1v\relax\voko
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\strutbox
             28
                            \@depth\arraystretch\dp\strutbox \@width\z@
             29
                   \else\if #1z\relax\@rotswtrue
             31
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\zstrutbox
             32
                            \@depth\arraystretch\dp\zstrutbox \@width\z@
             33
             34
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\tstrutbox
                            \@depth\arraystretch\dp\tstrutbox \@width\z@
             35
                   \fi\fi
             36
             37
                 \else
                   \if #1t\relax\tate
             38
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\tstrutbox
             39
                             \@depth\arraystretch\dp\tstrutbox \@width\z@
             40
             41
             42
                      \vrule\@height\arraystretch\ht\strutbox
             43
                             \@depth\arraystretch\dp\strutbox \@width\z@
                   \fi
             44
                 \fi}%
             45
                  \@mkpream{#3}\edef\@preamble{\ialign \noexpand\@halignto
                  \bgroup \tabskip\z@skip \@arstrut \@preamble \tabskip\z@skip \cr}%
             47
                  \let\@startpbox\@@startpbox \let\@endpbox\@@endpbox
             48
                 \let\tabularnewline\\%
             49
                   \let\par\@empty
             50
                   \let\@sharp##%
             51
                   \set@typeset@protect
             52
```

\lineskip\z@skip\baselineskip\z@skip

53

- \ifhmode \@preamerr\z@ \@@par\fi
- \@preamble}

\endarray array 環境と tabular 環境の終了コマンドです。 \@end@alignbox は \p@array から 呼び出される \fork@array@option によって設定されます。 \endtabular

- 56 \def\endarray{\crcr\egroup\egroup\@end@alignbox}
- 57 \def\endtabular{\crcr\egroup\egroup\@end@alignbox \$\egroup\null}
- 58 \expandafter \let \csname endtabular*\endcsname = \endtabular

\fork@array@option array 環境と tabular 環境で与えられた第一引数と第二引数の組合せの分岐を行ない ます。

> コミュニティ版では、アスキー版で不自然だった表組(array 環境および tabular 環境)と周囲の本文との揃え位置を修正し、以下のように設計しました。

- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<y>, <z>指定の場合
 - [t] 指定のとき 一行目のベースラインが周囲のそれと一致(罫線の場合は和文ベースラ インの位置)
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 最終行のベースラインが周囲のそれと一致(罫線の場合は和文ベースラ インの位置)
- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき 表組の上端が周囲の和文ベースラインと一致
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 表組の下端が周囲の和文ベースラインと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<y>指定の場合
 - [t] 指定のとき 表組の上端が周囲の和文ベースラインと一致
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)

- [b] 指定のとき 表組の下端が周囲の和文ベースラインと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき
 行目のベースラインが周囲のそれと一致(罫線の場合は和文ベースラインの位置)
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 最終行のベースラインが周囲のそれと一致(罫線の場合は和文ベースラ インの位置)
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<z>指定の場合
 - [t] 指定のとき
 -行目の欧文ベースラインが周囲のそれと一致
 - [c] 指定のとき 表組の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき最終行の欧文ベースラインが周囲のそれと一致

```
59 \def\fork@array@option<#1>[#2]{%
60 \@rotswfalse
縦組モードのとき:
61 \iftdir
62 \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
63 \if #2t\relax
```

\def\@begin@alignbox{% 65 \@tempdima=\tbaselineshift 66 \advance\@tempdima-\ybaselineshift 67 \raise\@tempdima\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}% \let\@end@alignbox\egroup 68 \else\if #2b\relax 69 70 \def\@begin@alignbox{% 71 \@tempdima=\tbaselineshift \advance\@tempdima-\ybaselineshift 72 \raise\@tempdima\vbox\bgroup\vbox}% 74\def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}% 75 \let\@begin@alignbox\vcenter 76

```
77
        \let\@end@alignbox\relax
    \fi\fi
78
79 \else\if #1z\relax\let\box@dir\relax\@rotswtrue
    \if #2t\relax
        \def\@begin@alignbox{%
81
            \@tempdima=\tbaselineshift
82
            \advance\@tempdima-\ybaselineshift
83
            \advance\@tempdima\ht\tstrutbox
84
            \raise\arraystretch\@tempdima\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
85
        \let\@end@alignbox\egroup
86
     \else\if #2b\relax
87
        \def\@begin@alignbox{%
88
            \@tempdima=\tbaselineshift
89
            \advance\@tempdima-\ybaselineshift
90
            \advance\@tempdima-\dp\tstrutbox
91
            \raise\arraystretch\@tempdima\vbox\bgroup\vbox}%
92
        \def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}%
93
94
     \else
        \let\@begin@alignbox\vcenter
95
        \let\@end@alignbox\relax
96
97
     \fi\fi
98 \else\let\box@dir\tate
     99
        \let\@begin@alignbox\vtop
100
101
        \let\@end@alignbox\relax
102
     \else\if #2b\relax
        \let\@begin@alignbox\vbox
103
        \let\@end@alignbox\relax
104
105
     \else
        \let\@begin@alignbox\vcenter
106
        \let\@end@alignbox\relax
107
108
    \fi\fi
109 \fi\fi
横組モードのとき:
110 \else
111 \if #1t\relax\let\box@dir\tate
112
     \if #2t\relax
        \def\@begin@alignbox{\vtop\bgroup\kern\z@\vbox}%
113
        \let\@end@alignbox\egroup
114
     \else\if #2b\relax
        \def\@begin@alignbox{\vbox\bgroup\vbox}%
117
        \def\@end@alignbox{\kern\z@\egroup}%
118
119
        \let\@begin@alignbox\vcenter
        \let\@end@alignbox\relax
120
121
     \fi\fi
122 \else\let\box@dir\yoko
123
     \if #2t\relax
        \let\@begin@alignbox\vtop
```

```
125 \let\@end@alignbox\relax
126 \else\if #2b\relax
127 \let\@begin@alignbox\vbox
128 \let\@end@alignbox\relax
129 \else
130 \let\@begin@alignbox\vcenter
131 \let\@end@alignbox\relax
132 \fi\fi
133 \fi\fi}
```

14.2 フロートとキャプションの出力位置

キャプションとフロートは、出力位置の指定や大きさの指定などができるように拡張しています。詳細は、『日本語 $\text{LPT}_{PX} 2_{\varepsilon}$ ブック』を参照してください。

\layoutfloat コマンドで作られるボックスです。

134 \newbox\@floatbox

フロートオブジェクトの幅と高さです。

- $135 \newdimen\floatwidth$
- $136 \mbox{ }\mbox{\ensuremath{\texttt{Newdimen}}\mbox{\ensuremath{\texttt{floatheight}}}$

フロートオブジェクトのまわりに引かれる罫線の太さです。

137 \newdimen\floatruletick \floatruletick=0.4pt

フロートオブジェクトとキャプションの間のアキです。

 $138 \verb|\captionfloatsep| \verb|\captionfloatsep=10pt|$

\caption@dir には、キャプションを組む方向を示すオプションが格納されます。 \captiondir は \caption@dir の値と現在の組み方向によって、\yoko, \tate, \relax のいずれかに設定されます。

- 139 \def\caption@dir{Z}
- 140 \let\captiondir\relax

キャプションの幅です。

141 \newdimen\captionwidth \captionwidth\z@

キャプションを付ける位置を指定します。

- 142 \def\caption@posa{Z}
- 143 \def\caption@posb{Z}

組み立てられたキャプションが格納されるボックスです。

144 \newbox\@captionbox

キャプションに使われる文字です。

 $145 \ensuremath{\mbox{\sc hormalfont}\mbox{\sc hormalsize}}$

\layoutfloat \X@layoutfloat \@layoutfloat \layoutfloat は図表類の大きさと位置を指定するのに使います。大きさを省略するか、負の値を指定すると、そのオブジェクトの自然な長さになります。このとき

は、罫が引かれません。正の大きさを指定すると、\floatruletickの太さの罫で 囲まれます。

位置指定を省略した場合、中央揃えになるようにしています。

```
146 \def\layoutfloat{\@ifnextchar(%)
      {X@layoutfloat}_{X@layoutfloat(-5\p@,-5\p@)}
148 %
149 \def\X@layoutfloat(#1,#2) {\@ifnextchar[%]
      {\c (\#1,\#2)}{\c (\#1,\#2)[c]}
150
151 %
152 \long\def\@layoutfloat(#1,#2)[#3]#4{%}
    \setbox\z@\hbox{#4}%
     \floatwidth=#1 \floatheight=#2 \edef\float@pos{#3}%
     \ifdim\floatwidth<\z0
        \floatwidth\wd\z@\floatruletick\z@
    \fi
157
158
    \ifdim\floatheight<\z@
        \floatheight\ht\z@\advance\floatheight\dp\z@\relax
159
        \floatruletick\z@
160
161
    \setbox\@floatbox\vbox to\floatheight{\offinterlineskip
162
163
       \hrule width\floatwidth height\floatruletick depth\z@
164
       \vss\hbox to\floatwidth{%
         \vrule width\floatruletick height\floatheight depth\z@
         \hss\vbox to\floatheight{\hsize\floatwidth\vss#4\vss}\hss
166
167
         \vrule width\floatruletick height\floatheight depth\z@
       }\hrule width\floatwidth height\floatruletick depth\z@}}
```

\DeclareLayoutCaption

\DeclareLayoutCaption コマンドは、キャプションの組方向、付ける位置や幅のデフォルトをフロートのタイプごとに設定することができます。このコマンドでデフォルト値が設定されていないと、\pcaption コマンドでエラーが発せられます。このコマンドはプリアンブルでのみ、使用できます。

 $\verb|\DeclareLayoutCaption| \langle type \rangle < \langle dir \rangle > (\langle width \rangle) \ [\langle pos1 \rangle \langle pos2 \rangle]$

コマンド引数を省略することはできません。 $\langle dir \rangle$ には、'y', 't', 'z', 'n' のいずれかを指定します。'n' と指定をすると、本文の組み方向と同じ方向でキャプションが組まれます。これがデフォルトです。(補足:2018/09/20 v1.2j までは、この説明に反して実際のコードは'y' がデフォルトになっており、「日本語 $\text{IAT}_{EX} 2_{\varepsilon}$ ブック」にも'y' と書かれていましたが、後述の \bigstar のバグ修正に合わせ、2018/10/07 v1.2k で'n' に直しました。)

 $\langle width \rangle$ には、キャプションを折り返す長さを指定します。'(12zw)'と指定をすると、漢字 12 文字分の長さで折り返されます。デフォルトは (.8\linewidth) です。なお、キャプションの幅をフロートオブジェクトの幅に合わせる場合は'(\floatwidth)'と指定し、高さに合わせる場合は'(\floatheight)'と指定します。

 $\langle pos1 \rangle$ と $\langle pos2 \rangle$ には、キャプションを出力する位置を指定します。 $\langle pos1 \rangle$ は、'c'、

```
figure タイプが 'cd'、table タイプは 'cu' です。
                                      169 \def\DeclareLayoutCaption#1<#2>(#3) [#4#5] {%
                                                \expandafter
                                      171
                                                \ifx\csname #1@layoutc@ption\endcsname\relax \else
                                                    \@latex@info{Redeclaring capiton layout setting of '#1'}%
                                      173
                                                \expandafter
                                      174
                                                \gdef\csname #1@layoutc@ption\endcsname{%
                                      176
                                                      \if Z\caption@dir\def\caption@dir{#2}\fi
                                                      \ifdim\captionwidth=\z@ \captionwidth=#3\relax\fi
                                      177
                                                      \if Z\caption@posa\def\caption@posa{#4}\fi
                                      178
                                                      \label{lem:caption@posb} $$ \left( x_0 \right) = C_0 . $$ if $Z \subset \mathbb{F}_{1}^2 . $$
                                      180 \@onlypreamble\DeclareLayoutCaption
                                      181 \DeclareLayoutCaption{figure}<n>(.8\linewidth)[cd]
                                      182 \DeclareLayoutCaption{table}<n>(.8\linewidth)[cu]
                                      \DeclareLayoutCaption コマンドで設定をした、デフォルト値とは異なる設定で
      \layoutcaption
                                      組みたい場合は、\layoutcaption コマンドを使用します。
 \X@layoutcaption
                                          \langle dir \rangle (\langle width \rangle) [\langle pos \rangle]
  \@ilayoutcaption
                                          なお、\layoutcaptionに組み方向オプションを付けましたので、\captiondir
\@iilayoutcaption
                                      で組み方向を指定する必要はありません。また、\captiondir で指定をしても、そ
                                      の値は無視されます。
                                      183 \def\layoutcaption{\def\caption@dir{Z}\captionwidth\z@lef} \def\caption@dir{Z}\captionwidth\z@lef} \def\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\caption\
                                                \def\caption@posa{Z}\def\caption@posb{Z}%
                                      185
                                                \@ifnextchar<\X@layoutcaption{%
                                      186
                                                    \@ifnextchar(\@ilayoutcaption{%
                                                         \@ifnextchar[\@iilayoutcaption\relax}}}
                                      187
                                      188 %
                                      189 \def\X@layoutcaption<#1>{\def\caption@dir{#1}%
                                                \@ifnextchar(\@ilayoutcaption{%
                                                    \@ifnextchar[\@iilayoutcaption\relax}}
                                      191
                                      192 %
                                      193 \def\@ilayoutcaption(#1){\setlength\captionwidth{#1}%
                                      194 \@ifnextchar[{\@iilayoutcaption}{\relax}}
                                      195 %
                                      196 \def\@iilayoutcaption[#1#2]{%
                                              \def\caption@posa{#1}\def\caption@posb{#2}}
                                     キャプションを図表類の天地左右の指定箇所に付けるには \pcaption コマンドで指定
                                     をします。位置の指定は \layoutcaption コマンドで行ないます。 \layoutcaption
              \@pcaption
                                      コマンドが省略された場合は、\DeclareLayoutCaption コマンドで設定されてい
                                      るデフォルト値が使われます。
                                      198 \def\pcaption{%
                                                  \ifx\@captype\@undefined
```

't', 'b' のいずれかです。〈pos2〉は、'u', 'd', '1', 'r' のいずれかです。デフォルトは、

```
200
       \@latex@error{\noexpand\pcaption outside float}\@ehd
       \expandafter\@gobble
201
202
203
       \refstepcounter\@captype
       \expandafter\@firstofone
204
205
     {\@dblarg{\@pcaption\@captype}}%
206
207 }
208 %
209 \long\def\@pcaption#1[#2]#3{%
210
    \addcontentsline{\csname ext@#1\endcsname}{#1}{%
       \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}{\ignorespaces#2}}%
211
212
       \@latex@error{Use \noexpand\pcaption with '\string\layoutfloat'}\@eha
213
214
    \fi
    \label{local_make_properties} $$\max_{0 \le 1} {\#3}% $$
215
    \@pboxswfalse
216
    \setbox\@tempboxa\vbox{\hbox to\hsize{\if 1\float@pos\else\hss\fi
217
      \if 1\caption@posb\box\@captionbox\kern\captionfloatsep\fi
218
219
      \if t\caption@posa\vtop
220
      \else\if b\caption@posa\vbox
221
      \else\@pboxswtrue $\vcenter \fi\fi
      222
       \unvbox\@floatbox
223
224
       \if d\caption@posb\kern\captionfloatsep\box\@captionbox\fi}%
225
      \if@pboxsw \m@th$\fi
      226
      \if r\float@pos\else\hss\fi}}%
227
    \par\vskip.25\baselineskip
228
    \box\@tempboxa}
229
キャプションを組み立て、\@captionbox を作成します。
230 \def\make@pcaptionbox#1{%
```

\make@pcaptionbox

まず、デフォルトの設定がされているかを確認します。設定されていない場合は、 警告メッセージを出力し、現在の組モードでのデフォルト値を使用します。設定さ れていれば、そのデフォルト値にします。

```
\expandafter
 231
                                           \ifx\csname\@captype @layoutc@ption\endcsname\relax
 232
                                                                      \@latex@warning{Default caption layout of '\@captype' unknown}%
 233
 234
                                                                                      \def\caption@dir{Z}\captionwidth\z@
 235
                                                                                      \label{lem:caption@posa{Z}\def\caption@posb{Z}% } $$ \end{Theorem} $$ \caption@posb{Z}% $$ \caption@posb{Z}% $$ \caption@posb{Z}% $$ \caption@posb{Z
236
                                          \else
                                                                      \csname \@captype @layoutc@ption\endcsname
 238
```

次に、組み方向を設定します。基本組の組み方向とキャプションの組み方向を変え る場合には、\Qtempswa を真とします。文字を回転させるときは \Qrotsw を真にし ます。

```
239 \@rotswfalse \@tempswafalse
240 \iftdir\if y\caption@dir \let\captiondir\yoko \@tempswatrue
241 \else\if z\caption@dir \let\captiondir\relax \@rotswtrue
242 \else\let\captiondir\tate\fi\fi
243 \else\if t\caption@dir\let\captiondir\tate \@tempswatrue
244 \else\let\captiondir\yoko\fi
245 \fi
```

キャプションを組み立てる前に、まず、キャプション文字列がどの程度の長さを持っているのかを確認するために、\hbox に入れます。

```
\setbox0\hbox{\if@rotsw $\fi\hbox{\captiondir}
\captionfontsetup\parindent\z@\inhibitglue
\csname fnum@\@captype\endcsname\char\euc"A1A1\relax#1}%
\if@rotsw \m@th$\fi}%
```

キャプションの幅に合わせるため、再び、ボックスを組み立てます。

キャプションを折り返さなくてもよい場合、 $\ensuremath{^{\circ}}$ ($\ensuremath{^{\circ}}$ を 大だし、キャプションの組み方向が基本組の組み方向と異なる場合($\ensuremath{^{\circ}}$ では同じボッか真)は、ボックス $\ensuremath{^{\circ}}$ の幅ではなく、高さに設定をします($\ensuremath{^{\circ}}$ では同じボックスでも、組方向によって $\ensuremath{^{\circ}}$ wd $\ensuremath{^{\circ}}$ と $\ensuremath{^{\circ}}$ かし、 $\ensuremath{^{\circ}}$ では同じボックスでも、組方向によって $\ensuremath{^{\circ}}$ wd $\ensuremath{^{\circ}}$ と $\ensuremath{^{\circ}}$ かし、 $\ensuremath{^{\circ}}$ と $\ensuremath{^{\circ}}$ からします。 $\ensuremath{^{\circ}}$ ない。 \ens

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる修正: 2018/09/20 v1.2j までは、キャプション の組方向が基本組の組み方向と直交する場合に深さを考慮するのを忘れていたため に、本来は折り返さずに済むはずの短いキャプションが、必ず折り返されてしまう というバグ (\bigstar) がありました。2018/10/07 v1.2k でこのバグを修正したため、組 版結果が大きく変わる場合があります。

```
\if@tempswa \@tempdima\ht0 \advance\@tempdima\dp0
     \else \@tempdima\wd0 \fi
     \verb|\dim|@tempdima>| caption width | @tempdima| caption width | fi
252
     \@pboxswfalse
     \setbox0\hbox{\if@rotsw $\fi
255
       \if u\caption@posb\vbox
       \else\if d\caption@posb\vbox
256
257
       \else\if t\caption@posa\vtop
258
       \else\if b\caption@posa\vbox
       \else\ifmmode\vcenter\else\@pboxswtrue $\vcenter\fi
259
260
       \fi\fi\fi\fi
261
       {\hsize\@tempdima\kern\z@
262
       \vbox{\captiondir\hsize\@tempdima
         \captionfontsetup\parindent\z@\inhibitglue
263
         \csname fnum@\@captype\endcsname\char\euc"A1A1\relax#1}\kern\z@
264
       }\if@pboxsw \m@th$\fi \if@rotsw \m@th$\fi}%
```

最後に \@captionbox を組み立てます。

位置 2 オプションが 'u' か 'd' の場合、このボックスの幅をフロートオブジェクトの幅と同じ長さにし、位置 1 オプションでの揃えに組み立てます。

位置 2 オプションが '1' か 'r' の場合は、キャプションの幅です。このときの位置 1 オプションの揃えは、この前の段階で準備をしておき、\@pcaption で最終的に フロートオブジェクトと組み合わせるときになされます。

- 266 \let\to@captionboxwidth\relax
- 267 \if l\caption@posb \else\if r\caption@posb\else
- 268 \def\to@captionboxwidth{to\floatwidth}\fi\fi
- 269 \setbox\@captionbox\hbox\to@captionboxwidth{%
- 270 \if t\caption@posa\else\hss\fi
- 271 \unhbox0\relax
- 272 \if b\caption@posa\else\hss\fi}}

14.3 段落ボックス環境

minipage 環境と \parbox コマンドも、tabular 環境と同じように、組方向を指定するオプションを追加してあります。これらのコマンドは、ltboxes.dtx で定義されています。

\parbox コマンドは幅だけでなく高さも指定できるようになっています。新しい \parbox コマンドについての詳細は、usrguide.tex を参照してください。

minipage 環境

\minipage 組方向オプションを調べます。

273 \def\minipage{\@ifnextchar<%>
274 {\X@minipage}{\X@minipage<Z>}}

\X@minipage 位置オプションを調べます。

275 \def\X@minipage<#1>{\@ifnextchar[%]

276 {\@iminipage<#1>}{\@iiiminipage<#1>{c}\relax[s]}}

\@iminipage 高さオプションを調べます。

277 \def\@iminipage<#1>[#2]{\@ifnextchar[%]

278 {\@iiminipage<#1>{#2}}{\@iiiminipage<#1>{#2}\relax[s]}}

\@iiminipage 内部位置オプションを調べます。

279 \def\@iiminipage<#1>#2[#3]{\@ifnextchar[%]

280 {\@iiiminipage<#1>{#2}{#3}}{\@iiiminipage<#1>{#2}{#3}[#2]}}

\@iiminipage minipage 環境の内部形式です。\leavevmode の後の \bgroup は、回転オプションが指定されたときのフラグ \if@rotsw が、このマクロの内部だけで有効になるようにするためです。この括弧は、\endminipage コマンドで閉じます。

281 \def\@iiiminipage<#1>#2#3[#4]#5{%

```
282
                   \leavevmode\bgroup
                   \setlength\@tempdima{#5}%
              283
                   \def\@mpargs{<#1>{#2}{#3}[#4]{#5}}%
              285
                   \@rotswfalse
                   \iftdir
              286
                     \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
              287
                     \else\if #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
              288
              289
                     \else\let\box@dir\tate
              290
                     \fi\fi
                   \else
              291
                     \if #1t\relax\let\box@dir\tate
              292
                     \else\let\box@dir\yoko
              293
              294
              295
                   \fi
                   \setbox\@tempboxa\vbox\bgroup\box@dir
              296
                     \if@rotsw \hsize\@tempdima\hbox\bgroup$\vbox\bgroup\fi
              297
                     \adjustbaseline
              298
                     \color@begingroup
              299
              300
                       \hsize\@tempdima
              301
                       \textwidth\hsize \columnwidth\hsize
              302
                       \@parboxrestore
              303
                       \def\@mpfn{mpfootnote}\def\thempfn{\thempfootnote}%
              304
                       \c@mpfootnote\z@
                       \let\@footnotetext\@mpfootnotetext
              305
                       \let\@listdepth\@mplistdepth\z@
              306
                       \@minipagerestore
              307
                       \@setminipage}
              308
             minipage 環境の終了コマンドです。
\endminipage
              309 \def\endminipage{%
              310
                     \par
              311
                     \unskip
              312
                     \ifvoid\@mpfootins\else
                       \vskip\skip\@mpfootins
              313
             314
                       \normalcolor
              315
                       \footnoterule
              316
                       \unvbox\@mpfootins
              317
                     \fi
                     \@minipagefalse
              318
                                       %% added 24 May 89
                   \color@endgroup
                   \if@rotsw \egroup\m@th$\egroup\fi
              \@iiminipage で開始したグループを閉じるための \egroup です。
                   \egroup
              321
                   \expandafter\@iiiparbox\@mpargs{\unvbox\@tempboxa}\egroup}
```

```
\parbox コマンド
                \parbox 組方向オプションを調べます。
                                                    323 \DeclareRobustCommand\parbox{\@ifnextchar<%>
                                                                              {\X@parbox}{\X@parbox<Z>}}
        \X@parbox 位置オプションを調べます。
                                                    325 \def\X@parbox<#1>{\@ifnextchar[%]
                                                                              {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
        \@iparbox 高さオプションを調べます。
                                                    327 \def\@iparbox<#1>[#2] {\@ifnextchar[%]
                                                                              \label{limits} $$ (\input) $
    \@iiparbox 内部位置オプションを調べます。
                                                    329 \def\@iiparbox<#1>#2[#3]{\@ifnextchar[%]%
                                                                              {\@iiiparbox<#1>{#2}{#3}}{\@iiiparbox<#1>{#2}{#3}[#2]}}
\@iiiparbox parbox の内部形式です。 minipage 環境と同じようにグルーピングをします。この
                                                    括弧と対になるのは、このマクロの最後の\egroupです。
                                                    331 \long\def\@iiiparbox<#1>#2#3[#4]#5#6{%
                                                                        \leavevmode\null\bgroup
                                                    333
                                                                        \setlength\@tempdima{#5}%
                                                    334
                                                                      \fork@parbox@option<#1>[#2]%
                                                    335 \if@rotsw
                                                                        \@begin@tempboxa\vbox{\box@dir\hsize\@tempdima
                                                                                 337
                                                    338 \else
                                                    339
                                                                       \@begin@tempboxa\vbox{\box@dir
                                                                                 \hsize\@tempdima\@parboxrestore\adjustbaseline#6\@@par}%
                                                    340
                                                    341 \fi
                                                                                 \ifx\relax#3\relax\else
                                                    342
                                                    343
                                                                                          \setlength\@tempdimb{#3}%
                                                    344
                                                                                          \edef\@parboxto{to\the\@tempdimb}%
                                                    345
                                                    346
                                                                                 \@begin@parbox\@parboxto{\box@dir\adjustbaseline
                                                                                              \let\hss\vss\let\unhbox\unvbox
                                                                                              \csname bm@#4\endcsname}\@end@parbox
                                                                        \@end@tempboxa\egroup\null}
                                                    349
```

\fork@parbox@option \parbox で与えられた第一引数と第二引数の組合せの分岐を行ないます。
 コミュニティ版では、アスキー版で不自然だった \parbox の箱と周囲の本文との
揃え位置を修正し、以下のように設計しました。

• 周囲の組方向が横組かつ組方向が<y>, <z>指定の場合

- [t] 指定のとき一行目のベースラインが周囲のそれと一致
- [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
- [b] 指定のとき 最終行のベースラインが周囲のそれと一致
- 周囲の組方向が横組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき 箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致
 - [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<y>指定の場合
 - [t] 指定のとき 箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致
 - [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき 箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<t>指定の場合
 - [t] 指定のとき一行目のベースラインが周囲のそれと一致
 - [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
 - [b] 指定のとき最終行のベースラインが周囲のそれと一致
- 周囲の組方向が縦組かつ組方向が<z>指定の場合
 - [t] 指定のとき 箱の上端が周囲の和文文字の高さと一致

- [c] 指定のとき 箱の中心が周囲の数式軸を通る(欧文ベースラインシフトの影響下)
- [b] 指定のとき 箱の下端が周囲の和文文字の深さと一致

```
350 \def\fork@parbox@option<#1>[#2]{%
351 \@rotswfalse
縦組モードのとき:
352 \setminus iftdir
353 \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
      \if #2t\relax
         \def\@begin@parbox{\raise\cht\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
355
         \let\@end@parbox\egroup
356
      \else\if #2b\relax
357
         \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
358
         \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
359
360
      \else\ifmmode
361
         \let\@begin@parbox\vcenter
362
         \let\@end@parbox\relax
363
364
         \def\@begin@parbox{$\vcenter}%
         \def\@end@parbox{\m@th$}%
365
      \fi\fi\fi
366
367 \le \ \#1z\ #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
      368
         \def\@begin@parbox{\raise\cht\vtop\bgroup\kern\z@\vtop}%
369
370
         \let\@end@parbox\egroup
      \else\if #2b\relax
371
         \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
372
373
         \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
374
      \else\ifmmode
375
         \let\@begin@parbox\vcenter
376
         \let\@end@parbox\relax
377
      \else
378
         \def\@begin@parbox{$\vcenter}%
         379
      \fi\fi\fi
380
381 \else\let\box@dir\tate
      \if #2t\relax
382
         \let\@begin@parbox\vtop
383
         \let\@end@parbox\relax
384
385
      \else\if #2b\relax
386
         \let\@begin@parbox\vbox
         \let\@end@parbox\relax
387
      \else\ifmmode
388
         \let\@begin@parbox\vcenter
389
         \let\@end@parbox\relax
390
```

```
\def\@begin@parbox{$\vcenter}%
                                  392
                                  393
                                                          \def\@end@parbox{\m@th$}%
                                  394
                                                  \fi\fi\fi
                                  395 \fi\fi
                                  横組モードのとき:
                                  396 \else
                                  397 \in #1t\end{tabular}
                                                  398
                                                          399
                                                          \let\@end@parbox\egroup
                                  400
                                  401
                                                  \else\if #2b\relax
                                                          \def\@begin@parbox{\lower\cdp\vbox\bgroup\vbox}%
                                  402
                                                          \def\@end@parbox{\kern\z@\egroup}%
                                  403
                                                  \else\ifmmode
                                  404
                                  405
                                                          \let\@begin@parbox\vcenter
                                  406
                                                          \let\@end@parbox\relax
                                  407
                                                          \def\@begin@parbox{$\vcenter}%
                                  408
                                                          \def\@end@parbox{\m@th$}%
                                  409
                                                  \fi\fi\fi
                                  410
                                  411 \else\let\box@dir\yoko
                                                 412
                                  413
                                                          \let\@begin@parbox\vtop
                                  414
                                                          \let\@end@parbox\relax
                                  415
                                                  \else\if #2b\relax
                                  416
                                                          \let\@begin@parbox\vbox
                                  417
                                                          \let\@end@parbox\relax
                                  418
                                                  \else\ifmmode
                                                          \let\@begin@parbox\vcenter
                                  419
                                                          \let\@end@parbox\relax
                                  420
                                                  \else
                                  421
                                  422
                                                          \def\@begin@parbox{$\vcenter}%
                                                          \def\@end@parbox{\m@th$}%
                                  423
                                                  \fi\fi\fi
                                  425 \fi\fi
                                  \pbox コマンド
                                  \pbox は組み方向を指定できるボックスコマンドです。次のような構文となってい
                                   ます。
                                       \pbox オプションを調べます。
                                  426 \end{The properties of the properties of t
\X@makepbox
\ensuremath{\texttt{\sc dim}}
                                  File d: plext.dtx
                                                                                                                                                                                                                               118
```

391

\else

```
427 \det X@makePbox<#1>{%}
                 429 %
            430 \def\@imakePbox<#1>[#2] {\@ifnextchar[%]
                 {\@iimakePbox<#1>{#2}}{\@iimakePbox<#1>{#2}[c]}}
           \pbox の内部形式です。
\@iimakePbox
            432 \def\@iimakePbox<#1>#2[#3]#4{%
                 \bgroup \@rotswfalse \@pboxswfalse
                 \iftdir
            435
                   \if #1y\relax\let\box@dir\yoko
            436
                   \else\if #1z\relax\@rotswtrue \let\box@dir\relax
            437
                   \else\let\box@dir\tate
                   \fi\fi
            438
                 \else
            439
                   \if #1t\relax\let\box@dir\tate
            440
                   \else\let\box@dir\yoko
            441
            442
            443
                 \ifmmode\else\if@rotsw\@pboxswtrue\hbox\bgroup$\fi\fi
                   \left( \frac{42}{\%} \right)
            445
                   \  \ifdim\end{ar} \
            446
            447
                   \hb@xt@\@tempdima{\box@dir
            448
                             \if #31\relax\else\hss\fi
            449
                             #4\relax
                             \if #3r\relax\else\hss\fi}\fi
            450
                 451
            14.4 作図環境
            picture 環境も、組方向を指定するオプションを追加してあります。なお、これらの
             コマンドは、ltpictur.dtx で定義されています。
   \picture 組方向オプションを調べます。
            452 \ensuremath{\mbox{\local{local}}} 452 \ensuremath{\mbox{\local}}
                  {\X@picture}{\X@picture<Z>}}
            図形領域オプションを調べます。
  \X@picture
            454 \def\X@picture<#1>(#2,#3){\@ifnextchar(%)
                  {\@@picture<#1>(#2,#3)}{\@@picture<#1>(#2,#3)(0,0)}}
            picture 環境の内部ではベースラインシフトの値をゼロにします。以前に設定されて
 \@@picture
            いた値は、それぞれ保存され、終了時に、その値に戻されます。
            456 \mbox{ }\mbox{\ensuremath{\texttt{Newdimen}}\mbox{\ensuremath{\texttt{SaveQybaselineshift}}}
            457 \mbox{ }\mbox{newdimen}\mbox{save@tbaselineshift}
```

458 \newdimen\@picwd

```
\picture の内部形式です。3組目の引数は、原点座標です。
                          459 \def\@@picture<#1>(#2,#3)(#4,#5){%
                                     \save@ybaselineshift\ybaselineshift
                                     \save@tbaselineshift\tbaselineshift
                          462
                                     \iftdir
                          463
                                         \if#1y\let\box@dir\yoko
                                              \verb|\picwd=#3\unitlength \eqref{length}| \label{length} $$ \operatorname{$\mathbb{Z}\subset\mathbb{R}^2$} \
                          464
                                              \@tempdima=#5\unitlength \@tempdimb=#4\unitlength
                          465
                                         \else\let\box@dir\tate
                          466
                                              \@picwd=#2\unitlength \@picht=#3\unitlength
                          467
                                              \@tempdima=#4\unitlength \@tempdimb=#5\unitlength
                          468
                          469
                                         \fi
                          470
                                     \else
                                         \if#1t\let\box@dir\tate
                          471
                                              \@picwd=#3\unitlength \@picht=#2\unitlength
                          472
                          473
                                              \@tempdima=#5\unitlength \@tempdimb=#4\unitlength
                          474
                                         \else\let\box@dir\yoko
                          475
                                              \@picwd=#2\unitlength \@picht=#3\unitlength
                          476
                                              \@tempdima=#4\unitlength \@tempdimb=#5\unitlength
                          477
                                         \fi
                          478
                          479
                                     \setbox\@picbox\hbox to\@picwd\bgroup\box@dir
                          480
                                     \hskip-\@tempdima\lower\@tempdimb\hbox\bgroup
                                     \ybaselineshift\z@ \tbaselineshift\z@
                                     \ignorespaces}
                          図形領域の幅と高さを指定の大きさにしてから、出力をします。そして、最後にベー
\endpicture
                          スラインシフトの値を元に戻します。
                          483 \def\endpicture{%
                                     \egroup\hss\egroup
                                     \ht\@picbox\@picht \wd\@picbox\@picwd \dp\@picbox\z@
                          485
                          486
                                     \mbox{\box\@picbox}%
                                     \ybaselineshift\save@ybaselineshift
                          487
                                     \tbaselineshift\save@tbaselineshift}
              \put picture 環境の内部で、フォントサイズ変更コマンドなどが使用された場合、ベース
            \line ラインシフト量が新たに設定されてしまうため、これらのコマンドがベースライン
        \vector シフトの影響を受けないように再定義をします。ベースラインシフトを有効にした
      \dashbox い場合は、\pbox コマンドを使用してください。
            \oval 489 \let\org@put\put
        \circle 490 \def\put{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@put}
                          491 %
                          492 \let\org@line\line
                          493 \left( \frac{y}{z} \right) 
                          494 %
                          495 \let\org@vector\vector
                          496 \ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{vector}}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{vector}}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{vector}}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbo
```

```
497 %
498 \let\org@dashbox\dashbox
499 \def\dashbox{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@dashbox}
500 %
501 \let\org@oval\oval
502 \def\oval{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@oval}
503 %
504 \let\org@circle\circle
505 \def\circle{\ybaselineshift\z@\tbaselineshift\z@\org@circle}
```

14.5 連数字/漢数字/傍点/下線

ここでは、連数字、漢数字、傍点、下線について説明をしています。

連数字と漢数字、および傍点と下線についての詳細は、『日本語 Late If $\mathbb{E}X 2_{\varepsilon}$ ブック』を参照してください。なお、傍点に使う文字は pldefs.ltx で定義されています。

なお、連数字コマンドは3種類ありましたが、\rensuji コマンドーつにまとめました。新しい連数字コマンドは次の構文となります。

```
\rensuji [\langle pos \rangle] \langle 横に並べる半角文字 \rangle \rensuji* [\langle pos \rangle] \langle 横に並べる半角文字 \rangle
```

アスタリスク形式の場合は、行間を連数字の幅に合わせて広げません。 $\langle pos \rangle$ は、連数字を揃える位置です。'c'(中央揃え)、'r'(右寄せ)、'1'(左寄せ)を指定できます。デフォルトでは、中央に揃えます。

次のフラグが真の場合には、連数字の幅に合わせて行間を広げません。アスタリスク形式の場合に真になります。

506 \newif\ifnot@advanceline

\rensujiskip は連数字の前後に入るアキです。デフォルトは、現在の文字の幅の4分の1を基準にしています。

```
507 \newskip\rensujiskip
```

 $508 \rensujiskip=0.25 \chs plus.25zw minus.25zw$

連数字

\rensuji \rensuji は、*形式かどうかを調べます。\@rensuji は、位置オプションを調べま
\@rensuji す。\@@rensuji が \rensuji の内部形式です。
\@@rensuji 509 \DeclareRobustCommand\rensuji{%
510 \@ifstar{\not@advancelinetrue\@rensuji}{\@rensuji}}
511 \def\@rensuji{\@ifnextchar[{\@@rensuji}{\@@rensuji}c]}}
512 \def\@@rensuji[#1]#2{%

513 \ifvmode\leavevmode\fi

 $514 \left(\frac{\#2}{else} \right)$

515 \hskip\rensujiskip

```
\ifnot@advanceline\not@advancelinefalse\else
                           516
                           517
                                          \setbox\z@\hbox{\yoko#2}%
                                          \@tempdima\ht\z@ \advance\@tempdima\dp\z@
                                          \if #1c\relax\vrule\@width\z@ \@height.5\@tempdima \@depth.5\@tempdima
                           519
                           520
                                          \else\if #1r\relax\vrule\@width\z@\@height\z@ \@depth\@tempdima
                                          \label{lem:condition} $$ \essay $$
                           521
                                          \fi\fi
                           522
                           523
                                     \fi
                                     \if #1c\relax\hbox to1zw{\yoko\hss#2\hss}%
                           524
                                     \else\if #1r\relax\vbox{\hbox to1zw{\yoko\hss#2}}%
                                      \else\vtop{\hbox to1zw{\yoko#2\hss}}%
                           526
                           527
                                      \fi\fi
                                     \hskip\rensujiskip
                           529 \left| \text{fi}else\hbox{#2}\right| 
                           530 }
      \Rensuji \Rensuji コマンドと \prensuji コマンドは、\rensuji コマンドで代用できます。
    \prensuji 531 \let\Rensuji\rensuji
                           532 \let\prensuji\rensuji
                           漢数字
                         \Kanji コマンドを定義します。\Kanji コマンドは \Alph と同じように、カウンタ
                         に対してのみ使用することができます。
        \@Kanji
                               \kanji コマンドは、後続の半角数字を漢数字にします。\kanji 1989 のように
          \kanji
                           指定をします。ただし、横組モードのときには、何もしません。つねに漢数字にし
                           たい場合は、\kansuji プリミティブを使ってください。
                               後続の数字まで漢数字になってしまうバグを修正しました (Issue #33)。
                           533 \def\Kanji#1{\expandafter\@Kanji\csname c@#1\endcsname}
                           534 \def\@Kanji#1{\kansuji #1}
                           535 \def\kanji{\iftdir\expandafter\kansuji\fi}
                           傍点
                        \bou は、傍点を付けるコマンドです。
\boutenchar
                               傍点として出力する文字は\boutenchar に指定します。この文字は、いつでも、
               \bou
                           横組用フォントが使われます。デフォルトは、EUC コード A1A2(、)です。
                           536 \def\boutenchar{\char\euc"A1A2}
                           537 \DeclareRobustCommand\bou[1] {\ifvmode\leavevmode\fi\@bou#1\end}
                           538 \def\@bou#1{%
                                     \ifx#1\end \let\next=\relax
                           539
                           540
                                     \else
                                          \iftdir\if@rotsw
                           541
                           542
                                              \hbox to\z0{\vbox to\z0{\boxmaxdepth\maxdimen}
```

```
543
           \vss\moveleft-0.2zw\hbox{\boutenchar}\nointerlineskip
           \hbox{\char\euc"A1A1}}\hss{\nobreak#1\relax}
544
545
546
         \hbox to\z@{\vbox to\z@{\boxmaxdepth\maxdimen
           \verb|\vss\moveleft0.2zw\hbox{\yoko\boutenchar}\nointerlineskip|
547
           \hbox{\char\euc"A1A1}}\hss{\nobreak#1\relax}
548
       fi\else
549
         \hbox to\z@{\vbox to\z@{%
550
           \vss\moveleft-0.2zw\hbox{\yoko\boutenchar}\nointerlineskip
551
           \hbox{\char\euc"A1A1}}\hss}\nobreak#1\relax
552
553
       \let\next=\@bou
554
     \fi\next}
```

下線

\kasen 下線を引くコマンドです。横組モードのときは、引数を \underline に渡します。 縦組モードでも、回転モードの \parbox などで使われたときには、やはり引数を \underline に渡します。これ以外の場合は、引数の上に直線を引きます。

```
556 \DeclareRobustCommand\kasen[1] {%

557 \ifydir\underline{#1}%

558 \else\if@rotsw\underline{#1}\else

559 \setbox\z@\hbox{#1}\leavevmode\raise.7zw

560 \hbox to\z@{\vrule\@width\wd\z@ \@depth\z@ \@height.4\p@\hss}%

561 \box\z@
```

14.6 参照番号

\fi\fi}

参照番号の類を連数字で出力するように再定義します。itemize 環境などのリスト型のラベルについては、jarticle などのパッケージで定義しています。詳細は、jclasses.dtx を参照してください。

\@eqnnum これらは\equationコマンドで作成された数式に付加される番号です。ltmath.dtx \@thecounter で定義されています。

```
563 \def\@eqnnum{{\reset@font\rmfamily \normalcolor}
564 \iftdir\raise.25zh\hbox{\yoko(\theequation)}%
565 \else (\theequation)\fi}}
566 \def\@thecounter#1{\noexpand\rensuji{\noexpand\arabic{#1}}}
```

\@thmcounter \newtheorem コマンドで作成した環境で参照されるラベルです。ltthm.dtx で定義されています。

```
567 \def\0thmcounter#1{\noexpand\rensuji{\noexpand\arabic{#1}}} 568 \langle package \rangle
```

File e

pl209.dtx

15 DOCSTRIP 用モジュール

DOCSTRIP で以下のモジュール名を指定することで、対象となる部分を取り出すことができます。

pl209.def ファイルを生成 pl209 oldfonts oldpfont.sty を生成 style jarticle.sty ファイルを生成 jarticle jbook.sty ファイルを生成 ibook jreport.sty ファイルを生成 jreport tarticle.sty ファイルを生成 tarticle tbook.sty ファイルを生成 tbook treport treport.sty ファイルを生成

16 2.09 互換マクロ

2.09 用のコマンド定義ファイルがロードされたとき、メッセージを出力します。また、IATFX の 2.09 コマンドマクロ定義をロードします。

- 1 (*pl209)
- 2 \typeout{Entering pLaTeX 2.09 compatibility mode.}
- 3 \input{latex209.def}
- 4 (/pl209)

フォント選択コマンドのトレースのために ptrace パッケージをロードします。

- 5 (oldfonts)\RequirePackage{oldlfont}
- 6 \(\rangle pl209 \) | oldfonts\\\ RequirePackage{ptrace}

\Rensuji pIFTEX 2ε では、\Rensuji, \prensuji の動作を \rensuji コマンドがカバーして \prensuji います。

- 7 (*pl209)
- 8 \let\Rensuji\rensuji
- 9 \let\prensuji\rensuji
- 10 (/pl209)

\@footnotemark 脚注の印を出力するマクロを、組み方向に応じて、脚注の方向が変わるようにし \@makefnmark ます。

- 11 (*pl209)
- 12 \def\@footnotemark{\leavevmode

File e: pl209.dtx

```
\ifhmode\edef\@x@sf{\the\spacefactor}\fi
    \ifydir\@makefnmark
    \else\hbox to\z0{\hskip-.25zw\raise2\cht\@makefnmark\hss}\fi
16 \ifhmode\spacefactor\@x@sf\fi\relax}
17 \def\@makefnmark{\hbox{\ifydir $\m@th^{\@thefnmark}$
    \else\hbox{\yoko$\m@th^{\@thefnmark}$}\fi}}
19 (/pl209)
_{20}~\langle*\text{pl209}\rangle
21 \fontencoding{JY1}
22 \fontfamily{mc}
23 \fontsize{10}{15}
24 (/pl209)
25 \langle *pl209 \mid oldfonts \rangle
27 \DeclareSymbolFont{gothic}{JY1}{gt}{m}{n}
28 \DeclareSymbolFontAlphabet\mathmc{mincho}
29 \DeclareSymbolFontAlphabet\mathgt{gothic}
31 \jfam\symmincho
\mcと \gt は、和文フォントを変更しますが、欧文フォントには影響しません。
32 \DeclareRobustCommand\mc{%
      \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
33
      \kanjifamily{\mcdefault}%
34
35
      \kanjiseries{\kanjiseriesdefault}%
      \kanjishape{\kanjishapedefault}%
      \selectfont\mathgroup\symmincho}
38 \DeclareRobustCommand\gt{%
      \kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
40
      \kanjifamily{\gtdefault}%
      \kanjiseries{\kanjiseriesdefault}%
41
      \kanjishape{\kanjishapedefault}%
42
      \selectfont\mathgroup\symgothic}
\bf コマンドは、和文フォントをゴシックにし、欧文フォントをボールドにします。
44 \DeclareRobustCommand\bf{\normalfont\bfseries\mathgroup\symbold\jfam\symgothic}
\rm, \sf, \sl, \sc, \it, \tt の各コマンドを、欧文ファミリだけをデフォルトフォン
トから属性を変更するようにし、和文フォントは影響を受けないように修正します。
45 \DeclareRobustCommand\roman@normal{%
      \romanencoding{\encodingdefault}%
46
47
      \romanfamily{\familydefault}%
48
      \romanseries{\seriesdefault}%
      \romanshape{\shapedefault}%
      \selectfont\ignorespaces}
51 \DeclareRobustCommand\rm{\roman@normal\rmfamily\mathgroup\symoperators}
52 \DeclareRobustCommand\sf{\roman@normal\sffamily\mathgroup\symsans}
53 \DeclareRobustCommand\s1{\roman@normal\s1shape\mathgroup\symslanted}
```

```
54 \DeclareRobustCommand\sc{\roman@normal\scshape\mathgroup\symsmallcaps}
     55 \DeclareRobustCommand\it{\roman@normal\itshape\mathgroup\symitalic}
     56 \DeclareRobustCommand\tt{\roman@normal\ttfamily\mathgroup\symtypewriter}
\em \em コマンドで、和文フォントも \gt に切り替えるようにしました。
     57 \DeclareRobustCommand\em{%
         \@nomath\em
         \ifdim \fontdimen\@ne\font>\z@\mc\rm\else\gt\it\fi}
     60 (/pl209 | oldfonts)
     61 (*pl209)
     62 \let\mcfam\symmincho
     63 \let\gtfam\symgothic
                         {\edef\f@size{\@vpt}\rm\mc}
     64 \renewcommand\vpt
     65 \renewcommand\vipt {\edef\f@size{\@vipt}\rm\mc}
     66 \renewcommand\viipt {\edef\f@size{\@viipt}\rm\mc}
     67 \renewcommand\viiipt{\edef\f@size{\@viiipt}\rm\mc}
     68 \renewcommand\ixpt {\edef\f@size{\@ixpt}\rm\mc}
     69 \renewcommand\xpt
                          {\edef\f@size{\@xpt}\rm\mc}
     70 \renewcommand\xipt {\edef\f@size{\@xipt}\rm\mc}
     71 \renewcommand\xiipt {\edef\f@size{\@xiipt}\rm\mc}
     72 \renewcommand\xivpt {\edef\f@size{\@xivpt}\rm\mc}
     73 \renewcommand\xviipt{\edef\f@size{\@xviipt}\rm\mc}
     75 \renewcommand\xxvpt {\edef\f@size{\@xxvpt}\rm\mc}
     76 (/pl209)
    そして、最後に p1209.cfg というファイルがあれば、それをロードします。
```

17 スタイルファイル

77 $\langle p|209\rangle \setminus InputIfFileExists\{p|209.cfg\}\{\}\{\}$

以下は、pIATeX 2.09 での標準スタイルファイルです。pIATeX 2ε のクラスファイルをロードするようにしています。

```
78 \( \*style \)
79 \( \*style \)
79 \( \*synticle \) | jbook | jreport | tarticle | tbook | treport \)
80 \( NeedsTeXFormat \{ pLaTeX2e \} \)
81 \( \/ jarticle \) | jbook | jreport | tarticle | tbook | treport \)
82 \( \*synticle \)
83 \( \@ obsoletefile \{ jarticle . cls \} \{ jarticle . sty \} \)
84 \( LoadClass \{ jarticle \} \)
85 \( \/ jarticle \)
86 \( \**tarticle \)
87 \( \@ obsoletefile \{ tarticle . cls \} \{ tarticle . sty \} \)
88 \( LoadClass \{ tarticle \} \)
89 \( \/ tarticle \)
90 \( \*sybook \)
91 \( \@ obsoletefile \{ jbook . cls \} \{ jbook . sty \} \)
```

File e: pl209.dtx

```
92 \LoadClass{jbook}
93 \/jbook\
94 \*tbook\
95 \@obsoletefile{tbook.cls}{tbook.sty}
96 \LoadClass{tbook}
97 \/tbook\
98 \*jreport\
99 \@obsoletefile{jreport.cls}{jreport.sty}
100 \LoadClass{jreport}
101 \/jreport\
102 \*treport\
103 \@obsoletefile{treport.cls}{treport.sty}
104 \LoadClass{treport}
105 \/treport\
106 \/style\
```

File f

kinsoku.dtx

このファイルは、禁則と文字間スペースの設定について説明をしています。日本語 T_{EX} の機能についての詳細は、『日本語 T_{EX} テクニカルブック I』を参照してください。

なお、このファイルのコード部分は、以前のバージョンで配布された kinsoku.tex と同一です。

 $1 \langle *plcore \rangle$

18 禁則

ある文字を行頭禁則の対象にするには、\prebreakpenaltyに正の値を指定します。 ある文字を行末禁則の対象にするには、\postbreakpenaltyに正の値を指定しま す。数値が大きいほど、行頭、あるいは行末で改行されにくくなります。

18.1 半角文字に対する禁則

ここでは、半角文字に対する禁則の設定を行なっています。

- 2 \prebreakpenalty'!=10000
- 3 \prebreakpenalty' "=10000
- 4 \postbreakpenalty'\#=500
- 5 \postbreakpenalty'\\$=500
- 6 \prebreakpenalty'\%=500
- 7 \prebreakpenalty'\&=500
- $9 \verb|\prebreakpenalty", = 10000$
- 10 \prebreakpenalty')=10000
- 11 \postbreakpenalty'(=10000
- $12 \text{ \prebreakpenalty'} = 500$
- 13 \prebreakpenalty'+=500
- 14 \prebreakpenalty'-=10000
- 15 \prebreakpenalty'.=10000
- $16 \prescript{\prescript{\prescript{16}}{\prescript{\$
- 17 \prebreakpenalty'/=500
- 18 \prebreakpenalty';=10000
- 19 \prebreakpenalty'?=10000
- 20 \prebreakpenalty':=10000
- $21 \prebreakpenalty']=10000$
- $22\postbreakpenalty'[=10000$

18.2 全角文字に対する禁則

ここでは、全角文字に対する禁則の設定を行なっています。

```
23 \text{ \prebreakpenalty'}, =10000
24 \prebreakpenalty' = 10000
25 \prebreakpenalty', =10000
26 \prebreakpenalty'. =10000
27 \prebreakpenalty' :=10000
28 \prebreakpenalty': =10000
29 \prebreakpenalty'; =10000
30 \text{ \label{eq:condition}} =10000
31 \prebreakpenalty' ! =10000
32 \prebreakpenalty\jis"212B=10000
33 \prebreakpenalty\jis"212C=10000
34 \prebreakpenalty\jis"212D=10000
35 \postbreakpenalty\jis"212E=10000
36 \prebreakpenalty\jis"2139=10000
37 \prebreakpenalty\jis"2144=250
38 \prebreakpenalty\jis"2145=250
39 \postbreakpenalty\jis"2146=10000
40 \prebreakpenalty\jis"2147=5000
41 \postbreakpenalty\jis"2148=5000
42 \verb|\prebreakpenalty | jis" 2149 = 5000
43 \prebreakpenalty() =10000
44 \postbreakpenalty' (=10000
45 \prebreakpenalty' = 10000
46 \postbreakpenalty' {=10000
47 \prebreakpenalty' = 10000
48 \postbreakpenalty' [=10000
49 \postbreakpenalty' '=10000 50 \prebreakpenalty' '=10000
51 \postbreakpenalty\jis"214C=10000
52 \prebreakpenalty\jis"214D=10000
53 \postbreakpenalty\jis"2152=10000
54 \prebreakpenalty\jis"2153=10000
55 \postbreakpenalty\jis"2154=10000
56 \prebreakpenalty\jis"2155=10000
57 \postbreakpenalty\jis"2156=10000
58 \prebreakpenalty\jis"2157=10000
59 \postbreakpenalty\jis"2158=10000
60 \prebreakpenalty\jis"2159=10000
61 \postbreakpenalty\jis"215A=10000
62 \prebreakpenalty\jis"215B=10000
63 \prebreakpenalty' -= 10000
64 \text{ \label{eq:condition}} +=200
65 \text{ \prebreakpenalty'} = 200
66 \prebreakpenalty'==200
67 \postbreakpenalty' #=200
68 \postbreakpenalty' $ =200
```

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
69 \prebreakpenalty '%=200
70 \prebreakpenalty &=200
71 \prebreakpenalty' &=150
72 \prebreakpenalty' w=150
73 \prebreakpenalty 'う=150
74 \prebreakpenalty'え=150
75 \prebreakpenalty' お=150
76 \prebreakpenalty'\supset=150
77 \prebreakpenalty' ≈=150
78 \prebreakpenalty' <math>p=150
79 \prebreakpenalty' \sharp =150
80 \prebreakpenalty\jis"246E=150
81 \prebreakpenalty' 7 = 150
82 \prebreakpenalty' \( \tau = 150 \)
83 \prebreakpenalty'ゥ=150
84 \prebreakpenalty' x=150
85 \prebreakpenalty'オ=150
86 \prebreakpenalty'y=150
87 \prebreakpenalty' \forall =150
88 \prebreakpenalty' = 150
89 \prebreakpenalty' \exists =150
90 \prebreakpenalty\jis"256E=150
91 \prebreakpenalty\jis"2575=150
92 \prebreakpenalty\jis"2576=150
```

19 文字間のスペース

ある英字の前後と、その文字に隣合う漢字に挿入されるスペースを制御するには、\xspcode を用います。

ある漢字の前後と、その文字に隣合う英字に挿入されるスペースを制御するには、 \inhibitxspcode を用います。

19.1 ある英字と前後の漢字の間の制御

ここでは、英字に対する設定を行なっています。 指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の漢字の間での処理を禁止する。
- 1 直前の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 2 直後の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 3 前後の漢字との間でのスペースの挿入を許可する。

```
93 \xspcode'(=1
94 \xspcode')=2
95 \xspcode'[=1
96 \xspcode']=2
```

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
97 \xspcode''=1

98 \xspcode''=2

99 \xspcode';=2

100 \xspcode',=2

101 \xspcode'.=2
```

T1 などの 8 ビットフォントエンコーディングで 128–255 の文字は欧文文字ですので、周囲の和文文字との間に \xkanjiskip が挿入される必要があります。そこで、奥村さんの jsclasses や田中さんの upI 4 TeX と同等の対処をします。

```
102 \xspcode"80=3
103 \xspcode"81=3
104 \xspcode"82=3
105 \xspcode"83=3
106 \xspcode"84=3
107 \xspcode"85=3
108 \xspcode"86=3
109 \xspcode"87=3
110 \xspcode"88=3
111 \xspcode"89=3
112 \xspcode"8A=3
113 \xspcode"8B=3
114 \times c=3
115 \xspcode"8D=3
116 \xspcode"8E=3
117 \xspcode"8F=3
118 \xspcode"90=3
119 \xspcode"91=3
120 \xspcode"92=3
121 \xspcode"93=3
122 \xspcode"94=3
123 \xspcode"95=3
124 \xspcode"96=3
125 \xspcode"97=3
126 \xspcode"98=3
127 \xspcode"99=3
128 \xspcode"9A=3
129 \xspcode"9B=3
130 \xspcode"9C=3
131 \times pcode"9D=3
132 \times 9E=3
133 \xspcode"9F=3
134 \times 2000
135 \xspcode"A1=3
136 \xspcode"A2=3
137 \xspcode"A3=3
138 \xspcode"A4=3
139 \xspcode"A5=3
140 \xspcode"A6=3
```

141 \xspcode"A7=3

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
142 \xspcode"A8=3
143 \xspcode"A9=3
144 \xspcode"AA=3
145 \times B=3
146 \spcode"AC=3
147 \xspcode"AD=3
148 \times E=3
149 \xspcode"AF=3
150 \space{B0=3}
151 \times B1=3
152 \xspcode"B2=3
153 \times B3=3
154 \times B4=3
155 \times B5=3
156 \xspcode"B6=3
157 \times B7=3
158 \xspcode"B8=3
159 \xspcode"B9=3
160 \xspcode"BA=3
161 \xspcode"BB=3
162 \xspcode"BC=3
163 \times BD=3
164 \xspcode"BE=3
165 \xspcode"BF=3
166 \xspcode"C0=3
167 \times C1=3
168 \space "C2=3
169 \xspcode"C3=3
170 \xspcode"C4=3
171 \xspcode"C5=3
172 \spcode"C6=3
173 \xspcode"C7=3
174 \times code"C8=3
175 \xspcode"C9=3
176 \xspcode"CA=3
177 \xspcode"CB=3
178 \spcode"CC=3
179 \xspcode"CD=3
180 \xspcode"CE=3
181 \xspcode"CF=3
182 \times D0=3
183 \times D1=3
184 \times D2=3
185 \times D3=3
186 \times D4=3
187 \xspcode"D5=3
188 \times D6=3
189 \space"D7=3
190 \xspcode"D8=3
191 \xspcode"D9=3
```

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
192 \xspcode"DA=3
193 \xspcode"DB=3
194 \xspcode"DC=3
195 \xspcode"DD=3
196 \xspcode"DE=3
197 \xspcode"DF=3
198 \xspcode"E0=3
199 \xspcode"E1=3
200 \space"E2=3
201 \times E3=3
202 \xspcode"E4=3
203 \times E5=3
204 \spcode"E6=3
205 \space "E7=3
206 \xspcode"E8=3
207 \times 500
208 \xspcode"EA=3
209 \xspcode"EB=3
210 \xspcode"EC=3
211 \xspcode"ED=3
212 \xspcode"EE=3
213 \xspcode"EF=3
214 \spcode"F0=3
215 \sprace "F1=3
216 \xspcode"F2=3
217 \xspcode"F3=3
218 \spcode"F4=3
219 \xspcode"F5=3
220 \xspcode"F6=3
221 \sprace{1}{221} = 3
222 \spcode"F8=3
223 \xspcode"F9=3
224 \spcode"FA=3
225 \times FB=3
226 \space{"FC=3}
227 \xspcode"FD=3
228 \xspcode"FE=3
229 \xspcode"FF=3
```

19.2 ある漢字と前後の英字の間の制御

ここでは、漢字に対する設定を行なっています。 指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 1 直前の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 2 直後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 3 前後の英字との間でのスペースの挿入を許可する。

File f: kinsoku.dtx Date: 2017/08/05 Version v1.0b

```
230 \inhibitxspcode', =1
231 \inhibitxspcode' . =1
232 \inhibitxspcode', =1
233 \inhibitxspcode'. =1
234 \inhibitxspcode'; =1
235 \inhibitxspcode'?=1
236 \inhibitxspcode') =1
237 \inhibitxspcode' (=2
238 \inhibitxspcode'] =1
239 \inhibitxspcode' [=2
240 \inhibitxspcode' } =1
241 \inhibitxspcode' {=2
242 \inhibitxspcode' =2
243 \inhibitxspcode' '=1
244 \inhibitxspcode' =2
245 \inhibitxspcode' "=1
246 \inhibitxspcode' [=2
247 \in 247 = 1
248 \inhibitxspcode' \langle =2
249 \inhibitxspcode'\rangle =1
250 \inhibitxspcode' \( = 2
251 \ \ ) = 1
252 \inhibitxspcode' \[ = 2 \]
253 \inhibitxspcode' \] =1
254\ \mbox{\sc inhibitxspcode}\ \mbox{\sc $\mathbb{F}$=2}
255 \inhibitxspcode'\mathbb{J} =1
256 \inhibitxspcode' [=2
257 \inhibitxspcode'] =1
_{259} \inhibitxspcode' \sim=0
260 \inhibitxspcode'...=0
261 \in \text{inhibitxspcode'} = 0
262 \inhibitxspcode' =1
263 \inhibitxspcode' =1
264 \inhibitxspcode' =1
_{265} \langle /plcore \rangle
```

$egin{array}{l} egin{array}{l} egin{array}$

このファイルは、pIstTEX 2_{ε} の標準クラスファイルです。lphaDOCSTRIP プログラムによって、横組用のクラスファイルと縦組用のクラスファイルを作成することができます。

次に DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示します。

オプション	意味
article	article クラスを生成
report	report クラスを生成
book	book クラスを生成
10pt	10pt サイズの設定を生成
$11 \mathrm{pt}$	11pt サイズの設定を生成
12pt	12pt サイズの設定を生成
bk	book クラス用のサイズの設定を生成
tate	縦組用の設定を生成
yoko	横組用の設定を生成

20 オプションスイッチ

ここでは、後ほど使用するいくつかのコマンドやスイッチを定義しています。

\c@@paper 用紙サイズを示すために使います。A4, A5, B4, B5 用紙はそれぞれ、1, 2, 3, 4 として表されます。

- $_1 \ \langle * \mathsf{article} \ | \ \mathsf{report} \ | \ \mathsf{book} \rangle$
- 2 \newcounter{@paper}

\ifClandscape 用紙を横向きにするかどうかのスイッチです。デフォルトは、縦向きです。

3 \newif\if@landscape \@landscapefalse

\@ptsize 組版をするポイント数の一の位を保存するために使います。0, 1, 2 のいずれかです。

 ${\tt 4 \newcommand{\Qptsize}{\tt \{}}$

\if@restonecol 二段組時に用いるテンポラリスイッチです。

 $5 \neq 5$

\if@titlepage タイトルページやアブストラクト (概要)を独立したページにするかどうかのスイッチです。report と book スタイルのデフォルトでは、独立したページになります。

6 \newif\if@titlepage

File g: jclasses.dtx

7 (article)\@titlepagefalse 8 (report | book) \@titlepagetrue

\ifCopenright chapter レベルを右ページからはじめるかどうかのスイッチです。横組では奇数ペー ジ、縦組では偶数ページから始まることになります。report クラスのデフォルトは、 "no" です。book クラスのデフォルトは、"yes" です。

9 (!article) \newif \if@openright

\ifCopenleft chapter レベルを左ページからはじめるかどうかのスイッチです。日本語 TrX 開発 コミュニティ版で新たに追加されました。横組では偶数ページ、縦組では奇数ペー ジから始まることになります。report クラスと book クラスの両方で、デフォルト は "no" です。

10 (!article) \newif \if@openleft

\if@mainmatter スイッチ \@mainmatter が真の場合、本文を処理しています。このスイッチが偽の 場合は、\chapter コマンドは見出し番号を出力しません。

11 $\langle book \rangle \setminus f$ (mainmatter f)

\hour

\minute

- 12 \hour\time \divide\hour by 60\relax
- 13 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
- 14 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta

\if@stysize pIATpX 2ε 2.09 互換モードで、スタイルオプションに a4j,a5p などが指定されたと きの動作をエミュレートするためのフラグです。

15 \newif\if@stysize \@stysizefalse

\if@enablejfam 日本語ファミリを宣言するために用いるフラグです。

16 \newif\if@enablejfam \@enablejfamtrue

和欧文両対応の数式文字コマンドを有効にするときに用いるフラグです。マクロの 展開順序が複雑になるのを避けるため、デフォルトでは false としてあります。

17 \newif\if@mathrmmc \@mathrmmcfalse

21 オプションの宣言

ここでは、クラスオプションの宣言を行なっています。

21.1 用紙オプション

```
用紙サイズを指定するオプションです。
18 \DeclareOption{a4paper}{\setcounter{@paper}{1}%
    \setlength\paperheight {297mm}%
20 \setlength\paperwidth {210mm}}
21 \DeclareOption{a5paper}{\setcounter{@paper}{2}%
22 \setlength\paperheight {210mm}
23 \setlength\paperwidth {148mm}}
24 \DeclareOption{b4paper}{\setcounter{@paper}{3}%
25 \setlength\paperheight {364mm}
26 \setlength\paperwidth {257mm}}
27 \DeclareOption{b5paper}{\setcounter{@paper}{4}%
   \setlength\paperheight {257mm}
   \setlength\paperwidth {182mm}}
ドキュメントクラスに、以下のオプションを指定すると、通常よりもテキストを組
み立てる領域の広いスタイルとすることができます。
31 \DeclareOption{a4j}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue}
    \setlength\paperheight {297mm}%
    \setlength\paperwidth {210mm}}
\setlength\paperheight {210mm}
    \setlength\paperwidth {148mm}}
\setlength\paperheight {364mm}
    \setlength\paperwidth {257mm}}
40 \DeclareOption{b5j}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
    \setlength\paperheight {257mm}
42
    \setlength\paperwidth {182mm}}
43 %
44 \DeclareOption{a4p}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue}
45 \setlength\paperheight {297mm}%
    \setlength\paperwidth {210mm}}
47 \DeclareOption{a5p}{\setcounter{@paper}{2}\@stysizetrue
    \setlength\paperheight {210mm}
49 \setlength\paperwidth {148mm}}
50 \DeclareOption{b4p}{\setcounter{@paper}{3}\@stysizetrue
   \setlength\paperheight {364mm}
52 \setlength\paperwidth {257mm}}
53 \DeclareOption{b5p}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
   \setlength\paperheight {257mm}
   \setlength\paperwidth {182mm}}
```

21.2 サイズオプション

基準となるフォントの大きさを指定するオプションです。

 $56 \ightharpoonup 56 \ightharpoonup 56 \ightharpoonup 36 \ightha$

```
57 \renewcommand{\@ptsize}{0}
58 \else
59 \DeclareOption{10pt}{\renewcommand{\@ptsize}{0}}
60 \fi
61 \DeclareOption{11pt}{\renewcommand{\@ptsize}{1}}
62 \DeclareOption{12pt}{\renewcommand{\@ptsize}{2}}
```

21.3 横置きオプション

このオプションが指定されると、用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

```
63 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue
```

- 64 \setlength\@tempdima{\paperheight}%
- 65 \setlength\paperheight{\paperwidth}%
- 66 \setlength\paperwidth{\@tempdima}}

21.4 トンボオプション

tombow オプションが指定されると、用紙サイズに合わせてトンボを出力します。このとき、トンボの脇に DVI を作成した日付が出力されます。作成日付の出力を抑制するには、tombow ではなく、tombo と指定をします。

ジョブ情報の書式は元々filename: 2017/3/5(13:3) のような書式でしたが、jsclasses にあわせて桁数固定の filename (2017-03-05 13:03) に直しました。

```
67 \DeclareOption{tombow}{%
```

- 68 \tombowtrue \tombowdatetrue
- 69 \setlength{\Qtombowwidth}{.1\pQ}%
- 70 \@bannertoken{%
- 72 \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
- 73 \maketombowbox}
- 74 \DeclareOption{tombo}{%
- 75 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 76 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
- 77 \maketombowbox}

21.5 面付けオプション

このオプションが指定されると、トンボオプションを指定したときと同じ位置に文章を出力します。作成した DVI をフィルムに面付け出力する場合などに指定をします。

78 \DeclareOption{mentuke}{%

- 79 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 80 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
- 81 \maketombowbox}

21.6 組方向オプション

このオプションが指定されると、縦組で組版をします。

21.7 両面、片面オプション

twoside オプションが指定されると、両面印字出力に適した整形を行ないます。

```
86 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse}
```

87 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue}

21.8 二段組オプション

二段組にするかどうかのオプションです。

```
88 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
```

89 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}

21.9 表題ページオプション

Otitlepage が真の場合、表題を独立したページに出力します。

```
90 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
```

91 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}

21.10 右左起こしオプション

chapter を右ページあるいは左ページからはじめるかどうかを指定するオプションです。openleft オプションは日本語 T_FX 開発コミュニティによって追加されました。

21.11 数式のオプション

leqno を指定すると、数式番号を数式の左側に出力します。fleqn を指定するとディスプレイ数式を左揃えで出力します。

```
99 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
100 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}}
```

21.12 参考文献のオプション

参考文献一覧を"オープンスタイル"の書式で出力します。これは各ブロックが改行で区切られ、\bibindentのインデントが付く書式です。

101 \DeclareOption{openbib}{%

参考文献環境内の最初のいくつかのフックを満たします。

```
102 \AtEndOfPackage{%
103 \renewcommand\@openbib@code{%
104 \advance\leftmargin\bibindent
105 \itemindent -\bibindent
106 \listparindent \itemindent
107 \parsep \z@
108 }%
```

そして、\newblockを再定義します。

109 \renewcommand\newblock{\par}}}

21.13 日本語ファミリ宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字

 $pIFT_EX 2_{\varepsilon}$ は、このあと、数式モードで直接、日本語を記述できるように数式ファミリを宣言します。しかし、 T_EX で扱える数式ファミリの数が 16 個なので、その他のパッケージと組み合わせた場合、数式ファミリを宣言する領域を超えてしまう場合があるかもしれません。そのときには、残念ですが、そのパッケージか、数式内に直接、日本語を記述するのか、どちらかを断念しなければなりません。このクラスオプションは、数式内に日本語を記述するのをあきらめる場合に用います。

disablejfam オプションを指定しても \textmc や \textgt などを用いて、数式内に日本語を記述することは可能です。

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる補足: コミュニティ版 pIFT_{EX} の 2016/11/29 以降の版では、 $e-pT_{EX}$ の拡張機能(通称「旧 FAM256 パッチ」)が利用可能な場合に、IFT_{EX} の機能で宣言できる数式ファミリ(数式アルファベット)の上限を 256 個に増やしています。したがって、新しい環境では disablejfam を指定しなくても上限を超えることが起きにくくなっています。

mathrmmc オプションは、\mathrm と \mathbf を和欧文両対応にするためのクラスオプションです。

```
110 \if@compatibility
111 \@mathrmmctrue
112 \else
113 \DeclareOption{disablejfam}{\@enablejfamfalse}
114 \DeclareOption{mathrmmc}{\@mathrmmctrue}
115 \fi
```

21.14 ドラフトオプション

draft オプションを指定すると、オーバフルボックスの起きた箇所に、5pt の罫線が引かれます。

```
116 \DeclareOption{draft}{\setlength\overfullrule{5pt}}
```

- 117 \DeclareOption{final}{\setlength\overfullrule{Opt}}
- 118 (/article | report | book)

21.15 オプションの実行

```
オプションの実行、およびサイズクラスのロードを行ないます。
```

```
119 (*article | report | book)
```

- 120 (*article)
- 121 \(\tate\)\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,tate}
- 122 (yoko) \ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final}
- 123 (/article)
- 124 (*report)
- 125 (tate) \ExecuteOptions{a4paper, 10pt, oneside, onecolumn, final, openany, tate}
- $127 \langle / \text{report} \rangle$
- $128 \langle *book \rangle$
- 129 (tate) \ExecuteOptions {a4paper, 10pt, twoside, one column, final, open right, tate}
- 130 (yoko) \ExecuteOptions{a4paper,10pt,twoside,onecolumn,final,openright}
- 131 (/book)
- 132 \ProcessOptions\relax
- 133 (book & tate) \input{tbk1\@ptsize.clo}
- 134 (!book & tate) \input{tsize1\@ptsize.clo}
- 135 $\langle book \& yoko \rangle \setminus input{jbk1 \setminus @ptsize.clo}$
- 136 (!book & yoko)\input{jsize1\@ptsize.clo}

縦組用クラスファイルの場合は、ここで plext.sty も読み込みます。

- 137 $\langle tate \rangle \setminus RequirePackage\{plext\}$
- 138 (/article | report | book)

22 フォント

ここでは、LATEX のフォントサイズコマンドの定義をしています。フォントサイズコマンドの定義は、次のコマンドを用います。

 $\ensuremath{\texttt{Qsetfontsize}}\sl baselineskip \rangle$

〈font-size〉これから使用する、フォントの実際の大きさです。

 $\langle baselineskip \rangle$ 選択されるフォントサイズ用の通常の \baselineskip の値です (実際は、\baselinestretch * $\langle baselineskip \rangle$ の値です)。

数値コマンドは、次のように IPTEX カーネルで定義されています。

\normalsize 基本サイズとするユーザレベルのコマンドは\normalsizeです。IATEX の内部では \@normalsize \@normalsize を使用します。

\normalsize マクロは、\abovedisplayskip と \abovedisplayshortskip、および \belowdisplayshortskip の値も設定をします。\belowdisplayskip は、つねに \abovedisplayskip と同値です。

また、リスト環境のトップレベルのパラメータは、つねに \@listI で与えられます。

```
139 (*10pt | 11pt | 12pt)
140 \renewcommand{\normalsize}{%
141 (10pt & yoko)
                    \@setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
142 (11pt & yoko)
                    \@setfontsize\normalsize\@xipt{15.5}%
143 (12pt & yoko)
                   \@setfontsize\normalsize\@xiipt{16.5}%
144 \langle 10pt \& tate \rangle
                   \@setfontsize\normalsize\@xpt{17}%
145 \langle 11pt \& tate \rangle
                   \@setfontsize\normalsize\@xipt{17}%
146 (12pt & tate)
                   \@setfontsize\normalsize\@xiipt{18}%
147 (*10pt)
     \abovedisplayskip 10\p0 \plus2\p0 \plus5\p0
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
     \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
151 (/10pt)
152 (*11pt)
     \abovedisplayskip 11\p@ \@plus3\p@ \@minus6\p@
153
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
     \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
156 \langle/11pt\rangle
157 (*12pt)
     \abovedisplayskip 12\p@ \@plus3\p@ \@minus7\p@
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
     \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
160
161 (/12pt)
162
      \belowdisplayskip \abovedisplayskip
      \let\@listi\@listI}
```

ここで、ノーマルフォントを選択し、初期化をします。このとき、縦組モードならば、デフォルトのエンコードを変更します。

- 164 (tate)\def\kanjiencodingdefault{JT1}%
- 165 $\langle tate \rangle \ kanjiencoding{\ kanjiencodingdefault} \%$
- 166 \normalsize

\normalsize を robust にします。すぐ上で \DeclareRobustCommand とせずに、 カーネルの定義を \renewcommand した後に \MakeRobust を使っている理由は、ログ

```
に LaTeX Info: Redefining \normalsize on input line ... というメッセー
                 ジを出したくないからです。ただし、latexrelease パッケージで 2015/01/01 より昔
                の日付に巻き戻っている場合は \MakeRobust が定義されていません。
                167 \ifx\MakeRobust\@undefined \else
                168 \MakeRobust\normalsize
                169 \fi
    \Cht 基準となる長さの設定をします。これらのパラメータは plfonts.dtx で定義されて
    \Cdp います。基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1)から「漢」(JIS コー
    \Cwd ド 0x3441) へ変更しました。
    \Cvs 170 \setbox0\hbox{\char\jis"3441}%
    \Chs 171 \setlength\Cht{\ht0}
                172 \setlength\Cdp\{\dp0\}
                173 \setlength\Cwd{\wd0}
                174 \setlength\Cvs{\baselineskip}
                175 \setlength\Chs{\wd0}
                176 \setbox0=\box\voidb@x
\small \small コマンドの定義は、\normalsize に似ています。こちらはカーネルで未定
                義なので、直接 \DeclareRobustCommand で定義します。
                177 \DeclareRobustCommand{\small}{%
                178 (*10pt)
                          \@setfontsize\small\@ixpt{11}%
                179
                           \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
                           181
                           182
                           \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                183
                                                   \topsep 4\p@ \plus2\p@ \eminus2\p@
                184
                185
                                                   \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
                186
                                                   \itemsep \parsep}%
                187 (/10pt)
                188 (*11pt)
                          \@setfontsize\small\@xpt\@xiipt
                           \label{local_problem} $$ \above displayskip 10 \leq \ensuremath{p@ \ensuremath{plus2\p@ \ensuremath{p@ \ensuremath{p@ \ensuremath{pm. \ensuremath{pm. \ensuremath{p. \ensure
                190
                           \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
                191
                           \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
                192
                           \label{leftmargin} $$ \ef{0:listi{leftmargin} in} $$ \ef{0:listi{leftmargin} in} $$
                193
                                                   \topsep 6\p@ \plus2\p@ \eminus2\p@
                194
                                                   \parsep 3\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
                195
                                                   \itemsep \parsep}%
                196
                197 (/11pt)
                198 (*12pt)
                         \@setfontsize\small\@xipt{13.6}%
                199
                         200
                201
                         \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
                          \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
                202
                          \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
```

```
topsep 9\\p@ \\p@ \\plus3\\p@ \\pminus5\\p@
              204
                              \parsep 4.5\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
              205
                              \itemsep \parsep}%
              206
              207 (/12pt)
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
              208
             \footnotesize コマンドの定義は、\normalsize に似ています。こちらも直接
\footnotesize
              \DeclareRobustCommand で定義します。
              209 \DeclareRobustCommand{\footnotesize}{%
              210 (*10pt)
              211
                   \@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
              212
                   \abovedisplayskip 6\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
                   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus\p@
                   \belowdisplayshortskip 3\p@ \@plus\p@ \@minus2\p@
                   \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
              216
                              \topsep 3\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
                              \label{local_problem} $$ \operatorname{poly} 2\pi \ \Omega \ \Omega \ \Omega \ \Omega \ \ \Omega $$
              217
              218
                              \itemsep \parsep}%
              219 (/10pt)
              220 (*11pt)
              221
                  \@setfontsize\footnotesize\@ixpt{11}%
                   \abovedisplayskip 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
                   \above displays hortskip \z @ \plus \p @
              223
                   224
                   \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
              226
                              \topsep 4\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
              227
                              \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
              228
                              \itemsep \parsep}%
              229 (/11pt)
              230 (*12pt)
              231
                  \@setfontsize\footnotesize\@xpt\@xiipt
                   232
                   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
              233
                   \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
              234
                   \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                              237
                              \parsep 3\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
              238
                              \itemsep \parsep}%
              _{239}~\langle/12pt\rangle
                  \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
 \scriptsize これらは先ほどのマクロよりも簡単です。これらはフォントサイズを変更するだけ
       \tiny で、リスト環境とディスプレイ数式のパラメータは変更しません。
             241 (*10pt)
      \large
              242 \DeclareRobustCommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
      \Large
              243 \DeclareRobustCommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
      \LARGE
              244 \DeclareRobustCommand{\large}{\@setfontsize\large\@xiipt{17}}
              245 \DeclareRobustCommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
       \huge
       \Huge
```

```
246 \DeclareRobustCommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
                                                                                                                                             247 \label{localize} \label{localize} \label{localize} \\ 247 \label{localize} \label{localize} \label{localize} \label{localize} \\ 247 \label{localize} \labe
                                                                                                                                             248 \ensuremath{\label{logelength} \ensuremath{\labelength} \en
                                                                                                                                             249 (/10pt)
                                                                                                                                             250 (*11pt)
                                                                                                                                             251 \DeclareRobustCommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viiipt{9.5}}
                                                                                                                                             252 \ensuremath{\lower.pmand{\tiny}{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\contint{\
                                                                                                                                             253 \ensuremath{\large}{\command{\large}} \ensuremath{\large}{\comma
                                                                                                                                             254 \ensuremath{\large}{\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\large\lar
                                                                                                                                             256 \label{localize} $$ \end{\mathbf \def} \ \cline{28} $$ \end{\mathbf \def} $$ \end{\mathbf 
                                                                                                                                             257 \DeclareRobustCommand{\Huge}{\@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
                                                                                                                                             258 (/11pt)
                                                                                                                                             259 (*12pt)
                                                                                                                                             261 \DeclareRobustCommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vipt\@viipt}
                                                                                                                                             262 \end{Command} \end{\large} {\tt Qsetfontsize} \end{\large} \end{Cxivpt} \end{\large} \end{Cxivpt} \end{Cx
                                                                                                                                             264 \label{large} \label{lar
                                                                                                                                             265 \ensuremath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmath{\lowernthmat
                                                                                                                                             266 \let\Huge=\huge
                                                                                                                                             267 (/12pt)
                                                                                                                                             268 (/10pt | 11pt | 12pt)
                                                                                                                                     このクラスファイルが意図する和文スケール値(1zw÷要求サイズ)を表す実数値
\Cjascale
                                                                                                                                                マクロ \Cjascale を定義します。この pLATFX 2g の標準クラスでは、フォーマット
                                                                                                                                             作成時に読み込まれたフォント定義ファイル(jy1mc.fd / jy1gt.fd / jt1mc.fd /
                                                                                                                                             jt1gt.fd) での和文スケール値がそのまま有効ですので、これは 0.962216 です。
                                                                                                                                             269 (*article | report | book)
                                                                                                                                             270 \def\Cjascale{0.962216}
                                                                                                                                             271 \langle / article \mid report \mid book \rangle
                                                                                                                                                                                                                                        レイアウト
                                                                                                                                             23
```

23.1 用紙サイズの決定

```
\columnsep は、二段組のときの、左右(あるいは上下)の段間の幅です。このス
\columnseprule ペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

272 ⟨*article|report|book⟩

273 \if@stysize

274 ⟨tate⟩ \setlength\columnsep{3\Cwd}

275 ⟨yoko⟩ \setlength\columnsep{2\Cwd}

276 \else

277 \setlength\columnsep{10\p0}

278 \fi

279 \setlength\columnseprule{0\p0}
```

23.2 段落の形

\lineskip これらの値は、行が近付き過ぎたときの TFX の動作を制御します。

\normallineskip 280 \setlength\lineskip{1\p0}

281 \setlength\normallineskip{1\p0}

\baselinestretch これは、\baselineskip の倍率を示すために使います。デフォルトでは、何もし

ません。このコマンドが "empty" でない場合、\baselineskip の指定の plus や

minus 部分は無視されることに注意してください。

282 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間に挿入される、縦方向の追加スペースです。\parindent は段落

\parindent の先頭の字下げ幅です。

283 \setlength\parskip{0\p0 \@plus \p0}

 $284 \verb|\setlength\parindent{1\Cwd}|$

\smallskipamount これら3つのパラメータの値は、LATEX カーネルの中で設定されています。これら

\medskipamount はおそらく、サイズオプションの指定によって変えるべきです。しかし、LATeX 2.09

acksim eta LAT $_{
m E\!X}\, 2_{arepsilon}$ の以前のリリースの両方との互換性を保つために、これらはまだ同じ値

としています。

285 $\langle *10pt \mid 11pt \mid 12pt \rangle$ 286 $\langle *10pt \mid 11pt \mid 12pt \rangle$ 286 $\langle *10pt \mid 11pt \mid 12pt \rangle$

287 \setlength\medskipamount{6\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}

288 \setlength\bigskipamount{12\p0 \Oplus 4\p0 \Ominus 4\p0}

289 (/10pt | 11pt | 12pt)

\@lowpenalty \nopagebreak と \nolinebreak コマンドは、これらのコマンドが置かれた場所に、

\@medpenalty ペナルティを起いて、分割を制御します。置かれるペナルティは、コマンドの引数に

\Chighpenalty よって、\Clowpenalty, \Cmedpenalty, \Chighpenalty のいずれかが使われます。

290 \@lowpenalty 51

 $291 \mbox{\em 0medpenalty} 151$

292 \@highpenalty 301

293 (/article | report | book)

23.3 ページレイアウト

23.3.1 縦方向のスペース

\headheight \headheight は、ヘッダが入るボックスの高さです。\headsep は、ヘッダの下端

\headsep と本文領域との間の距離です。\topskip は、本文領域の上端と1行目のテキスト

\topskip のベースラインとの距離です。

294 (*10pt | 11pt | 12pt)

 $295 \setlength\headheight{12\p0}$

296 **(*tate)**

File g: jclasses.dtx

```
298 \ifnum\c@@paper=2 % A5
                     \setlength\headsep{6mm}
            300
                 \else % A4, B4, B5 and other
                    \setlength\headsep{8mm}
            301
            302
            303 \else
                     \setlength\headsep{8mm}
            304
            305 \fi
            306 \langle / tate \rangle
            307 (*yoko)
            308 \langle !bk \rangle \setlength \headsep{25\p0}
            309 (10pt & bk)\setlength\headsep{.25in}
            310 \langle 11pt \& bk \rangle \setminus setlength \setminus headsep \{.275in\}
            311 \langle 12pt \& bk \rangle \setminus setlength \setminus headsep \{.275in\}
            312 (/yoko)
            313 \setlength\topskip{1\Cht}
\footskip \footskip は、本文領域の下端とフッタの下端との距離です。フッタのボックスの
            高さを示す、\footheight は削除されました。
            314 <tate \setlength\footskip{14mm}
            315 (*yoko)
            316 \langle !bk \rangle \setlength footskip{30p@}
            317 (10pt & bk)\setlength\footskip{.35in}
            318 (11pt & bk)\setlength\footskip{.38in}
```

\maxdepth T_{EX} のプリミティブレジスタ \maxdepth は、\topskip と同じような働きをします。 \@maxdepth レジスタは、つねに \maxdepth のコピーでなくてはいけません。これ は \begin{document}の内部で設定されます。 T_{EX} と PT_{EX} 2.09 では、\maxdepth は 4pt に固定です。 PT_{EX} 2 ε では、\maxdepth+\topskip を基本サイズの 1.5 倍に したいので、\maxdepth を \topskip の半分の値で設定します。

```
321 \if@compatibility
322 \setlength\maxdepth{4\p@}
323 \else
324 \setlength\maxdepth{.5\topskip}
325 \fi
```

319 $\langle 12pt \& bk \rangle \setminus \{12pt \& bk \} \setminus \{12pt \& bk \}$

23.3.2 本文領域

320 (/yoko)

297 \if@stysize

\textheight と \textwidth は、本文領域の通常の高さと幅を示します。縦組でも横組でも、"高さ"は行数を、"幅"は字詰めを意味します。後ほど、これらの長さに \topskip の値が加えられます。

\textwidth 基本組の字詰めです。

互換モードの場合: 326 \if@compatibility 互換モード:a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定: \if@stysize \ifnum\c@@paper=2 % A5 328 \if@landscape 330 (10pt & yoko) $\stingth\textwidth{47\Cwd}$ 331 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{42\Cwd} 332 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{40\Cwd} 333 (10pt & tate) $\stingth\textwidth{27\Cwd}$ 334 (11pt & tate) \setlength\textwidth{25\Cwd} $\stingth\textwidth{23\Cwd}$ 335 (12pt & tate) 336 \else 337 (10pt & yoko) \setlength\textwidth{28\Cwd} 338 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{25\Cwd} 339 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{24\Cwd} 340 **(10pt & tate)** $\stingth\textwidth{46\Cwd}$ 341 **(11pt** & tate) $\setlength\textwidth{42\Cwd}$ 342 (12pt & tate) $\stingth\textwidth{38\Cwd}$ 343 \fi \else\ifnum\c@@paper=3 % B4 344 \if@landscape 345 $\stingth\textwidth{75\Cwd}$ 346 (10pt & yoko) 347 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{69\Cwd} 348 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{63\Cwd} 349 (10pt & tate) \setlength\textwidth{53\Cwd} 350 (11pt & tate) \setlength\textwidth{49\Cwd} 351 **(12pt & tate)** $\stingth\textwidth{44\Cwd}$ 352 \else 353 (10pt & yoko) $\stingth\textwidth{60\Cwd}$ 354 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{55\Cwd} 355 (12pt & yoko) $\stingth\textwidth{50\Cwd}$ $356 \langle 10pt \& tate \rangle$ $\stingth\textwidth{85\Cwd}$ 357 (11pt & tate) \setlength\textwidth{76\Cwd} 358 (12pt & tate) $\stingth\textwidth{69\Cwd}$ 359 \fi \else\ifnum\c@@paper=4 % B5 \if@landscape 362 (10pt & yoko) $\stingth\textwidth{60\Cwd}$ 363 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{55\Cwd} 364 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{50\Cwd} 365 (10pt & tate) \setlength\textwidth{34\Cwd} $366 \langle 11pt \& tate \rangle$ \setlength\textwidth{31\Cwd} $_{367}$ $\langle 12pt \& tate \rangle$ \setlength\textwidth{28\Cwd} \else 368 369 (10pt & yoko) \setlength\textwidth{37\Cwd} 370 (11pt & yoko) \setlength\textwidth{34\Cwd} 371 (12pt & yoko) \setlength\textwidth{31\Cwd}

\setlength\textwidth{55\Cwd}

372 (10pt & tate)

```
373 (11pt & tate)
                       \setlength\textwidth{51\Cwd}
374 (12pt & tate)
                       \setlength\textwidth{47\Cwd}
         \fi
376
       \else % A4 ant other
377
         \if@landscape
378 (10pt & yoko)
                        \setlength\textwidth{73\Cwd}
379 (11pt & yoko)
                        \setlength\textwidth{68\Cwd}
380 (12pt & yoko)
                        \stingth\textwidth{61\Cwd}
381 \langle 10pt \& tate \rangle
                       \stingth\textwidth{41\Cwd}
382 \langle 11pt \& tate \rangle
                       \setlength\textwidth{38\Cwd}
383 (12pt & tate)
                       \setlength\textwidth{35\Cwd}
384
         \else
385 (10pt & yoko)
                        386 (11pt & yoko)
                        \setlength\textwidth{43\Cwd}
387 (12pt & yoko)
                        \stingth\textwidth{40\Cwd}
388 (10pt & tate)
                       \stingth\textwidth{67\Cwd}
389 (11pt & tate)
                       \setlength\textwidth{61\Cwd}
390 (12pt & tate)
                       \stingth\textwidth{57\Cwd}
         \fi
391
       \fi\fi\fi
392
393
     \else
互換モード:デフォルト設定
       \if@twocolumn
394
         \setlength\textwidth{52\Cwd}
395
       \else
396
397 (10pt&!bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{327\p0}
398 (11pt&!bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{342\p0}
399 (12pt&!bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{372\p0}
400 (10pt & bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{4.3in}
401 (11pt & bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{4.8in}
402 (12pt & bk & yoko)
                          \setlength\textwidth{4.8in}
403 (10pt & tate)
                     \setlength\textwidth{67\Cwd}
404 (11pt & tate)
                     \setlength\textwidth{61\Cwd}
405 \langle 12pt \& tate \rangle
                     \stingth\textwidth{57\Cwd}
406
       \fi
     \fi
407
2e モードの場合:
408 \ensuremath{\setminus} else
2e モード: a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定:二段組では用
紙サイズの8割、一段組では用紙サイズの7割を版面の幅として設定します。
     \if@stysize
409
       \if@twocolumn
410
411 (yoko)
               \setlength\textwidth{.8\paperwidth}
               \setlength\textwidth{.8\paperheight}
412 (tate)
       \else
414 (yoko)
               \setlength\textwidth{.7\paperwidth}
415 \langle tate \rangle
               \setlength\textwidth{.7\paperheight}
```

```
416
                      \fi
              417
                   \else
              2e モード:デフォルト設定
                           \verb|\setlength|@tempdima{\paperheight}|
              418 (tate)
              419 \langle yoko \rangle
                            \setlength\@tempdima{\paperwidth}
              420
                      \addtolength\@tempdima{-2in}
                           \addtolength\@tempdima{-1.3in}
              421 (tate)
              422 (yoko & 10pt)
                                  \setlength\@tempdimb{327\p@}
              423 (yoko & 11pt)
                                  \setlength\@tempdimb{342\p0}
              424 (yoko & 12pt)
                                  \setlength\@tempdimb{372\p0}
              425 (tate & 10pt)
                                  \setlength\@tempdimb{67\Cwd}
              426 (tate & 11pt)
                                  \stingth\@tempdimb{61\Cwd}
              427 \langle tate \& 12pt \rangle
                                  \setlength\@tempdimb{57\Cwd}
                      \if@twocolumn
              428
              429
                        \ifdim\@tempdima>2\@tempdimb\relax
              430
                          \setlength\textwidth{2\@tempdimb}
              431
                          \setlength\textwidth{\@tempdima}
              432
                        \fi
              433
                      \else
              434
              435
                        \ifdim\@tempdima>\@tempdimb\relax
                          \setlength\textwidth{\@tempdimb}
              436
              437
                          \setlength\textwidth{\@tempdima}
              438
                        \fi
              439
                      \fi
              440
              441
                   \fi
              442 \fi
              443 \@settopoint\textwidth
              基本組の行数です。
\textheight
                互換モードの場合:
              444 \if@compatibility
              互換モード:a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定:
                   \if@stysize
              445
                      \ifnum\c@@paper=2 % A5
              446
                        \if@landscape
              447
              448 (10pt & yoko)
                                       \setlength\textheight{17\Cvs}
              449 (11pt & yoko)
                                       \setlength\textheight{17\Cvs}
              450 (12pt & yoko)
                                       \setlength\textheight{16\Cvs}
              451 (10pt & tate)
                                      \setlength\textheight{26\Cvs}
              452 \langle 11pt \& tate \rangle
                                      \stingth\textheight{26\Cvs}
              453 (12pt & tate)
                                      \stingth\textheight{25\Cvs}
              454
                        \else
              455 \langle 10pt \& yoko \rangle
                                       \setlength\textheight{28\Cvs}
              456 \langle 11pt \& yoko \rangle
                                       \setlength\textheight{25\Cvs}
              457 (12pt & yoko)
                                       \setlength\textheight{24\Cvs}
```

```
458 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{16\Cvs}
459 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{16\Cvs}
460 (12pt & tate)
                        \setlength\textheight{15\Cvs}
461
          \fi
        \else\ifnum\c@@paper=3 % B4
462
463
          \if@landscape
464 (10pt & yoko)
                        \setlength\textheight{38\Cvs}
465 (11pt & yoko)
                        \stingth\textheight{36\Cvs}
466 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{34\Cvs}
467 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{48\Cvs}
468 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{48\Cvs}
                        \stingth\textheight{45\Cvs}
469 (12pt & tate)
470
          \else
471 (10pt & yoko)
                        \setlength\textheight{57\Cvs}
472 (11pt & yoko)
                        \setlength\textheight{55\Cvs}
473 (12pt & yoko)
                        \stingth\textheight{52\Cvs}
474 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{33\Cvs}
475 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{33\Cvs}
476 (12pt & tate)
                        \stingth\textheight{31\Cvs}
477
          \fi
478
        \else\ifnum\c@@paper=4 % B5
          \if@landscape
480 (10pt & yoko)
                        \setlength\textheight{22\Cvs}
481 (11pt & yoko)
                        \setlength\textheight{21\Cvs}
482 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{20\Cvs}
483 (10pt & tate)
                        \stingth\textheight{34\Cvs}
484 (11pt & tate)
                        \stingth\textheight{34\Cvs}
485 (12pt & tate)
                        \setlength\textheight{32\Cvs}
         \else
486
487 (10pt & yoko)
                        \setlength\textheight{35\Cvs}
488 (11pt & yoko)
                        \setlength\textheight{34\Cvs}
489 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{32\Cvs}
490 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{21\Cvs}
491 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{21\Cvs}
492 (12pt & tate)
                        \setlength\textheight{20\Cvs}
493
          \fi
        \else % A4 and other
494
          \if@landscape
495
496 (10pt & yoko)
                        \stingth\textheight{27\Cvs}
497 (11pt & yoko)
                        \setlength\textheight{26\Cvs}
498 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{25\Cvs}
499 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{41\Cvs}
500 (11pt & tate)
                        \setlength\textheight{41\Cvs}
501 (12pt & tate)
                        \setlength\textheight{38\Cvs}
502
          \else
503 (10pt & yoko)
                        \stingth\textheight{43\Cvs}
504 (11pt & yoko)
                        \stingth\textheight{42\Cvs}
505 (12pt & yoko)
                        \setlength\textheight{39\Cvs}
506 (10pt & tate)
                        \setlength\textheight{26\Cvs}
507 (11pt & tate)
                        \stingth\textheight{26\Cvs}
```

```
508 (12pt & tate)
                     \setlength\textheight{22\Cvs}
509
        \fi
      \fi\fi\fi
511 (yoko)
           \addtolength\textheight{\topskip}
                \verb| \add to length \ textheight{\ \ baselineskip}|
512 (bk & yoko)
           \addtolength\textheight{\Cht}
513 (tate)
514 (tate)
           \addtolength\textheight{\Cdp}
互換モード:デフォルト設定
515 \else
516 (10pt&!bk & yoko)
                   \setlength\textheight{578\p0}
518 \langle 11pt \& yoko \rangle \quad \text{setlength} \quad \text{$18$ (11pt & yoko)}
520 \langle 10pt \& tate \rangle \setlength\textheight{26\Cvs}
523 \fi
2e モードの場合:
524 \else
2eモード:a4jやb5jのクラスオプションが指定された場合の設定:縦組では用紙サイ
ズの 70%(book) か 78%(ariticle,report)、横組では 70%(book) か 75%(article,report)
を版面の高さに設定します。
    \if@stysize
525
526 \langle \mathsf{tate} \& \mathsf{bk} \rangle
               \setlength\textheight{.75\paperwidth}
527 \langle tate \& !bk \rangle
               \setlength\textheight{.78\paperwidth}
528 \langle yoko \& bk \rangle
               \setlength\textheight{.70\paperheight}
529 (yoko&!bk)
               \setlength\textheight{.75\paperheight}
2e モード:デフォルト値
530 \else
531 \langle \mathsf{tate} \rangle
           \setlength\@tempdima{\paperwidth}
532 \langle yoko \rangle
           \setlength\@tempdima{\paperheight}
533
      \addtolength\@tempdima{-2in}
534 (yoko)
           \addtolength\@tempdima{-1.5in}
      \divide\@tempdima\baselineskip
      \@tempcnta\@tempdima
537
      \setlength\textheight{\@tempcnta\baselineskip}
538 \fi
539 \fi
最後に、\textheightに \topskip の値を加えます。
540 \addtolength\textheight{\topskip}
541 \@settopoint\textheight
```

23.3.3 マージン

\topmargin は、"印字可能領域"—用紙の上端から1インチ内側— の上端からヘッ \topmargin ダ部分の上端までの距離です。 2.09 互換モードの場合: 542 \if@compatibility $543 \langle *yoko \rangle$ 544 \if@stysize \setlength\topmargin{-.3in} 546 547 (!bk) \setlength\topmargin{27\p0} \setlength\topmargin{.75in} 548 (10pt & bk) 549 (11pt & bk) \setlength\topmargin{.73in} 550 (12pt & bk) \setlength\topmargin{.73in} 551 \fi $552 \langle /\mathsf{yoko} \rangle$ 553 (*tate) 554\if@stysize \ifnum\c@@paper=2 % A5 555 \setlength\topmargin{.8in} 556 \else % A4, B4, B5 and other 558 \setlength\topmargin{32mm} 559 \fi 560 \else \setlength\topmargin{32mm} 561 562 563 \addtolength\topmargin{-1in} \addtolength\topmargin{-\headheight} $\verb|\addtolength| topmargin{-|headsep|}$ 566 (/tate) 2e モードの場合: $567 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}$ \setlength\topmargin{\paperheight} \addtolength\topmargin{-\headheight} \addtolength\topmargin{-\headsep} \addtolength\topmargin{-\textwidth} \addtolength\topmargin{-\textheight} \addtolength\topmargin{-\footskip} 574 \if@stysize \ifnum\c@@paper=2 % A5 575 576 \addtolength\topmargin{-1.3in} 577 \addtolength\topmargin{-2.0in} 578 \fi 579

\addtolength\topmargin{-2.0in}

\addtolength\topmargin{-2.8in}

\else

580 581 (yoko)

582 (tate)

```
583
                                                                                                                                                        \fi
                                                                                                                                                        \addtolength\topmargin{-.5\topmargin}
                                                                                                                     584
                                                                                                                     585 \fi
                                                                                                                     586 \@settopoint\topmargin
                                                                                                                     \marginparsep は、本文と傍注の間にあけるスペースの幅です。横組では本文の左
             \marginparsep
                                                                                                                     (右)端と傍注、縦組では本文の下(上)端と傍注の間になります。\marginparpush
      \marginparpush
                                                                                                                     は、傍注と傍注との間のスペースの幅です。
                                                                                                                     587 \if@twocolumn
                                                                                                                     588
                                                                                                                                                   \setlength\marginparsep{10\p0}
                                                                                                                     589 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}
                                                                                                                     590 (tate)
                                                                                                                                                                                           \setlength\marginparsep{15\p0}
                                                                                                                                                                                            \setlength\marginparsep{10\p0}
                                                                                                                     591 (yoko)
                                                                                                                     592 \fi
                                                                                                                     593 (tate)\setlength\marginparpush{7\p0}
                                                                                                                     594 (*yoko)
                                                                                                                     595 \langle 10pt \rangle \setminus 10pt \setminus
                                                                                                                     596 \langle 11pt \rangle \setminus \{5 p@\}
                                                                                                                     597 \langle 12pt \rangle \setminus \{12pt\} \setminus \{12p
                                                                                                                     598 (/yoko)
                                                                                                                      まず、互換モードでの長さを示します。
      \oddsidemargin
                                                                                                                                      互換モード、縦組の場合:
\evensidemargin
                                                                                                                     599 \if@compatibility
\marginparwidth
                                                                                                                     600 (tate)
                                                                                                                                                                                                   \setlength\oddsidemargin{0\p0}
                                                                                                                     601 \langle tate \rangle
                                                                                                                                                                                                   \sting 10 p0
                                                                                                                      互換モード、横組、book クラスの場合:
                                                                                                                     602 (*yoko)
                                                                                                                     603 (*bk)
                                                                                                                     604 (10pt)
                                                                                                                                                                                                             \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        \{.5in\}
                                                                                                                     605 \langle 11pt \rangle
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      \{.25in\}
                                                                                                                                                                                                             \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                     606 (12pt)
                                                                                                                                                                                                             \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    \{.25in\}
                                                                                                                     607 (10pt)
                                                                                                                                                                                                             \setlength\evensidemargin {1.5in}
                                                                                                                     608 (11pt)
                                                                                                                                                                                                             \setlength\evensidemargin {1.25in}
                                                                                                                     609 (12pt)
                                                                                                                                                                                                             \setlength\evensidemargin {1.25in}
                                                                                                                     610 (10pt)
                                                                                                                                                                                                             \setlength\marginparwidth {.75in}
                                                                                                                     611 (11pt)
                                                                                                                                                                                                             \setlength\marginparwidth {1in}
                                                                                                                     _{612}~\langle 12pt\rangle
                                                                                                                                                                                                            \setlength\marginparwidth {1in}
                                                                                                                     613 (/bk)
                                                                                                                      互換モード、横組、report と article クラスの場合:
                                                                                                                     614 (*!bk)
                                                                                                                                                                        \if@twoside
                                                                                                                     615
                                                                                                                     616 (10pt)
                                                                                                                                                                                                                         \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       {44\p@}
                                                                                                                     617 \langle 11pt \rangle
                                                                                                                                                                                                                          \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       {36\p@}
                                                                                                                     618 \langle 12pt \rangle
                                                                                                                                                                                                                         \setlength\oddsidemargin
                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       {21\p@}
```

```
619 (10pt)
               \setlength\evensidemargin
                                           {82\p@}
620 (11pt)
               \setlength\evensidemargin
                                           \{74 \ p0\}
621 (12pt)
               \setlength\evensidemargin
622 (10pt)
               \setlength\marginparwidth {107\p0}
               \still
623 (11pt)
624 (12pt)
               \stingth \margin par width \{85\p0\}
       \else
625
                                          {60\p@}
626 (10pt)
              \setlength\oddsidemargin
627 (11pt)
              \setlength\oddsidemargin
                                          {54\p@}
628 \langle 12pt \rangle
              \setlength\oddsidemargin
                                          {39.5 p@}
                                          {60\p@}
629 (10pt)
              \setlength\evensidemargin
630 (11pt)
                                          {54\p@}
              \setlength\evensidemargin
631 (12pt)
              \setlength\evensidemargin
                                          {39.5 p@}
632 (10pt)
              \setlength\marginparwidth
                                          {90\p@}
633 (11pt)
              \setlength\marginparwidth
                                          {83\p@}
634 (12pt)
              \setlength\marginparwidth
                                          {68\p@}
635
    \fi
636 (/!bk)
互換モード、横組、二段組の場合:
     \if@twocolumn
        \sting 100 \
638
        \setlength\evensidemargin {30\p@}
639
        \setlength\marginparwidth {48\p0}
640
     \fi
641
642 (/yoko)
縦組、横組にかかわらず、スタイルオプション設定ではゼロです。
     \if@stysize
       \if@twocolumn\else
644
         \setlength\oddsidemargin{0\p0}
645
         \setlength\evensidemargin{0\p0}
646
       \fi
647
     \fi
648
  互換モードでない場合:
649 \ensuremath{\setminus} else
     \setlength\@tempdima{\paperwidth}
          \addtolength\@tempdima{-\textheight}
651 (tate)
652 \langle \mathsf{yoko} \rangle
          \verb| | add to length | @tempdima{-| textwidth}| \\
  \oddsidemargin を計算します。
     \if@twoside
653
654 (tate)
            \setlength\oddsidemargin{.6\@tempdima}
655 (yoko)
             \setlength\oddsidemargin{.4\@tempdima}
656
     \else
       \setlength\oddsidemargin{.5\@tempdima}
657
658
     \addtolength\oddsidemargin{-1in}
659
```

```
\evensidemargin を計算します。
    \setlength\evensidemargin{\paperwidth}
    \addtolength\evensidemargin{-2in}
662 (tate) \addtolength\evensidemargin{-\textheight}
         \addtolength\evensidemargin{-\textwidth}
     \addtolength\evensidemargin{-\oddsidemargin}
     \@settopoint\oddsidemargin % 1999.1.6
666
    \@settopoint\evensidemargin
                   を 計 算 し ま す。こ こ で 、\@tempdima
\marginparwidth
                                                              の値は、
\paperwidth - \textwidth です。
667 (*yoko)
     \if@twoside
       \setlength\marginparwidth{.6\@tempdima}
670
       \addtolength\marginparwidth{-.4in}
671
     \else
       \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
672
       \addtolength\marginparwidth\{-.4in\}
673
674
     \fi
     675
       \setlength\marginparwidth{2in}
676
677
678 (/yoko)
  縦組の場合は、少し複雑です。
679 (*tate)
    \setlength\@tempdima{\paperheight}
     \addtolength\@tempdima{-\textwidth}
681
     \addtolength\@tempdima{-\topmargin}
682
     \addtolength\@tempdima{-\headheight}
683
     \addtolength\@tempdima{-\headsep}
     \addtolength\@tempdima{-\footskip}
     \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
687 (/tate)
    \@settopoint\marginparwidth
688
689 \fi
```

脚注 23.4

\footnotesepは、それぞれの脚注の先頭に置かれる"支柱"の高さです。このクラ \footnotesep スでは、通常の \footnotesize の支柱と同じ長さですので、脚注間に余計な空白 は入りません。

```
690 \langle 10pt \rangle \setminus setlength \setminus footnotesep \{6.65 \setminus p0\}
691 \langle 11pt \rangle \setminus setlength \setminus footnotesep \{7.7 \setminus p0\}
692 \langle 12pt \rangle \setminus setlength \setminus footnotesep \{8.4 \setminus p0\}
```

\skip\footins は、本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。 \footins

```
693~\langle 10 pt \rangle \ \Quad \Quad
694 \langle 11pt \rangle \setminus \{10pc \setminus 0plus 4 \neq 0 \setminus 0plus 2 \neq 0\}
695 (12pt) \end{0.8p0 \end{0.8p0} \end{0.8p0} \end{0.8p0} \end{0.8p0} $$ (12pt) \end{0
```

23.5 フロート

すべてのフロートパラメータは、IATeX のカーネルでデフォルトが定義されていま す。そのため、カウンタ以外のパラメータは \renewcommand で設定する必要があ ります。

23.5.1 フロートパラメータ

フロートオブジェクトが本文のあるページに置かれるとき、フロートとそのページ \textfloatsep にある別のオブジェクトの距離は、これらのパラメータで制御されます。これらの \intextsep パラメータは、一段組モードと二段組モードの段抜きでないフロートの両方で使わ れます。

> \floatsep は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。 \textfloatsep は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。 \intextsep は、本文の途中に出力されるフロートと本文との距離です。

```
696 (*10pt)
697 \setlength\floatsep
                        {12\p@ \plus 2\p@ \eminus 2\p@}
698 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
700~\langle/10pt\rangle
701 (*11pt)
702 \setlength\floatsep \{12\p0\ \p0\ 2\p0\ \p0\ 2\p0\}
703 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
704 \setlength\intextsep \{12\p0\ \p0\ 2\p0\ \p0\ 2\p0\}
705 (/11pt)
706 (*12pt)
                        {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
707 \setlength\floatsep
708 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
709 \setlength\intextsep \{14\p0\ \p0\ 4\p0\ \p0\ 4\p0\ \p0\}
710 (/12pt)
```

\dblfloatsep

二段組モードで、\textwidth の幅を持つ、段抜きのフロートオブジェクトが本 \dbltextfloatsep 文と同じページに置かれるとき、本文とフロートとの距離は、\dblfloatsep と \dbltextfloatsep によって制御されます。

> \dblfloatsep は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。 \dbltextfloatsep は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。

```
711 (*10pt)
712 \setlength\dblfloatsep
                             {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
713 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
714 (/10pt)
```

```
715 (*11pt)
                         716 \setlength\dblfloatsep
                                                                                        {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
                         717 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p0}
                         718 (/11pt)
                         719 (*12pt)
                         720 \setlength\dblfloatsep
                                                                                         {14\p0\ \p0} \ 2\p0\ \p0 \ 4\p0}
                         721 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
                         722 (/12pt)
                        フロートオブジェクトが、独立したページに置かれるとき、このページのレイアウ
      \@fptop
                          トは、次のパラメータで制御されます。これらのパラメータは、一段組モードか、
      \@fpsep
                         二段組モードでの一段出力のフロートオブジェクトに対して使われます。
      \@fpbot
                              ページ上部では、\@fptopの伸縮長が挿入されます。ページ下部では、\@fpbot
                         の伸縮長が挿入されます。フロート間には \Ofpsep が挿入されます。
                              なお、そのページを空白で満たすために、\@fptopと\@fpbotの少なくともどち
                          らか一方に、plus ...fil を含めてください。
                         723 (*10pt)
                         724 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
                         725 \setlength\Ofpsep{8\p0 \Oplus 2fil}
                         726 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
                         727 \langle/10pt\rangle
                         728 (*11pt)
                         729 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
                         730 \setlength\@fpsep{8\p@ \@plus 2fil}
                         731 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
                         732 (/11pt)
                         733 (*12pt)
                         734 \setlength\@fptop\{0\p0\p0\p0\ 1fil}
                         735 \setlength\@fpsep{10\p@ \@plus 2fil}
                         736 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
                         737 (/12pt)
\@dblfptop 二段組モードでの二段抜きのフロートに対しては、これらのパラメータが使われ
\@dblfpsep ます。
\dot{0dblfpbot} 738 \dot{*10pt}
                         739 \setlength\@dblfptop\{0\polimits plus 1fil\}
                         740 \setlength\@dblfpsep{8\p0\ \p0\ 2fil}
                         741 \setlength\@dblfpbot\{0\p0\end{0p0} \@plus 1fil}
                         742 (/10pt)
                         743 (*11pt)
                         744 \setlength\@dblfptop\{0\polimits plus 1fil\}
                         745 \setlength\@dblfpsep{8\p@ \@plus 2fil}
                         746 \setlength\@dblfpbot\{0\polenote{0p0}\ \polenote{0p0}\ \p
                         747 (/11pt)
                         748 (*12pt)
                         749 \setlength\@dblfptop\{0\polenotemark \center(0\polenotemark) \center(0)\polenotemark
```

750 \setlength\@dblfpsep{10\p@ \@plus 2fil}

751 \setlength\@dblfpbot $\{0\p0\ \p0\ 1fil\}$

752 (/12pt)

753 (/10pt | 11pt | 12pt)

23.5.2 フロートオブジェクトの上限値

\c@topnumber topnumber は、本文ページの上部に出力できるフロートの最大数です。

754 (*article | report | book)

755 \setcounter{topnumber}{2}

\c@bottomnumber bottomnumber は、本文ページの下部に出力できるフロートの最大数です。

756 \setcounter{bottomnumber}{1}

\c@totalnumber totalnumber は、本文ページに出力できるフロートの最大数です。

757 \setcounter{totalnumber}{3}

\c@dbltopnumber dbltopnumber は、二段組時における、本文ページの上部に出力できる段抜きのフ

ロートの最大数です。

758 \setcounter{dbltopnumber}{2}

\topfraction これは、本文ページの上部に出力されるフロートが占有できる最大の割り合いです。

759 \renewcommand{\topfraction}{.7}

\bottomfraction これは、本文ページの下部に出力されるフロートが占有できる最大の割り合いです。

760 \renewcommand{\bottomfraction}{.3}

\textfraction これは、本文ページに最低限、入らなくてはならない本文の割り合いです。

761 \renewcommand{\textfraction}{.2}

\floatpagefraction これは、フロートだけのページで最低限、入らなくてはならないフロートの割り合

いです。

762 \renewcommand{\floatpagefraction} $\{.5\}$

\dbltopfraction これは、2段組時における本文ページに、2段抜きのフロートが占めることができ

る最大の割り合いです。

763 \renewcommand{\dbltopfraction}{.7}

\dblfloatpagefraction これは、2段組時におけるフロートだけのページに最低限、入らなくてはならない

2段抜きのフロートの割り合いです。

764 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.5}

24 改ページ(日本語 TFX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage
\pltx@cleartoleftpage
\pltx@cleartooddpage
\pltx@cleartoevenpage

\cleardoublepage 命令は、 $I^{\Delta}T_{E}X$ カーネルでは「奇数ページになるまでページを繰る命令」として定義されています。しかし $pI^{\Delta}T_{E}X$ カーネルでは、アスキーの方針により「横組では奇数ページになるまで、縦組では偶数ページになるまでページを繰る命令」に再定義されています。すなわち、 $pI^{\Delta}T_{E}X$ では縦組でも横組でも右ページになるまでページを繰ることになります。

pIATeX 標準クラスの book は、横組も縦組も openright がデフォルトになっていて、これは従来 pIATeX カーネルで定義された \cleardoublepage を利用していました。しかし、縦組で奇数ページ始まりの文書を作りたい場合もあるでしょうから、コミュニティ版クラスでは以下の(非ユーザ向け)命令を追加します。

- 1. \pltx@cleartorightpage: 右ページになるまでページを繰る命令
- 2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令
- 3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令
- 4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

```
765 \def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page
       \iftdir
767
         \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
768
769
         \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
770
771
     \else
       \ifydir
         \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
773
774
         \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
775
       \fi
     fi\fi
776
777 \def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
     \ifodd\c@page
778
779
       \ifydir
         \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
780
781
         \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
       \fi
782
     \else
783
       \iftdir
784
         \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
785
786
         \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
787
       \fi
     \fi\fi}
788
```

\pltx@cleartooddpage は \LaTeX の \cleardoublepage に似ていますが、上の 2 つに合わせるため \thispagestyle{empty}を追加してあります。

```
789 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
790 \ifodd\c@page\else
791 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
792 \ifotwocolumn\hbox{}\newpage\fi
793 \fi\fi}
794 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
795 \ifodd\c@page
796 \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
797 \ifotwocolumn\hbox{}\newpage\fi
798 \fi\fi}
```

\cleardoublepage

そして report と book クラスの場合は、ユーザ向け命令である \cleardoublepage を、openright オプションが指定されている場合は \pltx@cleartorightpage に、openleft オプションが指定されている場合は \pltx@cleartoleftpage に、それ ぞれ \let します。openany の場合は pltxpx カーネルの定義のままです。

```
799 \( *!\article \)
800 \( \if \) @openleft
801 \\ \let\cleardoublepage\pltx\( \) @cleartoleftpage
802 \\ \else\\ \if \) @openright
803 \\ \let\cleardoublepage\pltx\( \) @cleartorightpage
804 \\ \fi\\ \fi
805 \( \/ !\article \)
```

25 ページスタイル

pIFTEX 2ε では、つぎの 6 種類のページスタイルを使用できます。empty は 1tpage . dtx で定義されています。

```
empty ヘッダにもフッタにも出力しないplain フッタにページ番号のみを出力するheadnombre ヘッダにページ番号のみを出力するfootnombre フッタにページ番号のみを出力するheadings ヘッダに見出しとページ番号を出力するbothstyle ヘッダに見出し、フッタにページ番号を出力するページスタイル foo は、\ps@foo コマンドとして定義されます。
```

\@evenhead これらは \ps@... から呼び出され、ヘッダとフッタを出力するマクロです。

```
\@oddhead\@oddhead奇数ページのヘッダを出力\@evenfoot\@oddfoot奇数ページのフッタを出力\@oddfoot(@evenhead偶数ページのヘッダを出力\@evenfoot偶数ページのフッタを出力
```

これらの内容は、横組の場合は \textwidth の幅を持つ \hbox に入れられ、縦組の場合は \textheight の幅を持つ \hbox に入れられます。

25.1 マークについて

ヘッダに入る章番号や章見出しは、見出しコマンドで実行されるマークコマンドで決定されます。ここでは、実行されるマークコマンドの定義を行なっています。これらのマークコマンドは、 T_EX の \mark 機能を用いて、'left' と 'right' の 2 種類のマークを生成するように定義しています。

\markboth{ $\langle LEFT \rangle$ }{ $\langle RIGHT \rangle$ }: 両方のマークに追加します。 \markright{ $\langle RIGHT \rangle$ }: '右' マークに追加します。

\leftmark: \@oddhead, \@oddfoot, \@evenhead, \@evenfoot マクロで使われ、現在の "左" マークを出力します。\leftmark は T_EX の \botmark コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてはいけません。

\rightmark: \@oddhead, \@oddfoot, \@evenhead, \@evenfoot マクロで使われ、現在の "右" マークを出力します。\rightmark は TEX の \firstmark コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてはいけません。

マークコマンドの動作は、左マークの'範囲内の'右マークのために合理的になっています。たとえば、左マークは \chapter コマンドによって変更されます。そして右マークは \section コマンドによって変更されます。しかし、同一ページに複数の \markboth コマンドが現れたとき、おかしな結果となることがあります。

\tableofcontents のようなコマンドは、\@mkboth コマンドを用いて、あるページスタイルの中でマークを設定しなくてはなりません。\@mkboth は、\ps@... コマンドによって、\markboth (ヘッダを設定する)か、\@gobbletwo (何もしない)に \let されます。

25.2 plain ページスタイル

\ps@plain jpl@in に \let するために、ここで定義をします。

806 \def\ps@plain{\let\@mkboth\@gobbletwo

807 \let\ps@jpl@in\ps@plain

808 \let\@oddhead\@empty

809 \def\@oddfoot{\reset@font\hfil\thepage\hfil}%

810 \let\@evenhead\@empty

811 \let\@evenfoot\@oddfoot}

25.3 jpl@inページスタイル

\ps@jpl@in *jpl@in* スタイルは、クラスファイル内部で使用するものです。IATEX では、book クラスを headings としています。しかし、\tableofcontents コマンドの内部では plain として設定されるため、一つの文書でのページ番号の位置が上下に出力されることになります。

File g: jclasses.dtx

そこで、 $pIPT_{FX} 2_{\varepsilon}$ では、\tableof contents や \the index のページスタイルを jpl@in にし、実際に出力される形式は、ほかのページスタイルで \let をしていま す。したがって、headingsのとき、目次ページのページ番号はヘッダ位置に出力さ れ、plainのときには、フッタ位置に出力されます。

ここで、定義をしているのは、その初期値です。

812 \let\ps@jpl@in\ps@plain

headnombre ページスタイル 25.4

\ps@headnombre headnombre スタイルは、ヘッダにページ番号のみを出力します。

813 \def\ps@headnombre{\let\@mkboth\@gobbletwo

\let\ps@jpl@in\ps@headnombre

815 (yoko) \def\@evenhead{\thepage\hfil}%

\def\@oddhead{\hfil\thepage}% 816 (yoko)

818 (tate) \def\@oddhead{\thepage\hfil}%

819 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty}

footnombre ページスタイル 25.5

\ps@footnombre

footnombre スタイルは、フッタにページ番号のみを出力します。

820 \def\ps@footnombre{\let\@mkboth\@gobbletwo

821 \let\ps@jpl@in\ps@footnombre

822 (yoko) \def\@evenfoot{\thepage\hfil}%

823 (yoko) \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%

 $824 \langle \mathsf{tate} \rangle$ \def\@evenfoot{\hfil\thepage}%

\let\@oddhead\@empty\let\@evenhead\@empty}

headings スタイル

headings スタイルは、ヘッダに見出しとページ番号を出力します。

\ps@headings

このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。

 $827 \footnotemark$ 827 \if@twoside

横組の場合は、奇数ページが右に、偶数ページが左にきます。縦組の場合は、奇数 ページが左に、偶数ページが右にきます。

\def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre

\let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty

830 (yoko) \def\@evenhead{\thepage\hfil\leftmark}%

831 (yoko) \def\@oddhead{{\rightmark}\hfil\thepage}%

\def\@evenhead{{\leftmark}\hfil\thepage}% 832 (tate)

833 (tate) \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%

\let\@mkboth\markboth 834

```
835 (*article)
        \def\sectionmark##1{\markboth{%
836
           \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
838
           ##1}{}}%
        \def\subsectionmark##1{\markright{%
839
           \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
840
           ##1}}%
841
842 (/article)
843 (*report | book)
     \def\chaptermark##1{\markboth{%
844
         \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
845
                 \if@mainmatter
846 (book)
847
             \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
848 (book)
849
         \fi
         ##1}{}}%
850
     \def\sectionmark##1{\markright{%
851
        \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
852
        ##1}}%
853
854 (/report | book)
855
片面印刷の場合:
856 \ensuremath{\,\backslash\,} else \% if not twoside
     \def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre
       \let\@oddfoot\@empty
858
             \def\@oddhead{{\rightmark}\hfil\thepage}%
859 (yoko)
860 (tate)
             \let\@mkboth\markboth
862 (*article)
     \def\sectionmark##1{\markright{%
864
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne \thesection.\hskip1zw\fi
865
        ##1}}%
866 (/article)
867 (*report | book)
868 \def\chaptermark#1{\markright{%}}
      \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
              \if@mainmatter
870 (book)
           \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
871
872 (book)
      \fi
      ##1}}%
875 (/report | book)
876
     }
877 \fi
```

25.7 bothstyle スタイル

\ps@bothstyle bothstyle スタイルは、ヘッダに見出しを、フッタにページ番号を出力します。

```
このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。
878 \if@twoside
     \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
880 (*yoko)
881
       \def\@evenhead{\leftmark\hfil}% right page
882
       \def\@evenfoot{\thepage\hfil}% right page
       \def\@oddhead{\hfil\rightmark}% left page
883
       \def\@oddfoot{\hfil\thepage}% left page
884
885 \langle /yoko \rangle
886 (*tate)
       \def\@evenhead{\hfil\leftmark}% right page
887
       888
889
       \def\@oddhead{\rightmark\hfil}% left page
       890
891 (/tate)
892
     \let\@mkboth\markboth
893 (*article)
894
     \def\sectionmark##1{\markboth{%
        \verb|\| \verb|\| \verb|\| c@secnumdepth > \verb|\| \verb|\| \verb|\| thesection. \verb|\| hskip1zw \verb|\| fi
895
        ##1}{}}%
896
     \def\subsectionmark##1{\markright{%
897
898
        \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
899
        ##1}}%
900 (/article)
901 (*report | book)
902 \def\chaptermark##1{\markboth{%}
903
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
904 \langle \mathsf{book} \rangle
               \if@mainmatter
905
            \verb|\dchapapp| the chapter | @chappos | hskip1zw|
906 (book)
               \fi
907
        \fi
        ##1}{}}%
908
     \def\sectionmark##1{\markright{%
909
        \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
910
        ##1}}%
911
912 (/report | book)
914 \else % if one column
915 \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
            \def\@oddhead{\hfil\rightmark}%
916 (yoko)
917 (yoko)
            \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%
918 (tate)
            \def\@oddhead{\rightmark\hfil}%
            919 (tate)
       \let\@mkboth\markboth
921 (*article)
     923
924
        ##1}}%
925 (/article)
```

```
926 (*report | book)
       \def\chaptermark##1{\markright{%
           \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
929 (book)
                     \if@mainmatter
                \verb|\dchapapp| the chapter \verb|\dchappos| hskip1zw|
930
931 (book)
932
           \fi
           ##1}}%
933
934 \langle / \text{report} \mid \text{book} \rangle
935
      }
936 \fi
```

25.8 myheading スタイル

\ps@myheadings myheadings ページスタイルは簡潔に定義されています。ユーザがページスタイルを設計するときのヒナ型として使用することができます。

```
937 \def\ps@myheadings{\let\ps@jpl@in\ps@plain%
938 \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
939 \square\ps@\hfil\leftmark}%
940 \square\ps@\def\@oddhead{{\rightmark}\hfil\thepage}%
941 \tate\ \def\@ovenhead{{\leftmark}\hfil\thepage}%
942 \tate\ \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
943 \let\@mkboth\@gobbletwo
944 \let\end{\thepage\hfil\rightmark}%
\let\chaptermark\@gobble
945 \let\sectionmark\@gobble
946 \article\ \let\subsectionmark\@gobble
947 }
```

26 文書コマンド

26.1 表題

titlepage 通常の環境では、ページの最初と最後を除き、タイトルページ環境は何もしません。また、ページ番号の出力を抑制します。レポートスタイルでは、ページ番号を1にリセットし、そして最後で1に戻します。互換モードでは、ページ番号はゼロに設定されますが、右起こしページ用のページパラメータでは誤った結果になります。二段組スタイルでも一段組のページが作られます。

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる変更:上にあるのはアスキー版の説明です。改めてアスキー版の挙動を整理すると、以下のようになります。

- 1. アスキー版では、タイトルページの番号を必ず1にリセットしていましたが、これは正しくありません。これは、タイトルページが奇数ページ目か偶数ページ目かにかかわらず、レイアウトだけ奇数ページ用が適用されてしまうからです。さらに、タイトルの次のページも偶数のページ番号を持ってしまうため、両面印刷で奇数ページと偶数ページが交互に出なくなるという問題もあります。
- 2. アスキー版 book クラスは、タイトルページを必ず \cleardoublepage で始めていました。pIATEX カーネルでの \cleardoublepage の定義から、縦組の既定ではタイトルが偶数ページ目に出ることになります。これ自体が正しくないと断定することはできませんが、タイトルのページ番号を1にリセットすることと合わさって、偶数ページに送ったタイトルに奇数ページ用レイアウトが適用されてしまうという結果は正しくありません。

そこで、コミュニティ版ではタイトルのレイアウトが必ず奇数ページ用になるという挙動を支持し、book クラスではタイトルページを奇数ページ目に送ることにしました。これでタイトルページが表紙らしく見えるようになります。また、report クラスのようなタイトルが成り行きに従って出る場合には

- 奇数ページ目に出る場合、ページ番号を1(奇数)にリセット
- 偶数ページ目に出る場合、ページ番号を0(偶数)にリセット

としました。

一つめの例を考えます。

\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}

アスキー版 tbook クラスでの結果は

1ページ目:空白(ページ番号1は非表示)

2ページ目:タイトル(奇数レイアウト、ページ番号1は非表示)

3ページ目:チャプター(偶数レイアウト、ページ番号 2)

ですが、仮に最初の空白ページさえなければ

1ページ目:タイトルすなわち表紙(奇数レイアウト、ページ番号1は非表示)

2ページ目:チャプター(偶数レイアウト、ページ番号 2)

```
とみなせるため、コミュニティ版では空白ページを発生させないようにしました。
二つめの例を考えます。
```

```
\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
テスト文章
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}
```

アスキー版 tbook クラスでの結果は

```
1ページ目:テスト文章(奇数レイアウト、ページ番号 1)
2ページ目:タイトル(奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示)
3ページ目:チャプター(偶数レイアウト、ページ番号 2)
```

ですが、これでは奇数と偶数のページ番号が交互になっていないので正しくありません。そこで、コミュニティ版では

```
1ページ目:テスト文章(奇数レイアウト、ページ番号1)
2ページ目:空白ページ(ページ番号2は非表示)
3ページ目:タイトル(奇数レイアウト、ページ番号1は非表示)
4ページ目:チャプター(偶数レイアウト、ページ番号2)
```

と直しました。

なお、pIATeX 2.09 互換モードはアスキー版のまま、すなわち「ページ番号をゼロに設定」としてあります。これは、横組の右起こしの挙動としては誤りですが、縦組の右起こしの挙動としては一応正しくなっているといえます。

最初に互換モードの定義を作ります。

```
952 \if@compatibility
953 \newenvironment{titlepage}
954
       {%
955 (book)
              \cleardoublepage
        \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
956
        \else\@restonecolfalse\newpage\fi
957
        \thispagestyle{empty}%
958
        \setcounter{page}\z@
959
960
       {\if@restonecol\twocolumn\else\newpage\fi
  そして、LATeX ネイティブのための定義です。
963 \ensuremath{\setminus} else
964 \newenvironment{titlepage}
965
       {%
               \pltx@cleartooddpage %% 2017/02/15
966 (book)
         \if@twocolumn
967
968
           \@restonecoltrue\onecolumn
```

File g: jclasses.dtx

```
970
                   \@restonecolfalse\newpage
          971
          972
                 \thispagestyle{empty}%
                  \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017/02/15
          973
          974
                {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
          975
          両面モードでなければ、タイトルページの直後のページのページ番号も1にします。
                 \if@twoside\else
                   \setcounter{page}\@ne
          977
                \fi
          978
          979
                }
          980 \fi
         このコマンドは、表題を作成し、出力します。表題ページを独立させるかどうかに
\maketitle
          よって定義が異なります。report と book クラスのデフォルトは独立した表題です。
          article クラスはオプションで独立させることができます。
         縦組のときは、\thanks コマンドを \p@thanks に \let します。このコマンドは
\p@thanks
          \footnotetext を使わず、直接、文字を \@thanks に格納していきます。
           著者名の脇に表示される合印は直立した数字、注釈側は横に寝た数字となってい
          ましたが、不自然なので \hbox{\yoko ...}を追加し、両方とも直立するようにし
          ました。
          981 \def\p@thanks#1{\footnotemark
              \protected@xdef\@thanks{\@thanks
                \protect{\noindent\hbox{\yoko$\m@th^\thefootnote$}#1\protect\par}}}
          984 \if@titlepage
              \newcommand{\maketitle}{\begin{titlepage}%
              \let\footnotesize\small
             \let\footnoterule\relax
          \let\footnote\thanks
          990 (tate) \vbox to\textheight\bgroup\tate\hsize\textwidth
              \null\vfil
          992
              \vskip 60\p@
              \begin{center}%
          993
          994
                {\LARGE \@title \par}%
                \vskip 3em%
          995
                {\Large
          996
                \verb|\lineskip|.75em||
          997
                 \begin{tabular}[t]{c}%
          998
          999
                   \@author
                 \end{tabular}\par}%
         1000
                 \vskip 1.5em%
         1002
                {\large \@date \par}%
                                       % Set date in \large size.
```

969

\else

```
1003
     \end{center}\par
          \vfil{\centering\@thanks}\vfil\null
1004 (tate)
1005 (tate)
          \egroup
1006 (yoko)
           \@thanks\vfil\null
     \end{titlepage}%
footnote カウンタをリセットし、\thanks と \maketitle コマンドを無効にし、い
 くつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。
      \setcounter{footnote}{0}%
1008
      \global\let\thanks\relax
1009
      \global\let\maketitle\relax
1010
      \global\let\p@thanks\relax
1011
      \global\let\@thanks\@empty
1012
1013
      \global\let\@author\@empty
      \global\let\@date\@empty
     \global\let\@title\@empty
 タイトルが組版されたら、\title コマンドなどの宣言を無効にできます。\and の
定義は、\author の引数でのみ使用しますので、破棄します。
      \global\let\title\relax
1017
      \global\let\author\relax
1018
      \global\let\date\relax
     \global\let\and\relax
1019
1020
     }%
1021 \else
1022
     \newcommand{\maketitle}{\par
1023
      \begingroup
        \renewcommand{\thefootnote}{\fnsymbol{footnote}}%
1024
        \def\@makefnmark{\hbox{\ifydir $\m@th^{\@thefnmark}$
1025
          \end{area} $$ \operatorname{hbox}(\yoko\n@th^{\dthefnmark})_{i}}%
1026
1027 (*tate)
        \long\def\@makefntext##1{\parindent 1zw\noindent
1028
           \hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}##1}%
1029
1030 (/tate)
1031 (*yoko)
         \long\def\@makefntext##1{\parindent 1em\noindent
1032
1033
           \hb@xt@1.8em{\hss$\m@th^{\@thefnmark}$}##1}%
1034 (/yoko)
        \if@twocolumn
1035
          \ifnum \col@number=\@ne \@maketitle
1036
          \else \twocolumn[\@maketitle]%
1037
          \fi
1038
1039
        \else
1040
          \newpage
          \global\@topnum\z@
                              % Prevents figures from going at top of page.
1041
1042
          \@maketitle
1043
         \thispagestyle{jpl@in}\@thanks
1044
```

ここでグループを閉じ、footnote カウンタをリセットし、\thanks, \maketitle,

170

File g: jclasses.dtx

\@maketitle を無効にし、いくつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。

```
1045
                \endgroup
                \setcounter{footnote}{0}%
           1046
           1047
                \global\let\thanks\relax
                \global\let\maketitle\relax
          1048
                \global\let\@maketitle\relax
           1050
                \global\let\p@thanks\relax
           1051
                \global\let\@thanks\@empty
                \global\let\@author\@empty
           1052
                \global\let\@date\@empty
          1053
           1054
                \global\let\@title\@empty
          1055
                \global\let\title\relax
           1056
                \global\let\author\relax
           1057
                \global\let\date\relax
           1058
                \global\let\and\relax
           1059
           独立した表題ページを作らない場合の、表題の出力形式です。
\@maketitle
                \def\@maketitle{%
                \newpage\null
           1061
                \vskip 2em%
           1062
                \begin{center}%
           {\LARGE \@title \par}%
           1066
           1067
                  \vskip 1.5em%
                 {\large
           1068
                   \lineskip .5em%
           1069
          1070
                   \begin{tabular}[t]{c}%
          1071
                     \@author
           1072
                   \end{tabular}\par}%
           1073
                  \vskip 1em%
          1074
                  {\large \@date}%
                \end{center}%
                \par\vskip 1.5em}
          1076
          1077 \fi
                  概要
           26.2
  abstract 要約文のための環境です。book クラスでは使えません。report スタイルと、titlepage
           オプションを指定した article スタイルでは、独立したページに出力されます。
           1078 (*article | report)
          1079 \if@titlepage
```

1080 1081

1082

1083

\newenvironment{abstract}{%

\@beginparpenalty\@lowpenalty

\titlepage

 $\null\vfil$

```
{\bfseries\abstractname}%
                 1085
                            \@endparpenalty\@M
                 1086
                 1087
                           \end{center}}%
                           {\par\vfil\null\endtitlepage}
                 1088
                 1089 \else
                       \verb|\newenvironment{abstract}{{\#}}|
                 1090
                 1091
                         \if@t.wocolumn
                           \section*{\abstractname}%
                 1092
                         \else
                 1093
                 1094
                           \small
                           \begin{center}%
                 1095
                            {\bfseries\abstractname\vspace{-.5em}\vspace{\z0}}\%
                 1096
                           \end{center}%
                 1097
                 1098
                           \quotation
                         \fi}{\if@twocolumn\else\endquotation\fi}
                 1099
                 1100 \fi
                 1101 (/article | report)
                  26.3
                         章見出し
                  26.3.1 マークコマンド
     \chaptermark \...mark コマンドを初期化します。これらのコマンドはページスタイルの定義で
     \sectionmark 使われます (第25節参照)。これらのたいていのコマンドは ltsect.dtx ですでに
  \subsectionmark 定義されています。
\paragraphmark 1103 %\newcommand*{\sectionmark}[1]{} 1104 %\newcommand*{\subsectionmark}[1]{}
\verb|\subparagraphmark|| 1105 \% \\ \verb|\newcommand*{\subsubsectionmark}[1]{} 
                 1106 %\newcommand*{\paragraphmark}[1]{}
                 1107 %\newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
                  26.3.2 カウンタの定義
   \c@secnumdepth secnumdepthには、番号を付ける、見出しコマンドのレベルを設定します。
                 1108 (article)\setcounter{secnumdepth}{3}
                 1109 (!article)\setcounter{secnumdepth}{2}
       \c@chapter これらのカウンタは見出し番号に使われます。最初の引数は、二番目の引数が増加
       \c@section するたびにリセットされます。二番目のカウンタはすでに定義されているものでな
    \c@subsection くてはいけません。
 \c@subsubsection 1110 \newcounter{part}
     \c@paragraph 1111 \langle *book | report \rangle \ 1112 \newcounter{chapter}
```

\begin{center}%

1084

 $\colone{2.5cm} \colone{2.5cm} \col$

```
1114 (/book | report)
                1115 (article) \newcounter{section}
                1116 \newcounter{subsection} [section]
                1117 \newcounter{subsubsection} [subsection]
                1118 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                1119 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
                \theCTR が実際に出力される形式の定義です。
                   \arabic{COUNTER}は、COUNTERの値を算用数字で出力します。
     \thechapter
                   \roman{COUNTER}は、COUNTERの値を小文字のローマ数字で出力します。
     \thesection
                   \Roman{COUNTER}は、COUNTERの値を大文字のローマ数字で出力します。
  \thesubsection
                   \alph{COUNTER}は、\alph{COUNTER}の値を 1=a, 2=b のようにして出力します。
\thesubsubsection
                   Alph{COUNTER}は、COUNTER の値を 1 = A, 2 = B のようにして出力し
   \theparagraph
\thesubparagraph
                 ます。
                   \Kanji{COUNTER}は、COUNTERの値を漢数字で出力します。
                   \rensuji{\langle obj \rangle}は、\langle obj \rangle を横に並べて出力します。したがって、横組のときに
                 は、何も影響しません。
                1120 (*tate)
                1121 \renewcommand{\thepart}{\rensuji{\QRoman\cQpart}}
                1123 (*report | book)
                1124 \renewcommand{\thechapter}{\rensuji{\@arabic\c@chapter}}
                1125 \ \texttt{\command{\thesection}{\thechapter \cdot \rensuji{\color:}}}
                1126 (/report | book)
                1127 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection \rensuji{\@arabic\c@subsection}}
                1128 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                       \thesubsection · \rensuji{\@arabic\c@subsubsection}}
                1130 \renewcommand{\theparagraph}{%
                      \thesubsubsection · \rensuji{\@arabic\c@paragraph}}
                1132 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                       \theparagraph · \rensuji{\@arabic\c@subparagraph}}
                1133
                1134 (/tate)
                1135 (*yoko)
                1136 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                1137 \(\rangle\)\renewcommand{\thesection}{\\Qarabic\c\Qsection}
                1138 (*report | book)
                1139 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                1140 \mbox{ } \mbox{command{\thesection}{\thechapter.\c@section}}
                1141 (/report | book)
                1142 \mbox{ renewcommand{\thesubsection}{\thesection.\c@subsection}}
                1143 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                       \t \
                1144
                1145 \renewcommand{\theparagraph}{%
                       \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
                1146
                1147 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                       \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
```

1149 (/yoko)

\@chapappの初期値は'\prechaptername'です。 \@chapapp

\@chappos

\@chappos の初期値は '\postchaptername' です。

\appendix コマンドは \@chapapp を '\appendixname' に、\@chappos を空に再 定義します。

- 1150 (*report | book)
- 1151 \newcommand{\@chapapp}{\prechaptername}
- 1152 \newcommand{\@chappos}{\postchaptername}
- 1153 (/report | book)

前付け、本文、後付け 26.3.3

\frontmatter \backmatter

一冊の本は論理的に3つに分割されます。表題や目次や「はじめに」あるいは権利 \mainmatter などの前付け、そして本文、それから用語集や索引や奥付けなどの後付けです。

> 日本語 T_EX 開発コミュニティによる補足: L^AT_EX の classes.dtx は、1996/05/26 (v1.3r) と 1998/05/05 (v1.3y) の計 2 回、\frontmatter と \mainmatter の定義を 修正しています。一回目はこれらの命令を openany オプションに応じて切り替え、 二回目はそれを元に戻しています。アスキーによる jclasses.dtx は、1997/01/15 に 一回目の修正に追随しましたが、二回目の修正には追随していません。コミュニティ 版では、一旦はアスキーによる仕様を維持しようと考えました (2016/11/22) が、以 下の理由により二回目の修正にも追随することにしました (2017/03/05)。

アスキー版での \frontmatter と \mainmatter の改ページ挙動は

openright なら \cleardoublepage、openany なら \clearpage を実行

というものでした。しかし、\frontmatter 及び\mainmatter はノンブルを1にリ セットしますから、改ページの結果が偶数ページ目になる場合4にノンブルが偶奇逆 転してしまいました。このままでは openany の場合に両面印刷がうまくいかないた め、新しいコミュニティ版では

必ず \pltx@cleartooddpage を実行

としました。これは両面印刷 (twoside) の場合は奇数ページに送り、片面印刷 (oneside) の場合は単に改ページとなります。(参考: latex/2754)

- 1155 \newcommand{\frontmatter}{%
- \pltx@cleartooddpage
- \@mainmatterfalse\pagenumbering{roman}}
- 1158 \newcommand{\mainmatter}{%

 $^{^4}$ 縦 tbook のデフォルト (openright) が該当するほか、横 jbook と縦 tbook の openany のときに は成り行き次第で該当する可能性があります。

```
1159 \pltx@cleartooddpage
```

1160 \@mainmattertrue\pagenumbering{arabic}}

1161 \newcommand{\backmatter}{%

1162 \if@openleft \cleardoublepage \else

1163 \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi

1164 \@mainmatterfalse}

1165 (/book)

26.3.4 ボックスの組み立て

クラスファイル定義の、この部分では、\@startsectionと\secdefの二つの内部マクロを使います。これらの構文を次に示します。

\@startsection マクロは 6 つの引数と 1 つのオプション引数 '*' を取ります。 \@startsection $\langle name \rangle \langle level \rangle \langle indent \rangle \langle beforeskip \rangle \langle afterskip \rangle \langle style \rangle$ optional * [$\langle altheading \rangle$] $\langle heading \rangle$

それぞれの引数の意味は、次のとおりです。

〈name〉レベルコマンドの名前です(例:section)。

 $\langle level \rangle$ 見出しの深さを示す数値です(chapter=1, section=2, ...)。" $\langle level \rangle <=$ カウンタ secnumdepth の値"のとき、見出し番号が出力されます。

〈indent〉 見出しに対する、左マージンからのインデント量です。

〈**beforeskip**〉見出しの上に置かれる空白の絶対値です。負の場合は、見出しに続く テキストのインデントを抑制します。

〈afterskip〉正のとき、見出しの後の垂直方向のスペースとなります。負の場合は、 見出しの後の水平方向のスペースとなります。

〈style〉見出しのスタイルを設定するコマンドです。

⟨∗⟩ 見出し番号を付けないとき、対応するカウンタは増加します。

〈**heading**〉新しい見出しの文字列です。

見出しコマンドは通常、\@startsection と 6 つの引数で定義されています。 \secdef マクロは、見出しコマンドを \@startsection を用いないで定義すると きに使います。このマクロは、2 つの引数を持ちます。

 $\scalebox{secdef}\langle unstarcmds\rangle\langle starcmds\rangle$

 $\langle unstarcmds \rangle$ 見出しコマンドの普通の形式で使われます。

 $\langle starcmds \rangle *$ 形式の見出しコマンドで使われます。

File g: jclasses.dtx

\secdef は次のようにして使うことができます。

26.3.5 part レベル

\part このコマンドは、新しいパート(部)をはじめます。

article クラスの場合は、簡単です。

新しい段落を開始し、小さな空白を入れ、段落後のインデントを行い、\secdef で作成します。(アスキーによる元のドキュメントには「段落後のインデントをしないようにし」と書かれていましたが、実際のコードでは段落後のインデントを行っていました。そこで日本語 TeX 開発コミュニティは、ドキュメントをコードに合わせて「段落後のインデントを行い」へと修正しました。)

```
1166 (*article)
1167 \newcommand{\part}{%
1168 \if@noskipsec \leavevmode \fi
1169 \par\addvspace{4ex}%
1170 \@afterindenttrue
1171 \secdef\@part\@spart}
1172 (/article)
```

report と book スタイルの場合は、少し複雑です。

まず、右ページからはじまるように改ページをします。そして、部扉のページスタイルを empty にします。 2 段組の場合でも、 1 段組で作成しますが、後ほど 2 段組に戻すために、empty へのrestonecol スイッチを使います。

\@part このマクロが実際に部レベルの見出しを作成します。このマクロも文書クラスによって定義が異なります。

article クラスの場合は、secnumdepth が -1 よりも大きいとき、見出し番号を付けます。このカウンタが -1 以下の場合には付けません。

```
1182 \( \*\article \)
1183 \\ \def \( \@part[#1] #2{\%} \)
1184 \\ \ifnum \( \c@secnumdepth > \m@ne \)
1185 \\ \refstepcounter{part}\%
```

```
\addcontentsline{toc}{part}{%
       1186
                   \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1zw}#1}%
       1187
        1188
                \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
        1189
             \fi
       1190
             \markboth{}{}%
       1191
             {\parindent\z@\raggedright
        1192
              \verb|\interline penalty@M\normalfont|
       1193
              \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
        1194
                 \Large\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
        1195
                 \par\nobreak
        1196
        1197
               \huge\bfseries#2\par}%
        1198
              \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
        1200 (/article)
          report と book クラスの場合は、secnumdepth が -2 よりも大きいときに、見出し
        番号を付けます。-2以下では付けません。
        1201 (*report | book)
        1202 \def\@part[#1]#2{%
             1203
        1204
                \refstepcounter{part}%
        1205
                \addcontentsline{toc}{part}{%
        1206
                   \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1em}#1}%
             \else
       1207
                \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
       1208
       1209
             \fi
             \markboth{}{}%
       1210
       1211
             {\centering
              \verb|\interline penalty|@M\\|\\normalfont|
       1212
               1213
        1214
                 \huge\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
       1215
                 \par\vskip20\p@
       1216
               \fi
               \Huge\bfseries#2\par}%
       1217
              \@endpart}
       1218
       1219 (/report | book)
\Ospart このマクロは、番号を付けないときの体裁です。
       1220 (*article)
        1221 \def\@spart#1{{%
             \parindent\z@\raggedright
        1222
             \interlinepenalty\@M\normalfont
        1223
             \huge\bfseries#1\par}%
        1224
             \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
        1226 (/article)
        1227 (*report | book)
        1228 \def\@spart#1{{%
```

```
1229 \centering
1230 \interlinepenalty\@M\normalfont
1231 \Huge\bfseries#1\par}%
1232 \@endpart}
1233 \(\langle\report \| \book\rangle\)
```

(@endpart \@part と \@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷モードのときは、白ページを追加します。二段組モードのときには、これ以降のページを二段組に戻します。2016 年 12 月から、openany のときに白ページを追加するのをやめました。このバグは IATEX では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されていました。(参考: latex/3155、texjporg/jsclasses#48)

```
1234 (*report | book)
1235 \def\@endpart{\vfil\newpage
      \if@twoside
1237
       \if@openleft %% \if@openleft added (2017/02/15)
1238
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
       \else\if@openright %% \if@openright added (2016/12/18)
1239
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
1240
       \fi\fi \% added (2016/12/18, 2017/02/15)
1241
1242
二段組文書のとき、スイッチを二段組モードに戻す必要があります。
      \if@tempswa\twocolumn\fi}
```

26.3.6 chapter レベル

ます。24を参照してください。

1244 (/report | book)

chapter 章レベルは、必ずページの先頭から開始します。openright オプションが指定されている場合は、右ページからはじまるように \cleardoublepage を呼び出します。そうでなければ、\clearpage を呼び出します。なお、縦組の場合でも右ページからはじまるように、フォーマットファイルで \clerdoublepage が定義されています。日本語 T_EX 開発コミュニティによる補足: コミュニティ版の実装では、openrightと openleft の場合に \cleardoublepage をクラスファイルの中で再々定義してい

章見出しが出力されるページのスタイルは、jpl@in になります。jpl@in は、headnomble か footnomble のいずれかです。詳細は、第 25 節を参照してください。

また、\@topnum をゼロにして、章見出しの上にトップフロートが置かれないようにしています。

```
1245 \\ \text{report | book} \\
1246 \\ \newcommand{\chapter}{\%} \\
1247 \\ \if@openleft \cleardoublepage \else \\
1248 \\ \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \\ \fi \\
1249 \\ \thispagestyle{jpl@in}\% \\
1250 \\ \global\@topnum\z@
```

```
1251 \@afterindenttrue
1252 \secdef\@chapter\@schapter}

このマクロは、章見出しに番号を付けるときに呼び出されます。secnumdepthが-1
よりも大きく、\@mainmatterが真(book クラスの場合)のときに、番号を出力します。
日本語 TeX 開発コミュニティによる補足:本家 IFTeX の classes では、二段組
```

日本語 T_{EX} 開発コミュニティによる補足:本家 I E T_{EX} の classes では、二段組のときチャプタータイトルは一段組に戻されますが、アスキーによる j classes では二段組のままにされています。したがって、チャプタータイトルより高い位置に右カラムの始点が来るという挙動になっていますが、コミュニティ版でもアスキー版の挙動を維持しています。

```
1253 \def\@chapter[#1]#2{%
      \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1255 (book)
             \if@mainmatter
1256
        \refstepcounter{chapter}%
        \typeout{\@chapapp\space\thechapter\space\@chappos}%
1257
        \addcontentsline{toc}{chapter}%
1258
          {\bf \{\protect\numberline \{\qrapp\thechapter\qrapp\space{2chappos}\}\#1\}\%}
1259
             \verb|\else| add contents line{toc}{chapter}{\#1} \\ | fi
1260 (book)
1261
     \else
1262
        \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
1263
1264
      \chaptermark{#1}%
      \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\p0}}%
1266
      \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\p0}}%
      \@makechapterhead{#2}\@afterheading}
1267
このマクロが実際に章見出しを組み立てます。
1268 \def\@makechapterhead#1{\hbox{}%
      \vskip2\Cvs
1269
1270
      {\parindent\z@
1271
       \raggedright
1272
       \normalfont\huge\bfseries
1273
       \leavevmode
1274
       \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1275
         \setlength\@tempdima{\linewidth}%
1276 (book)
             \if@mainmatter
         1277
1278
         \addtolength\@tempdima{-\wd\z@}\%
         1279
1280 (book)
             \fi
         \vtop{\hsize\@tempdima#1}%
1281
1282
       \else
```

\@schapter このマクロは、章見出しに番号を付けないときに呼び出されます。

 $fi}\nobreak\vskip3\Cvs$

#1\relax

\@makechapterhead

```
日本語 TFX 開発コミュニティによる補足:やはり二段組でチャプタータイトルよ
り高い位置に右カラムの始点が来るという挙動を維持してあります。
```

1285 \def\@schapter#1{%

1286 \@makeschapterhead{#1}\@afterheading

1287 }

\@makeschapterhead 番号を付けない場合の形式です。

1288 \def\@makeschapterhead#1{\hbox{}%

\vskip2\Cvs 1289

{\parindent\z@ 1290

1291 \raggedright

1292 \normalfont\huge\bfseries

1293 \leavevmode

\setlength\@tempdima{\linewidth}% 1294

 $\displaystyle \vert {\normalfont \normalfont \normal$ 1295

1296 (/report | book)

26.3.7 下位レベルの見出し

\section 見出しの前後に空白を付け、\Large\bfseries で出力をします。

1297 \newcommand{\section}{\@startsection{section}{1}{\z@}%

 ${1.5\Cvs \Qplus.5\Cvs \Qminus.2\Cvs}$ %

1299 {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%

1300 {\normalfont\Large\bfseries}}

\subsection 見出しの前後に空白を付け、\large\bfseries で出力をします。

1301 \newcommand{\subsection}{\Qstartsection{subsection}{2}{\zQ}%

 ${1.5\Cvs \ensuremath{\Cvs \ensuremath{\Cvs \ensuremath{\Cvs}}\%}$

1303 ${.5\Cvs \ensuremath{\column{c} \cline{0.5}\Cvs}}$

1304 {\normalfont\large\bfseries}}

\subsubsection 見出しの前後に空白を付け、\normalsize\bfseries で出力をします。

1305 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%

1306 ${1.5\Cvs \ensuremath{\Cvs \ensuremath{\Cvs \ensuremath{\Cvs}}\%}$

 ${.5\Cvs \ensuremath{\column{c} \cline{0.5}\Cvs}}\%$ 1307

{\normalfont\normalsize\bfseries}} 1308

\paragraph 見出しの前に空白を付け、\normalsize\bfseries で出力をします。見出しの後ろ で改行されません。

1309 \newcommand{\paragraph}{\Qstartsection{paragraph}{4}{\zQ}\%

 ${3.25ex \mathbb{Q}plus 1ex \mathbb{Q}minus .2ex}$ % 1310

1311 $\{-1em\}\%$

{\normalfont\normalsize\bfseries}} 1312

\subparagraph 見出しの前に空白を付け、\normalsize\bfseries で出力をします。見出しの後ろ で改行されません。

26.3.8 付録

\appendix article クラスの場合、\appendix コマンドは次のことを行ないます。

- section と subsection カウンタをリセットする。
- \thesection を英小文字で出力するように再定義する。

```
 \begin{array}{lll} & 1317 & \\ & 1318 \\ & 1318 \\ & 1318 \\ & 1319 \\ & 1320 \\ & 1320 \\ & 1321 \\ & 1321 \\ & 1321 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1322 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\ & 1323 \\
```

report と book クラスの場合、\appendix コマンドは次のことを行ないます。

- chapter と section カウンタをリセットする。
- \@chapapp を \appendixname に設定する。
- \@chappos を空にする。
- \thechapter を英小文字で出力するように再定義する。

26.4 リスト環境

ここではリスト環境について説明をしています。

リスト環境のデフォルトは次のように設定されます。

まず、\rigtmargin, \listparindent, \itemindent をゼロにします。そして、K番目のレベルのリストは \@listKで示されるマクロが呼び出されます。ここで

'K' は小文字のローマ数字で示されます。たとえば、3番目のレベルのリストとして \@listiii が呼び出されます。 \@listK は \leftmarginを \leftmarginK に設定します。

```
\leftmargin 二段組モードのマージンは少しだけ小さく設定してあります。
    \leftmargini 1333 \if@twocolumn
               1334
                    \setlength\leftmargini {2em}
   \leftmarginii
               1335 \else
  \leftmarginiii 1336
                    \setlength\leftmargini {2.5em}
   \leftmarginv 次の3つの値は、\labelsepとデフォルトラベル('(m)', 'vii.', 'M.') の幅の合計よ
   \leftmarginvi りも大きくしてあります。
               1338 \setlength\leftmarginii {2.2em}
                1339 \setlength\leftmarginiii {1.87em}
               1340 \setlength\leftmarginiv {1.7em}
                1341 \if@twocolumn
                    \setlength\leftmarginv {.5em}
                1342
                    \setlength\leftmarginvi{.5em}
               1343
               1344 \else
               1345 \setlength\leftmarginv {1em}
               1346 \setlength\leftmarginvi{1em}
               1347 \fi
       \labelsep \labelsep はラベルとテキストの項目の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅
     \labelwidth です。
               1348 \setlength \labelsep {.5em}
               1349 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
                1350 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}
\@beginparpenalty これらのペナルティは、リストや段落環境の前後に挿入されます。
 \@endparpenalty
\@itempenalty
                このペナルティは、リスト項目の間に挿入されます。
                1351 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
                1352 \@endparpenalty
                                   -\@lowpenalty
                1353 \@itempenalty
                                   -\@lowpenalty
                1354 (/article | report | book)
                リスト環境の前に空行がある場合、\parskipと \topsepに \partopsep が加えら
      \partopsep
                れた値の縦方向の空白が取られます。
                1355 \langle 10pt \rangle \setlength\partopsep{2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}
                1356 \langle 11pt \rangle  \setlength\partopsep{3\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}
                1357 \langle 12pt \rangle  \setlength\partopsep{3\p0 \@plus 2\p0 \@minus 2\p0}
        \@listi \@listiは、\leftmargin,\parsep,\topsep,\itemsepなどのトップレベルの定
        \@listⅠ 義をします。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえ
                ば、\small の中では "小さい" リストパラメータになります)。
```

```
\@listi のコピーを保存するように定義されています。
                                   1358 (*10pt | 11pt | 12pt)
                                   1359 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                                   1360 (*10pt)
                                                       \parsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
                                                     \topsep 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
                                                     \itemsep4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
                                  1364 (/10pt)
                                   1365 (*11pt)
                                                     \parsep 4.5\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
                                  1366
                                                       \topsep 9\p@ \@plus3\p@ \@minus5\p@
                                   1367
                                                     \itemsep4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
                                   1368
                                   1369 (/11pt)
                                   1370 (*12pt)
                                   1371
                                                       \parsep 5\p0 \plus 2.5\p0 \pl
                                                       \topsep 10\p0 \@plus4\p0 \@minus6\p0
                                                       $\left(\frac{p}{2.5}p^{0}\right)^{0} \end{substitute} $$ \left(\frac{p}{2.5}p^{0}\right)^{0} \end{substitute} $$
                                  1374 (/12pt)
                                  1375 \let\@listI\@listi
                                       ここで、パラメータを初期化しますが、厳密には必要ありません。
                                   1376 \@listi
   \@listii 下位レベルのリスト環境のパラメータの設定です。これらは保存用のバージョンを
\@listiii 持たないことと、フォントサイズコマンドによって変更されないことに注意をして
   \@listiv ください。言い換えれば、このクラスは、本文サイズが \normalsize で現れるリス
      \@listv トの入れ子についてだけ考えています。
   \@listvi 1377 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
                                                          \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
                                  1378
                                  1379 (*10pt)
                                                           \topsep 4\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
                                   1380
                                   1381
                                                            \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
                                   1382 (/10pt)
                                   1383 (*11pt)
                                                           \topsep 4.5\p0 \plus2\p0 \plus2\p0 \plus2\p0
                                                            \parsep 2\p0 \@plus\p0 \@minus\p0
                                   1385
                                  1386 (/11pt)
                                  1387 (*12pt)
                                  1388
                                                           persep 2.5\p@ \ensuremath{\mbox{\ensuremath{\mbox{$0$}}}\polemath{\mbox{\ensuremath{\mbox{$0$}}}\polemath{\mbox{\ensuremath{\mbox{$0$}}}\polemath{\mbox{\ensuremath{\mbox{$0$}}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}}\polemath{\mbox{$0$}
                                  1389
                                   1390 (/12pt)
                                   1391
                                                          \itemsep\parsep}
                                   1392 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
                                                          \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
                                   1394 (10pt)
                                                                              \topsep 2\p@ \@plus\p@\@minus\p@
                                   1395 (11pt)
                                                                              \topsep 2\p@ \@plus\p@\@minus\p@
                                   1396 (12pt)
                                                                             \topsep 2.5\p@\@plus\p@\@minus\p@
```

このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せるように、\@listI は

```
\partopsep \p@ \@plus\z@ \@minus\p@
              1398
                     \itemsep\topsep}
              1399
              1400 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
              1401
                                \labelwidth\leftmarginiv
                                \advance\labelwidth-\labelsep}
              1402
              1403 \def\@listv
                               {\leftmargin\leftmarginv
              1404
                                \labelwidth\leftmarginv
                                \advance\labelwidth-\labelsep}
              1405
              1406 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
                                \labelwidth\leftmarginvi
              1407
                                \advance\labelwidth-\labelsep}
              1408
              1409 (/10pt | 11pt | 12pt)
               26.4.1 enumerate 環境
               enumerate 環境は、カウンタ enumi, enumii, enumiii, enumiv を使います。enumN は
               N番目のレベルの番号を制御します。
   \theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは、すでに1tlists.dtxで定義されてい
   \theenumii ます。
  \theenumiii 1410 \langle *article | report | book \rangle
  \theenumiv ^{1411} \*tate\
              1412 \renewcommand{\theenumi}{\rensuji{\@arabic\c@enumi}}
              1413 \renewcommand{\theenumii}{\rensuji{(\@alph\c@enumii)}}
              1414 \renewcommand{\theenumiii}{\rensuji{\Croman\cCenumiii}}
              1415 \renewcommand{\theenumiv}{\rensuji{\QAlph\cQenumiv}}
              1416 (/tate)
              1417 \langle *yoko \rangle
              1418 \renewcommand{\theenumi}{\Qarabic\cQenumi}
              1419 \renewcommand{\theenumii}{\Qalph\cQenumii}
              1420 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
              1421 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
              1422 (/yoko)
 \labelenumi enumerate 環境のそれぞれの項目のラベルは、\labelenumi ... \labelenumiv で
\labelenumii 生成されます。
\labelenumiii 1423 \langle *tate \rangle
\verb|\labelenumiv| 1424 \verb|\newcommand{\labelenumi}{\theenumi}|
              1425 \newcommand{\labelenumii}{\theenumii}
              1426 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii}
```

1428 (/tate) 1429 (*yoko)

1427 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv}

1430 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
1431 \newcommand{\labelenumii}{(\theenumii)}
1432 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}

1397

\parsep\z@

```
1433 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
                             1434 (/yoko)
        \p@enumii \ref コマンドによって、enumerate 環境の N 番目のリスト項目が参照されるとき
      \p@enumiii の書式です。
        \p@enumiv 1435 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
                             1436 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi(\theenumii)}
                             1437 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
        enumerate トップレベルで使われたときに、最初と最後に半行分のスペースを開けるように、
                               変更します。この環境は、ltlists.dtxで定義されています。
                             1438 \renewenvironment{enumerate}
                                         {\ifnum \@enumdepth >\thr@@\@toodeep\else
                                            \advance\@enumdepth\@ne
                             1441
                                            \edef\@enumctr{enum\romannumeral\the\@enumdepth}%
                             1442
                                            \expandafter \list \csname label\@enumctr\endcsname{%
                             1443
                                                  \iftdir
                                                        \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
                             1444
                                                             \else\topsep\z@\fi
                             1445
                                                        \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
                             1446
                                                        \labelwidth1zw \labelsep.3zw
                             1447
                                                        \ifnum \@enumdepth=\@ne \leftmargin1zw\relax
                             1448
                                                             \else\leftmargin\leftskip\fi
                             1449
                                                         \advance\leftmargin 1zw
                             1450
                             1451
                                                  \fi
                             1452
                                                         \usecounter{\@enumctr}%
                                                         \label{lap{#1}} $$ \end{makelabel} $$ \operatorname{lap{\#1}}}% $$
                             1453
                                            \fi}{\endlist}
                             1454
                               26.4.2 itemize 環境
   \labelitemi itemize 環境のそれぞれの項目のラベルは、\labelenumi ... \labelenumiv で生成
 \labelitemii されます。
\verb|\labelitemiii| 1455 \verb|\newcommand{\labelitemi}{\labelitemfont \textbullet}|
 1457
                                         \iftdir
                                                {\labelitemfont \textcircled{~}}
                             1460
                                                {\labelitemfont \bfseries\textendash}
                             1461
                                         \fi
                             1462 }
                             1463 \verb|\newcommand{\labelitemiii}{\labelitemfont \verb|\textasteriskcentered}|
                             1464 \mbox{ } {\abelitemiv}{\abelitemfont \textperiodcentered}
                             1465 \mbox{ } \mbox{newcommand} \mbox{labelitemfont} \mbox{ } \mbox{normalfont} \mbox{ } \m
            itemize トップレベルで使われたときに、最初と最後に半行分のスペースを開けるように、
                               変更します。この環境は、ltlists.dtxで定義されています。
```

```
1466 \renewenvironment{itemize}
      {\ifnum \@itemdepth >\thr@@\@toodeep\else
1467
       \advance\@itemdepth\@ne
1469
       \edef\@itemitem{labelitem\romannumeral\the\@itemdepth}%
       \expandafter \list \csname \@itemitem\endcsname{%
1470
1471
          \iftdir
             \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
1472
                \else\topsep\z@\fi
1473
             \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
1474
             \labelwidth1zw \labelsep.3zw
1475
             \ifnum \@itemdepth =\@ne \leftmargin1zw\relax
1476
1477
                \else\leftmargin\leftskip\fi
             \advance\leftmargin 1zw
1478
1479
1480
              \def\makelabel##1{\hss\llap{##1}}}%
       \fi}{\endlist}
1481
```

26.4.3 description 環境

description description 環境を定義します。縦組時には、インデントが3字分だけ深くなります。

```
1482 \newenvironment{description}
      {\left\langle \right\rangle } = \left\langle \right\rangle 
1483
       \iftdir
1484
         \leftmargin\leftskip \advance\leftmargin3\Cwd
1485
1486
         \rightmargin\rightskip
         \labelsep=1zw \itemsep\z@
1487
1488
         \listparindent\z@ \topskip\z@ \parskip\z@ \partopsep\z@
1489
       \fi
                \let\makelabel\descriptionlabel}}{\endlist}
1490
```

\descriptionlabel ラベルの形式を変更する必要がある場合は、\descriptionlabelを再定義してください。

```
1491 \newcommand{\descriptionlabel}[1]{%
1492 \hspace\labelsep\normalfont\bfseries #1}
```

26.4.4 verse 環境

verse verse 環境は、リスト環境のパラメータを使って定義されています。改行をするには \\ を用います。 \\ は \@centercr に \let されています。

```
1493 \newenvironment{verse}
1494 {\let\\\@centercr
1495 \list{}{\itemsep\z@ \itemindent -1.5em%
1496 \listparindent\itemindent
1497 \rightmargin\leftmargin \advance\leftmargin 1.5em}%
1498 \item\relax}{\endlist}
```

26.4.5 quotation 環境

quotation quotation 環境もまた、list 環境のパラメータを使用して定義されています。この環境の各行は、\textwidth よりも小さく設定されています。この環境における、段落の最初の行はインデントされます。

1499 \newenvironment{quotation}
1500 {\list{}{\listparindent 1.5em%}
1501 \itemindent\listparindent
1502 \rightmargin\leftmargin
1503 \parsep\z0 \@plus\p0}%
1504 \item\relax}{\endlist}

26.4.6 quote 環境

quote quote 環境は、段落がインデントされないことを除き、quotation 環境と同じです。

1505 \newenvironment{quote}

1506 {\list{}{\rightmargin\leftmargin}% 1507 \item\relax}{\endlist}

26.5 フロート

ltfloat.dtx では、フロートオブジェクトを操作するためのツールしか定義していません。タイプが TYPE のフロートオブジェクトを扱うマクロを定義するには、次の変数が必要です。

\fps@TYPE タイプ TYPE のフロートを置くデフォルトの位置です。

\ftype@TYPE タイプ TYPE のフロートの番号です。各 TYPE には、一意な、2 の倍数の TYPE 番号を割り当てます。たとえば、図が番号 1 ならば、表は 2 です。次のタイプは 4 となります。

\ext@TYPE タイプ TYPE のフロートの目次を出力するファイルの拡張子です。たと えば、\ext@figure は 'lot' です。

\fnum@TYPE キャプション用の図番号を生成するマクロです。たとえば、\fnum@figure は '図 \thefigure' を作ります。

26.5.1 figure 環境

ここでは、figure 環境を実装しています。

\c@figure 図番号です。

\thefigure 1508 \(\article \)\newcounter{figure}

1509 (report | book) \newcounter{figure}[chapter]

```
1510 (*tate)
            1511 \langle article \rangle \renewcommand{ \the figure } {\rensuji{ \coefigure }}
            1512 (*report | book)
            1513 \renewcommand{\thefigure}{%
            1514 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter{} · \fi\rensuji{\@arabic\c@figure}}
            1515 (/report | book)
            1516 (/tate)
            1517 (*yoko)
            1518 (article)\renewcommand{\thefigure}{\@arabic\c@figure}
            1519 (*report | book)
            1520 \renewcommand{\thefigure}{%
            1521 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi\@arabic\c@figure}
            1522 (/report | book)
            1523 (/yoko)
 \fps@figure フロートオブジェクトタイプ "figure" のためのパラメータです。
\ftype@figure 1524 \def\fps@figure{tbp}
 1528 (yoko) \def\fnum@figure{\figurename~\thefigure}
     figure *形式は2段抜きのフロートとなります。
     figure* 1529 \newenvironment{figure}
            1530
                            {\@float{figure}}
                            {\end@float}
            1532 \newenvironment{figure*}
                            {\@dblfloat{figure}}
            1534
                            {\end@dblfloat}
             26.5.2 table 環境
             ここでは、table 環境を実装しています。
    \c@table 表番号です。
   \thetable 1535 \( \article \) \newcounter{table}
            1536 (report | book) \newcounter{table} [chapter]
            1537 (*tate)
            1539 (*report | book)
            1540 \renewcommand{\thetable}{%
                 \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter{} · \fi\rensuji{\@arabic\c@table}}
            1541
            1542 (/report | book)
            1543 (/tate)
            1544 (*yoko)
            1546 (*report | book)
```

```
1547 \renewcommand{\thetable}{%
               1548 \quad \text{ifnum} \ cOchapter > \ zO \ the chapter. \ fi \ Carabic \ cOtable \}
               1549 (/report | book)
               1550 (/yoko)
      \fps@table フロートオブジェクトタイプ "table" のためのパラメータです。
    \ftype@table 1551 \def\fps@table{tbp}
               1552 \def\ftype@table{2}
      \ext@table
               1553 \def\ext@table{lot}
     1555 \langle yoko \rangle \def fnum@table{\tablename^{thetable}}
          table *形式は2段抜きのフロートとなります。
         table* 1556 \newenvironment{table}
               1557
                                {\@float{table}}
               1558
                                {\end@float}
               1559 \newenvironment{table*}
                                {\@dblfloat{table}}
               1561
                                {\end@dblfloat}
                26.6 キャプション
   \@makecaption \caption コマンドは、キャプションを組み立てるために \@mkcaption を呼出ます。
                このコマンドは二つの引数を取ります。一つは、〈number〉で、フロートオブジェク
                トの番号です。もう一つは、〈text〉でキャプション文字列です。〈number〉には通常、
                '図 3.2' のような文字列が入っています。このマクロは、\parbox の中で呼び出され
                ます。書体は\normalsizeです。
\abovecaptionskip これらの長さはキャプションの前後に挿入されるスペースです。
\verb|\belowcaptionskip| 1562 \verb|\newlength| above captionskip|
                1563 \newlength\belowcaptionskip
               1564 \setlength\abovecaptionskip{10\p@}
               1565 \setlength\belowcaptionskip{0\p@}
                  キャプション内で複数の段落を作成することができるように、このマクロは\long
                で定義をします。
                1566 \long\def\@makecaption#1#2{%
               1567
                    \vskip\abovecaptionskip
                    \iftdir\sbox\@tempboxa{#1\hskip1zw#2}%
               1568
                      \else\sbox\@tempboxa{#1: #2}%
               1569
               1570
                    \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
               1571
               1572
                      \iftdir #1\hskip1zw#2\relax\par
                        \else #1: #2\relax\par\fi
               1573
               1574
               1575
                      \global \@minipagefalse
```

1576 \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%

1577 \fi

1578 \vskip\belowcaptionskip}

26.7 コマンドパラメータの設定

26.7.1 array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境のカラムは 2\arraycolsep で分離されます。
1579 \setlength\arraycolsep{5\p0}

\tabcolsep tabular 環境のカラムは 2\tabcolsep で分離されます。
1580 \setlength\tabcolsep{6\p0}

\arrayrulewidth arrayとtabular環境内の罫線の幅です。
1581 \setlength\arrayrulewidth{.4\p0}

\doublerulesep array と tabular 環境内の罫線間を調整する空白です。
1582 \setlength\doublerulesep{2\p0}

26.7.2 tabbing 環境

\tabbingsep \', コマンドで置かれるスペースを制御します。
1583 \setlength\tabbingsep{\labelsep}

26.7.3 minipage 環境

| Compfootins minipage にも脚注を付けることができます。\skip\Compfootins は、通常の\skip\footins と同じような動作をします。
| 1584 \skip\Compfootins = \skip\footins |

26.7.4 framebox 環境

\fboxsep \fboxsep は、\fboxと\frameboxでの、テキストとボックスの間に入る空白です。
\fboxrule \fboxrule は\fboxと\frameboxで作成される罫線の幅です。

1585 \setlength\fboxsep{3\p0}

1586 \setlength\fboxrule{.4\p0}

26.7.5 equation と eqnarray 環境

\theequation equation カウンタは、新しい章の開始でリセットされます。また、equation 番号に は、章番号が付きます。

File g: jclasses.dtx

このコードは \chapter 定義の後、より正確には chapter カウンタの定義の後、でなくてはいけません。

27 フォントコマンド

disablejfam オプションが指定されていない場合には、以下の設定がなされます。まず、数式内に日本語を直接、記述するために数式記号用文字に "JY1/mc/m/n" を登録します。数式バージョンが bold の場合は、"JY1/gt/m/n" を用います。これらは、\mathmc, \mathgt として登録されます。また、日本語数式ファミリとして \symmincho がこの段階で設定されます。mathrmmc オプションが指定されていた場合には、これに引き続き \mathrm と \mathbf を和欧文両対応にするための作業がなされます。この際、他のマクロとの衝突を避けるため \AtBeginDocument を用いて展開順序を遅らせる必要があります。

disablejfam オプションが指定されていた場合には、\mathmc と \mathgt に対してエラーを出すだけのダミーの定義を与える設定のみが行われます。

変更

pLPT_EX 2.09 compatibility mode では和文数式フォント fam が 2 重定義されていたので、その部分を変更しました。

```
1593 \if@enablejfam
      \if@compatibility\else
1594
        \DeclareSymbolFont{mincho}{JY1}{mc}{m}{n}
1595
1596
        \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
        \SetSymbolFont{mincho}{bold}{JY1}{gt}{m}{n}
1597
        \jfam\symmincho
1598
        1599
1600
      \fi
      \if@mathrmmc
1601
1602
        \AtBeginDocument{%
        \label{thm} $$\operatorname{\mathbf{Mathrm}}_{\mathbf{Mathrm}}_{\mathbf{Mathrm}} $$
1603
        \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
1604
      }%
1605
1606
      \fi
1607 \else
      \DeclareRobustCommand{\mathmc}{%
        \@latex@error{Command \noexpand\mathmc invalid with\space
           'disablejfam' class option.}\@eha
1610
      }
1611
```

```
1612 \DeclareRobustCommand{\mathgt}{\%}
1613 \QlatexQerror{Command \noexpand\mathgt invalid with\space
1614 'disablejfam' class option.}\Qeha
1615 }
1616 \fi
```

ここでは IFT_EX 2.09 で一般的に使われていたコマンドを定義しています。これらのコマンドはテキストモードと数式モードの**どちらでも**動作します。これらは互換性のために提供をしますが、できるだけ \text...と \math...を使うようにしてください。

- \mc これらのコマンドはフォントファミリを変更します。互換モードの同名コマンドと
- \gt 異なり、すべてのコマンドがデフォルトフォントにリセットしてから、対応する属
- \rm 性を変更することに注意してください。
- \sf 1617 \DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}
- \tt \lambda \DeclareOldFontCommand{\gt}{\normalfont\gtfamily}{\mathgt}
 - 1619 \DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
 - $1620 \verb|\DeclareOldFontCommand{\sf}{\normalfont\sffamily}{\mbox|\mbox|}$
 - $1621 \end{\text{\command} \rathth{\command{\rathth{\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command}\command{\rathth{\command}\command{\rathth{\command}\command}\command{\rathth{\command}\command}\command{\rathth{\command}\command}\command}\command{\rathth{\command}\command}\command}\command{\rathth{\command}\command}\command}\command}\command\command\command}\command\command}\command\command}\command\command}\command\command}\command\command}\command\command}\command\command}\command\command}\command\command}\command\command}\command\com$
- \bf このコマンドはボールド書体にします。ノーマル書体に変更するには、\mdseries と指定をします。
 - $1622 \verb|\DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mbox|\mbox|}$
- \it これらのコマンドはフォントシェイプを切替えます。スラント体とスモールキャッ
- \sl プの数式アルファベットはありませんので、数式モードでは何もしませんが、警告
- \sc メッセージを出力します。\upshape コマンドで通常のシェイプにすることができます。
 - 1623 \DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mathit}

 - $1625 \verb|\DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\close{Command}\sc}|$
- \cal これらのコマンドは数式モードでだけ使うことができます。数式モード以外では何 \mit もしません。現在の NFSS は、これらのコマンドが警告を生成するように定義して いますので、'手ずから' 定義する必要があります。
 - 1626 \DeclareRobustCommand*{\cal}{\@fontswitch\relax\mathcal}
 1627 \DeclareRobustCommand*{\mit}{\@fontswitch\relax\mathnormal}

28 相互参照

28.1 目次

\section コマンドは、.toc ファイルに、次のような行を出力します。

\contentsline{section} $\{\langle title \rangle\}\{\langle page \rangle\}$

 $\langle title \rangle$ には項目が、 $\langle page \rangle$ にはページ番号が入ります。\section に見出し番号が付く場合は、 $\langle title \rangle$ は、\numberline{ $\langle num \rangle$ }{ $\langle heading \rangle$ }となります。 $\langle num \rangle$ は\thesection コマンドで生成された見出し番号です。 $\langle heading \rangle$ は見出し文字列です。この他の見出しコマンドも同様です。

figure 環境での \caption コマンドは、.lof ファイルに、次のような行を出力します。

 $\verb|\contentsline{figure}| \{ numberline{|\langle num\rangle|} \{ \langle caption\rangle| \} \} \{ \langle page\rangle| \}$

 $\langle num \rangle$ は、\thefigure コマンドで生成された図番号です。 $\langle caption \rangle$ は、キャプション文字列です。table 環境も同様です。

\contentsline $\{\langle name \rangle\}$ コマンドは、\ $10\langle name \rangle$ に展開されます。したがって、目次の体裁を記述するには、\10chapter,\10section などを定義します。図目次のためには \10figure です。これらの多くのコマンドは \100dottedtocline コマンドで定義されています。このコマンドは次のような書式となっています。

 $\verb|\dottedtocline|{\langle level\rangle}|{\langle indent\rangle}|{\langle numwidth\rangle}|{\langle title\rangle}|{\langle page\rangle}|$

 $\langle level \rangle$ " $\langle level \rangle$ <= tocdepth"のときにだけ、生成されます。\chapter はレベル 0、\section はレベル 1、... です。

 $\langle indent \rangle$ 一番外側からの左マージンです。

 $\langle numwidth \rangle$ 見出し番号(\numberline コマンドの $\langle num \rangle$)が入るボックスの幅です。

\c@tocdepth tocdepthは、目次ページに出力をする見出しレベルです。

 $1628 \ \langle article \rangle \ setcounter \{tocdepth\} \{3\} \\ 1629 \ \langle larticle \rangle \ setcounter \{tocdepth\} \{2\}$

また、目次を生成するために次のパラメータも使います。

\Opnumwidth ページ番号の入るボックスの幅です。

 $1630 \mbox{ \newcommand{\communitath}{1.55em}}$

\Otocrmarg 複数行にわたる場合の右マージンです。

1631 \newcommand{\@tocrmarg}{2.55em}

\@dotsep ドットの間隔 (mu 単位) です。2 や 1.7 のように指定をします。 1632 \newcommand{\@dotsep}{4.5}

\toclineskip この長さ変数は、目次項目の間に入るスペースの長さです。デフォルトはゼロとなっています。縦組のとき、スペースを少し広げます。

File g: jclasses.dtx

```
1634 (yoko)\setlength\toclineskip{\z@}
                                     1635 (tate)\setlength\toclineskip{2\p0}
                                    \numberline マクロの定義を示します。オリジナルの定義では、ボックスの幅を
          \numberline
          \@lnumwidth \@tempdima にしていますが、この変数はいろいろな箇所で使われますので、期待
                                        した値が入らない場合があります。
                                            フォント選択コマンドの後、あるいは \numberline マクロの中でフォントを切
                                       替えてもよいのですが、一時変数を意識したくないので、見出し番号の入るボック
                                        スを \@lnumwidth 変数を用いて組み立てるように \numberline マクロを再定義し
                                        ます。
                                     1636 \newdimen\@lnumwidth
                                     1637 \def\numberline#1{\hb@xt@\@lnumwidth{#1\hfil}}
  \@dottedtocline 目次の各行間に\toclineskipを入れるように変更します。このマクロはltsect.dtx
                                       で定義されています。
                                     1638 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{%
                                                  \ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                                       \vskip\toclineskip \@plus.2\p@
                                     1641
                                                       {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                                     1642
                                                         \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                                     1643
                                                         \interlinepenalty\@M
                                                        \leavevmode
                                     1644
                                                         \@lnumwidth #3\relax
                                     1645
                                                         \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                                     1646
                                     1647
                                                         {#4}\nobreak
                                     1648
                                                         \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu.\mkern \@dotsep mu$}%
                                     1649
                                                         \hfill\nobreak
                                                         \hb@xt@\@pnumwidth{\hss\normalfont \normalcolor #5}%
                                     1651
                                                         \par}%
                                     1652
                                                  \fi}
\addcontentsline 縦組の場合にページ番号を \rensuji で囲むように変更します。
                                            このマクロは ltsect.dtx で定義されています。
                                     1653 \providecommand*\protected@file@percent{}
                                     1654 \def\addcontentsline#1#2#3{%
                                     1655 \protected@write\@auxout
                                     1656
                                                       1657 (tate)
                                                                   \@temptokena{\rensuji{\thepage}}}%
                                     1658 (yoko)
                                                                    \@temptokena{\thepage}}%
                                                       {\string\@writefile{#1}%
                                     1659
                                                             {\bf \{\protect\contentsline{#2}{\#3}{\tt \{\the\contentsline{#2}}{\#3}{\tt \{\the\contentsline{#2}{\#3}}{\tt \{\the\contentsline{#2}{\#3}}{\tt \{\the\contentsline{#2}{\#3}}{\tt \{\the\contentsline{*2}{\#3}}{\tt \{\the\contentsline{*2}{\#3}}{
                                     1660
                                     1661
                                                               \protected@file@percent}}%
                                     1662 }
```

1633 \newdimen\toclineskip

28.1.1 本文目次

```
目次を生成します。
\tableofcontents
                 1663 \newcommand{\tableofcontents}{%
                 1664 (*report | book)
                       \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                       \else\@restonecolfalse\fi
                 1666
                 1667 (/report | book)
                 1668 (article)
                             \section*{\contentsname
                             \chapter*{\contentsname
                 1669 (!article)
                  \tableofcontents では、\@mkboth は heading の中に入れてあります。ほかの命
                  令 (\listoffigures など) については、\@mkboth は heading の外に出してありま
                  す。これは IATFX の classes.dtx に合わせています。
                         \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
                       }\@starttoc{toc}%
                 1672 (report | book) \if@restonecol\twocolumn\fi
         \1@part part レベルの目次です。
                 1674 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                      \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
                 1676 (article)
                                \addpenalty{\@secpenalty}%
                 1677 (!article)
                                \addpenalty{-\@highpenalty}%
                 1678
                         \addvspace{2.25em \@plus\p@}%
                 1679
                         \begingroup
                 1680
                         \parindent\z@\rightskip\@pnumwidth
                 1681
                         \parfillskip-\@pnumwidth
                         {\leavevmode\large\bfseries
                 1682
                          \setlength\@lnumwidth{4zw}%
                 1683
                 1684
                          #1\hfil\nobreak
                          \hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}}\par
                 1685
                         \nobreak
                 1686
                 1687 (article)
                                \if@compatibility
                         \global\@nobreaktrue
                 1689
                         \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
                 1690 (article)
                                \fi
                 1691
                          \endgroup
                       fi
                 1692
      \1@chapter chapter レベルの目次です。
                 1693 (*report | book)
                 1694 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
                       \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
                 1695
                         \addpenalty{-\@highpenalty}%
                 1696
                 1697
                         \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
                 1698
                         \begingroup
                           \parindent\z@ \rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
```

```
1700
                                                                  \leavevmode\bfseries
                                                                  \setlength\@lnumwidth{4zw}%
                                         1701
                                                                  \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                                         1702
                                         1703
                                                                 $1\nobreak\hfil\nobreak\hb@xt@\pnumwidth{\hss#2}\par
                                         1704
                                                                  \penalty\@highpenalty
                                         1705
                                                             \endgroup
                                         1706
                                                        \{fi\}
                                         1707 \; \langle / \text{report} \mid \text{book} \rangle
              \logartion section レベルの目次です。
                                         1708 (*article)
                                         1709 \newcommand*{\l@section}[2]{%
                                                       \ifnum \c@tocdepth >\z@
                                         1710
                                         1711
                                                             \addpenalty{\@secpenalty}%
                                         1712
                                                             \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
                                         1713
                                                             \begingroup
                                         1714
                                                                  \parindent\z@ \rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
                                         1715
                                                                  \leavevmode\bfseries
                                                                  \setlength\@lnumwidth{1.5em}%
                                         1716
                                                                  \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                                         1717
                                                                 1718
                                         1719
                                                             \endgroup
                                         1720
                                                        \{fi\}
                                         1721 (/article)
                                         1722 (*report | book)
                                         1723 \langle tate \rangle \newcommand*{\l@section}{\cdottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
                                         1724 \langle yoko \rangle \newcommand*{\l@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}
                                         1725 (/report | book)
       \l@subsection 下位レベルの目次項目の体裁です。
\l0subsubsection 1726 \langle *tate \rangle
         \l@paragraph ^{1727} \langle *article \rangle
                                         1728 \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                           {\@dottedtocline{2}{1zw}{4zw}}
  \verb|\label{loss-prop}| 1729 \verb|\label{loss-pr
                                         1730 \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                                           {\@dottedtocline{4}{3zw}{8zw}}
                                         1731 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4zw}{9zw}}
                                         1732 (/article)
                                         1733 (*report | book)
                                         1734 \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                           {\@dottedtocline{2}{2zw}{6zw}}
                                         1735 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3zw}{8zw}}}
                                         1736 \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                                           {\dot{dottedtocline}{4}{4zw}{9zw}}
                                         1737 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{5zw}{10zw}}
                                         1738 (/report | book)
                                         1739 (/tate)
                                         1740 (*yoko)
                                         1741 (*article)
                                         1742 \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                           1743 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
```

```
1745 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
                                     1746 (/article)
                                     1747 (*report | book)
                                     1748 \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                                          {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
                                     1749 \enskip 174
                                     1750 \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                                          1751 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                                      1752 (/report | book)
                                      1753 (/yoko)
                                       28.1.2 図目次と表目次
\listoffigures 図の一覧を作成します。
                                     1754 \newcommand{\listoffigures}{%
                                     1755 (*report | book)
                                                   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                     1757
                                                    \else\@restonecolfalse\fi
                                     1758
                                                    \chapter*{\listfigurename}%
                                     1759 (/report | book)
                                                                         \section*{\listfigurename}%
                                     1760 (article)
                                                 \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
                                     1761
                                                  \@starttoc{lof}%
                                     1763 \langle report \mid book \rangle \land if@restonecol \land twocolumn \land fi
                                     1764 }
            \l@figure 図目次の体裁です。
                                     1765 \langle tate \rangle \newcommand*{\l@figure}{\l@dottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
                                     1766 \langle yoko \rangle \newcommand*{\l@figure}{\l@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}
  \listoftables 表の一覧を作成します。
                                     1767 \newcommand{\listoftables}{%
                                     1768 (*report | book)
                                     1769
                                                    \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                     1770
                                                    \else\@restonecolfalse\fi
                                     1771 \chapter*{\listtablename}%
                                     1772 (/report | book)
                                     1773 (article)
                                                                         \section*{\listtablename}%
                                                   \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
                                                   \@starttoc{lot}%
                                     1776 (report | book) \if@restonecol\twocolumn\fi
                                     1777 }
               \lotable 表目次の体裁は、図目次と同じにします。
                                     1778 \let\l@table\l@figure
```

1744 \newcommand*{\l@paragraph}

 ${\dot{cline}{4}{7.0em}{4.1em}}$

28.2 参考文献

```
オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。
    \bibindent
             1779 \newdimen\bibindent
             1780 \setlength\bibindent{1.5em}
     \newblock \newblock のデフォルト定義は、小さなスペースを生成します。
             1781 \newcommand{\newblock}{\hskip .11em\@plus.33em\@minus.07em}
thebibliography 参考文献や関連図書のリストを作成します。
             1782 \newenvironment{thebibliography}[1]
             \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
             1785
             1786
                        {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
                         \leftmargin\labelwidth
             1787
                         \advance\leftmargin\labelsep
             1788
                         \@openbib@code
             1789
             1790
                         \usecounter{enumiv}%
             1791
                         \let\p@enumiv\@empty
                         \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
             1792
             1793
                    \sloppy
                    \clubpenalty4000
             1794
             1795
                    \@clubpenalty\clubpenalty
             1796
                    \widowpenalty4000%
              1797
                    \sfcode '\.\@m}
              1798
                   {\def\@noitemerr
                    {\@latex@warning{Empty 'thebibliography' environment}}%
             1799
             1800
              \@openbib@code のデフォルト定義は何もしません。この定義は、openbib オプショ
\@openbib@code
              ンによって変更されます。
             1801 \let\@openbib@code\@empty
    \@biblabel The label for a \bibitem[...] command is produced by this macro. The default
              from latex.dtx is used.
              1802 % \renewcommand*{\@biblabel}[1]{[#1]\hfill}
       \@cite The output of the \cite command is produced by this macro. The default from
              ltbibl.dtx is used.
              1803 % \renewcommand*{\@cite}[1]{[#1]}
```

28.3 索引

```
theindex 2段組の索引を作成します。索引の先頭のページのスタイルは jpl@in とします。し
                                たがって、headings と bothstyle に適した位置に出力されます。
                               1804 \newenvironment{theindex}
                                           {\if@twocolumn\@restonecolfalse\else\@restonecoltrue\fi
                               1806 (article)
                                                           \twocolumn[\section*{\indexname}]%
                                                                      \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}]%
                               1807 (report | book)
                                              \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
                               1808
                                              \thispagestyle{jpl@in}\parindent\z@
                               1809
                                パラメータ \columnseprule と \columnsep の変更は、\twocolumn が実行された
                                後でなければなりません。そうしないと、索引の前のページにも影響してしまうた
                                めです。
                               1810
                                              \protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\protect\pro
                                              \columnseprule\z@ \columnsep 35\p@
                               1811
                               1812
                                              \let\item\@idxitem}
                                           {\if@restonecol\onecolumn\else\clearpage\fi}
        \@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。
          \subitem 1814 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 40\p@}
   \subsubitem \lambda \text{1815 \newcommand{\subitem}{\(\text{Qidxitem \hspace*{20\p@}}\)
                               1816 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*\{30\p0\}}
    \indexspace 索引の"文字"見出しの前に入るスペースです。
                               1817 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@ \@plus5\p@ \@minus3\p@\relax}
                                                 脚注
                                28.4
\footnoterule 本文と脚注の間に引かれる罫線です。
                               1818 \renewcommand{\footnoterule}{%
                                           \mbox{kern-3}p@
                               1820
                                           \hrule\@width.4\columnwidth
                               1821
                                           \mbox{kern2.6}p0
    \c@footnote report と book クラスでは、chapter レベルでリセットされます。
                               1822 \langle !article \rangle \setminus @addtoreset{footnote}{chapter}
  \@makefntext このマクロにしたがって脚注が組まれます。
                                     \@makefnmark は脚注記号を組み立てるマクロです。
                               1823 (*tate)
                               1824 \newcommand\@makefntext[1]{\parindent 1zw
                               1825 \noindent\hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}#1}
                               1826 (/tate)
                               1827 (*yoko)
```

1828 \newcommand \@makefntext[1] {\parindent 1em

```
1829 \noindent\hb@xt@ 1.8em{\hss\@makefnmark}#1}
1830 (/yoko)
```

29 今日の日付

組版時における現在の日付を出力します。

1831 \newif\if 西曆 \ 西曆 true 1832 \def\ 西曆{\ 西曆 true} 1833 \def\ 和曆{\ 西曆 false}

\heisei \today コマンドを \rightmark で指定したとき、\rightmark を出力する部分で 和暦のための計算ができないので、クラスファイルを読み込む時点で計算しておきます。

1834 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax

\today 縦組の場合は、漢数字で出力します pIFTEX 2018-12-01 以前では縦数式ディレクショ \pltx@today@year ン時でも漢数字で出力していましたが、pIFTEX 2019-04-06 以降からはそうしなくなりました。

```
1835 \def\pltx@today@year@#1{%
      \ifnum\numexpr\year-#1=1 元 \else
        \ifnum1=\iftdir\ifmdir0\else1\fi\else0\fi
1837
           \kansuji\number\numexpr\year-#1\relax
1838
        \else
1839
           \number\numexpr\year-#1\relax\nobreak
1840
        \fi
1841
      \fi 年
1842
1843 }
1844 \def\pltx@today@year{%
      \infty = \frac{10000+\mathrm{1000}}{\mathrm{1000}}
1846
        昭和 \pltx@today@year@{1925}%
1847
      \ensuremath{\verb| linum| numexpr| year*10000+\month*100+\day<20190501}
1848
         平成 \pltx@today@year@{1988}%
1849
        令和 \pltx@today@year@{2018}%
1850
      fi\fi
1851
1852 \left( \frac{1}{8} \right)
1853
         \ifnum1=\iftdir\ifmdir0\else1\fi\else0\fi\kansuji\number\year
1854
        \else\number\year\nobreak\fi 年
1856
      \else
1857
        \pltx@today@year
```

```
1858 \fi
1859 \ifnum1=\iftdir\ifmdir0\else1\fi\else0\fi
1860 \kansuji\number\month 月
1861 \kansuji\number\day 日
1862 \else
1863 \number\month\nobreak 月
1864 \number\day\nobreak 日
1865 \fi}}
```

30 初期設定

```
\prepartname
   \postpartname
                1866 \newcommand{\prepartname}{第}
                1867 \newcommand{\postpartname}{部}
\prechaptername
                 1868 (report | book) \newcommand {\prechaptername} {第}
\postchaptername
                \contentsname
\listfigurename 1870 \newcommand{\contentsname}{目 次}
                1871 \newcommand{\listfigurename}{図 目 次}
 \listtablename
                 1872 \newcommand{\listtablename}{表 目 次}
       \refname
       \bibname
                1873 (article)\newcommand{\refname}{参考文献}
                1874 (report | book)\newcommand{\bibname}{関連図書}
      \indexname
                 1875 \newcommand{\indexname}{索 引}
    \figurename
     \tablename 1876 \newcommand{\figurename}{図}
                 1877 \newcommand{\tablename}{表}
  \appendixname
   \abstractname
                1878 \newcommand{\appendixname}{付 録}
                 1879 (article | report) \newcommand {\abstractname} {概要}
                 1880 \langle book \rangle \rangle 
                 1881 \langle !book \rangle \rangle 
                 1882 \pagenumbering{arabic}
                 1883 \raggedbottom
                 1884 \if@twocolumn
                 1885
                      \twocolumn
                      \sloppy
                 1886
                 1887 \else
                 1888 \onecolumn
                 1889 \fi
```

\@mparswitch は傍注を左右(縦組では上下)どちらのマージンに出力するかの指定です。偽の場合、傍注は一方の側にしか出力されません。このスイッチを真とすると、とくに縦組の場合、奇数ページでは本文の上に、偶数ページでは本文の下に傍注が出力されますので、おかしなことになります。

また、縦組のときには、傍注を本文の下に出すようにしています。\reversemarginparとすると本文の上側に出力されます。ただし、二段組の場合は、つねに隣接するテキスト側のマージンに出力されます。

```
1890 (*tate)
1891 \normalmarginpar
1892 \@mparswitchfalse
1893 (/tate)
1894 (*yoko)
1895 \if@twoside
1896 \@mparswitchtrue
1897 \else
1898 \@mparswitchfalse
1899 \fi
1900 (/yoko)
1901 (/article|report|book)
```

File h jltxdoc.dtx

```
jltxdoc クラスは、ltxdoc をテンプレートにして、日本語用の修正を加えています。
            2 \DeclareOption*{\PassOptionsToClass{\CurrentOption}{ltxdoc}}
            3 \ProcessOptions
            4 \LoadClass{ltxdoc}
\normalsize ltxdoc からロードされる article クラスでの行間などの設定値で、日本語の文章
    \small を組版すると、行間が狭いように思われるので、多少広くするように再設定します。
\parindent また、段落先頭での字下げ量を全角一文字分とします。
            5 \renewcommand{\normalsize}{%
                 \@setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
            7
               \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
              \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
            9 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
                \belowdisplayskip \abovedisplayskip
           10
                \let\@listi\@listI}
           11
           12 \renewcommand{\small}{%
              \@setfontsize\small\@ixpt{11}%
               \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
               \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@
               17
               \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
                         \label{local_problem} $$ \operatorname{dp0 \plus2p0 \plus2p0} \
                         \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
           19
                         \itemsep \parsep}%
           20
           21 \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
           22 \normalsize
           23 \setlength\parindent{1zw}
     \file \file マクロは、ファイル名を示すのに用います。
           24 \providecommand*{\file}[1]{\texttt{#1}}
   \pstyle \pstyle マクロは、ページスタイル名を示すのに用います。
           25 \providecommand*{\pstyle}[1]{\textsl{#1}}
   \Lcount \Lcount マクロは、カウンタ名を示すのに用います。
           26 \providecommand*{\Lcount}[1]{\textsl{\small#1}}
     \Lopt \Lopt マクロは、クラスオプションやパッケージオプションを示すのに用います。
           27 \providecommand*{\Lopt}[1]{\textsf{#1}}
```

```
\dst \dst マクロは、"DOCSTRIP" を出力する。
      28 \providecommand\dst{{\normalfont\scshape docstrip}}
```

\NFSS \NFSS マクロは、"NFSS"を出力します。

29 \providecommand\NFSS{\textsf{NFSS}}

\c@clineno \mlineplus マクロは、その時点でのマクロコードの行番号に、引数に指定された \mlineplus 行数だけを加えた数値を出力します。たとえば \mlineplus{3}とすれば、直前のマ クロコードの行番号(29)に3を加えた数、"32"が出力されます。

- 30 \newcounter{@clineno}
- 31 \def\mlineplus#1{\setcounter{@clineno}{\arabic{CodelineNo}}%
- \addtocounter{@clineno}{#1}\arabic{@clineno}}

tsample tsample 環境は、環境内に指定された内容を罫線で囲って出力をします。第一引数 は、出力するボックスの高さです。plext.dtxの中で使用しています。このマクロ 内では縦組になることに注意してください。

- $33 \left| 4f\right|$
- \hbox to\linewidth\bgroup\vrule width.1pt\hss
- \vbox\bgroup\hrule height.1pt
- 36 \vskip.5\baselineskip
- \vbox to\linewidth\bgroup\tate\hsize=#1\relax\vss} 37
- 38 \def\endtsample{%
- \vss\egroup 39
- \vskip.5\baselineskip 40
- \hrule height.1pt\egroup 41
- \hss\vrule width.1pt\egroup}

\DisableCrossrefs jclasses.dtx を処理するときに、\if 西暦の部分でエラーになるため、一時的に \EnableCrossrefs クロスリファレンスの機能をオフにします。しかし、デフォルトの定義では完全に 制御できないので、ここで再定義をします。

- 43 \def\DisableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedfalse\@esphack}
- 44 \def\EnableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedtrue
- \def\DisableCrossrefs{\@bsphack\scan@allowedfalse\@esphack}\@esphack}

\verb pIATFX では、\verb コマンドを修正して直前に \xkanjiskip が入るようにしてい ます。しかし、ltxdoc.cls が読み込む doc.sty が上書きしてしまいますので、こ れを再々定義します。doc.sty での定義は

> \def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\null\fi \bgroup \let\do\do@noligs \verbatim@nolig@list \ttfamily \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials \Oifstar{\Osverb}{\Ovobeyspaces \frenchspacing \Osverb}}

となっていますので、plcore.dtxと同様に \null を外して \vadjust{}を入れます。

```
46 \ensuremath{\label{leavevmode} \fi} \\
```

- 47 \bgroup \let\do\do@noligs \verbatim@nolig@list
- $49 \qquad \verb{\continuous} {\continuous} \\$

\xspcode コマンド名の\と16進数を示すための"の前にもスペースが入るよう、これらの \xspcode の値を変更します。

- 50 \xspcode"5C=3 %% \
- 51 \xspcode"22=3 %% "
- $52 \langle / \mathsf{class} \rangle$

1992/02/04 jclasses.dtx v1.1d	1995/08/11 plext.dtx v1.1c
General: disablejfam の判断を間違	\X@tabular: \tabarray のタイプミ
えてたのを修正 140	ス修正 103
	1995/08/22 plfonts.dtx v1.0c
1995/02/05 plcore.dtx v1.1c	
\@outputpage: \oddsidemargin \&	\@@kenc@update : 縦横用エンコード の保存
\evensidemargin が逆だったの	** **
を修正 79	\selectfont: 縦横両方のフォント
1995/03/28 plfonts.dtx v1.1b	を切り替えるようにした 24
\ktenc@list: リストの初期値を変更 9	1995/08/23 jclasses.dtx v1.0d
\notffam@list: リストの初期値を	\ps@bothstyle: 横組の evenfoot が
変更 10	中央揃えになっていたのを修正 165
1995/04/05 plcore.dtx v1.1b	\ps@myheadings: 横組モードの左右
\verb: 互換モードのときは、	が逆であったのを修正 166
pl209.def の定義を使う 89	1995/08/24 plfonts.dtx v1.1c
1995/04/07 plcore.dtx v1.0a	\strut: "\centerling \strut" $\mathcal O$
\@footnotetext: 組方向の判定を	幅がゼロになってしまうのを修正 11
ボックスの外でするようにした 86	1995/08/25 plcore.dtx v1.1c
	\@gnewline: 行頭禁則文字の直前で
1995/04/12 plcore.dtx v1.0a	の改行での不具合の修正 64
(@footnotemark: 脚注記号の出力位	1995/08/30 jclasses.dtx v1.0a
置の調整	General: 柱の書体がノンブルに影響
Cmakefnmark : 縦組でも上付き数字	するバグの修正 162
を使うように修正 84	1995/08/30 plvers.dtx v1.0a
\thempfn: Removed \thempfn 84	General: LATEX <1995/06/01>版用
\thempfootnote: Removed	に修正1
\thempfootnote 84	1995/08/31 plfonts.dtx v1.0c
1995/04/12 plfonts.dtx v1.1b	\adjustbaseline: 欧文書体の基準
\textunderscore: 下線マクロを追	を 'M' から '/' に変更 27
加	1995/09/07 plcore.dtx v1.1c
1995/04/26 plfonts.dtx v1.1b	\@setref: change \null to \relax
\selectfont: ベースラインの調整	in \@setref 88
をサイズ変更時に行なうように	1995/09/11 plext.dtx v1.1c
した 25	\@iiiminipage: Add
1995/05/10 plfonts.dtx v1.1b	\adjustbaseline 114
\fontfamily: \notkfam@list \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\@iiiparbox: Add
エンコードごとに登録されてし	\adjustbaseline 115
まうのを修正した。欧文につい	
ても同様。	1 3 . 3
\ktenc@list: リスト内の空白を削除 9	1995/09/12 plfonts.dtx v1.1c
	General: \xkanjiskipのデフォルト
\notffam@list: リスト内の空白を	值 59
削除	1995/09/26 jclasses.dtx v1.0a
1995/05/16 plvers.dtx v1.0	General: Change b4paper
General: plate X 2 を用に	width/height 352x250 to
ltvers.dtx を修正 1	364×257

Change b5paper width/height	1996/01/12 plext.dtx v1.1g
250x176 to $257x182$ 137	\@iiiminipage:
1995/10/24 plext.dtx v1.1c	Grouping \@iiiminipage 113
\@iiiparbox:	\@iiiparbox:
$\operatorname{typo} \operatorname{\texttt{}} \operatorname{\texttt{adjustbaesline}}.$ 115	Grouping \@iiiparbox 115
1995/11/09 plfonts.dtx v1.2	1996/01/26 plcore.dtx v1.1b
\DeclareFixedFont:	\@makefnmark : 脚注マークの後ろに
\DeclareFixedFont の日本語化 19	余計なスペースが入るのを修正 84
1995/11/10 plcore.dtx v1.1a	1996/01/31 plvers.dtx v1.0b
\@outputpage: \topmargin が反映	General: LATEX <1995/12/01>版用
されないバグを修正 79	に修正 1
1995/11/10 plext.dtx v1.1d	1996/02/17 plcore.dtx v1.1e
\p@array: \@array to \p@array . 104	General: \printglossary を追加 . 91
\p@tabarray:\@tabarray $ m to$	1996/02/29 jclasses.dtx v1.0d
\p@tabarray 104	General: article と report のデフォ
\p@tabular: \@tabular to	ルトを plain に修正 201
\p@tabular 104	\ps@jpl@in: <i>jpl@in</i> の初期値を定 義
\X@tabular: \@tabarray to	義 162 1996/03/05 jclasses.dtx v1.0d
\p@tabarray 103	\ps@bothstyle: 横組で偶数ページ
\@tabular to \p@tabular 103	と奇数ページの設定が逆なのを
1995/11/21 plext.dtx v1.1d	修正 165
\prensuji: \Rensuji, \prensuji	1996/03/06 plfonts.dtx v1.1c
を作成 122	\notffam@list:\notkfam@list \Z
1995/11/21 plfonts.dtx v1.2	\notffam@list の初期値を変更 10
\@notffam: \fontfamily コマンド	1996/03/12 plcore.dtx v1.1d
用のフラグ追加 31	\@stopfield: \=の後ろに和欧文間
\adjustbaseline: 縦組時のみ調整	- スペースが入るのを修正 91
するようにした 27	1996/03/13 plext.dtx v1.0h
\fontfamily: 代用フォントが使わ	$\DeclareLayoutCaption: ++ 7$
れないバグを修正 32	ション出力位置の初期値を設定 110
1995/11/22 plfonts.dtx v1.2	\kanji: \@Kanji を追加。英語版と
\selectfont: エラーフォントに対	同様にした。 122
応した	1996/03/13 plext.dtx v1.1h
1995/11/24 jclasses.dtx v1.1d	\make@pcaptionbox: typo:
\marginparwidth:	\@latex@warning 111
typo: \marginmarwidth to \marginparwidth 156	1996/03/14 jclasses.dtx v1.0e
\marginparwidth 156 1995/11/24 plfonts.dtx v1.2	description: \topskip \(\forall \)\ \parkip
General: it, sl, sc の宣言を外した . 59	などの値を縦組時のみに設定す
1995/12/25 jclasses.dtx v1.0c	るようにした 186
General: Macro \if@openbib	itemize: 縦組時のみに設定するよう
removed	にした
openbib オプションを再実装 140	1996/03/21 jclasses.dtx v1.0e
1995/12/25 jclasses.dtx v1.1c	General: \usepackage to \RequirePackage 141
\maxdepth: \@maxdepth の設定を除	. 1
Multan Manuardepth の設定を示した 147	1996/07/10 jclasses.dtx v1.0f General: 面付けオプションを追加 138
1995/12/28 jclasses.dtx v1.0c	General: 岡竹ワインクヨンを追加 136 1996/07/10 plcore.dtx v1.0f
\listoftables: fix the	\maketombowbox: トンボの横に DVI
\listoftable typo 197	ファイルの作成日を出力するよ

うにした。	1997/01/25 jclasses.dtx v1.1a	
1996/09/03 jclasses.dtx v1.0g		136
General: Add to \@bannertoken. 138	\textheight: Add paper option	
1996/09/03 plcore.dtx v1.1f		150
\@bannerfont: Add	\textwidth: Add paper option	
\@bannertoken 74		148
1996/12/17 jclasses.dtx v1.0h	1997/01/25 plfonts.dtx v1.1	110
\ 和暦: Typo:和歷 to 和曆 200	\ktenc@list: Add TS1 encoding	
1997/01/11 plvers.dtx v1.0c	to the starting member of	
General: 译T _E X <1996/06/01>版用	\fenc@list	. 9
に修正1		. 3
1997/01/15 jclasses.dtx v1.1	1997/01/28 jclasses.dtx v1.1a \labelitemiv: Bug fix:	
\backmatter: \frontmatter,		185
$\mbox{\colored}$ \mainmatter, \backmatter $lpha$		100
ĿŶT _E X の定義に修正 174	1997/01/28 jclasses.dtx v1.1b	
\part: \part を IATEX の定義に修	\if@enablejfam:	100
正 176	3	136
1997/01/16 plcore.dtx v1.1g	1997/01/28 plfonts.dtx v1.3b	
\verb: \verb コマンドを 卧TEX	\textgt: \textmc, \textgt の動作	
<1996/06/01>に合わせて修正 . 89	修正	44
1997/01/23 jclasses.dtx v1.1a	1997/01/29 pl209.dtx v1.0e	
General: 日付出力オプション 138	General: 二文字書体変更コマンドの	
thebibliography:		125
I₽T _E X <1996/12/01>に合わせて	1997/01/29 plfonts.dtx v1.3b	
修正 198	General: フォント定義ファイルのサ	
1997/01/23 jltxdoc.dtx v1.0a	イズ指定の調整	59
\parindent: \normalsize, \small	1997/01/30 plfonts.dtx v1.0	
などの再定義 203	\reDeclareMathAlphabet:	
1997/01/23 plcore.dtx v1.0g	\reDeclareMathAlphabet を追	
\maketombowbox: 作成日の出力をす	加。ありがとう、ymt さん。	20
るかどうかをフラグで指定する	1997/01/30 plfonts.dtx v1.3b	
ようにした。 74	General: 数式用フォントの宣言をク	
1997/01/23 plvers.dtx v1.0d	ラスファイルに移動した	57
General: LATEX <1996/12/01>版用	1997/02/05 jclasses.dtx v1.1d	
に修正	General: 開始ページがおかしくなる	
1997/01/24 plfonts.dtx v1.3	のを修正	139
General: Rename font definition	\topmargin: \tompargin を半分に	
filename	するのはアキ領域の計算後	154
Rename provided font definition filename 59	1997/02/12 jclasses.dtx v1.1d	
filename 59 1997/01/25 jclasses.dtx v1.0g	\maketitle: 縦組クラスの表紙を縦	
General: Insert \hbox, to switch	書きにするようにした	169
tate-mode 139	1997/02/14 jclasses.dtx v1.1d	
\columnseprule: \columnsep:	\thefigure: \ifnum 文の構文エ	
10pt to 3\Cwd or 2\Cwd 145		188
\marginparwidth:	1997/02/14 plcore.dtx v1.1g	
\oddsidemargin,	(@footnotemark: 縦組時の位置調整	
\evensidemagin; Opt if	を 2\cht から.9zh に変更	87
specified papersize at	\@makefnmark: 縦組時に脚注マーク	٠.
\documentstyle option 155		84

1997/02/20 pl $209.dtx$ v $1.0e$	\ps@headings: 片面印刷のとき、
General: Typemiss:oldlfont from	section レベルが出力されないの
oldlfonts 124	を修正 164
1997/03/11 plfonts.dtx v1.3b	1997/09/03 jclasses.dtx v1.1f
General: すべてのサイズをロード可	\textheight: landscape での指定を
能にした 59	追加 150
1997/04/08 jclasses.dtx v1.1e	1997/09/03 jclasses.dtx v1.1h
\topmargin: 横組クラスでの調整量	General: landscape オプションを互
を-2.4 インチから-2.0 インチに	換モードでも有効に 138
した。 153	オプションの処理時に縦横の値を
1997/04/08 plfonts.dtx v1.3c	交換 138
\DeclareTateKanjiEncoding@: 和	\textwidth: landscape での指定を
文エンコード宣言コマンドを縦組	追加 148
用と横組用で分けるようにした。 15	1997/12/12 jclasses.dtx v1.1i
1997/04/09 plfonts.dtx v1.3c	\ps@bothstyle: report, book 27
\DeclareFixedFont: 縦横エンコー	スで片面印刷時に、bothstyleス
ド・リストの分離による拡張 19	タイルにすると、コンパイルエ
1997/04/24 plfonts.dtx v1.3c	ラーになるのを修正 165
\fontfamily: フォント定義ファイ	1998/02/03 jclasses.dtx v1.1j
ル名を小文字に変換してから探	\topmargin: 互換モード時の a5p の
すようにした。 33	トップマージンを 0.7in 増加 . 153
1997/06/25 pl209.dtx v1.0f	1998/02/03 plcore.dtx v1.1g
\em: \em で和文を強調書体に 126	\@outputpage: \@shipoutsetup &
1997/06/25 plcore.dtx v1.1h	\@outputpage 内に入れた 79
\@gnewline: ĿTEX の改行マクロの	1998/02/03 plcore.dtx v1.1i
変更に対応。ありがとう、奥村	\@shipoutsetup: Command removed
さん。 64	
1997/06/25 plfonts.dtx v1.3d	1998/02/17 plvers.dtx v1.0f General: 译下X <1997/12/01>版用
\eminnershape: \em,\emph で和文	で修正1
を強調書体に 44	1998/03/23 jclasses.dtx v1.1k
1997/07/02 plvers.dtx v1.0e	\@spart: report と book クラスで番
General: 卧T _F X <1997/06/01>版用	号を付けない見出しのペナルティ
に修正1	が \Moだったのを \@M に修正 177
1997/07/08 jclasses.dtx v1.1f	1998/04/07 jclasses.dtx v1.1m
General: 縦組時にベースラインがお	\heisei: \today の計算手順を変更 200
かしくなるのを修正 139	1998/08/10 plfonts.dtx v1.3f
1997/07/10 plfonts.dtx v1.3e	\DeclareFixedFont: プリアンブ
\fontfamily: fd ファイル名の小文	ル・コマンドにしてしまってい
字化が効いていなかったのを修正 33	たのを解除 19
fd ファイル名の小文字化が効いて	1998/09/01 plvers.dtx v1.0g
いなかったのを修正。ありがと	General: PTFX <1998/06/01>版用
う、大岩さん 33	に修正 1
1997/07/29 jltxdoc.dtx v1.0b	1998/10/13 jclasses.dtx v1.1n
\xspcode: \と"の\xspcodeを変	General: 動作していなかったのを修
更 205	正。ありがとう、刀袮さん 138
1997/08/25 jclasses.dtx v1.1g	\thetable: report, book クラスで
\ps@bothstyle: 片面印刷のとき、	chapter カウンタを考慮していな
section レベルが出力されないの	かったのを修正。ありがとう、
を修正 165	平川@慶應大さん。 188

1998/12/24 jclasses.dtx v1.1o	が、縦組で中身が空のボックス
\@makechapterhead: secnumdepth	だけの場合も適正になるように
カウンタを -1 以下にすると、	修正68
見出し文字列も消えてしまうの	2001/05/10 plext.dtx v1.1i
を修正179	\@iimakePbox: 縦組でzを指定する
1999/04/05 plcore.dtx v1.1j	とエラーになるのを修正。 119
\@gnewline: オプションを付けた場	2001/05/10 plfonts.dtx v1.3k
合に、余計な空白が入ってしま	\adjustbaseline: 欧文書体の基準
うのを修正。ありがとう、鈴木	を再び '/'から 'M' に変更 27
隆志@京都大学さん。 64	2001/09/04 jclasses.dtx v1.2
1999/04/05 plfonts.dtx v1.3g	\c makechapterhead: \c hapter $\c O$
\process@table: plpatch.ltx の内	出力位置がアスタリスク形式と
容を反映。ありがとう、山本さ	そうでないときと違うのを修正
λ _o	(ありがとう、鈴木@津さん) . 179
1999/04/05 plvers.dtx v1.0h	\@makeschapterhead: \chapter \O
General: I ^A T _E X <1998/12/01>版用 に修正1	出力位置がアスタリスク形式と
1999/05/18 jclasses.dtx v1.1q	そうでないときと違うのを修正
enumerate: 縦組時のみに設定するよ	(ありがとう、鈴木@津さん) . 180
うにした 185	2001/09/04 plcore.dtx v1.2
1999/08/09 jclasses.dtx v1.1r	\@makespecialcolbox: 本文と
\topmargin: \if@stysize フラグに	\footnoterule が重なってしま
限らず半分にする 154	うのを修正 71, 72
1999/08/09 plfonts.dtx v1.3h	2001/09/04 plvers.dtx v1.0l
\strut: 縦組のとき、幅のあるボッ	General: L ^A T _E X <2001/06/01>版用
クスになってしまうのを修正 11	に修正 1
1999/08/09 plvers.dtx v1.0i	2001/09/26 plcore.dtx v1.2a
General: IATEX <1999/06/01>版用	\@outputpage: L⁴TEX <2001/06/01>に対応 78
に修正1	
1999/1/6 jclasses.dtx v1.1p	2001/10/04 jclasses.dtx v1.3 \@dottedtocline: 第5引数の書体
\marginparwidth: \oddsidemargin	を \rmfamily から \normalfont
のポイントへの変換を後ろに . 155	に変更 194
2000/02/29 plvers.dtx v1.0j	2002/04/05 plfonts.dtx v1.3l
General: 译T _E X <1999/12/01>版用	\adjustbaseline:
に修正 1	\adjustbaseline でフォントの
2000/07/13 plfonts.dtx v1.3i	基準値が縦書き以外では設定さ
\check@nocorr@:\textコマンド の左側に\xkanjiskipが入らな	れないのを修正 27
いのを修正(ありがとう、乙部	2002/04/09 jclasses.dtx v1.4
(のを修正 (ありがこう、乙部 (0東大さん) 54	General: 縦組スタイルで
2000/10/24 plfonts.dtx v1.3j	\flushbottom しないようにし
\adjustbaseline: 文頭に鈎括弧な	た 201
どがあるときに余計なアキがで	2004/06/14 plfonts.dtx v1.3m
る問題に対処 27	\@notffam: \fontfamily コマンド
2000/11/03 plvers.dtx v1.0k	内部フラグ変更 32
General: PTFX <2000/06/01>版用	\fontfamily: \fontfamily コマン
に修正 1	ド内部プラグ変更 32
2001/05/10 plcore.dtx v1.1j	2004/08/10 plfonts.dtx v1.3n
\@makecol: \@makecol で組み立て	\@changed@kcmd: 和文エンコーディ
られる \@outputbox の大きさ	ングの切り替えを有効化 31

\KanjiEncodingPair: 和文エンコー	acksimplEndIncludeInRelease を新
ディングの切り替えを有効化 17	説。3
\selectfont: 和文エンコーディン	2016/02/28 plcore.dtx v1.2c
グの切り替えを有効化 24	∖@iiiparbox: 1.2b と同様の修正を
2004/08/10 plvers.dtx v1.0m	\parbox 命令にも行った 97
General: L ^A T _E X <2003/12/01>版対	\@tabular: 1.2b と同様の修正を
応確認1	tabular 環境にも行った 96
2005/01/04 plfonts.dtx v1.3o	\underline: 1.2b と同様の修正を
\fontfamily: \fontfamily 中のフ	\underline 命令にも行った 97
ラグ修正 32	2016/04/01 plcore.dtx v1.2d
2006/01/04 plfonts.dtx v1.3p	\Coutputtombow: multicol パッケー
\DeclareFontEncoding@:	ジを使うとトンボの下端が縮む
\DeclareFontEncoding@中で	問題を修正 76
\LastDeclaredEncodeng の再定	2016/04/01 plfonts.dtx v1.6a
義が抜けていたので追加 13	\@text@composite: ベースライン補
2006/06/27 jclasses.dtx v1.6	正量が O でないときに \AA など
General: フォントコマンドを修正。	一部の合成文字がおかしくなる
ありがとう、ymt さん。 191	ことに対応するため再定義 49
2006/06/27 plfonts.dtx v1.4	\@text@composite@x: ベースライン
\reDeclareMathAlphabet:	補正量が O でないときに \AA な
\reDeclareMathAlphabet を修	ど一部の合成文字がおかしくな
正。ありがとう、ymt さん。 20	ることへの対応。 53
2006/11/10 plfonts.dtx v1.5	2016/04/17 plvers.dtx v1.0u
\reDeclareMathAlphabet: \reDeclareMathAlphabet を修	General: トムTEX <2016/03/31>版対
でもBectare Mathaiphabet を修 正。ありがとう、ymt さん。 20	応確認1
2016/01/26 plcore.dtx v1.2b	2016/04/30 plfonts.dtx v1.6b
\@makecol: \@outputbox の深さが	General: ptrace.sty の冒頭で
他のものの位置に影響を与えな	tracefnt.sty を
いようにする	$\Require Package With Options$
\vskip -\dimen@が縦組モード	するようにした7
では無効になっていたので修正 68	2016/05/07 plvers.dtx v1.0v
\@makefnmark: 2013 年以降の pTFX	General: パッチファイルをロードす
(r28720) で脚注番号の前後の和	るのをやめた。2
文文字との間に xkanjiskip が	\everyjob: 起動時の文字列を最新の
入ってしまう問題に対応 84	
2016/02/01 plfonts.dtx v1.6	2016/05/12 plvers.dtx v1.0w
\eminnershape: LATEX	\everyjob: 起動時の文字列に入れる
<2015/01/01>での \em の定義変	LATEX のバージョンを元の
更に対応。\eminnershape を追	EFT _E X のバナーから引き継ぐよ
加。	うに改良 3
2016/02/01 plvers.dtx v1.0s	起動時の文字列に入れる Babel の
General: LATEX <2015/01/01>版用	バージョンを元の IAT _E X のバ
に修正 1	ナーから取得するコードを
latexrelease 利用時に警告を出す	platex.ini から取り入れた 3
ようにした 4	2016/05/20 plcore.dtx v1.2e
2016/02/03 plvers.dtx v1.0t	General: fltrace パッケージの
\plIncludeInRelease: \plIncludeInRelease \text{\chi}	pIATEX 版として pfltrace パッ ケージを新設
ADTINCTINGETHRELEASE C.	クーンを利取

2016/06/06 plfonts.dtx v1.6c	\footnotetext: 閉じ括弧類の直後
\@text@composite: v1.6a での誤っ	に \footnotetext が続く場合に
た再定義を削除 (forum:1941) . 49	改行が起きることがある問題に
\@text@composite@x: v1.6a での修	対処86
正でéなど全てのアクセント付	\pltx@foot@penalty: カウンタ
き文字で周囲に \xkanjiskip が	\pltx@foot@penalty を追加 85
入らなくなっていたのを修正。. 53	2016/08/26 plvers.dtx v1.0z
\g@tlastchart@: マクロ追加 48	General: platex.cfg の読み込みを
\pltx@isletter: マクロ追加 48	plcore.ltx から platex.ltx へ
2016/06/08 kinsoku.dtx v1.0a	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
General: T1 などの 8 ビットフォン	2016/09/01 plcore.dtx v1.2h
トエンコーディングのために	\@makecol: 縦組で longtable パッ
128-256 の文字を \xspcode=3	ケージを使って表組の途中で改
に設定 131	ページするとき無限ループが起
2016/06/19 plfonts.dtx v1.6d	こる問題に対処 (Issue 21) 68
\pltx@isletter: アクセント付き文	2016/09/08 plcore.dtx v1.2i
字をさらに修正 (forum:1951) . 48	\@footnotetext: v1.2g の修正で入
2016/06/19 plvers.dtx v1.0x	れた \null がまずかったので水
\ppatch@level: パッチレベルを	平モードのときだけ発行するこ
plvers.dtx で設定 1	とにした (Issue 23) 86
2016/06/26 plfonts.dtx v1.6e	2016/09/14 plvers.dtx v1.1
\@text@composite@x: v1.6a 以降の	\everyjob: 起動時のバナーを取得す
修正で全てのアクセント付き文	るコードを改良 2
字でトラブルが相次いだため、	2016/11/07 plext.dtx v1.2b
いったんパッチを除去。 53	\@@rensuji: 横組で段落の頭に
2016/06/27 plvers.dtx v1.0y	\rensuji を使えるように
General: platex.cfg の読み込みを	\leaveymode を追加して修正 121
追加 3	2016/11/09 plcore.dtx v1.2j
2016/06/30 plcore.dtx v1.2f	\e@alloc@top: FAM256 パッチ適用
	e-pT _E X に対応 98
\AtBeginDvi: \@begindvibox を常 に横組に 83	e-piex に対ル 98
2016/07/25 jltxdoc.dtx v1.0c \verb: doc パッケージが上書きする	
	2016/11/12 jclasses.dtx v1.7
\verb を再々定義 204	\@makefntext: Replaced all \hbox
2016/08/20 plext.dtx v1.2a	to by \hb@xt@ (sync with
\@iiiparbox: \parbox 前後の余分	classes.dtx v1.3a) 199
な \xkanjiskip を削除 115	\footnoterule: use \@width (sync
\endtabular: tabular 環境後の余分	with classes.dtx v1.3a) 199
な \xkanjiskip を削除 105	thebibliography: Moved
\p@array: 横組で <t>を指定した場</t>	\@mkboth out of heading arg
合に \@arstrutbox を余計に	(sync with classes.dtx v1.4c) 198
\hbox に入れていたのを修正 . 104	theindex: \columnsep \(\gamma \)
\p@tabular: tabular 環境前の余分	\columnseprule の変更を後ろ
な \xkanjiskip を削除 104	に移動 (sync with classes.dtx
2016/08/25 plcore.dtx v1.2g	v1.4f) 199
\@footnotetext : 脚注の合印直後で	\listoffigures: Moved \@mkboth
の改行が禁止されてしまう問題	out of heading arg (sync with
に対処86	classes.dtx v1.4c) 197
\footnote: 合印の前の文字と合印の	\listoftables: Moved \@mkboth
間をベタ組に 85	out of heading arg (sync with

classes.dtx v1.4c) $\dots 197$	Changed \endgraf to \@@par	
\maketitle: ドキュメントに反して	(sync with ltboxes.dtx v1.0y)	115
∖@maketitle が空になっていな	Ensure \@parboxto holds the	
かったのを修正 171	value of \@tempdimb not the	
2016/11/16 jclasses.dtx v1.7a	register itself (pr/3867) (sync	
\@dottedtocline: Added		115
\nobreak for latex/2343 (sync	\@iminipage: Changed \@empty to	
with ltsect.dtx v1.0z) 194	\relax as flag for natural	
\@makechapterhead: replace	width: pr/2975 (sync with	
\reset@font with \normalfont		113
(sync with classes.dtx v1.3c) 179	\@iparbox: Changed \@empty to	
\@makeschapterhead: replace	\relax as flag for natural	
\reset@font with \normalfont	width: pr/2975 (sync with	
(sync with classes.dtx v1.3c) 180	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	115
\@part: replace \reset@font with	\endminipage: put \global into	
\normalfont (sync with	definition of \@minipagefalse	
classes.dtx v1.3c) 176		114
\@spart: replace \reset@font	\p@tabular: Use \setlength, so	
with \normalfont (sync with	that calc extensions apply	
classes.dtx v1.3c) 177		104
enumerate: Use \expandafter	\X@minipage: Changed \@empty to	
(sync with ltlists.dtx v1.0j) . 185	\relax as flag for natural	
\paragraph: replace \reset@font	width: pr/2975 (sync with	
with \normalfont (sync with	- , , -	113
classes.dtx v1.3c) 180	\X@parbox: Changed \@empty to	
\part: Check @noskipsec switch	\relax as flag for natural	
and possibly force horizontal	width: pr/2975 (sync with	
mode (sync with classes.dtx	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	115
v1.4a) 176	2016/11/22 jclasses.dtx v1.7b	
\section: replace \reset@font	、 \backmatter: 補足ドキュメントを	
with \normalfont (sync with		174
classes.dtx v1.3c) 180	2016/12/18 jclasses.dtx v1.7c	
\subparagraph: replace	\@endpart: Only add empty page	
\reset@font with \normalfont	after part if twoside and	
(sync with classes.dtx v1.3c) 180	openright (sync with	
\subsection: replace \reset@font		178
with \normalfont (sync with	\@schapter : 奇妙な article ガード	
classes.dtx v1.3c) 180	とコードを削除してドキュメン	
\subsubsection: replace		180
\reset@font with \normalfont	2017/02/04 plext.dtx v1.2d	
(sync with classes.dtx v1.3c) 180	\kanji: \Kanji の引数だけでなく後	
itemize: Use \expandafter (sync	に連続する数字も漢数字になっ	
with ltlists.dtx v1.0j) 185	and the second s	122
2016/11/19 plext.dtx v1.2c	2017/02/15 jclasses.dtx v1.7d	
\@iiiminipage: Use \@setminpage		139
(sync with ltboxes v1.1a) 114	\if@openleft: \if@openleft ス	
\@iiiparbox: Changed \@empty to		136
\relax as flag for natural	titlepage: book クラスで titlepage	_00
width: pr/2975 (sync with	を必ず奇数ページに送るように	
ltboxes.dtx v1.1f) 115	_t_	168

titlepage のページ番号を奇数なら	2017/03/10 v1.3c) 79
ば1に、偶数ならば0にリセッ	\verb: \verb の途中でハイフネー
トするように変更 168	ションが起きないように
\p@thanks: 縦組クラスの所属表示の	\language を設定 (sync with
番号を直立にした 169	ltmiscen.dtx $2017/03/09$
\pltx@cleartoevenpage:	v1.1m) 90
\cleardoublepage の代用とな	2017/03/19 plvers.dtx v1.1b
る命令群を追加 160	General:
2017/02/20 plcore.dtx v1.2k	\document@default@language
\@setref: 目次で \ref を使った場	の定義を保証 (sync with
合に後ろの空白が消える現象に	ltfinal.dtx $2017/03/09 \text{ v2.0t}$) 3
対処するため、\relax のあとに	\l@nohyphenation の定義を保証
{} を追加 88	(sync with ltfinal.dtx
2017/02/20 plfonts.dtx v1.6f	$2017/03/09 \text{ v}2.0\text{t}) \dots 3$
\set@fontsize: \ystrutbox を組み	2017/03/28 plext.dtx v1.2f
立てるように 26	\fork@array@option: 表と周囲との
\strut: \strutbox の代わりに	揃え位置を修正 106
\ystrutbox を使用 11 \strutbox: \strutbox を縦横両対	\fork@parbox@option: 段落の箱と
	周囲との揃え位置を修正 117
応に	2017/04/23 plcore.dtx v1.2n
\ystrutbox: \ystrutbox を追加 . 11	\@gnewline : ドキュメントの追加 . 65
2017/02/20 plvers.dtx v1.1a	2017/04/23 plvers.dtx v1.1c
General: LATEX <2017/01/01>版対	General: PTEX <2017-04-15>版対
応確認1	
2017/02/25 plcore.dtx v1.2l	2017/05/03 plcore.dtx v1.2o
\@makecol: 脚注とボトムフロートの	\@no@lnbk: 行頭禁則文字の直前でも
順序を入れ替えたことで版面全	改行するようにした 65
体の垂直位置がずれていたのを	2017/05/04 plext.dtx v1.2g
修正 (Issue 32) 67	\@iimakePbox: Use \setlength, so
\@makespecialcolbox: \@makecol	that calc extensions apply 119
を変更したのに	\pbox: Make \pbox Robust 118
${\tt Qmakespecialcolbox}$ を変更し	2017/07/21 plcore.dtx v1.2p
ない、という判断について明文化 71	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
2017/03/02 plext.dtx v1.2e	JFM グル―を削除 95
\parbox: Make \parbox Robust	\@tabclassz : tabular 環境のセル内
(sync with ltboxes 2015/01/08	の JFM グルーを削除 92
v1.1h)	2017/07/21 plext.dtx v1.2h
2017/03/05 jclasses.dtx v1.7e	\fork@array@option: 表と周囲との
General: トンボに表示するジョブ情	揃え位置をさらに修正 106
報の書式を変更 138	2017/08/05 kinsoku.dtx v1.0b
\backmatter: \frontmatter と \mainmatter を奇数ページに送	General: %、&、%、&の禁則ペナ
Mainmatter を可数ペークに返 るように変更 174	ルティが誤っていたのを修正
2017/03/07 plfonts.dtx v1.6g	$(post \rightarrow pre) \dots 128$
\textunderscore: ベースライン補	2017/08/05 plfonts.dtx v1.6h
正量を修正 46	\adjustbaseline: trace のコード
2017/03/19 plcore.dtx v1.2m	の%忘れを修正 28
\@outputpage: \language をリセッ	和文書体の基準を全角空白から
\(\text{\text{(sync with ltoutput.dtx}}\)	「漢」に変更 27

2017/08/25 plcore.dtx v1.2q	\platexrelease のエミュレー
\@no@lnbk: \nolinebreak の場合に	ト内部処理を分離 3
\(x)kanjiskip が入らなくなっ	2017/11/11 plvers.dtx v1.1f
ていたのを修正 65	General: トチTEX のバナーを保存する
2017/08/31 jclasses.dtx v1.7f	コードを platex.ltx から
\Chs: 和文書体の基準を全角空白か	plcore.ltx へ移動2
ら「漢」に変更 143	2017/12/04 plvers.dtx v1.1g
2017/09/19 jclasses.dtx v1.7g	\everyjob: plPT _E X のバナーの定義
\Chs: 内部処理で使ったボックス 0	時に \pfmtname, \pfmtversion,
を空にした 143	\ppatch@level を展開しないよ
2017/09/24 jltxdoc.dtx v1.0d	うに 3
\verb: を追加 204	2017/12/05 plfonts.dtx v1.6k
2017/09/24 plfonts.dtx v1.6i	General: デフォルト設定ファイルの
\<: \<が段落頭でも効くようにした 56	読み込みを plcore.ltx から
\check@nocorr@: 2010 年の pT _E X	platex.ltx へ移動 56
本体の修正により、v1.3i で入れ た対処が不要になっていたので	2018/01/10 plvers.dtx v1.1h
10-10-4	\plIncludeInRelease: Modify
	\plIncludeInRelease code to
2017/09/24 plvers.dtx v1.1d \everyjob: パッチレベルが負の数の	check matching
場合を pre-release 扱いへ 3	\plEndIncluderelease (sync
2017/09/26 plcore.dtx v1.2r	with ltvers.dtx 2018/01/08
\@tabclassz: tabular 環境の右揃え	v1.1a)
(r) で罫線がずれるようになって	2018/01/27 plcore.dtx v1.2v
いたバグを修正 92	\@no@lnbk: v1.2o と v1.2q の修正で
2017/09/27 plcore.dtx v1.2s	\nolinebreak が効かない場合 があったので、元に戻した 65
、 \@setref: 相互参照のスペースファ	
クターを補正 88	2018/02/04 jclasses.dtx v1.7h
\@startline : tabbing 環境の行冒頭	\Cjascale: 和文スケール値 \Cjascale を定義 145
の JFM グルーを削除 90	
\verb: \verb の冒頭の半角空白を保	2018/02/04 plfonts.dtx v1.6l General: 和文スケール値を明文化 59
持 89	
2017/10/31 plcore.dtx v1.2t	2018/02/24 plcore.dtx v1.2w
\@setref: v1.2s の変更に伴い、	\e@alloc@top: e-upTEX でも \omathchardef を使用 98
\ref が数式モードでエラーに	
なっていたのを修正 88	2018/03/01 plcore.dtx v1.2x
2017/11/04 plcore.dtx v1.2u	\@classv : セル最初の \par で空行 が入らないようにした 95
\@setref: emath ∅ \marusuuref	
対策	\@tabclassz:\removejfmglueが あれば利用するようにした 92
2017/11/06 plfonts.dtx v1.6j	
General: 縦横のエンコーディングの	\pltx@next@inhibitglue: $ ilde{ar{c}}$ \everypar $ar{c}$ \inhibitglue $ar{c}$
セット化を plcore から pldefs へ	(everypar / (imitality life /) 仕込むマクロ追加 95
移動 57	removejfmglue: JFM グルーノー
\ct@encoding: \cy@encoding と \ct@encoding を具体的な値で	ドを削除するマクロ追加 63
はなく「空」で初期化 7	2018/03/12 plcore.dtx v1.2y
2017/11/09 plvers.dtx v1.1e	\pltx@next@inhibitglue:
\plIncludeInRelease:	\inhibitglue $\stackrel{\circ}{c}$ \everypar $^{\mathcal{O}}$
latexrelease \angle	末尾に移動 95
	/1-/-12-74

2018/03/31 plfonts.dtx v1.6m	\@tombowreset@@paper: コマンド
\DeclareFontEncoding@: utf8.def	に分離、さらに bleed 幅を
由来のコードを追加 14	\@tombowbleed に切り出し 78
2018/03/31 plvers.dtx v1.1i	\maketombowbox: bleed 幅を
General:	\@tombowbleed に切り出し 74
必須 1	2018/07/03 jclasses.dtx v1.8
2018/04/06 plfonts.dtx v1.6n	∖和暦: ∖today のデフォルトを和暦
\DeclareFontEncoding@:	から西暦に変更 200
\UseRawInputEncoding で使わ	2018/07/03 plfonts.dtx v1.6q
れる \DeclareFontEncoding@の	General: シリーズ b が bx と等価に
保存版(従来の定義)を準備	なるように宣言 59
(sync with ltfinal.dtx	2018/07/25 plfonts.dtx v1.6r
2018/04/06 v2.1b) 14	\@text@composite@x:
2018/04/07 plvers.dtx v1.1j	$\[[no] fixcomposite accent \] $
General: LATEX <2018-04-01>版対	クロ追加 53
応確認 1	コード整理 53
2018/04/08 plfonts.dtx v1.6o	\pltx@isletter: PDF のしおりに
\DeclareFontEncoding@: Delay	アクセント文字が含まれる場合
full UTF-8 handling to	に対応 48
\everyjob (sync with	\pltx@ltx@sh@ft: コード追加 47
ltfinal.dtx 2018/04/08 v2.1d) . 15	\pltx@oalign: コード追加 47
2018/04/08 plvers.dtx v1.1k	\pltx@saved@ltx@sh@ft: コード追
、 / · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	加 47
後 (plfinal) ではなく最初	\pltx@saved@oalign: コード追加 46
(plcore) に早めた 2	\pltx@saved@text@composite@x:
2018/04/09 plfonts.dtx v1.6p	コード整理 50
\DeclareFontEncoding@: v1.6o で	\pltx@text@composite@x: コード
加えた対策を削除。参考:	整理 50
plvers.dtx $2018/04/09$ v1.11 \mathcal{O}	2018/09/02 plcore.dtx v1.3
\everyjob 15	\@outputtombow: platexrelease
2018/04/09 plvers.dtx v1.1l	バグ修正 76
General: バナーの保存しかたを改良 2	\removejfmglue:\removejfmglue
\everyjob: バナーの再構築のしかた	の挙動を明文化 63
を改良 2	2018/09/09 plext.dtx v1.2i
2018/05/13 plcore.dtx v1.2z	\@@rensuji: 縦数式ディレクション
\@outputpage:	の連数字 121
\@tombowreset@@paper コマン	\@pcaption : Made caption an error outside a float:
ドに分離 79	latex/2815 (sync with ltfloat
\@outputtombow: 色の付いたテキス	1999/04/19 v1.1u) 110
トの途中で改ページするとトン	\DeclareLayoutCaption: 安全のた
ボにも色が付く現象に対処、さ	め、\DeclareLayoutCaptionで
らにトンボの色を	定義する内部命令を
\@tombowcolor へ・bleed 幅を	\@layoutcaption から
\@tombowbleed に切り出し 76	\@layoutc@ption へ変更 . 110
\@tombowbleed: \@tombowbleed ₹	\p@array: Check for hmode to see
クロ追加 73	if something went wrong during
\@tombowcolor: \@tombowcolor ∀	parsing (pr/2884) (sync with
クロ追加	lttab.dtx 1998/11/13 v1.1m) 105

Moved the code associated with	2019/04/02 jclasses.dtx v1.8b
\@mkpream into the group	\heisei: \heisei の値は
provided by the box, for	西暦 – 1988 で固定 200
robustness ($latex/2183$) (sync	\pltx@today@year: \today の計
with lttab.dtx $1996/10/21$	算・出力方法を変更。 200
v1.1i)	2019/08/13 plfonts.dtx v1.6s
$\operatorname{Use} \$	General: Explicitly set some
(sync with lttab.dtx	defaults after
$1996/10/21 \text{ v1.1i}) \dots 104$	\DeclareErrorKanjiFont
2018/09/20 plext.dtx v1.2j	change (sync with ltfssini.dtx
\p@tabular: Change \@stabular	$2019/07/09 \text{ v3.1c}) \dots 56$
to \p@stabular, to avoid	\DeclareErrorKanjiFont:
conflict with stabular package 104	\DeclareErrorKanjiFont:
2018/09/24 plvers.dtx v1.1m	Don't set any \k@ macros
\everyjob: バナーの再構築を簡略化 2	(sync with ltfssbas.dtx
2018/10/07 plext.dtx v1.2k	2019/07/09 v3.2c) 19
\DeclareLayoutCaption: $++7$	2019/09/16 plcore.dtx v1.3c
ションのデフォルトの組方向を y	\AtBeginDvi: Make \AtBeginDvi
から n へ変更 (forum:2506,	robust (sync with ltoutput.dtx
issue 76)	2019/08/27 v1.4e)
$\mbox{\colored}$ \make@pcaptionbox: $+ r T $ $)$ $= T $	\underline: Make \underline
の組み方向が基本組の組み方向	robust (sync with ltboxes.dtx 2019/08/27 v1.3b) 97
と直交する場合に、深さを忘れ	2019/09/16 plfonts.dtx v1.6t
ていたバグ修正 (forum:2506,	\strut: Make \strut, \tstrut
issue 76)	etc. robust (sync with
2018/10/25 jclasses.dtx v1.8a	ltdefns.dtx 2019/08/27 v1.5f) 11
\addcontentsline: ファイル書き出	\usefont: Make \usefont etc.
し時の行末文字対策 (sync with	robust (sync with ltfssbas.dtx
ltsect.dtx $2018/09/26 \text{ v}1.1c)$ 194	2019/08/27 v3.2d) 37
2018/10/31 plcore.dtx v1.3a	2019/09/16 plvers.dtx v1.1p
General: $\LaTeX 2_{\varepsilon} \succeq p \LaTeX 2_{\varepsilon} \mathcal{O}$	\plIncludeInRelease: エラーメッ
更新タイミングずれ対策を	セージを更新 (sync with
plvers.dtx (plfinal) から	ltvers.dtx 2019/07/01 v1.1c) 3
plcore.dtx へ移動、	2019/09/29 plext.dtx v1.2l
latexrelease 対策 (sync with	\bou: Make \bou robust 122
ltfinal 2018/08/24 v2.1f) 100	\kasen: Make \kasen robust 123
2018/10/31 plvers.dtx v1.1n	2019/09/29 plfonts.dtx v1.6u
General: \LaTeX $2_{\varepsilon} \ \ \ \ p \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ $	\adjustbaseline: Make
更新タイミングずれ対策を	\adjustbaseline robust 27
plvers.dtx (plfinal) から	\userelfont: Make \userelfont
plcore.dtx へ移動 3	robust 24
2018/12/01 plvers.dtx v1.1o	2019/10/01 plvers.dtx v1.1q
General: LPT _E X <2018-12-01>版対	General: L ^A T _E X <2019-10-01>版対
応確認1	応確認1
2019/02/08 plcore.dtx v1.3b	$2019/10/17~\rm jclasses.dtx~v1.8c$
∖@tabclassz: 中央揃えのセルでの	\@normalsize : フォントサイズ変更
\unskip 対策 (sync with lttab	命令を robust に (sync with
$2018/12/30 \text{ v}1.1\text{p}) \dots 92$	classes. $dtx 2019/08/27 v1.4j$) 143

\footnotesize: フォントサイズ変 更命令を robust に (sync with	\textgt: 定義を pldefs から plcore へ移動44
classes.dtx 2019/08/27 v1.4j) 144 \Huge: フォントサイズ変更命令を	\usefont: Don't call \fontseries or \fontshape (sync with
robust & (sync with classes.dtx	ltfssbas.dtx 2019/12/17 v3.2e) 37
$2019/08/27 \text{ v1.4j}) \dots 144$	2020/02/01 plvers.dtx v1.1r
\small: フォントサイズ変更命令を	
robust & (sync with classes.dtx	General: I₽T _E X <2020-02-02>版対
$2019/08/27 \text{ v}1.4\text{j}) \dots 143$	応確認 1
2019/10/19 plcore.dtx v1.3d	2020/02/03 plfonts.dtx v1.6w
\e@alloc@top: 判定順序を修正;	\init@series@setup: 巻き戻しのバ
extended mode かつ FAM256	グ修正 43
拡張ありの場合に限りレジスタ	2020/02/24 plfonts.dtx v1.6y
数が 65536 個のため。 98	\fontseriesforce: Switch
\float@count: コピー忘れ 100	\if@forced@series added
2019/10/25 jclasses.dtx v1.8d	(sync with ltfssaxes.dtx
\@normalsize: Don't use	2020/02/18 v1.0c) 35
\MakeRobust if in rollback	\mdseries: Make the \ifx
prior to 2015 (sync with	selection outside of
classes. $dtx 2019/10/25 v1.4k$) 143	\fontseries argument so that
2020/01/03 jclasses.dtx v1.8e	it is not done several times
\labelitemiv: Normalize label	(sync with ltfssini.dtx
fonts (sync with classes.dtx	2020/02/18 v3.1i) 40
$2019/12/20 \text{ v}1.4\text{l}) \dots 185$	\update@series@target@value@kanji:
2020/02/01 plfonts.dtx v1.6v	No series auto-update when
General: Set \kanjishapedefault	forced (sync with ltfssini.dtx
explicitly to "n" (sync with	2020/02/18 v3.1i) 41
fontdef.dtx 2019/12/17 v3.0e) 57	Recognize current family if it is
\<: 定義を pldefs から plcore へ移動 56	not a "meta" family and
\eminnershape: Support \emph	auto-update series using
sequences (sync with	\bfdefault (sync with
ltfssini.dtx 2019/12/17 v3.1e) 44	ltfssini.dtx $2020/02/18 \text{ v}3.1i$). 41
定義を pldefs から plcore へ移動 44 \fontseriesforce: New	2020/02/28 plfonts.dtx v1.6z
commands \fontseriesforce	\series@maybe@drop@one@m:
etc. (sync with ltfssaxes.dtx	\series@maybe@drop@one@m $\mathcal O$
2019/12/16 v1.0a)	存在確認 34
\fontshapeforce: New commands	\set@target@series@kanji: Drop
\fontshapeforce etc. (sync	"m" only in a specific set of
with ltfssaxes.dtx 2019/12/16	values (sync with ltfssaxes.dtx
v1.0a)	$2020/02/27 \text{ v1.0d}) \dots 35$
\mdseries@gt: LATEX \(\bar{D}^{\bar{\gamma}} \) mweights	\update@series@target@value@kanji:
パッケージを基にしたシリーズ	Drop surplus "m" from
のカスタム設定を導入したので、	\target@series@value (sync
これをサポート (sync with	with ltfssini.dtx 2020/02/25
ltfssini.dtx 2019/12/17 v3.1e) 39	v3.1j) 41

イタリック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。下線の 引かれた数字は、定義されているページを示しています。その他の数字は、その項 目が使われているページを示しています。

$\mathbf{Symbols}$	\@Alph g1321,
\ h50	$g1322,\ g1330,\ g1331,\ g1415,\ g1421$
\# f4	\@alph g1413, g1419
\\$ f5	\@ampacol
\% f6	c1093, c1117, c1148, c1177, c1206
\& f7	\@arabic g1122, g1124, g1125,
\ g1797	g1127, $g1129$, $g1131$, $g1133$,
\< b1707	g1137, $g1139$, $g1140$, $g1142$,
\@@enc@update b728	g1144, $g1146$, $g1148$, $g1412$,
\@@end a14, a23, b854, b1785	g1418, g1511, g1514, g1518,
\@@endpbox d48	g1521, g1538, g1541, g1545,
\@@if@newlist	g1548, g1587, g1591, g1785, g1792
c605, c655, c672, c726, c741, c795	\@arrayacol d3
$\verb§@kenc@update b740, b749$	\@arrayclassiv d4
$\colone{1}$ \co	\@arrayclassz d3
c551, c569, c581, c582, c694, c763	\@arraycr d5
\\000e9aperwidth $c505, c508, c510, c512,$	\@arstrut d47
c514, c530, c533, c535, c537,	\\(\text{Qarstrutbox} \\ \text{Carstrutbox}
c539, c552, c555, c557, c559,	\@author g949, g999, g1013, g1052, g1071
c561, c569, c579, c580, c693, c762	\@auxout g1655 \@badtab c1056, c1070
\@@par c1292, c1315, d54, d337, d340	\@bannerfont
\@@picture d455, <u>d456</u>	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
\@@rensuji	\QBC . <u>c388</u> , c427, c475, c515, c540, c562
\@@startpbox d48	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
\@@topmargin <u>c569</u> , c577, c583, c634,	d81, d88, d95, d100, d103, d106,
c691, c695, c706, c760, c764, c775	d113, d116, d119, d124, d127, d130
\@@underline c1335,	\@begin@parbox
c1336, c1343, c1344, c1351, c1352	d346, d355, d358, d361, d364,
\@acol c1101, c1125, c1156,	d369, d372, d375, d378, d383,
c1185, c1214, c1261, c1268, d3, d17	d386, d389, d392, d399, d402,
\@acolampacol c1091,	d405, $d408$, $d413$, $d416$, $d419$, $d422$
c1099, c1115, c1123, c1146,	\@begin@tempboxa
c1154, c1175, c1183, c1204, c1212	$\dots \dots c1292, c1315, d336, d339$
\@addamp	\@begindvi $c632, c704, c773$
c1097, c1121, c1152, c1181, c1210	\@begindvibox
\@addtopreamble c1229, c1235, c1240	c807, c808, c815, c816, c823, c824
\@addtoreset g1589, g1822	\@beginparpenalty $g1083, \underline{g1351}$
\@afterheading	$\verb \dbib 185, g1786, g1802 $
g1199, g1225, g1267, g1286	\@BL . <u>c388</u> , c421, c469, c515, c540, <u>c562</u>
$\verb \coloredge \texttt{Qafterindenttrue} \texttt{g1170}, \texttt{g1251}, \texttt{g1642}$	$\verb \QB1 . \underline{c388}, c424, c472, c512, c537, c559$

\@bou d537, d538, d554	\@dotsep g1632, g1648
\@BR . $\underline{c388}$, c431, c479, c515, c540, c562	\@dottedtocline
\QBr . $\underline{c388}$, c434, c482, c512, c537, c559	g1638, g1723, g1724, g1728,
\Obsphack h43, h44, h45	$g17\overline{29}$, $g1730$, $g1731$, $g1734$,
\@captionbox	g1735, $g1736$, $g1737$, $g1742$,
d144, d218, d222, d224, d226, d269	g1743, $g1744$, $g1745$, $g1748$,
\@captype d199, d203,	g1749, g1750, g1751, g1765, g1766
d206, d232, d233, d237, d248, d264	\@eha . b300, b319, b338, b517, b722,
\@cclv c157, c198, c229, c260	b734, b766, d213, g1610, g1614
\@cclvi	\@ehd c15, d200
b1508, b1552, b1555, b1556, b1564	\@elt b1146, b1148, b1149, b1176,
\@centercr g1494	b1178, b1179, b1197, b1205, c158
$\verb \colored \verb Cchanged@cmd b154, b174, b204 $	\@enablejfamfalse g113
$\c b241, b265, b750, \underline{b771}$	\@enablejfamtrue g16
\@chapapp . $g847, g871, g905, g930,$	\@end@alignbox
$\underline{g1150}$, $g1257$, $g1259$, $g1277$, $g1328$	d56, d57, d68, d74, d77,
\@chappos . $g847, g871, g905, g930,$	d86, d93, d96, d101, d104, d107,
$\underline{g1150}$, $g1257$, $g1259$, $g1277$, $g1329$	d114, d117, d120, d125, d128, d131
\@chapter g1252, g1253	\@end@check@plIncludeInRelease .
\@check@plIncludeInRelease	a114, a116
$\dots \dots a113, a114, a115, a117$	\@end@parbox
\@chnum c1105, c1129, c1160, c1189, c1218	d348, d356, d359, d362, d365,
\@cite \dots $g1803$	d370, d373, d376, d379, d384,
\QCL . $\underline{c391}$, c438, c485, c510, c535, c557	d387, d390, d393, d400, d403,
$\color{0}$ \Qclassiv c1263, c1270, d4, d19	d406, d409, d414, d417, d420, d423
\@classv $\underline{c1226}$	\@end@tempboxa c1305, c1328, d349
\@classz c1262, c1269, d3, d18	\@endparpenalty g1086, g1351
$\c g1795$	\@endpart g1218, g1232, g1234
\@colht c180,	\@endpbox c1230, c1236, c1241, d48
c205, c236, c267, c301, c307,	\\Qenumctr \ldots \\gamma 1250, \text{C1250}, \text{C1250}, \text{C1241}, \text{d4c} \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
c311, c329, c334, c656, c727, c796	
\@combinefloats c161, c201, c232, c263	\Quad \Quad \Quad \Quad
\@CR . <u>c391</u> , c441, c488, c510, c535, c557	\Quad
\@curline c1061, c1075	\Quad
\\Quad \\Quad \\Quad \\\Quad \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\Quad
\@currentlabel c912, c935, c957	c687, c756, <u>g806</u> , g811, g819, g822, g824, g829, g882, g888, g938
\@currname	@cevenhead c619, c686, c755,
\@curtabmar . c1059, c1060, c1073, c1074	
\\date g950, g1002, g1014, g1053, g1074	<u>g806</u> , g810, g815, g817, g826, g830, g832, g881, g887, g939, g941
\@dblarg d206	
\@dblfloat g1533, g1560	\@finalstrut c917, c940, c962
\@dblfpbot g1555, g1565 \	\@firstampfalse
-	c1101, c1125, c1156, c1185, c1214
\@dblfpsep <u>g738</u>	\@firstofone
\@dblfptop g738	\@firstoftwo b451,
\@defaultunits	b1411, b1415, b1422, b1431,
\@depth b576, b579, b582,	b1440, b1444, b1453, b1488, b1581
b614, b617, b620, d29, d32, d35,	\\(\text{Qfloat} \\
d40, d43, d519, d520, d521, d560	\Officethox d134, d162, d212, d223

\@font@info b158, b186, b208, b246,	\@iiparbox d328, <u>d329</u>
b270, b284, b290, b550, b590, b628	\@ilayoutcaption \dag{d183}
\@font@shape@subst@warning	\@imakePbox d428, d430
b910, b913, b971, b974	\@imakepbox
\@fontswitch b456, g1626, g1627	\@iminipage d276, d277
\@footnotemark	\@inmathwarn b773
. c865, c870, c877, c882, <u>c966</u> , <u>e11</u>	\@input@ c1081
\@footnotetext	\@iparbox \d326, \d327
\\(\mathref{Q}\)forced\(\mathref{Q}\)seriesfalse \(\ldots\). \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\@itemdepth g1467, g1468, g1469, g1476
\\\delta forced \\delta series frame \\delta b \\delta forced \\delta forced \\delta series frame \\delta forced \\delta f	\@itemitem g1469, g1470
\@fpbot g723	\@itempenalty g1351
	\@ixpt e68, g179, g221, h13
\@fpsep <u>g723</u>	\@Kanji
\@fptop <u>g723</u>	\@kludgeins c177,
\Offeelist c159, c199, c230, c261	c202, c233, c264, c291, c292,
\@getpen c93, c108, c124, c140	c293, c302, c326, c330, c348, c359
\@gnewline <u>c77</u>	\@knjcmdfalse b533
\@gobble b420, b421, b422,	\@knjcmdtrue b490, b495
b428, b1205, c628, c629, c630,	\@landscapefalse g3
c700, c701, c702, c769, c770,	\@landscapetrue g63
c771, d201, g944, g945, g946, g1656	\@lastchclass
\@gobble@plIncludeInRelease	c1090, c1114, c1145, c1174, c1203
a93, a101, a111	\@latex@error b300, b319, b338,
\@gobbletwo b423,	b517, b722, b734, b766, b850,
b425, b426, g806, g813, g820, g943	b860, c10, d200, d213, g1609, g1613
\@halignto d5, d7, d16, d46 \@height b576, b579, b582,	\Clatev@roming h219
b614, b617, b620, d28, d31, d34,	\clatex@warning b218,
d39, d42, d519, d520, d521, d560	c979, c993, c1006, d233, g1799 \@latex@warning@no@line a126, c24
\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\Qlayoutfloat \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\@listdepth \\d306, \g1444, \g1472
\@idxitem g1812, g1814	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
\@ifl@t@r	\clisti g163, g183, g193, g203,
\\difnextchar $\dots \dots \dots$	g215, g225, g235, g1358, h11, h17
c863, c867, c875, c879, c889, c897, d8, d10, d12, d20, d146,	\@listii g1377
d149, d185, d186, d187, d190,	\@listiii <u>g1377</u>
d191, d194, d273, d275, d277,	\@listiv <u>g1377</u>
d279, d323, d325, d327, d329,	\@listv g1377
d426, d428, d430, d452, d454, d511	\@listvi g1377
\@ifpackageloaded a124, a125	\@lnumwidth g1636, g1645, g1646,
\@ifstar c1024, c1036, c1046, d510, h49	g1683, g1701, g1702, g1716, g1717
\@ifundefined b299, b318	\@lowpenalty
\@iiiminipage . d276, d278, d280, <u>d281</u>	. g290, g1083, g1351, g1352, g1353
\@iiiparbox <u>c1284</u> ,	\@M g1086,
d322, d326, d328, d330, <u>d331</u>	g1193, g1212, g1223, g1230, g1643
\@iilayoutcaption $\dots \dots \dots$	\@m
$\c d431, \c d432$	\@mainmatterfalse g1157, g1164
\@iiminipage $d278$, $\overline{d279}$	\@mainmattertrue g11, g1160
/	5 / 9

$\verb \color= g1562 $	\@nobreakfalse g1689
\@makechapterhead $g1267$, $\overline{g1268}$	\@nobreaktrue g1688
\@makecol	\@noitemerr g1798
\@makefnmark <u>c833</u> , c968, c969,	\@noligs c1022, c1034, c1045
$\underline{e11}$, $g1025$, $g\overline{1029}$, $g1825$, $g1829$	\@nolnerr c79, c89, c104, c120, c136
\@makefntext c916,	\@nomath b1275, b1279, b1295,
c939, c961, g1028, g1032, g1823	b1302, b1309, e58, g1624, g1625
\@makeother c1021, c1033, c1044, h48	\@normalsize $g139$
$\c g1286, g1288, g1807$	\@notffam <u>b789</u>
\@makespecialcolbox	\@notffamfalse b79
c178, c203, c234, c265, <u>c288</u>	\@notffamtrue b826, b838
\@maketitle	\@notkfam <u>b789</u>
$g1036, g1037, g1042, g1049, \underline{g1060}$	\@notkfamfalse b796
$\verb \color= 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0$	\@notkfamtrue b804, b81
$\verb \color= g111, g114 $	$\mbox{Qnxttabmar}$ $c1055$,
\@maxdepth c165, c181, c191,	c1057, c1059, c1069, c1071, c1073
c206, c223, c237, c254, c268, c285	\@obsoletefile
\@medpenalty $\underline{g290}$	e83, e87, e91, e95, e99, e103
$\verb \coloredge b1147$	\@oddfoot
$\verb \del{condition} \verb \del{condition} \end{condition} \end{condition} \end{condition}$. $c616$, $c683$, $c752$, $g806$, $g809$,
$\verb \colored c159 , c160 ,$	g811, g819, g823, g825, g829,
c199, c200, c230, c231, c261, c262	g858, g884, g890, g917, g919, g938
$\mbox{\colored}$ \Cminipagefalse d318, g1575	\@oddhead c616, c683,
\@minipagerestore d307	c752, <u>g806</u> , g808, g816, g818,
$\c g806, g813, g820, g834,$	g826, g831, g833, g859, g860,
g861, g892, g920, g943, g1670,	g883, g889, g916, g918, g940, g942
g1761, g1774, g1783, g1784, g1808	\\(\text{Qonlypreamble} \) \(\text{b276}, \text{b277}, \text{b278}, \\ \text{b270}, \text{b290}, b290
\@mkpream d46	b279, b280, b296, b357, b390,
\@MM c910, c933, c955	b434, b1325, b1326, c28, c29, d180
\@mpargs	\@openbib@code g103, g1789, g1802
\Comparswitchfalse g1892, g1898	\@openleftfalse g95, g9'
\Omparswitchtrue \dots g1896	\@openlefttrue g90
\@mpfn c863, c875, d303	\@openrightfalse g96, g9'
\mathcal{Q} \mathc	\@openrighttrue g93, g98
\@mpfootnotetext d305	\@outputbox
\@mplistdepth d306	c164, c166, c180, c183, c184,
\@namedef b160, b161,	c198, c205, c208, c209, c227,
b188, b189, b210, b211, b248,	c229, c236, c239, c240, c260,
b249, b272, b273, b297, b353, d8	c267, c270, c271, c295, c297, c298, c303, c306, c311, c313,
\Cnameuse c613, c680, c749	c328, c334, c336, c646, c718, c78°
\@needsformat	\\Quad
\\delta \end{array} \text{QneedsPformat} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{QneedsPformat} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\delta \end{array} \text{C2} \\\\delta \end{array}	\(\text{Qoutputtombow}\) \(\text{c494}\), \(\text{c633}\), \(\text{c774}\)
\@newlistfalse c606, c673, c742	\(\mathref{Qparboxrestore}\) \(\cdot\) \(\cdo\) \(\cdot\) \(\cdot\) \(\cdot\) \(\cdot\) \(\cdot\) \(\cdot\
	c674, c743, c911, c934, c956,
\@nextchar c1229, c1235, c1240 \@nil a16, a90, a91, b366, b379, b895,	c1292, c1315, d302, d337, d340
b897, b956, b958, b1663, b1686	\@parboxto c1287, c1295, c1302,
\@nnil b563, b565, b601, b603	c1310, c1318, c1325, d344, d346
\@no@lnbk <u>c85</u>	\QparseQversion a16, a90, a91
/emoetupir	(Paraceverbreit aro, ago, ag.

\@part g1171, g1180, g1182	\@setref@ c982, c984, c998, c1011
\@pboxswfalse	\@settopoint
c1290, c1313, d216, d253, d433	g443, g541, g586, g665, g666, g688
\@pboxswtrue	\@sharp c1106, c1108,
c1300, c1323, d221, d259, d444	c1110, c1131, c1134, c1137,
\@pcaption $\dots \dots \dots$	c1162, c1165, c1168, c1191,
\@picbox d479, d485, d486	c1194, c1197, c1219, c1221,
\@picht d464, d467, d472, d475, d485	c1223, c1230, c1236, c1241, d51
\@picwd d458,	\@shipoutsetup <u>c593</u>
d464, d467, d472, d475, d479, d485	\@spart g1171, g1180, g1220
\@plIncludeInRele@se a86, a87	
\@plIncludeInRelease . a84, a85, a86	\Ospecialpagefalse c613, c680, c749
\@plincludeinreleasefalse	\Cspecialstyle c613, c680, c749
a75, a81, a106, a112	\@startfield c1062, c1076
\@plincludeinreleasetrue a96	\@startline
\@pnumwidth	\@startpbox c1229, c1235, c1240, d48
g1630, g1650, g1680, g1681,	\@startsection
g1685, g1699, g1703, g1714, g1718	g1297, g1301, g1305, g1309, g1313
\@preamble c1103, c1104, c1127,	\@starttoc g1671, g1762, g1775
c1128, c1158, c1159, c1187,	\@stopfield $\dots \dots \underline{c1080}$
c1188, c1216, c1217, d46, d47, d55	\c 0stysizefalse g15
\@preamerr d54	\@stysizetrue g31,
\@ptsize g4, g57, g59,	g34, g37, g40, g44, g47, g50, g53
g61, g62, g133, g134, g135, g136	\@sverb c1024, c1036, c1046, h49
\@reinserts <u>c354</u>	\@tabacol c1261, c1268, d17
\@rensuji <u>d509</u>	\@tabarray c1263, c1270
\@resetactivechars c604, c671, c740	\@tabclassiv c1263, c1270, d19
\@restonecolfalse g957,	\Qtabclassz $c1084$, c1262, c1269, d18
g970, g1666, g1757, g1770, g1805	\@tabular $\underline{c1258}$
\@restonecoltrue g956,	\@tabularcr c1263, c1270, d19
g968, g1665, g1756, g1769, g1805	\@TC . $\underline{c385}$, c410, c459, c506, c531, c553
\@Roman g1121, g1136	\@tempa b421,
\@roman g1414, g1420	b424, b425, b430, c905, c906,
\@rotswfalse d60, d239, d285, d351, d433	c928, c929, c950, c951, c1248, c1251
\@rotswtrue	\@tempb b422, b426, b431
. d30, d79, d241, d288, d367, d436	\@tempboxa c348, c636, c643,
\@schapter g1252, g1285	c644, c708, c715, c716, c777,
\@secondoftwo	c784, c785, d217, d229, d296,
. b1411, b1417, b1427, b1440,	d322, g1568, g1569, g1571, g1576
b1449, b1453, b1454, b1486, b1579	\@tempc b423, b424
\@secpenalty g1676, g1711	\@tempcnta g13, g14, g536, g537
\@setfontsize g141, g142, g143,	\@tempcntb b1504, b1505, b1508,
g144, g145, g146, g179, g189,	b1509, b1510, b1517, b1518,
g199, g211, g221, g231, g242,	b1538, b1539, b1542, b1552,
g243, g244, g245, g246, g247,	b1555, b1556, b1557, b1564, b1565
g248, g251, g252, g253, g254,	\@tempdima b1543, b1553,
g255, g256, g257, g260, g261,	b1568, b1569, c301, c303, c304,
g262, g263, g264, g265, h6, h13	c309, c314, c326, c331, c335,
\@setminipage d308	c1291, c1292, c1314, c1315, d65,
\@setref <u>c971</u>	d66, d67, d71, d72, d73, d82,

\(\frac{d465}{d468}, \frac{d473}{d476}, \frac{d480}{d518}, \frac{d519}{d520}, \frac{d521}{d521}, \frac{g44}{g49}, \frac{g432}{g432}, \frac{g435}{g438}, \frac{g531}{g532}, \frac{g534}{g533}, \frac{g534}{g553}, \frac{g534}{g553}, \frac{g536}{g550}, \frac{g551}{g567}, \frac{g669}{g667}, \frac{g669}{g672}, \frac{g680}{g681}, \frac{g682}{g683}, \frac{g684}{g684}, \frac{g685}{g685}, \frac{g686}{g684}, \frac{g684}{g685}, \frac{g686}{g684}, \frac{g684}{g685}, \frac{g686}{g684}, \frac{g684}{g685}, \frac{g686}{g684}, \frac{g684}{g685}, \frac{g686}{g684}, \frac{g685}{g687}, \frac{g689}{g69}, \frac{g72}{g429}, \frac{g430}{g436}, \frac{g437}{g429}, \frac{g429}{g430}, \frac{g435}{g436}, \frac{g437}{g429}, \frac{g437}{g429}, \frac{g437}{g436}, \frac{g427}{g429}, \frac{g437}{g429}, \frac{g437}{g436}, \frac{g427}{g429}, \frac{g437}{g429}, \frac{g437}{g436}, \frac{g427}{g429}, \frac{g437}{g436}, \frac{g427}{g429}, \frac{g430}{g436}, \frac{g437}{g436}, \frac{g427}{g429}, \frac{g427}{g4	d83, d84, d85, d89, d90, d91, d92, d250, d251, d252, d261, d262, d283, d297, d300, d333, d336, d340, d445, d446, d447,	$\label{eq:continuous} $$ \ \ g948, g994, g1015, g1054, g1066 $$ \ \ \ g7, g91 $$ \ \ \ g8, g90 $$ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \$
\$66, g418, g419, g420, g421, g429, g432, g435, g438, g531, g552, g536, g650, g651, g652, g654, g655, g667, g669, g672, g680, g681, g682, g683, g684, g685, g686, g1275, g1278, g1281, g1294, g1295		
g429, g432, g435, g438, g531, g532, g533, g534, g535, g536, g650, g651, g659, g651, g669, g672, g680, g681, g682, g683, g684, g685, g686, g1275, g1278, g1281, g1294, g1295 (**tempdrimb**) **b563, b564, b601, b602, c1294, c1295, c1317, c1318, d343, d344, d465, d468, d473, d476, d480, g422, g423, g424, g425, g426, g427, g429, g430, g435, g436, c91, c91, c94, c95, c106, c110, c111, c122, c126, c127, c138, c141, c142, c422, c426, c428, c429, c430, c432, c442, c443, c451, c452, c457, c458, c460, c461, c462, c464, c465, c467, c468, c470, c471, c478, c480, c481, c489, c490, g69, g76, g80 **Wetempsvarfalse** d230, g1178 *Wetempsvarfalse** b806, b827 *Wetempsvarfalse** b806, b82		
g532, g533, g534, g535, g536, g656, g652, g654, g655, g656, g651, g652, g654, g655, g656, g657, g669, g672, g680, g681, g682, g683, g684, g685, g686, g1275, g1278, g1281, g1294, g1295	g429, g432, g435, g438, g531,	
\$657, \$669, \$672, \$680, \$681, \$686, \$682, \$683, \$684, \$685, \$686, \$682, \$683, \$684, \$685, \$686, \$682, \$685, \$686, \$682, \$685, \$686, \$682, \$685, \$686, \$682, \$685, \$686, \$682, \$685, \$686, \$682, \$685, \$686, \$682, \$685, \$688,		
\(\) \(\)		
\(\(\) \) \(\)		
\tempdimb		
b563, b564, b601, b602, c1294, c1295, c1317, c1318, d343, d344, d465, d468, d473, d476, d480, g422, g423, g424, g425, g426, g427, g429, g430, g435, g436 (426, c428, c429, c430, c432, c491, c91, c94, c95, c106, c110, c111, c122, c126, c127, c138, c141, c142 (458, c460, c461, c462, c467, c91, c94, c95, c106, c110, c111, c122, c126, c127, c138, c141, c142 (468, c470, c471, c478, c489, c489, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c463, c506, c531, c553 (480, c481, c463, c506, c531, c553 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c463, c506, c531, c553 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c490, c491, c473, c476, c477, c478, c486, c480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 (481, c482, c484, c483, c484, c490, c481, c482, c442, c443, c445, c445, c445, c445, c446, c462, c464, c441, c412, c443, c441, c412, c446, c462, c464, c441, c441, c412, c443, c441, c412, c443, c441, c412, c443, c445		\@tombowwidth
C1295, C1317, C1318, d343, d344, d4465, d468, d473, d476, d480, g422, g423, g424, g425, g426, g427, g429, g430, g435, g436	•	
d480, g422, g423, g424, g425, g426, g427, g429, g430, g435, g436 \(\) \(\) \(\) \(\) \(\) \(\) \(\) \(\) \(\) \(\) \(\) \(\) \(
G426, g427, g429, g430, g435, g436 C433, c435, c436, c439, c440, c421, c91, c94, c95, c106, c110, c111, c122, c126, c127, c138, c141, c142 C458, c467, c468, c467, c468, c470, c471, c458, c467, c468, c467, c468, c470, c471, c478, c458, c460, c461, c462, c464, c462, c464, c462, c464, c465, c467, c468, c470, c471, c473, c474, c476, c477, c478, c480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 C438, c469, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 C438, c469, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 C438, c467, c468, c487, c489, c490, g69, g76, g80 C438, c469, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 C438, c467, c468, c469, c461, c462, c464, c461, c462, c464, c464, c462, c464, c464, c462, c464, c464, c464, c468, c469, c461, c462, c464, c464, c464, c462, c464, c464, c464, c464, c464, c462, c464, c464, c464, c464, c462, c464, c461, c462, c464, c464, c46	d344, d465, d468, d473, d476,	
\tempskipa b565, b566, b603, b604, c91, c94, c95, c106, c110, c111, c122, c126, c127, c138, c141, c142 \tempswafalse		
Cess		
C122, c126, c127, c138, c141, c142		
\(\text{dempswafalse} \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \		c465, $c467$, $c468$, $c470$, $c471$,
Cetempswatrue d240, d243, g1178 C480, c481, c483, c484, c486, c487, c489, c490, g69, g76, g80 c490, g69, g76, g80 c487, c489, c490, g69, g76, g80 c490, g69, g76, g80 c487, c489, c490, g69, g76, g80 c490, g69, g76, g80 c487, c484, c486, c508, c531, c553 c487, c487, c484, c486, c506, c534, c568, c568, c689, c695, c1660, b1602, b169, c568, c588, c489, c490, p1034, g1250 c487, c487, c484, c486, c514, c483, c582, c1660, b1602, c688, c546, c508, c533, c555 c484, c486, c514, c483, c548, c484, c486, c514, c483, c5487, c484, c484, c58, c514, c483, c514, c483, c514, c483, c514, c483, c514, c483, c506, c534, c484, c486, c514, c483, c514, c483, c514, c484, c548, c514, c483, c514, c484, c484, c514, c483, c514, c484, c484		
\[\text{Qtempswztrue} \		
\[\text{Qtemptokena} \cdots \ g1657, g1658, g1660 \\ \text{Qtemptokena} \cdots \ g1657, g1658, g1660 \\ \text{QtextQcomposite} \cdots \ b1460 \\ \text{QtextQcomposite} \cdots \ b1463, b1472, b1478, b1602, b1618 \\ \text{Qtextbottom} \cdot c162, c167, c175, c187, \\ c190, c212, c243, c274, c315, c337 \\ \text{Qtextsuperscript} \cdot c838, c839, c845, c846 \\ \text{Qtexttop} \cdot c182, c207, c238, c269, c296 \\ \text{Qtexttop} \cdot c182, c207, c238, c269, c296 \\ \text{Qthanks} \cdot c845, c846, c864, c869, c876, c881, c890, c898, c913, c936, c958, e17, e18, g1025, g1026, g1033 \\ \text{Qthefenda} \cdot \cdot c616, c620, c650, c683, c687, c722, c752, c756, c791 \\ \text{Qthemargin} \cdot \cdot c618, c621, c622, c635, c684, c685, c688, c689, c695, c707, c753, c754, c757, c758, c764, c776 \end{array} \text{\text{Qtopnum}} \text{g1041, g1250} \\ \text{\text{Qtopnum}} \text{\text{Qcopnum}} \text{g1041, g1250} \\ \text{\text{Qtr}} \text{\text{Composite}} \text{\text{Qcomposite}} \text{\text{\text{Qcomposite}} \text{\text{Qcomposite}}		
\(\text{\te	=	_
\(\text{0composite(0x)} \) \(_	-
b1463, b1472, b1478, b1602, b1618		
\textbottom c162, c167, c175, c187, c190, c212, c243, c274, c315, c337 \textsuperscript c838, c839, c845, c846 \textsuperscript c182, c207, c238, c269, c296 \textsuperscript c234, c274, c315, c337 \textsuperscript c234, c296 \textsuperscript c236, c296 \textsuperscript c366 \textsuperscript c366 \textsuperscript c366, c296 \textsuperscript c366 \textsuperscript c366, c296 \textsuperscript c366, c296 \textsuperscript c2666, c296 \textsuperscript c2626, c296 \textsuperscript c2666 \textsuperscript c2666, c2666	-	
c190, c212, c243, c274, c315, c337 \@twosidefalse		
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$		
$ \begin{array}{llllllllllllllllllllllllllllllllllll$		\@twosidetrue g87
g1004, g1006, g1012, g1044, g1051 \(\) \	\@texttop . c182, c207, c238, c269, c296	$\verb \dtypeset@protect b772$
\text{\text{Qthecounter}} \tag{} \text{} \text	9 ,	
\\(\text{0thefnmark} \cdots \cdots \cdots \text{c838}, \cdots \text{c839}, \\		
c845, c846, c864, c869, c876, b868, b877, b878, b879, b885, c881, c890, c898, c913, c936, b886, b887, b888, b918, b930, c958, e17, e18, g1025, g1026, g1033 b939, b940, b941, b947, b948, \@thefoot \ldots \cdots		
c881, c890, c898, c913, c936, b886, b887, b888, b918, b930, c958, e17, e18, g1025, g1026, g1033 b939, b940, b941, b947, b948, \@thefoot c616, c620, c650, b949, b1034, b1035, b1036, c683, c687, c722, c752, c756, c791 b1071, b1072, b1073, b1074, \@thehead c616, c619, c640, b1075, b1090, b1097, b1131, c683, c686, c712, c752, c755, c781 b1132, b1133, b1134, b1250, \@themargin c583, c617, b1273, b1311, b1368, b1393, c618, c621, c622, c635, c684, b1398, b1403, b1458, b1513, c685, c688, c689, c695, c707, b1560, b1600, b1626, b1627, c753, c754, c757, c758, c764, c776 b1628, b1629, b1630, b1631,	·	
c958, e17, e18, g1025, g1026, g1033 b939, b940, b941, b947, b948, \@thefoot c616, c620, c650, b949, b1034, b1035, b1036, c683, c687, c722, c752, c756, c791 b1071, b1072, b1073, b1074, \@thehead c616, c619, c640, b1075, b1090, b1097, b1131, c683, c686, c712, c752, c755, c781 b1132, b1133, b1134, b1250, \@themargin c583, c617, b1273, b1311, b1368, b1393, c618, c621, c622, c635, c684, b1398, b1403, b1458, b1513, c685, c688, c689, c695, c707, b1560, b1600, b1626, b1627, c753, c754, c757, c758, c764, c776 b1628, b1629, b1630, b1631,		
\\(\text{\cong}\) \\(\co		
\\ \text{@thehead} \ \ \cdots	$\verb \dthefoot c616, c620, c650,$	b949, b1034, b1035, b1036,
c683, c686, c712, c752, c755, c781 b1132, b1133, b1134, b1250, \@themargin c583, c617, b1273, b1311, b1368, b1393, c618, c621, c622, c635, c684, b1398, b1403, b1458, b1513, c685, c688, c689, c695, c707, b1560, b1600, b1626, b1627, c753, c754, c757, c758, c764, c776 b1628, b1629, b1630, b1631,		
\\(\begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc		
c618, c621, c622, c635, c684, b1398, b1403, b1458, b1513, c685, c688, c689, c695, c707, b1560, b1600, b1626, b1627, c753, c754, c757, c758, c764, c776 b1628, b1629, b1630, b1631,		
c685, c688, c689, c695, c707, b1560, b1600, b1626, b1627, c753, c754, c757, c758, c764, c776 b1628, b1629, b1630, b1631,		
$c753,\ c754,\ c757,\ c758,\ c764,\ c776 \\ \hspace*{1.5cm} b1628,\ b1629,\ b1630,\ b1631,$		
\@thmcounter $\underline{d567}$ b1632, b1633, b1640, b1641,		
	$\verb (@thmcounter \underline{d567} $	b1632, b1633, b1640, b1641,

h1649 h1649 h1644 h1645	\
b1642, b1643, b1644, b1645, b1646, b1647, b1652, b1653,	\addcontentsline
b1654, b1655, b1656, b1657,	g1208, g1258, g1260, g1262, g1653
b1654, b1659, b1710, c37, c38,	
c62, c372, c382, c590, c818,	\addpenalty g1676, g1677, g1696, g1711
c826, c851, c857, c998, c1011,	\addto@hook
c1088, c1256, c1345, c1353,	\addtocontents g1265, g1266
c1358, c1362, c1374, c1375,	\addtocounter h32
c1389, c1390, c1398, c1409,	\addvspace g1169,
c1419, c1420, c1428, c1441,	g1265, g1266, g1678, g1697, g1712
c1444, c1451, c1458, d199, g167	\adjust@box b636, b643, b644, b645, b646, b651, b652, b653, b657,
\@verb c1024, c1036, c1046	b668, b669, b670, b671, b676,
\@viiipt e67, g211, g242, g251, g260	b677, b678, b682, b695, b696,
\@viipt $e66, g242, g252, g261$	b697, b698, b703, b704, b705, b709
\@vipt $e65, g243, g252, g261$	\adjust@dimen b637,
\@vobeyspaces h49	b652, b653, b654, b655, b656,
\@vpt e64, g243	b657, b658, b677, b678, b679,
\@width b575, b578,	b680, b681, b682, b683, b704,
b581, b613, b616, b619, b1336,	b705, b706, b707, b708, b709, b710
b1344, d29, d32, d35, d40, d43, d519, d520, d521, d560, g1820	\adjustbaseline b573,
\\ \text{Qwritefile} \\ \text{Cwritefile} \\	b611, <u>b636</u> , b1051, b1067, d24,
\@x@sf c967, c970, e13, e16	d298, d337, d340, d346, g84 \afont b28, b393, b411, b415, b545
\@xfootnote	\aftergroup b595, b411, b415, b545 \aftergroup b592,
\@xfootnotemark c867, c879	b630, b1506, b1540, b1665,
\@xfootnotenext c889, c897	b1688, c598, c610, c611, c654,
\@xiipt e71,	c665, c677, c678, c735, c746, c747
g143, g146, g189, g231, g244, g253	\all@shape b458
\@xipt e70, g142, g145, g199	\alph
\@xivpt $e72, g245, g254, g262$	\and g1019, g1058
\@xpt e69, g141, g144, g189, g231, h6	\appendix g1317
\@xviipt e73, g246, g255, g263	\appendixname $g1328$, $\overline{g1878}$
\@xxpt e74, g247, g256, g264	\arabic d566, d567, h31, h32
\\(\text{0xxvpt} \text{ e75, g248, g257, g265} \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\array <u>d3</u>
\\ c1263, c1270, d5, d19, d49, g1494	\arraycolsep g1579
\' f8	\arrayrulewidth $\overline{g1581}$
A	\arraystretch
\abovecaptionskip g1562, g1567	\dots d28, d29, d31, d32, d34,
\abovedisplayshortskip	d35, d39, d40, d42, d43, d85, d92
. g149, g154, g159, g181, g191,	$\verb \AtBeginDocument a123, g83, g1602 $
g201, g213, g223, g233, h8, h15	$\verb \AtBeginDvi \underline{c802} $
\abovedisplayskip	\AtEndOfPackage g102
\dots g148, g153, g158, g162,	\author $g948$, g1017, g1056
$g180,\ g190,\ g200,\ g208,\ g212,$	\autospacing b1787
g222, g232, g240, h7, h10, h14, h21	\autoxspacing b1789
abstract (environment) g1078	P
\abstractname	B value of the street of the s
\dots g1085, g1092, g1096, g1878	\backmatter $g1154$

1	1400 140 1440 1441 1440
\baselineskip b570, b571, b572,	d436, d437, d440, d441, d446,
b576, b579, b582, b608, b609,	d447, d463, d466, d471, d474, d479
b610, b614, b617, b620, b1349,	\boxmaxdepth
b1357, b1361, c631, c647, c703,	. c165, c181, c206, c237, c268,
c719, c772, c788, d53, d228,	c312, c501, c524, c528, d542, d546
g174, g512, g535, g537, h36, h40	\break c81
\baselinestretch	C
\dots b552, b553, b568, b606, g282	C
\begin $g985$, $g993$,	\c@@paper <u>g1</u> , g298, g328, g344,
$g998,\ g1063,\ g1070,\ g1084,\ g1095$	g360, g446, g462, g478, g555, g575
\belowcaptionskip $g1562$, $g1578$	\c@bottomnumber $g756$
\belowdisplayshortskip	\c@chapter $\dots \underline{g1110}$,
$. \ \ g150, \ g155, \ g160, \ g182, \ g192,$	g1124, g1139, g1330, g1331,
g202, g214, g224, g234, h9, h16	g1514, g1521, g1541, g1548, g1591
\belowdisplayskip	\c@clineno <u>h30</u>
\dots g162, g208, g240, h10, h21	\c@dbltopnumber $g758$
\bf e44, g1622	\c@enumi g1412, g1418
\bfdef@ult b1086, b1220	\c@enumii g1413, g1419
\bfdefault	\c@enumiii g1414, g1420
b1077, b1078, b1086, b1105, b1110	\c@enumiv . $g1415$, $g1421$, $g1785$, $g1792$
\bfseries	\c@equation $\dots g1587, g1591$
<u>b1097</u> , c978, c992, c1005, e44,	\c@figure <u>g1508</u>
g1085, g1096, g1195, g1198,	\c@footnote g1822
g1214, $g1217$, $g1224$, $g1231$,	\c@mpfootnote d304
g1272, $g1292$, $g1300$, $g1304$,	\c@page c66, g766, g778, g790, g795, g973
g1308, $g1312$, $g1316$, $g1460$,	\c@paragraph g1110, g1131, g1146
g1492, g1622, g1682, g1700, g1715	\c@part g1121, g1136
\bfseries@gt $\underline{b1070}$, $b1109$	\c@secnumdepth
\bfseries@mc $\underline{b1070}$, $b1108$	g837, g840, g845, g852,
\bfseries@rm	g864, g869, g895, g898, g903,
b1071, b1097, b1102, b1228, b1230	g910, g923, g928, g1108, g1184,
\bfseries@rm@kernel $b1228$	$g1194, g1203, g12\overline{13}, g1254, g1274$
\bfseries@sf b1103, b1231, b1233	\c@section g1110, g1122,
\bfseries@sf@kernel $b1231$	$g1125, g1137, g11\overline{40, g1321}, g1322$
\bfseries@tt b1104, b1234, b1236	$\colon \colon $
\bfseries@tt@kernel $b1234$	\c@subsection g1110, g1127, g1142
\bibindent g104, g105, g1779	\c@subsubsection $\overline{g1110}$, $g1129$, $g1144$
\bibname $g1784$, $\overline{g1873}$	\c@table g1535
\bigskipamount g285	\c@tocdepth
\botmark c658, c729, c798	g1628, g1639, g1675, g1695, g1710
\bottomfraction g760	\c@topnumber g754
\bou	\c@totalnumber g757
\boutenchar	\cal g1626
\box@dir	\caption@dir d139, d176,
d24, d62, d79, d98, d111, d122,	d183, d189, d234, d240, d241, d243
d24, d02, d73, d36, d111, d122, d287, d288, d289, d292, d293,	\caption@posa
d296, d336, d339, d346, d353,	d142, d178, d184, d197, d219,
d367, d381, d397, d411, d435,	d220, d235, d257, d258, d270, d272
,,,,,,	

$\colongraph{\col$	\clearpage . $c65, g765, g777, g789,$
d179, d184, d197, d218, d222,	g794, g1163, g1176, g1248, g1813
d224, d226, d235, d255, d256, d267	\clubpenalty g1794, g1795
\captiondir d140, d240,	\col@number g1036
d241, d242, d243, d244, d246, d262	\color@begingroup
\captionfloatsep	. c169, c215, c246, c277, c318,
\dots d138, d218, d222, d224, d226	c340, c503, c915, c938, c960, d299
\captionfontsetup $d145$, $d247$, $d263$	\color@endbox
\captionwidth	c641, c651, c713, c723, c782, c792
d141, d177, d183, d193, d234, d252	\color@endgroup c173,
\Cdp $\underline{b19}$, $\underline{g170}$, $g514$	c219, c250, c281, c322, c344,
\cdp $b19$, $b645$,	c516, c918, c941, c963, c1080, d319
b649, b656, b670, b674, b681,	\color@hbox
b697, b701, b708, d358, d372, d402	c638, c648, c710, c720, c779, c789
\cdp@elt b150, b151,	\columnsep g272, g1811
b170, b171, b200, b201, b237,	\columnseprule $\overline{g272}$, g1811
b238, b261, b262, b343, b346, b348	\columnwidth
\cdp@list b151,	c911, c934, c956, d301, g1820
b171, b201, b238, b262, b350, b351	\contentsline g1660
\centering g1004, g1211, g1229	\contentsname
\cf@encoding b725, b781	g1668, g1669, g1670, g1870
\chapter g1245,	\cr d47
g1246, g1669, g1758, g1771, g1784	\crcr b1350, b1358,
$\verb \chaptermark \dots \dots g844, g868,$	b1362, c1275, c1281, d56, d57
g902, g927, g944, g1102, g1264	\ct@encoding b7, b509, b514, b521, b764
\char b643, b668, b695, c46, d248,	\curr@fontshape b546,
d264, d536, d544, d548, d552, g170	b910, b913, b971, b974, b1284
\chardef	\curr@kfontshape \b15,
c47, c48, c1360, c1377, c1392,	b522, b527, b910, b913, b971, b974
c1402, $c1403$, $c1411$, $c1429$, $c1437$	\CurrentOption h2
\check@icl b1664,	\Cvs \(\frac{b23}{2}\), g170, g448, g449,
b1671, b1673, b1687, b1694, b1696	g450, g451, g452, g453, g455,
\c check@icr b1665,	g456, g457, g458, g459, g460,
b1674, b1679, b1688, b1697, b1702	g464, g465, g466, g467, g468,
$\verb \check@nocorr@ \underline{b1661}$	g469, g471, g472, g473, g474,
\Chs $\underline{b25}$, $\underline{g170}$	g475, g476, g480, g481, g482,
\chs $\underline{b25}$, $b648$, $b673$, $b700$, $d508$	g483, g484, g485, g487, g488,
\Cht <u>b17</u> , g170, g313, g513	g489, g490, g491, g492, g496,
\cHT b27,	g497, g498, g499, g500, g501,
b649, b654, b674, b679, b701, b706	g503, g504, g505, g506, g507,
\cht <u>b17</u> , b644, b649, b669, b674,	g508, g520, g521, g522, g1269,
b696, b701, d355, d369, d399, e15	g1284, g1289, g1295, g1298,
\circle d489	g1299, g1302, g1303, g1306, g1307
\Cjascale $\overline{g269}$	\cvs <u>b23</u> , b647, b672, b699
\ck@encoding	\Cwd $\underline{b21}$, $g170$, $g274$, $g275$, $g284$,
. <u>b7</u> , b737, b750, b756, b774, b784	g330, g331, g332, g333, g334,
\cleardoublepage	g335, g337, g338, g339, g340,
$$ $\underline{c64}$, g799, g955, g1162,	g341, g342, g346, g347, g348,
g1163, g1175, g1176, g1247, g1248	g349, g350, g351, g353, g354,
- · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	= ' = ' = '

g355, g356, g357, g358, g362,	g91, g95, g96, g97, g99, g100,
g363, g364, g365, g366, g367,	g101, g113, g114, g116, g117, h2
g369, g370, g371, g372, g373,	\DeclarePreloadSizes
g374, g378, g379, g380, g381,	b1751, b1752, b1753,
g382, g383, g385, g386, g387,	b1754, b1757, b1758, b1759,
g388, g389, g390, g395, g403,	b1760, b1763, b1764, b1765,
g404, g405, g425, g426, g427, g1485	b1766, b1769, b1771, b1773, b1775
\cwd <u>b21</u> ,	\DeclareRelationFont $\underline{b458}$, $\underline{b1799}$,
b646, b648, b671, b673, b698, b700	b1800, b1810, b1811, b1821, b1831
\cy@encoding <u>b7</u> , b508, b515, b526, b760	\DeclareRobustCommand
(c) sencoting <u>b1</u> , 5500, 5515, 5526, 5100	. b71, b102, b104, b120, b490,
D	b501, b642, b720, b732, b744,
	b792, b793, b794, b869, b870,
\dashbox <u>d489</u>	b871, b873, b874, b875, b881,
\date $g948$, g1018, g1057	b882, b883, b931, b932, b933,
\day g71, g1845, g1847, g1861, g1864	b935, b936, b937, b943, b944,
\dblfloatpagefraction $g764$	b945, b984, b989, b994, b1005,
\dblfloatsep g711	b1008, b1011, b1041, b1057,
\dbltextfloatsep $\dots \overline{g711}$	b1098, b1114, b1251, b1254,
\dbltopfraction g763	b1258, b1261, b1274, b1278,
\DeclareEmphSequence	b1294, b1301, b1308, b1605,
b1270, b1273, b1292, b1299, b1306	b1610, c806, c1333, d323, d426,
\DeclareErrorKanjiFont . <u>b358</u> , b1277	d509, d537, d556, e32, e38, e44,
	e45, e51, e52, e53, e54, e55,
\DeclareFixedFont b391	e56, e57, g177, g209, g242, g243,
\DeclareFontEncoding <u>b136</u>	g244, g245, g246, g247, g248,
\DeclareFontEncoding@ <u>b136</u>	g251, g252, g253, g254, g255,
\DeclareFontEncoding@saved b164, b214	g256, g257, g260, g261, g262,
\DeclareFontFamily $\underline{b298}$	g263, g264, g265, g948, g949,
\DeclareFontShape	g950, g1608, g1612, g1626, g1627
b1801, b1805, b1806,	\DeclareSymbolFont e26, e27, g1595
b1812, b1816, b1817, b1822,	\DeclareSymbolFontAlphabet
b1826, b1827, b1832, b1836, b1837	e28, e29, g1596
\DeclareKanjiEncoding $\dots \underline{b217}$	\DeclareTateKanjiEncoding $b217$, $b1734$
\DeclareKanjiEncodingDefaults	\DeclareTateKanjiEncoding@ b217
<u>b281,</u> b1726	\DeclareTextCommandDefault
\DeclareKanjiFamily	b1331, b1341
<u>b317</u> , b1798, b1809, b1820, b1830	\DeclareTextFontCommand b1267, b1268
\DeclareKanjiSubstitution	\DeclareYokoKanjiEncoding $b217$, $b1732$
$$ $\underline{b336}$, b1733, b1735	$\DeclareYokoKanjiEncoding@ b217$
\DeclareLayoutCaption $\underline{d169}$	\default@family b152, b172, b202, b353
\DeclareMathAlphabet $g1599$	\default@k@family
\DeclareOldFontCommand	b239, b263, b367, b380, b383
1.8 g 1617, g 1618, g 1619, g 1620,	\default@k@series
g1621, g1622, g1623, g1624, g1625	b239, b263, b368, b381, b384
\DeclareOption g18,	\default@k@shape
g21, g24, g27, g31, g34, g37,	b240, b264, b369, b382, b385
g40, g44, g47, g50, g53, g59,	\default@KM b249, b273, b289, b292, b295
$g61,\ g62,\ g63,\ g67,\ g74,\ g78,$	\default@KT b283, b286, b294, b752
g82, g86, g87, g88, g89, g90,	\default@M b161, b189, b211

\default@series b152, b172, b202, b354	\endarray <u>d56</u>
\default@shape b153, b173, b203, b355	\endlist $g1454$, $g1481$,
description (environment) g1482	g1490, g1498, g1504, g1507, g1800
\descriptionlabel $g1490$, $\overline{g1491}$	\endminipage $\underline{d309}$
\dimen@ b1374,	\endpicture $\underline{d485}$
b1376, b1385, b1387, c183,	\endquotation $g1099$
c186, c208, c211, c239, c242,	\endtabular $\underline{c1272}, \underline{d56}$
c270, c273, c297, c299, d15, d16	\endtabular* <u>c1272</u>
\dimexpr c402, c409, c416, c418, c422,	\endtitlepage $g1088$
c426, c433, c435, c500, c580, c582	\endtsample h38
\DisableCrossrefs $\underline{h43}$	enumerate (environment) g1438
\DLMfontsw@oldlfont b444, b457	environments:
\DLMfontsw@oldstyle b441, b456	abstract $g1078$
\DLMfontsw@standard . b438, b446, b455	description \dots $g1482$
\do c1021, c1033, c1044, h47, h48	enumerate g1438
\do@emfont@update b1285	figure g1529
\do@noligs h47	<u>-</u>
	figure* g1529
\document@default@language	itemize $g1466$
\documentclass c603, c670, c1448	quotation $\underline{g1499}$
	quote ${ m g1505}$
\documentstyle	table g1556
\dospecials c1021, c1033, c1044, h48	table* g1556
\doublerulesep $\dots g1582$	thebibliography $\dots \qquad \overline{g1782}$
\dst	theindex g1804
\DualLang@mathalph@bet b429, b435	
\DualLang@Mfontsw	titlepage <u>g952</u>
b438, b441, b444, b446, b451, b453	tsample $\underline{\text{h}33}$
T.	verse g1493
E 1955	\errhelp a12, a17, b1780
\e@alloc@chardef <u>c1355</u>	\errmessage a13, a21, b1783
\e@alloc@top <u>c1355</u> , c1423	\error@fontshape b502, b503, b532
\e@mathgroup@top c1425	\error@kfontshape b363, b376, b503
\em <u>b1270</u> , <u>e57</u>	\euc b695,
\em@currfont b1284	d248, d264, d536, d544, d548, d552
\emfontdeclare@clist b1280, b1285	\evensidemargin
\eminnershape $\underline{b1270}$	c622, c684, c689, c753, c758, g599
$\ \ $	\every@math@size b395
\enablecjktoken c1398	\everyjob a40, <u>a43</u>
\EnableCrossrefs $\underline{h43}$	\everypar c1248, c1249, c1250, g1689
\enc@elt $\dots \underline{b33}$,	\ExecuteOptions
b35, b36, b155, b156, b183,	g121, g122, g125, g126, g129, g130
b184, b205, b206, b242, b243,	$\verb \expand@font@defaults \dots \underline{b1082},$
b244, b266, b267, b268, b809, b830	b1100, b1116, b1142, b1172, b1237
\enc@update b551, b726, b728	\ext@figure $g1524$
\encodingdefault $b1046$, $b1062$, $e46$	\ext@table g1551
\end $d537$, $d539$, $g1000$, $g1003$,	
$g1007,\ g1072,\ g1075,\ g1087,\ g1097$	${f F}$
$\verb \end@dblfloat \dots \dots g1534, g1561 $	$\verb f@baselineskip b387, b553, \\$
$\verb \end@float \dots \dots g1531, g1558 $	b566, b570, b591, b604, b608, b629

\f@encoding b16, b724,	\fmtversion a3, a11, a16
b725, b902, b963, b1188, b1414	\fnsymbol g1024
$\verb f@family b16, b792, b823, \\$	\fnum@figure $\underline{g1524}$
b836, b843, b902, b963, b990,	\fnum@table $g1551$
b1047, b1102, b1103, b1104,	\font . b28, b393, b402, b408, b411,
b1118, b1119, b1120, b1145, b1188	b414, b415, b520, b525, b545,
\f@linespread	b1275, b1281, b1295, b1302,
b552, b567, b568, b571, b585,	b1309, b1376, b1387, c393, e59
b588, b605, b606, b609, b623, b626	\font@name b522,
\f@series	b524, b527, b529, b546, b548, b550
b16, b869, b881, b991, b1048,	\fontdimen b1275, b1281, b1295,
b1138, b1154, b1156, b1160, b1161	b1302, b1309, b1376, b1387, e59
\f@shape . b16, b931, b943, b992, b1049	\fontencoding . $\underline{b720}$, $b1748$, $b1749$, $e21$
\f@size b386, b522, b527,	\fontfamily $b792$, b1139, b1150, e22
b546, b553, b564, b591, b602,	\fontseries <u>b867</u> , b982,
b629, b1284, e64, e65, e66, e67,	b1039, b1101, b1107, b1117, b1123
e68, e69, e70, e71, e72, e73, e74, e75	\fontseriesforce
\fam@elt	b847, b868, <u>b877</u> , b885, b947
<u>b33</u> , b40, b41, b42, b305, b306,	\fontshape $\dots \underline{b930}$, $b982$, $b1039$
b324, b325, b807, b818, b828, b839	\fontshapeforce $b930, \underline{b939}$
\famdef@ult b1088, b1238, b1239, b1240	\fontsize b396, b1731, e23
\familydefault b1047, b1063, b1088, e47	\footins c163, c168, c172, c213, c214,
\fboxrule $g1585$	c218, c244, c245, c249, c275,
\fboxsep $g1585$	c276, c280, c316, c317, c321,
\fenc@list <u>b35</u> , b156, b184, b206, b833	c338, c339, c343, c356, c357,
$\verb ffam@list b40, b303, b306, b822 \\$	$c358,c906,c929,c951,\underline{g693},g1584$
figure (environment) g1529	\footnote $\dots \dots \underline{c859}$,
figure* (environment) g1529	c902, c926, g989, g1064, g1065
\figurename g1527, g1528, g1876	$\verb footnotemark \underline{c859}, g981 \\$
\file h24	\footnoterule $c171$, $c217$, $c248$,
\firstmark c658, c729, c798	c279, c320, c342, d315, g987, g1818
\fixcompositeaccent	\footnotesep c909,
. <u>b1602</u> , b1618, b1623, b1626,	c917, c932, c940, c954, c962, g690
b1635, b1637, b1640, b1649, b1652	\footnotesize
\fl@trace	c907, c930, c952, g209, g986
. c291, c306, c307, c308, c309,	\footnotetext <u>c884</u>
c328, c329, c330, c331, c332, c350	\footskip
\float@count <u>c1422</u>	c647, c719, c788, g314, g573, g685
\float@pos d154, d217, d227	\fork@array@option d23, d59
\floatheight d136, d154,	\fork@parbox@option $d334$, $\underline{d350}$
d158, d159, d162, d165, d166, d167	\fps@figure g1524
\floatingpenalty c910, c933, c955	\fps@table $g1551$
\floatpagefraction g762	\frenchspacingh49
\floatruletick d137,	\frontmatter g1154
d156, d160, d163, d165, d167, d168	\ftype@figure g1524
\floatsep g696	
\floatwidth d135, d154, d155,	\ftype@table $g1551$
d156, d163, d164, d166, d168, d268	${f G}$
\fmtname a2, c7	\g@addto@macro b1091, b1244
- ,	, ,

$eq:continuous_continuous$	\if@noskipsec g1168 \if@notffam b790, b842 \if@notkfam b789, b842 \if@openleft g10,
Н	
\hangindent	d297, d320, d335, d444, d541, d558 \if@specialpage c612, c679, c748 \if@stysize g15, g273, g297, g327, g409, g445, g525, g544, g554, g574, g643 \if@tempswa d250, g1243 \if@tempswz b791, b814, b835 \if@titlepage g6, g984, g1079 \if@twocolumn c69, c74, g394, g410, g428, g587, g637, g644, g769, g774, g781, g786, g792, g797, g956, g967, g1035, g1091, g1099, g1178, g1333, g1341, g1665, g1756, g1769, g1805, g1884 \if@twoside c65, c615, c682, c751, g615, g653, g668, g765, g777, g789, g794, g827, g878, g976, g1236, g1895 \ifcsname b905, b908, b966, b969
I	\ifdefined c41
\ialign b1350, b1358, b1362, d46 \IeC b165 \if@compatibility	\\ \text{IffileExists} \tag{1830}, \text{ b810}, \text{ b831} \\ \text{ifin@} \tag{1832}, \text{ b400}, \text{ b406}, \text{ b507}, \text{ b513}, \text{ b748}, \text{ b760}, \text{ b764}, \text{ b800}, \text{ b804}, \text{ b823}, \text{ b826}, \text{ b998}, \text{ b1015}, \text{ b1031}, \text{ b1230}, \text{ b1233}, \text{ b1236} \\ \text{ifmdir} \tag{1857}, \text{ d514}, \text{ g1837}, \text{ g1854}, \text{ g1859} \\ \text{ifnot@advanceline} \tag{1859}, \text{ g766}, \text{ c666}, \text{ c616}, \text{ c683}, \text{ c752}, \text{ g766}, \text{ g778}, \text{ g790}, \text{ g795}, \text{ g973} \\ \text{iftdir} \tag{1857}, \text{ b61}, \text{ b72}, \text{ b650}, \text{ b675}, \text{ b702}, \text{ b1333}, \text{ b1343}, \text{ b1360}, \text{ b1543}, \text{ b1586}, \text{ c67}, \text{ c185}, \text{ c210}, \text{ c241}, \text{ c272}, \text{ c599}, \text{ c617}, \text{ c621}, \text{ c666}, \text{ c684}, \text{ c688}, \text{ c736}, \end{array}

c753, $c757$, $d26$, $d61$, $d240$,	\input b1744,
d286, d352, d434, d462, d514,	b1745, b1746, b1747, c31, e3,
d535, d541, d564, g767, g784,	g99, g100, g133, g134, g135, g136
g1443, g1457, g1471, g1484,	\InputIfFileExists b178, b1778, e77
g1568, g1572, g1837, g1854, g1859	\insert c356, c359, c906, c929, c951
\iftombow <u>c361</u> ,	\interfootnotelinepenalty c908, c931, c953
c499, c526, c549, c578, c692, c761	\interlinepenalty c908, c931, c953,
\iftombowdate <u>c361</u> , c404, c453	g1193, g1212, g1223, g1230, g1643
\ifvbox c177, c202, c233, c264, c359	\intextsep g696
\ifydir	\it e55, e59, g1623
b82, b92, c72, c830, c832, c838,	\item g1498, g1504, g1507, g1812
c845, c905, c928, c950, c968,	\item g1498, g1504, g1507, g1512 \itemindent g105,
d557, e14, e17, g772, g779, g1025	g106, g1483, g1495, g1496, g1501
\if 西暦g1831	itemize (environment) g1466
\ignorespaces b988, b993,	\itemsep g186, g196,
b1007, b1010, b1023, b1026,	g206, g218, g228, g238, g1363,
b1050, b1066, c82, c96, c112,	g1368, g1373, g1391, g1399,
c128, c143, c917, c940, c962,	g1446, g1474, g1487, g1495, h20
c1106, c1108, c1110, c1131, c1134, c1137, c1162, c1165,	\itshape b1276, b1282,
c1168, c1191, c1194, c1197,	b1296, b1303, b1310, e55, g1623
c1219, c1221, c1223, c1229,	\ixpt e68
c1235, c1240, d211, d482, e50	_
\in@ b31, b32, b1229, b1232, b1235	J
\in@@ b30, b32	\jcharwidowpenalty b1790
\in@false b31	\jfam e31, e44, g1598 \jfont b402, b525, c42, c44
\in@true b31	\jis b643, b668,
\index c629, c701, c770, g1656	•
	C40 137 133 134 133 130 137
	c46, f32, f33, f34, f35, f36, f37, f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52.
$\verb \label{eq:g1806} \verb g1806, g1807, g1808, \underline{g1873} $	$f38,\ f39,\ f40,\ f41,\ f42,\ f51,\ f52,$
$\label{eq:continuous_problem} \begin{array}{ll} \verb+\indexname+ & g1806, g1807, g1808, \underline{g1873} \\ \verb+\indexspace+ & \dots & \underline{g1817} \\ \end{array}$	f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52, f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,
$\begin{array}{llllllllllllllllllllllllllllllllllll$	$f38,\ f39,\ f40,\ f41,\ f42,\ f51,\ f52,$
$\begin{array}{llllllllllllllllllllllllllllllllllll$	f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52, f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59, f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170 K
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52, f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59, f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52, f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59, f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52, f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59, f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170
$\label{eq:continuous_state} $$ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ $	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\capable Meencoding} & \dots & \underline{b7}, b15, \\ b504, b508, b509, b514, b515, \\ b517, b521, b526, b530, b535, \\ b537, b539, b542, b736, b737, \\ \end{array}$
$\label{eq:continuous_state} $$ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ $	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \\ \textbf{K} \\ \\ \text{\coloreding} \dots \underline{\textbf{b7}}, \textbf{b15}, \\ \text{b504, b508, b509, b514, b515,} \\ \text{b517, b521, b526, b530, b535,} \\ \text{b537, b539, b542, b736, b737,} \\ \text{b751, b753, b754, b756, b757,} \\ \end{array}$
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873 \indexspace	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b7}, b15, \\ \text{b504, b508, b509, b514, b515,} \\ \text{b517, b521, b526, b530, b535,} \\ \text{b537, b539, b542, b736, b737,} \\ \text{b751, b753, b754, b756, b757,} \\ \text{b760, b764, b766, b902, b904,} \end{array}$
\indexspace	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b7, b15, b504, b508, b509, b514, b515, b517, b521, b526, b530, b535, b537, b539, b542, b736, b737, b751, b753, b754, b756, b757, b760, b764, b766, b902, b904, b908, b963, b965, b969, b1188} \\ \end{array}$
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873 \indexspace	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b7}, b15, \\ \text{b504, b508, b509, b514, b515,} \\ \text{b517, b521, b526, b530, b535,} \\ \text{b537, b539, b542, b736, b737,} \\ \text{b751, b753, b754, b756, b757,} \\ \text{b760, b764, b766, b902, b904,} \\ \text{b908, b963, b965, b969, b1188} \\ \\ \text{\coloredge{kgfamily}} & \dots & \underline{b12}, b15, b383, \\ \end{array}$
\indexspace	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b7}, b15, \\ \text{b504, b508, b509, b514, b515,} \\ \text{b517, b521, b526, b530, b535,} \\ \text{b537, b539, b542, b736, b737,} \\ \text{b751, b753, b754, b756, b757,} \\ \text{b760, b764, b766, b902, b904,} \\ \text{b908, b963, b965, b969, b1188} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b12}, b15, b383, \\ \text{b535, b537, b539, b542, b793,} \\ \end{array}$
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873 \indexspace	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b7, b15, b504, b508, b509, b514, b515, b517, b521, b526, b530, b535, b537, b539, b542, b736, b737, b751, b753, b754, b756, b757, b760, b764, b766, b902, b904, b908, b963, b965, b969, b1188} \\ \\ \text{\coloredge{kgfamily}} & \dots & \underline{b12, b15, b383, } \end{array}$
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873 \indexspace	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b7}, b15, \\ \text{b504, b508, b509, b514, b515,} \\ \text{b517, b521, b526, b530, b535,} \\ \text{b537, b539, b542, b736, b737,} \\ \text{b751, b753, b754, b756, b757,} \\ \text{b760, b764, b766, b902, b904,} \\ \text{b908, b963, b965, b969, b1188} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b12}, b15, b383, \\ \text{b535, b537, b539, b542, b793,} \\ \text{b800, b815, b843, b902, b904,} \\ \end{array}$
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873 \indexspace	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b7}, b15, \\ \text{b504, b508, b509, b514, b515,} \\ \text{b517, b521, b526, b530, b535,} \\ \text{b537, b539, b542, b736, b737,} \\ \text{b751, b753, b754, b756, b757,} \\ \text{b760, b764, b766, b902, b904,} \\ \text{b908, b963, b965, b969, b1188} \\ \\ \text{\coloreding} & \dots & \underline{b12}, b15, b383, \\ \text{b535, b537, b539, b542, b793,} \\ \text{b800, b815, b843, b902, b904,} \\ \text{b908, b963, b965, b969, b985,} \\ \end{array}$
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873 \indexspace	$ \begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \text{\$^{\text{k@encoding}}} \dots \dots \underline{\text{b7}}, \text{b15,} \\ \text{b504, b508, b509, b514, b515,} \\ \text{b517, b521, b526, b530, b535,} \\ \text{b537, b539, b542, b736, b737,} \\ \text{b751, b753, b754, b756, b757,} \\ \text{b760, b764, b766, b902, b904,} \\ \text{b908, b963, b965, b969, b1188} \\ \text{\$^{\text{k@family}}} \dots \underline{\text{b12}}, \text{b15, b383,} \\ \text{b535, b537, b539, b542, b793,} \\ \text{b800, b815, b843, b902, b904,} \\ \text{b908, b963, b965, b969, b985,} \\ \text{b1043, b1108, b1109, b1124,} \\ \end{array} $
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873 \indexspace	$\begin{array}{c} \text{f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52,} \\ \text{f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59,} \\ \text{f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170} \\ \hline \textbf{K} \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\$
\indexname g1806, g1807, g1808, g1873 \indexspace	f38, f39, f40, f41, f42, f51, f52, f53, f54, f55, f56, f57, f58, f59, f60, f61, f62, f80, f90, f91, f92, g170

b926, b965, b969, b986, b1044,	\ldfigure g1765, g1778
b1168, b1184, b1186, b1191,	\leftarrow
b1192, b1212, b1215, b1218, b1220	\10paragraph g1726
$\verb \k@shape \dots \dots \underline{b14},$	\1@part g1674
b15, b385, b535, b542, b904,	\lessection g1708
b908, b932, b944, b954, b961,	\1@subparagraph g1726
b967, b970, b973, b987, b1045	
\Kanji <u>d533</u>	\1@subsection
\kanji	\left(1@subsubsection g1726
\kanjidef@ult b1094, b1245, b1246	\ldtable <u>g1778</u>
\kanjiencoding <u>b720,</u>	\label c628, c700, c769, g1656
b984, b1006, b1022, b1042, b1058, b1316, b1743, e33, e39, g165	\labelenumi $g1423$
\kanjiencodingdefault	\labelenumii $g1423$
b1042, b1058,	\labelenumiii g1423
b1316, b1739, e33, e39, g164, g165	\labelenumiv g1425
\KanjiEncodingPair <u>b297</u> , b1736	\labelitemfont $g145\overline{5}$,
\kanjifamily <u>b792</u> , b1006, b1022,	g1458, g1460, g1463, g1464, g1465
b1059, b1169, b1180, b1253,	\labelitemi g1455
b1256, b1317, b1728, e34, e40	\labelitemii g1455
\kanjifamilydefault	\labelitemiii $\dots \dots g1455$
b1043, b1059, b1094, b1317, b1740	\labelitemiv g1455
$\verb \kanjiprocess@table \underline{b1313}$	\labelsep g1348, g1378, g1393,
\kanjiseries <u>b867</u> , b1006, b1022,	g1402, g1405, g1408, g1447,
b1060, b1107, b1108, b1109,	g1475, g1487, g1492, g1583, g1788
b1110, b1123, b1124, b1125,	\labelwidth g1348,
b1126, b1318, b1729, e35, e41	$g1378$, $g1393$, $g1401$, $\overline{g1402}$,
\kanjiseriesdefault b1044, b1060, b1318, b1741, e35, e41	g1404, $g1405$, $g1407$, $g1408$,
\kanjiseriesforce <u>b877</u>	g1447, g1475, g1483, g1786, g1787
\kanjishape <u>b930</u> , b1006, b1022,	\language c603, c670, c1023, c1035
b1061, b1319, b1730, e36, e42	\LARGE $g241$, g994, g1066
\kanjishapedefault b1045,	\Large <u>g241</u> , g996, g1195, g1300
b1061, b1319, b1742, e36, e42	\large $\underline{g241}$,
\kanjishapeforce $$	$g1002, g1068, g1074, g130\overline{4}, g1682$
\kanjiskip b1786	\lastbox
$\mbox{kansuji}$ $d534$,	\LastDeclaredEncoding b162, b190, b212
$d535, \ g1838, \ g1854, \ g1860, \ g1861$	\lastnodechar b1398
\kasen <u>d556</u>	\lastnodesubtype c37, c48, c53
\kenc@list <u>b35</u> , b244, b268,	\lastnodetype c47, c52
b747, b812, b997, b1014, b1030	\lastpenalty
\kenc@update	\lastskip c91, c106, c122, c138
b531, b738, b740, b755, b770	\layoutcaption a5
\kernel@ifnextchar	\layoutfloat <u>d146,</u> d213
\kfam@list <u>b40</u> , b322, b325, b799 \ktenc@list <u>b35</u> , b267, b405, b512, b763	\Lcount h26
\kyenc@list \(\begin{array}{c} \begin{array}{c} \begin{array} \begin{array}{c} array	\leaders g1648
<u>555,</u> 5246, 5555, 5666, 5755	\leavevmode b1332, b1342, b1349,
${f L}$	b1357, b1510, b1557, b1569,
\l@chapter g1693	b1584, b1713, c966, c1019,

c1031, c1042, c1261, c1268,	${f M}$
c1289, c1312, c1336, c1344, d17,	\m@th b1361, b1512,
d282, d332, d426, d513, d537,	c1304, c1327, c1336, c1344,
d559, e12, g1168, g1273, g1293,	c1352, d20, d225, d249, d265,
g1644, g1682, g1700, g1715, h46	d320, d337, d365, d379, d393,
\leftmargin g104, g183,	d409, d423, d451, e17, e18,
g193, g203, g215, g225, g235,	g983, g1025, g1026, g1033, g1648
g1333, g1359, g1377, g1392,	\mainmatter g1154
$\frac{1}{100}$, g1403, g1406, g1448,	\make@pcaptionbox $d215, \overline{d230}$
g1449, g1450, g1476, g1477,	\makeatletter c31
g1478, $g1483$, $g1485$, $g1497$,	\makeatother c31
g1502, g1506, g1787, g1788, h17	\makelabel g1453, g1480, g1490
\leftmargini	\MakeRobust g167, g168
$. \ \ g183, \ g193, \ g203, \ g215, \ g225,$	\maketitle g981
g235, $g1333$, $g1349$, $g1359$, $h17$	\maketombowbox <u>c396</u> , g73, g77, g81
\leftmarginii g1333, g1377, g1378	\marginparpush g587
\leftmarginiii g1333, g1392, g1393	\marginparsep g587
\leftmarginiv g1333, g1400, g1401	\marginpar\vec{g}{marginpar\vec{g}{marginpar\vec{g}{marginpar}}} \\ \marginpar\vec{g}{margi
\leftmarginv g1333, g1403, g1404	\markboth
\leftmarginvi <u>g1000</u> , g1100, g1101 \leftmarginvi g1333, g1406, g1407	. g834, g836, g844, g861, g892,
\leftmark <u>g1355</u> , g1400, g1407	g894, g902, g920, g1191, g1210
g830, g832, g881, g887, g939, g941	\markright g839, g851,
\leftskip g1449, g1477,	g863, g868, g897, g909, g922, g927
g1485, g1641, g1646, g1702, g1717	\math@bgroup b437, b440, b443
\line <u>d489</u>	\math@fontsfalse b394
\lineskip b1349, b1357, b1361, c631,	\mathbf b1099, g1604, g1622
c703, c772, d53, g280, g997, g1069	\mathcal g1626
\lineskiplimit c631, c703, c772	\mathchardef
\linewidth	c1359, c1363, c1364, c1376,
d181, d182, g1275, g1294, h34, h37	c1379, $c1380$, $c1391$, $c1394$,
\list g1442, g1470,	c1395, c1410, c1413, c1414, c1431
g1483, g1495, g1500, g1506, g1785	\mathgroup e37,
\listfigurename	e43, e44, e51, e52, e53, e54, e55, e56
g1758, g1760, g1761, g1870	\mathgt b1255, b1262, e29,
\listoffigures g1754	g1599, g1604, g1612, g1613, g1618
\listoftables g1767	\mathit g1623
\listparindent g1707	\mathmc b1252, b1259, e28,
. g106, g1488, g1496, g1500, g1501	g1596, g1603, g1608, g1609, g1617
\listtablename	\mathromal g1627
g1771, g1773, g1774, g1870	\mathrm b437, b440, b443, g1603, g1619 \mathsf g1620
	\mathsurround b1559
\lap g1453, g1480 \LoadClass	\mathtt g1621
. e84, e88, e92, e96, e100, e104, h4	\maxdepth g1021
	c191, c223, c254, c285, c312, g321
\Lopt <u>h27</u> \lower b1569,	\maxdimen c501, c528, d542, d546
b1585, d358, d372, d402, d480	\maybe@ic . b1664, b1665, b1687, b1688
\lowercase b177, b810, b831	\maybe@load@fontshape
\ltx@sh@ft b1607, b1612, b1639	b903, b964, b1158, b1189
(TOMBBHETC DIOUT, DIOTZ, DIOJ9	5505, 5504, 51156, 51169

\mbox c1106, c1108, c1110, c1161, c1164, c1167, c1235, d486 \mc e32,	g1116, g1117, g1118, g1119, g1508, g1509, g1535, g1536, h30 \newdimen
e59, e64, e65, e66, e67, e68, e69, e70, e71, e72, e73, e74, e75, g1617	. b17, b18, b19, b20, b21, b22, b23, b24, b25, b26, b27, b637,
\mcdef@ult b1092, b1108, b1124, b1245	c363, c569, c570, c571, d135,
\mcdefault b1092,	d136, d137, d138, d141, d456,
b1253, b1260, b1737, b1740, e34	d457, $d458$, $g1633$, $g1636$, $g1779$
\mcfam e62	$\verb \newenvironment g953,$
\mcfamily b1245, b1250, b1267,	g964, $g1080$, $g1090$, $g1482$,
b1289, b1297, b1303, b1310, g1617	g1493, $g1499$, $g1505$, $g1529$,
\mddef@ult b1087, b1218	g1532, g1556, g1559, g1782, g1804
\mddefault b1079,	\newif a74, b485, b789, b790,
b1080, b1087, b1121, b1126, b1741	b791, c361, c362, d2, d506, g3,
\mdseries <u>b1097</u>	g5, g6, g9, g10, g11, g15, g16, g17
\mdseries@gt $\dots \dots \underline{b1070}$, $\overline{b1125}$	\newlanguage c1445
\mdseries@mc $\overline{b1070}$, $b1124$	\newlength g1562, g1563
\mdseries@rm b1118	\newpage c68, c69, c73, c74, g768,
\mdseries@sf b1119	g769, g773, g774, g780, g781,
\mdseries@tt b1120	g785, g786, g791, g792, g796, g797, g957, g961, g970, g975,
\medskipamount g285	g1040, g1061, g1235, g1238, g1240
\merge@font@series $$	\newskip
\merge@font@shape b935	\newtoks c394
\merge@kanji@series b874, b885	\next d539, d554, d555
\merge@kanji@series@ <u>b885</u>	\NFSS h29
\merge@kanji@shape $b936, \overline{b947}$	\nfss@catcodes b138, b230, b254
\merge@kanji@shape@ $\underline{b947}$	\nfss@text c978, c992, c1005
\MessageBreak a127, a128, a129,	\nobreak c81, c967, d544, d548,
b220, b222, b224, c11, c13, c15, c25	d552, $g1196$, $g1199$, $g1225$,
\minipage $\underline{d273}$	g1279, $g1284$, $g1646$, $g1647$,
\minute <u>c1082</u> , g12, g72	g1649, g1684, g1686, g1703,
\mit g1626	g1718, g1840, g1855, g1863, g1864
\mkern g1648	\nocorr b1663, b1666, b1686, b1689
\mlineplus h30	\nofixcompositeaccent
\month . g71, g1845, g1847, g1860, g1863	<u>b1602</u> , b1620,
\moveleft	b1625, b1627, b1641, b1651, b1653
c502, c529, c551, d543, d547, d551	\noindent
\moveright c635, c707, c776	. g983, g1028, g1032, g1825, g1829
, ,	\nointerlineskip d543, d547, d551 \normalbaselineskip b572, b610,
${f N}$	b647, b672, b699, g1444, g1472
\NeedsTeXFormat b2, $\underline{c2}$, c148, e80	\normalcolor
\newblock g109, g1781	. c170, c216, c247, c278, c319,
\newbox b45, b46, b51, b66,	c341, c378, c639, c649, c711,
b636, c385, c386, c387, c388,	c721, c780, c790, d314, d563, g1650
c389, c390, c391, c392, d134, d144	\normalfont
\newcount c851, c1082, c1083, g1834	b1038, c838, c839, c845, c846,
\newcounter	d145, e44, g1193, g1212, g1223,
g2, g1110, g1112, g1113, g1115,	g1230, g1272, g1292, g1300,

g1304, g1308, g1312, g1316, g1465, g1492, g1617, g1618, g1619, g1620, g1621, g1622, g1623, g1624, g1625, g1650, h28 \normallineskip	$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$
g1836, g1838, g1840, g1845, g1847 O	g1066, g1072, g1076, g1088, g1169, g1196, g1198, g1215, g1217, g1224, g1231, g1318,
\oalign b1606, b1611, b1638 \oddsidemargin	g1325, g1572, g1573, g1651, g1685, g1703, g1718, g1814, g1817 \paragraph
P \p@array d21, d22	$\label{eq:partopsep} \begin{array}{lll} \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \$

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ b=plfonts.dtx}, \ c=plcore.dtx, \ d=plext.dtx, \ e=pl209.dtx, \\ f=kinsoku.dtx, \ g=jclasses.dtx, \ h=jltxdoc.dtx$

\pbox <u>d426</u>	b130, b142, b195, b359, b373,
\pcaption \frac{198}{198}	b487, b493, b559, b598, b639,
\penalty c93, c108,	b665, b692, b981, b1003, b1019,
c109, c124, c140, c920, c943, g1704	b1038, b1055, b1270, b1292,
\pfmtname <u>a27</u> , a55, a57, a59, c4, c11	b1299, b1306, b1328, b1339,
_	
\pfmtversion	b1346, b1353, b1366, b1370,
. <u>a27</u> , a55, a57, a59, a91, c23, c26	b1380, b1391, b1395, b1401,
\pickup@font b523, b528, b547	b1405, b1435, b1456, b1460,
\picture $\underline{d452}$	b1466, b1475, b1481, b1493,
$\verb \platexBANNER a39, a46,$	b1528, b1575, b1598, b1602,
a53, a61, a63, a67, a68, a69, a71	b1618, b1623, b1635, b1649,
\platexNILa a39, a45, a52, a66	b1661, b1684, b1707, b1717,
\platexNILb a41, a45, a52, a66	c34, c60, c85, c100, c116, c132,
\platexreleaseversion a31	c153, c195, c226, c257, c366,
\plEndIncludeInRelease	c371, c376, c381, c397, c447,
a104, a109, a111, b53,	c495, c523, c546, c573, c588,
b57, b63, b67, b78, b88, b98,	c594, c662, c732, c803, c812,
b107, b116, b123, b129, b134,	c820, c834, c842, c848, c855,
b194, b215, b372, b388, b492,	c859, c873, c884, c894, c901,
	c925, c947, c972, c987, c1000,
b497, b597, b634, b664, b691,	c1015, c1028, c1039, c1051,
b718, b1002, b1018, b1037,	
b1054, b1069, b1291, b1298,	c1066, c1085, c1142, c1171,
b1305, b1312, b1338, b1345,	c1200, c1226, c1233, c1238,
b1352, b1365, b1369, b1379,	c1243, $c1254$, $c1258$, $c1266$,
b1390, b1394, b1400, b1404,	c1272, $c1279$, $c1284$, $c1308$,
b1434, $b1455$, $b1459$, $b1465$,	c1330, c1339, c1347, c1355,
b1474, b1480, b1492, b1527,	c1372, $c1387$, $c1407$, $c1417$,
b1574, b1597, b1601, b1617,	c1425, c1435, c1439, c1448, c1456
b1622, b1634, b1648, b1660,	\pltx@cleartoevenpage g765
b1683, b1706, b1716, b1720,	\pltx@cleartoleftpage $g765, \overline{g801}$
c59, c63, c99, c115, c131, c146,	\pltx@cleartooddpage
c194, c225, c256, c287, c370,	g765, g966, g1156, g1159
c373, c380, c383, c446, c492,	
c522, c545, c567, c587, c591,	\pltx@cleartorightpage $g765$, $g803$
c661, c731, c800, c811, c819,	\pltx@composite@chkenc
c827, c841, c847, c854, c858,	b1413, b1431, b1432
c872, c883, c893, c900, c924,	\pltx@composite@temp
	b1505, b1506, b1539, b1540
c946, c964, c986, c999, c1012,	\pltx@cond b1410,
c1027, c1038, c1048, c1065,	b1422, b1425, b1429, b1430,
c1078, $c1141$, $c1170$, $c1199$,	b1439, b1444, b1447, b1451, b1452
c1225, $c1232$, $c1237$, $c1242$,	\pltx@foot@penalty <u>c848</u> , c888,
c1253, $c1257$, $c1265$, $c1271$,	c919, c920, c921, c942, c943, c944
c1278, $c1283$, $c1307$, $c1329$,	
c1338, $c1346$, $c1354$, $c1371$,	\pltx@gluetype c47, c52
c1386, $c1406$, $c1416$, $c1421$,	$\verb \pltx@isletter \underline{b1405}, b1499, b1533$
c1434, c1438, c1442, c1455, c1459	\pltx@isletter@i
\plEndIncludeRelease a80	\dots b1420, b1421, b1442, b1443
\plIncludeInRelease	\pltx@isletter@ii
. <u>a73</u> , b48, b54, b58, b64, b68,	b1423, b1424, b1445, b1446
b79, b89, b99, b108, b117, b124,	\pltx@isletter@iii
, , , , , , ,	•

b1426, b1427, b1448, b1449	\prensuji <u>d531</u> , <u>e7</u>
\pltx@isletter@iv	\prepare@family@series@update
\dots b1426, b1428, b1448, b1450	b1131, b1136
$\protect\pro$	\prepare@family@series@update@kanji
\pltx@ltx@sh@ft	<u>b1131</u> , b1250, b1260, b1265
<u>b1380</u> , b1607, b1631, b1645, b1657	\prepartname
\pltx@mark b1408,	$g1187, g1195, g1206, g1214, \underline{g1866}$
b1422, b1423, b1425, b1427,	\printglossary $c1081$
b1428, b1429, b1437, b1444,	\process@table $\underline{b1313}$
b1445, b1447, b1449, b1450, b1451	\ProcessOptions g132, h3
\pltx@mark@ b1408, b1437	\protect b419, b772, c602, c669, c739,
\pltx@next@inhibitglue . c1229, c1243	c977, c982, c991, c1004, d211,
\pltx@oalign	g983, g1259, g1265, g1266, g1660
<u>b1353</u> , b1606, b1629, b1643, b1655	\protected b1710, b1713, c51, c1246
$\label{lem:b1412} $$ \begin{array}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{lllll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{lllll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{lllll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{lllll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} \begin{tabular}{llll} ta$	\protected@edef c912, c935, c957
b1612, b1630, b1639, b1644, b1656	\protected@file@percent g1653, g1661
pltx@saved@oalign $b1346$,	\protected@write g1655
b1611, b1628, b1638, b1642, b1654	\protected@xdef
\pltx@saved@text@composite@x	c869, c876, c881, c890, c898, g982
<u>b1481</u> , b1613, b1632, b1646, b1658	\providecommand g1653, h24, h25, h26, h27, h28, h29
\pltx@scanstop b1409,	\ProvidesFile
b1420, b1421, b1423, b1424,	b1722, b1792, b1793, b1794, b1795
b1438, b1442, b1443, b1445, b1446	$\ProvidesPackage \dots b3, c149$
\pltx@text@composite@x	\ps@bothstyle g878
<u>b1493</u> , b1608, b1633, b1647, b1659	\ps@footnombre g820, g879, g915
\pltx@textbottom c162, c190	
$\verb \pltx@today@year g1835 $	\ps@headings g827
\pltx@today@year@	\ps@headnombre g813, g828, g857
\dots g1835, g1846, g1848, g1850	\ps@jpl@in g807, g812, g814,
\postbreakpenalty $f4, f5, f8, f11, f22,$	g821, g828, g857, g879, g915, g937
f35, f39, f41, f44, f46, f48, f49,	\ps@myheadings g937
f51, f53, f55, f57, f59, f61, f67, f68	\ps@plain <u>g806</u> , g812, g937
\postchaptername $g1152$, $g1866$	\pstyle <u>h25</u>
\postpartname	\put <u>d489</u>
g1187, g1195, g1206, g1214, <u>g1866</u>	0
\ppatch@level	Q \quotation g1098
. <u>a27</u> , a49, a50, a54, a56, a57, a59	quotation (environment) g1096
\prebreakpenalty	
f2, f3, f6, f7, f9, f10, f12, f13, f14, f15, f16, f17, f18, f19,	quote (environment) $\dots \underline{g1505}$
f20, f21, f23, f24, f25, f26, f27,	${f R}$
f28, f29, f30, f31, f32, f33, f34,	\raggedbottom g1883
f36, f37, f38, f40, f42, f43, f45,	\raggedright g1192, g1222, g1271, g1291
f47, f50, f52, f54, f56, f58, f60,	\raise b1333, b1343, c405,
f62, f63, f64, f65, f66, f69, f70,	c454, c969, d67, d73, d85, d92,
f71, f72, f73, f74, f75, f76, f77,	d355, d369, d399, d559, d564, e15
f78, f79, f80, f81, f82, f83, f84,	\reDeclareMathAlphabet
f85, f86, f87, f88, f89, f90, f91, f92	<u>b418</u> , g1603, g1604
\prechaptername g1151, g1866	\ref c973, c988

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ a=plvers.dtx}, \textbf{ b=plfonts.dtx}, \textbf{ c=plcore.dtx}, \textbf{ d=plext.dtx}, \textbf{ e=pl209.dtx}, \textbf{ f=kinsoku.dtx}, \textbf{ g=jclasses.dtx}, \textbf{ h=jltxdoc.dtx}$

\refname g1783, g1873	\roman@normal
\refstepcounter	e45, e51, e52, e53, e54, e55, e56
\dots d203, g1185, g1204, g1256	\romanencoding b464,
$\verb \rel0fontshape \underline{b16}$	$b469, b477, b481, \underline{b720}, b989,$
\rel@shape b460, b461, b474, b475	b1009, b1025, b1046, b1062, e46
\removejfmglue	\romanfamily b464,
<u>c34</u> , c1088, c1131, c1134, c1137	b469, b477, b481, <u>b792</u> , b1009,
\renewenvironment $g1438$, $g1466$	b1025, b1063, b1139, b1150, e4'
\Rensuji <u>d531</u> , <u>e7</u>	\romannumeral g1441, g1469
\rensuji <u>d509</u> , d531, d532, <u>d566</u> ,	\romanprocess@table b1313
d567, e8, e9, g1121, g1122,	\romanseries b465,
g1124, g1125, g1127, g1129,	b470, b478, b482, <u>b867</u> , b1009,
g1131, g1133, g1321, g1330,	b1025, b1064, b1101, b1102,
g1412, g1413, g1414, g1415,	b1103, b1104, b1105, b1117, b1118, b1119, b1120, b1121, e48
g1511, g1514, g1538, g1541, g1657	\romanseriesforce \b87'
$\verb \rensujiskip d507, d508, d515, d528 $	\romanshape b470, b482,
$\verb \RequirePackage e5, e6, g137 $	<u>b930</u> , b1009, b1025, b1065, e49
$\verb \RequirePackageWithOptions . b5, c151 $	\romanshapeforce <u>b938</u>
\reserved@a b308,	\rule c917, c940, c965
b311, b313, b327, b330, b332,	(==== , ===== , ===== , ===== , ===== , ===== , ===== , ======
b341, b345, b586, b588, b591,	${f S}$
b624, b626, b629, b810, b811,	\save@tbaselineshift d457, d461, d488
b831, b832, b898, b899, b904,	\save@ybaselineshift d456, d460, d48
b905, b959, b960, b965, b966,	\sbox g1568, g1569
b1199, b1200, b1666, b1669,	\sc e54, g1623
b1689, b1692, c3, c4, c7, c10	\scan@allowedfalse h43, h45
\reserved@b b344, b345, b1206,	\scan@allowedtrue h4
b1211, b1213, b1214, b1218, b1219, b1667, b1669, b1690, b1692	\scriptsize g24
\reserved@c b1208, b1211, b1216,	\scshape e54, g1625, h28
b1217, b1220, b1221, b1668,	\secdef g1171, g1180, g1255
b1670, b1677, b1691, b1693, b1700	\section g1092, g1297,
\reserved@e	g1668, g1760, g1773, g1783, g1806
\reserved@f	$\verb \sectionmark \dots \dots g836, g851,$
\reset@font b1052, b1068,	g863, g894, g909, g922, g945, g1102
c625, c697, c766, c907, c930,	\selectfont $\underline{b499}$, $\underline{b987}$,
c952, c978, c992, c1005, d563, g809	b992, b1007, b1010, b1023,
\rightmargin g1486, g1497, g1502, g1506	b1026, b1050, b1066, b1112,
\rightmark g831, g833, g859, g860,	b1128, b1253, b1256, b1260,
g883, g889, g916, g918, g940, g942	b1263, b1748, b1749, e37, e43, e50
\rightskip	\series@change@debug
g1486, g1641, g1680, g1699, g1714	b1138, b1141, b1152,
\rm b440, e51,	b1155, b1159, b1168, b1171,
e59, e64, e65, e66, e67, e68, e69,	b1182, b1185, b1190, b1202,
e70, e71, e72, e73, e74, e75, g1617	b1210, b1213, b1216, b1219, b1222
\rmdef@ult b1083, b1102, b1118, b1238	\series@drop@one@m b92
\rmdefault b1083, b1229	b846, b918, b920
\rmfamily b1238, d563, e51, g1619	\seriesdefault b1048, b1064, e48
1 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	(5511554514415 51046, 51004, 646

\set@fontsize $b553$, $\underline{b558}$	\symbold e44
$\verb \set@target@series@kanji \underline{b885}$	\symgothic e43, e44, e65
\set@typeset@protect c609,	\symitalic e55
c611, c676, c678, c745, c747, d52	\symmincho e31, e37, e62, g1598
\setcounter $g18, g21, g24, g27, g31,$	\symoperators e51
g34, g37, g40, g44, g47, g50,	\symsans e52
g53, g755, g756, g757, g758,	\symslanted e53
g959, g973, g977, g1008, g1046,	\symsmallcaps e54
g1108, g1109, g1319, g1320,	\symtypewriter e56
g1326, g1327, g1628, g1629, h31	m
\SetRelationFont <u>b458</u>	T
\SetSymbolFont e30, g1597	\tabbingsep g1583
\settowidth g1786	\tabcolsep $g1580$
\sf e52, <u>g1617</u>	table (environment) $\dots g1556$
\sfcode g1797	table* (environment) g1556
\sfdef@ult b1084, b1103, b1119, b1239	\tablename g1554, g1555, g1876
\sfdefault b1084, b1232	\tableofcontents $\overline{g1665}$
\sffamily b1239, e52, g1620	\tabskip d47
\shapedefault b1049, b1065, e49	\tabular <u>d</u> 3
\shipout c608, c675, c744	\tabular* d3
\size@update	\tabularnewline d49
b555, b569, b595, b607, b633	\target@meta@family@value
\skip c168, c214, c245, c276, c317,	b1144, b1174, b1200, b1207, b1209
c339, d313, g693, g694, g695, g1584	\target@series@value
\sl e53, <u>g1623</u>	b1143, b1151, b1154,
\sloppy g1793, g1886	b1156, b1160, b1161, b1173,
\slshape e53, g1624	b1181, b1184, b1186, b1191,
\small <u>g177</u> , g986, g1094, <u>h5</u> , h26	b1192, b1214, b1217, b1218, b1220
\smallskipamount g285	\tate b102, b104,
\spacefactor c967, c970, c984, e13, e16	b110, b112, b577, b580, b615,
\split@name b364, b377	b618, c357, c905, c928, c950,
\splitmaxdepth c910, c933, c955	d38, d98, d111, d242, d243,
\splittopskip c909, c932, c954	d289, d292, d381, d397, d437,
\stepcounter	d440, d466, d471, g83, g990, h37
c728, c797, c863, c868, c875, c880	\tbaselineshift
\strip@pt b564, b602, b1375, b1386	b651, b658, b660, b676, b683,
\strut <u>b68</u> , c1063, c1077 \strutbox b58,	b686, b703, b710, b713, b1334, b1343, b1360, b1471, b1502,
b93, b612, c910, c917, c933,	b1545, b1500, b1471, b1502, b1521, b1536, b1545, b1547,
c940, c955, c962, d28, d29, d42, d43	b1568, b1588, b1590, d65, d71,
\subitem g1814	d82, d89, d461, d481, d488,
<u>~</u>	d490, d493, d496, d499, d502, d505
\subparagraph g1313	\tenmin c42, c44, c45
\subparagraphmark $g1102$	\textasteriskcentered g1465
\subsection $g1301$	\textbaselineshiftfactor
\subsectionmark $g839$, $g897$, $g946$, $g1102$	b1513, b1514, b1560, b1561
\subsubitem $g1814$	\textbullet g1455
\subsubsection $\overline{\mathrm{g}1305}$	\textcircled g1458
\subsubsectionmark g1102	\textendash g1460

$\verb \textfloatsep g696 $	\thesection $g837, g852, g864, g895,$
\textfraction $\overline{g761}$	$g910, g923, \underline{g1120}, g1321, g1322$
\textgt <u>b1266</u>	\thesubparagraph $g1120$
\textheight	\thesubsection $g840$, $g898$, $\overline{g1120}$
. c600, c656, c667, c727, c737,	\thesubsubsection $\overline{\text{g1120}}$
$c796, \underline{g444}, g572, g651, g662, g990$	\thetable g1535, g1554, g1555
\textmc $\underline{b1266}$	\thispagestyle c68,
\textperiodcentered $g1464$	c73, g768, g773, g780, g785,
\textsf h27, h29	g791, g796, g958, g972, g1044,
\textsl h25, h26	g1177, g1238, g1240, g1249, g1809
\TextSymbolUnavailable b777	\thr@@ g1439, g1467
\textt b1662	\time g12, g14
\texttt h24	\tiny g241
\textunderscore <u>b1328</u>	\title g948, g1016, g1055
\textwidth	\titlepage g1081
c722, c737, c781, c791, d301,	titlepage (environment) g952
g326, g571, g652, g663, g681, g990	\tmp@error@fontshape $b502$, $b532$
\tfont b408, b520	\tmp@item b301, b303,
\thanks g988, g989, g1009, g1047, g1064	b320, b322, b397, b399, b405,
thebibliography (environment) . g1782	b504, b506, b512, b530, b745,
\thechapter g847,	b747, b757, b759, b763, b795,
g871, g905, g930, g1120, g1257,	b799, b803, b822, b825, b995,
g1259, g1277, g1330, g1331,	b997, b1012, b1014, b1028, b1030
g1514, g1521, g1541, g1548, g1591	\t \to@captionboxwidth . $d266, d268, d269$
\theenumi	\toclineskip g1633, g1640
g1410, g1424, g1430, g1435, g1436	\today g951, g1835
\theenumii g1410, g1425, g1431, g1436	\toks a46, a47,
\theenumiii g1410, g1426, g1432, g1437	a53, a55, a57, a59, a62, a67, a68
\theenumiv \frac{\omega}{\text{g1410}}, \omega 1427, \omega 1433, \omega 1792	\toks@ a88, a92,
\theequation \dots d564, d565, g1587	a95, a100, b342, b346, b348, b351
\thefigure g1508, g1527, g1528	\tombowdatefalse g75, g79
\thefootnote	\tombowdatetrue c362, g68
c830, c869, c881, g983, g1024	\tombowfalse
theindex (environment) g1804	\tombowtrue g68, g75, g79
\thempfn	\topfraction
$\underline{c829}$, c864, c876, c890, c898, d303	\topmargin c577, c691, c760, g542, g682
\thempfootnote $\underline{c831}$, $d303$	\topsep g184, g194, g204,
\thepage	g216, g226, g236, g1362, g1367,
c979, c993, c1006, g809, g815,	g1372, g1380, g1384, g1388,
g816, g817, g818, g822, g823,	g1394, g1395, g1396, g1399,
g824, g825, g830, g831, g832,	g1444, g1445, g1472, g1473, h18 \topskip g294, g324, g511, g540, g1488
g833, g859, g860, g882, g884,	$\begin{array}{llllllllllllllllllllllllllllllllllll$
g888, g890, g917, g919, g939, g940, g941, g942, g1657, g1658	b549, b584, b622, b659, b685, b712
\theparagraph g1120	\tsample h33
\theparagraph g1120 \thepart	tsample (environment) h33
g1120, g1187, g1195, g1206, g1214	\tstrut <u>b99</u>
5-120, 5-101, 51100, 51200, 51214	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ a=plvers.dtx}, \textbf{ b=plfonts.dtx}, \textbf{ c=plcore.dtx}, \textbf{ d=plext.dtx}, \textbf{ e=pl209.dtx}, \textbf{ f=kinsoku.dtx}, \textbf{ g=jclasses.dtx}, \textbf{ h=jltxdoc.dtx}$

\tstrutbox $\underline{b45}$, $\underline{b61}$,	\voidb@x c50, g176
b73, b85, b95, b103, b111, b577,	\vpt e64
b615, d34, d35, d39, d40, d84, d91	\vrule b575, b578, b581, b613,
\tt e56, g1617	b616, b619, c402, c403, c408,
	c409, c411, c412, c413, c415,
\ttdef@ult b1085, b1104, b1120, b1240	
\ttdefault b1085, b1235	c416, c418, c419, c422, c423,
\ttfamily b1240, e56, g1621, h48	c425, c426, c428, c429, c430,
\two@digits g71, g72	c432, c433, c435, c436, c439,
\twocolumn g961,	c440, c442, c443, c451, c452,
g975, g1037, g1243, g1672,	c457, $c458$, $c460$, $c461$, $c462$,
g1763, g1776, g1806, g1807, g1885	c464, c465, c467, c468, c470,
\type@restoreinfo b592, b630	c471, c473, c474, c476, c477,
\typeout a45, a52, a62,	c478, c480, c481, c483, c484,
a66, b660, b686, b713, e2, g1257	c486, c487, c489, c490, d28,
aoo, booo, booo, biio, cz, gizor	d31, d34, d39, d42, d165, d167,
${f U}$	d519, d520, d521, d560, h34, h42
\ucs	\vspace g1096
\underline <u>c1330</u> , d557, d558	33 7
\unexpanded c1249, c1250	\mathbf{W}
\unhcopy b73, b75, b83, b85, b93, b95,	\widowpenalties
b103, b105, b111, b113, b121, b127	\dots c1358, c1375, c1390, c1409
\unitlength $d464$, $d465$,	\widowpenalty $g1796$
d467, d468, d472, d473, d475, d476	\wlog b176, b179, b181
\unpenalty c888	
\update@series@target@value b1146	\mathbf{X}
	\X@layoutcaption d183
\update@series@target@value@kanji	$\label{eq:continuous} $$\X@layoutcaption \dots \underline{d183} $$ \X@layoutfloat \dots \underline{d146} $$$
lem:lem:lem:lem:lem:lem:lem:lem:lem:lem:	\%@layoutfloat $\underline{d146}$
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	$\label{local_continuous} $$\X@nakePbox$
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$
\update@series@target@value@kanji	$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	$ \begin{array}{llllllllllllllllllllllllllllllllllll$
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\X0layoutfloat \d146 \X0makePbox d426, d427 \X0makepbox \d274 \X0minipage d274, \d275 \X0parbox d324, \d325 \X0picture d453, \d454 \X0tabarray d5, \d10 \X0tabular d7, \d10 \xiipt e70
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\X0layoutfloat \ \\ \dd46 \\X0makePbox \ \ d426, \d427 \\X0makepbox \ \ \d274, \d275 \\X0minipage \ d274, \d275 \\X0parbox \ d324, \d325 \\X0picture \ d453, \d454 \\X0tabarray \ d5, \d10 \\X0tabular \ d7, \d10 \\xiipt \ e71 \\xiipt \ e70 \\xivpt \ e72
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\X0layoutfloat \d146 \X0makePbox d426, d427 \X0makepbox \d274 \X0minipage d274, \d275 \X0parbox d324, \d325 \X0picture d453, \d454 \X0tabarray d5, \d10 \X0tabular d7, \d10 \xiipt e70
$\begin{tabular}{lllllllllllllllllllllllllllllllllll$	\X0layoutfloat \d146 \X0makePbox d426, d427 \X0makepbox \d274 \X0minipage d274, \d275 \X0parbox d324, \d325 \X0picture d453, \d454 \X0tabarray d5, \d10 \X0tabular d7, \d10 \xiipt e70 \xivpt e72 \xkanjiskip b1788,
\update@series@target@value@kanji \updefault \ b1742 \upshape \	\X0layoutfloat \\ \\ \\ \\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \
$\begin{tabular}{l l l l l l l l l l l l l l l l l l l $	\X0layoutfloat \ \\ \dd46 \\X0makePbox \ \ d426, \d427 \\X0makepbox \ \ d426, \d275 \\X0makepbox \ \ d274, \d275 \\X0minipage \ d274, \d275 \\X0parbox \ d324, \d325 \\X0picture \ d453, \d454 \\X0tabarray \ d5, \d10 \\X0tabular \ d7, \d10 \\xipt \ e70 \\xipt \ e72 \\xkanjiskip \ b1788, \c835, \c1259, \c1273, \c1285, \c1340 \\xpt \ e69
$\begin{tabular}{l l l l l l l l l l l l l l l l l l l $	\X@layoutfloat \\ \\ \d146 \\X@makePbox \\ \d276 \\X@makepbox \\ \d276 \\X@minipage \\ \d274, \d275 \\X@parbox \\ \d324, \d325 \\X@picture \\ \d453, \d454 \\X@tabarray \\ \d5 \\
\update@series@target@value@kanji \updefault \ b1742 \upshape \ b1289, b1297, b1303, b1304, b1310 \usecounter \ g1452, g1790 \usefont \ b981 \usekanji \ b401, b407, \b981 \userelfont \ b486 \useroman \ b410, \b981 \verb \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	\X@layoutfloat \\ \\ \\ \dd46 \\ \X@makePbox \\ \d426, \d427 \\ \X@makepbox \\ \d426, \d427 \\ \X@minipage \\ \d274, \d275 \\ \X@parbox \\ \d324, \d325 \\ \X@picture \\ \d453, \d454 \\ \X@tabarray \\ \d5, \d10 \\ \X@tabular \\ \d7, \d10 \\ \xipt \\ \e70 \\ \xipt \\ \e70 \\ \xipt \\ \e835, \c1259, \c1273, \c1285, \c1340 \\ \xpt \\ \e69 \\ \xspcode \b1510, \b1518, \b1557, \b1565, \effinition \equiv \
\update@series@target@value@kanji \updefault \ b1742 \upshape \ b1289, b1297, b1303, b1304, b1310 \usecounter \ g1452, g1790 \usefont \ b981 \usekanji \ b401, b407, \b981 \userelfont \ b486 \useroman \ b410, \b981 \verball \ \text{vector} \ \ c1019, \h46 \verball \ \verball \ \ c1014, \h46 \verball \ \verball \ \ c1022, c1034, c1045 \verball \ \verball \ \ verball \ \ \verball \ \ c1045 \verball \ \ \verball \ \ c1045 \verball \ \ \verball \ \ c1045 \verball \ \ \ \verball \ \ c1045 \verball \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	\X@layoutfloat \\ \\ \\ \dd46 \\ \X\text{QmakePbox} \\ \dd426, \d427 \\ \X\text{Qmakepbox} \\ \dd426, \d427 \\ \X\text{Qmakepbox} \\ \dd427 \\ \X\text{Qminipage} \\ \dd4274, \d275 \\ \X\text{Qparbox} \\ \dd4325 \\ \X\text{Qpicture} \\ \dd453, \d454 \\ \X\text{Qtabarray} \\ \d5, \d10 \\ \X\text{Qtabular} \\ \d7, \d10 \\ \xipt \\ \d7, \d10 \\ \xipt \\ \d7, \d10 \\\ \d7
$\begin{tabular}{l l l l l l l l l l l l l l l l l l l $	\X@layoutfloat \\ \\ \\ \dd46 \\ \X\text{QmakePbox} \\ \dd426, \d427 \\ \X\text{Qmakepbox} \\ \dd426, \d427 \\ \X\text{Qmakepbox} \\ \dd427 \\ \X\text{Qminipage} \\ \dd4274, \d275 \\ \X\text{Qparbox} \\ \dd4325 \\ \X\text{Qpicture} \\ \dd453, \d454 \\ \X\text{Qtabarray} \\ \d5, \d10 \\ \X\text{Qtabular} \\ \d7, \d10 \\ \xipt \\ \d7, \d10 \\ \xipt \\ \d7, \d10 \\ \d7, \d7, \d10 \\ \d7, \d10 \\ \d7, \d7, \d7, \d7, \d7, \d7, \d7, \
\update@series@target@value@kanji \updefault \ b1742 \upshape \ b1289, b1297, b1303, b1304, b1310 \usecounter \ g1452, g1790 \usefont \ b981 \usekanji \ b401, b407, b981 \useroman \ b410, b981 \veroman \ b410, b981 \verb \ (1019, h46) \vertor \ (489) \verb \ (21014, h46) \verb@eol@error c1021, c1033, c1044, h48) \verbatim@font \ c1022, c1034, c1045 \verbatim@nolig@list \ h47 \verse (environment) \ g1493 \vfil \ c637, c709, c778, g991, g1004,	\X@layoutfloat \ \d146 \X@makePbox \ d426, d427 \X@makepbox \ d426, d427 \X@minipage \ d274, \d275 \X@parbox \ d324, \d325 \X@picture \ d453, \d454 \X@tabarray \ d5, \d10 \X@tabular \ d7, \d10 \xiipt \ e71 \xiipt \ e72 \xixpt \ e72 \xkanjiskip \ b1788,
\update@series@target@value@kanji \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\X@layoutfloat \ \d146 \X@makePbox \ d426, d427 \X@makePbox \ d426, d427 \X@minipage \ d274, \d275 \X@parbox \ d324, \d325 \X@picture \ d453, \d454 \X@tabarray \ d5, \d10 \X@tabular \ d7, \d10 \xiipt \ e71 \xiipt \ e72 \xixpt \ e72 \xkanjiskip \ b1788, \ c835, c1259, c1273, c1285, c1340 \xpt \ e69 \xspcode b1510, b1518, b1557, b1565, \ f93, f94, f95, f96, f97, f98, f99, f100, f101, f102, f103, f104, f105, f106, f107, f108, f109, f110, f111, f112, f113, f114, f115, f116, f117, f118, f119, f120, f121, f122,
\update@series@target@value@kanji \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\X@layoutfloat \ \d146 \X@makePbox \ d426, d427 \X@makePbox \ d426, d427 \X@minipage \ d274, \d275 \X@parbox \ d324, \d325 \X@picture \ d453, \d454 \X@tabarray \ d5, \d10 \X@tabular \ d7, \d10 \xiipt \ e71 \xiipt \ e72 \xixpt \ e72 \xkanjiskip \ b1788,
\update@series@target@value@kanji \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\X@layoutfloat \ \d146 \X@makePbox \ d426, d427 \X@makepbox \ d426, d427 \X@minipage \ d274, \d275 \X@parbox \ d324, \d325 \X@picture \ d453, \d454 \X@tabarray \ d5, \d10 \X@tabular \ d7, \d10 \xiipt \ e71 \xiipt \ e70 \xivpt \ e72 \xkanjiskip \ b1788,
\update@series@target@value@kanji \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\X@layoutfloat \ \d146 \X@makePbox \ d426, d427 \X@makepbox \ d427, \d275 \X@minipage \ d274, \d275 \X@parbox \ d324, \d325 \X@picture \ d453, \d454 \X@tabarray \ d5, \d10 \X@tabular \ d7, \d10 \xiipt \ e71 \xipt \ e70 \xivpt \ e72 \xkanjiskip \ b1788, \c835, c1259, c1273, c1285, c1340 \xpt \ e69 \xspcode b1510, b1518, b1557, b1565, \f93, f94, f95, f96, f97, f98, f99, \f100, f101, f102, f103, f104, \f105, f106, f107, f108, f109, f110, \f111, f112, f113, f114, f115, f116, \f117, f118, f119, f120, f121, f122, \f123, f124, f125, f126, f127, f128, \f129, f130, f131, f132, f133, f134, \f135, f136, f137, f138, f139, f140,
\update@series@target@value@kanji \\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	\X@layoutfloat \ \d146 \X@makePbox \ d426, d427 \X@makepbox \ d426, d427 \X@minipage \ d274, \d275 \X@parbox \ d324, \d325 \X@picture \ d453, \d454 \X@tabarray \ d5, \d10 \X@tabular \ d7, \d10 \xiipt \ e71 \xiipt \ e70 \xivpt \ e72 \xkanjiskip \ b1788,

 $\label{eq:File Key: a=plvers.dtx} \textbf{ a=plvers.dtx}, \textbf{ b=plfonts.dtx}, \textbf{ c=plcore.dtx}, \textbf{ d=plext.dtx}, \textbf{ e=pl209.dtx}, \textbf{ f=kinsoku.dtx}, \textbf{ g=jclasses.dtx}, \textbf{ h=jltxdoc.dtx}$

£1.47 £1.40 £1.40 £1.50 £1.51 £1.50	\\- \h190 \h196
f147, f148, f149, f150, f151, f152,	\yoko b120, b126,
f153, f154, f155, f156, f157, f158,	b574, b612, c357, c401, c407,
f159, f160, f161, f162, f163, f164,	c410, c414, c417, c421, c424,
f165, f166, f167, f168, f169, f170,	c427, $c431$, $c434$, $c438$, $c441$,
f171, f172, f173, f174, f175, f176,	c450, c456, c459, c463, c466,
f177, f178, f179, f180, f181, f182,	c469, $c472$, $c475$, $c479$, $c482$,
f183, f184, f185, f186, f187, f188,	c485, c488, c608, c675, c744,
f189, f190, f191, f192, f193, f194,	c808, c816, c830, c832, c839,
f195, f196, f197, f198, f199, f200,	c846, c905, c928, c950, d27, d62,
f201, f202, f203, f204, f205, f206,	d122, d240, d244, d287, d293,
f207, f208, f209, f210, f211, f212,	d353, d411, d435, d441, d463,
f213, f214, f215, f216, f217, f218,	d474, d517, d524, d525, d526,
f219, f220, f221, f222, f223, f224,	d547, d551, d564, e18, g983, g1026
f225, f226, f227, f228, f229, h50	\ystrut b117
\xviipt e73	\ystrutbox <u>b47</u> , b61, b75,
\xxpt e74	b80, b83, b121, b127, b560, b574
\xxvpt e75	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
•	${f Z}$
Y	\zstrut b99
\ybaselineshift b1333, b1335,	\zstrutbox b45,
b1360, b1384, b1471, b1502,	b105, b113, b580, b618, d31, d32
b1521, b1536, b1545, b1550,	
b1568, b1588, b1593, d66, d72,	t
d83, d90, d460, d481, d487,	\ 西曆 g1831
d490, d493, d496, d499, d502, d505	(
\year g71, g1834, g1836, g1838,	7
	\和暦 g1831
52010, 52010, 52011, 52001, 52000	() E / E / E / E / E / E / E / E / E / E